

# 原 古 墳

— 神流川中流域における後期古墳の調査 —

国道462号〈鬼石橋〉地域活力基盤創造事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2009

群 馬 県 藤 岡 土 木 事 務 所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

はら                      こ                      ふん  
原                      古                      墳

— 神流川中流域における後期古墳の調査 —

国道462号〈鬼石橋〉地域活力基盤創造事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

群馬県藤岡土木事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





1 原古墳の位置と周辺の景観



2 上空から見た原古墳



1 横穴式石室開口部側から見た原古墳



2 原古墳墳丘内、石積みの状況



1 原古墳、横穴式石室



2 原古墳、横穴式石室石積みの状況



1 原古墳出土副葬品



2 原古墳に立てられた円筒埴輪



3 包含層出土の弥生土器

## 序

本書は、藤岡市鬼石に所在し、国道462号〈鬼石橋〉道路特殊改良事業に伴い発掘調査された原古墳の調査報告書です。本遺跡の調査は、群馬県藤岡土木事務所からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成20年4月から7月にかけて実施したものです。

原古墳は、『上毛古墳綜覧』や『鬼石町誌』にも記載されている古墳で藤岡市鬼石地区を代表する古墳の一つです。今回の調査により、原古墳が、6世紀中頃に築造された横穴式石室を埋葬施設に有する古墳であったこと、築造当初は、墳丘上に多数の埴輪が立てられていたことなどが明らかになりました。また、古墳の周辺からは縄文時代や弥生時代中期の土器や石器が発見され、この鬼石の地に古くから先人たちの生活が展開していたことが分かりました。

これらの調査成果は、これまであまり発掘調査が行われる機会がなかった藤岡市鬼石地区の歴史に新たな資料を提供することとなるものと考えられます。そして、この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県県土整備部および藤岡土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、藤岡市教育委員会および地元関係者の皆様からは種々のご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成21年9月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 栄一





# 例 言

- 1、本書は、国道 462 号〈鬼石橋〉道路特殊改良事業・地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査・整理事業を実施した原古墳の調査報告書である。
- 2、原古墳は、群馬県藤岡市鬼石字落合 603 - 1 番地に所在する。
- 3、事業主体 群馬県西部県民局藤岡土木事務所
- 4、調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5、調査期間 平成 20 年（2008 年）4 月 1 日～平成 20 年（2008 年）7 月 31 日
- 6、整理期間 平成 20 年（2008 年）10 月 1 日～平成 21 年（2009 年）3 月 31 日
- 7、発掘調査体制は次の通りである。

管理・指導 理事長 高橋勇夫 常務理事 津金澤吉茂 木村裕紀  
調査研究部長 飯島義雄 調査研究グループGL 原 雅信  
事務担当 笠原秀樹（総務グループGL） 佐嶋芳明（経理グループGL） 須田朋子 矢島一美  
齋藤陽子（総務グループ職員） 齊藤恵理子 柳岡良宏（経理グループ職員）  
今井もと子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 武藤秀典（補助員）  
発掘調査担当 徳江秀夫 長谷川博幸（調査研究グループ）  
委託関係 シン技術コンサル 横田測量設計 パレオ・ラボ 高澤考古学研究所

- 8、整理事業体制は次の通りである。

管理・指導 理事長 高橋勇夫 常務理事 津金澤吉茂 木村裕紀  
資料整理部長 相京建史 資料整理第2グループGL 大木紳一郎  
事務担当 笠原秀樹（総務グループGL） 佐嶋芳明（経理グループGL） 須田朋子 矢島一美  
齋藤陽子（総務グループ職員） 齊藤恵理子 柳岡良宏（経理グループ職員）  
今井もと子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 武藤秀典 狩野真子  
（補助員）  
整理担当 坂口 一（資料整理第2グループ 平成 21 年 1 月）  
徳江秀夫（資料整理第2グループ 平成 20 年 10 月～平成 21 年 3 月）  
整理補助 鹿沼敏子（嘱託員） 大塚とし子 矢野純子 小金澤たみ子 戸神晴美 高田栄子  
渡部あい子 大勝桂子（補助員）  
保存処理 関 邦一（資料整理第1グループ） 小材浩一 津久井桂一 多田ひさ子（補助員）  
遺物写真 佐藤元彦（資料整理第1グループ）

遺物器械実測 田中精子 田所順子 岸 弘子 小池益美（補助員）

デジタル班 牧野裕美 市田武子 安藤美奈子 酒井史恵 廣津真希子 荒木絵美

高梨由美子 矢端真観 横塚由香 下川陽子（補助員）

9、本書作成の担当者は次のとおりである。

編 集 徳江秀夫（資料整理第2グループ）

執 筆 第1章第2節2 長谷川博幸

第1章第3節4（2）弥生時代の遺物（石器の部分）、遺物観察表遺構外出土の石器

飯島義雄

第1章第3節4（2）弥生時代の遺物（土器の部分）、遺物観察表遺構外出土の弥生土器

大木紳一郎

第4章第2節 右島和夫（群馬県文化財保護審議会委員）

第3章 パレオ・ラボ（藤根 久・米田恭子・竹原弘展）

上記以外 徳江秀夫

10、横穴式石室の石材・出土石器の石材同定については飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）にお願いした。

11、発掘調査および報告書作成には、群馬県教育委員会 藤岡市教育委員会 三杉地区自治会

池尻 篤 石井克巳 市橋一郎 井上 勉 梅澤重昭 大谷 徹 小田富士雄 亀田修一 軽部達也

小林 修 小林孝秀 志村 哲 杉山秀宏 田口一郎 田野倉武男 寺内敏郎 中里正憲 中島 誠

南雲芳昭 土生田純之 深澤敦仁 藤野一之 古郡正志 松井一明 丸山治雄 右島和夫 依田治雄

若狭 徹（五十音順敬称略）をはじめ 関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。

記して感謝いたします。

12、調査の経過、遺構・遺物に対する所見などについては、当事業団職員の石坂 茂 原 雅信 木津博明

小島敦子 岩崎泰一 大西雅広 桜井美枝 齊田智彦 諸氏の助言を得ている。

13、発掘調査の諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

## 凡 例

1、挿図に示す方位記号は世界測地系の国家座標上の北位を基準としている。

2、遺構および遺物実測図中の縮尺は、それぞれの図中に表示している。

3、第1図は国土地理院発行の200,000分の1の「宇都宮」「長野」地勢図を原図と使用している。

第2図は国土地理院発行の25,000分の1の地形図「鬼石」を原図として使用している。

第3図は飯島静男「群馬の地質」『群馬県植物誌』中の図を一部修正して使用した。

第4図は国土地理院発行の50,000分の1の地形図「高崎」「寄居」を原図として使用している。

# 目 次

口 絵	3 埋葬施設……………20
序	(1) 概 要
例 言	(2) 閉塞状況
凡 例	(3) 石 室
挿図目次	4 古墳構築過程解明のための調査……………26
表 目 次	(1) 墳丘の解体からの情報
文中写真目次	(2) 石室の解体からの情報
写真図版目次	(3) 石室の壁体と下部構造
抄 録	(4) 石室の壁体と使用石材
	5 出土遺物……………36
	(1) 埴 輪
	(2) 石室内出土の遺物
第1章 発掘調査と遺跡の概要	第3節 原古墳以外の調査……………65
第1節 発掘調査に至る経緯…………… 1	1 概要……………65
第2節 遺跡の立地と環境…………… 2	2 土坑……………65
1 遺跡の立地…………… 2	3 遺物包含層の調査……………67
2 周辺の遺跡…………… 2	4 遺構外出土の遺物……………67
第3節 発掘調査の方法と経過…………… 7	(1) 縄文時代の遺物
1 原古墳の呼称…………… 7	(2) 弥生時代の遺物
2 調査の方法…………… 9	(3) 古墳時代から平安時代の遺物
3 調査の経過……………10	(4) 中・近世の遺物
4 整理作業の方法……………11	第3章 分 析
第2章 発掘調査の記録	第1節 原古墳出土埴輪の
第1節 遺跡の概要……………12	胎土材料……………79
1 基本土層……………12	第4章 調査成果のまとめと考察
2 検出した遺構と遺物……………12	第1節 原古墳の編年的位置づけ……………89
第2節 原古墳の調査……………12	第2節 原古墳の墳丘構造をめぐって……………95
1 墳丘及び外部施設……………12	参考文献……………103
(1) 調査前の状況	遺物観察表……………105
(2) 墳 丘	写真図版
(3) 葺 石	
(4) 基壇面	
(5) 周 堀	
2 埴輪の出土状況……………18	

# 挿 図 目 次

第1図	原古墳の位置	1	第36図	靱形埴輪(1)	51
第2図	原古墳周辺の地形	3	第37図	靱形埴輪(2)	52
第3図	群馬県南西部の地質概図と原古墳の位置	3	第38図	大刀形埴輪(1)	54
第4図	原古墳周辺の遺跡分布	5	第39図	大刀形埴輪(2)	55
第5図	原古墳周辺の現況	8	第40図	人物埴輪	56
第6図	原古墳の調査区と国道462号特殊改良工事	9	第41図	馬形埴輪(1)	57
第7図	原古墳の位置とグリッドの設定	9	第42図	馬形埴輪(2)	58
第8図	原古墳の基本土層	12	第43図	馬形埴輪(3)	59
第9図	調査前の原古墳	13	第44図	器種不明の形象埴輪	60
第10図	墳丘と周堀調査トレンチの位置	14	第45図	形象埴輪基台部(1)	62
第11図	墳丘と周堀調査トレンチ土層断面図	15	第46図	形象埴輪基台部(2)	63
第12図	墳丘平面図・断面図	16	第47図	石室内出土遺物	64
第13図	墳丘断面図・葺石断面図	17	第48図	1号・2号土坑	65
第14図	埴輪出土位置概念図	19	第49図	遺物包含層の調査範囲	66
第15図	石室の残存状態と羨道閉塞状態	21	第50図	原古墳墳丘下遺物出土状況	66
第16図	石室壁面図・平面図(1)	23	第51図	E-7グリッド・E-9グリッド出土 土器とその出土状況	68
第17図	石室断面図	25	第52図	遺構外出土の縄文土器	69
第18図	石室図平面図(2)	27	第53図	遺構外出土の弥生土器(1)	70
第19図	墳丘基底面の状況	28	第54図	遺構外出土の弥生土器(2)	71
第20図	石室基底石と下部構造の状況	29	第55図	石鍬の外形比較	72
第21図	石室使用石材の取り上げ番号	31	第56図	遺構外出土の弥生時代石器(1)	73
第22図	石室使用石材の種類	35	第57図	遺構外出土の弥生時代石器(2)	74
第23図	円筒埴輪の各部位の名称	36	第58図	遺構外出土の古墳・平安時代、中・近世の土器	75
第24図	円筒埴輪(1)	38	第59図	遺構外出土の中・近世の石製品・金属製品	76
第25図	円筒埴輪(2)	39	第60図	遺構外出土の中・近世の古銭	77
第26図	円筒埴輪(3)	40	第61図	アルミニウム(Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )-ケイ素(SiO <sub>2</sub> )分布図	85
第27図	円筒埴輪(4)	41	第62図	埴輪胎土中の各元素分布図	86
第28図	円筒埴輪(5)	42	第63図	原古墳横穴式石室の位置づけ	91
第29図	円筒埴輪(6)	43	第64図	原古墳出土円筒埴輪の位置づけ	93
第30図	円筒埴輪(7)	44	第65図	谷ツ1号墳・東町古墳墳丘図	100
第31図	円筒埴輪(8)	45	第66図	剣崎長瀬西遺跡2号墳・空沢遺跡36号墳墳丘図	101
第32図	家形埴輪(1)	46	第67図	積石塚状横穴式円墳の諸例(1)	101
第33図	家形埴輪(2)	47	第68図	積石塚状横穴式円墳の諸例(2)	102
第34図	盾形埴輪(1)	48	第69図	初期横穴式石室の裏込め・裏込め被覆	102
第35図	盾形埴輪(2)	50			

# 表 目 次

第1表	周辺遺跡の概要	6	第5表	粘土および砂粒組成の特徴	83
第2表	石室石材計測表	32	第6表	岩石片の起源と組み合わせ	84
第3表	材料を検討した埴輪とその詳細	79			
第4表	埴輪の蛍光X線分析による化学組成	82			

# 文中写真目次

写真1	大円蓋古墳	4	写真5	墳丘東側断ち割り断面	28
写真2	原古墳に近接する古墳推定地	4	写真6	墳丘北側断ち割り断面	28
写真3	移築保存のための石室石材仮置状況	11	写真7	埴輪胎土の顕微鏡写真(1)	87
写真4	F-7グリッド土層堆積状況	12	写真8	埴輪胎土の顕微鏡写真(2)	88

# 写真図版目次

- PL1-1 原古墳の位置(●)と周辺の地形(上空から)  
2 原古墳の位置と周辺の地形(埼玉県側から)  
3 調査前の原古墳(南から)  
4 調査前の原古墳(南西、鬼石橋から)  
5 雑木伐採後の原古墳(南から)
- PL2-1 墳丘全景(南から)  
2 墳丘全景(北から)
- PL3-1 墳丘全景(南から)  
2 墳丘全景(北から)  
3 墳丘全景(西から)  
4 墳丘全景(東から)  
5 墳丘東部分検出状況(東から)  
6 墳丘東部分葺石残存状況(東から)  
7 墳丘北東部分検出状況(北西から)  
8 墳丘北東部分葺石残存状況(北東から)
- PL4-1 墳丘北東部分残存状況(北から)  
2 墳丘北西部分残存状況(西から)  
3 墳丘西部分残存状況(西から)  
4 墳丘南西部分残存状況(南から)  
5 墳丘北東部分埴輪出土状況(東から)  
6 墳丘北東部分埴輪出土状況(北東から)  
7 墳丘裾部北東部分埴輪出土状況(南東から)  
8 墳丘裾部北東部分埴輪出土状況(北東から)
- PL5-1 石室全景(南から)  
2 石室床面(北から)  
3 石室羨道部閉塞状況(南から)  
4 石室羨道部(南から)  
5 石室棚石(南から)  
6 石室奥壁(南から)
- PL6-1 石室羨道部左側壁(東から)  
2 石室玄室部左側壁(東から)  
3 石室玄室部左側壁(北東から)  
4 石室玄室部右側壁(東から)  
5 石室玄室部右側壁(西から)  
6 石室羨道部右側壁(西から)  
7 石室玄室右側壁(西から)  
8 石室羨道部右側壁(西から)
- PL7-1 石室床石除去後の舗石(北から)  
2 石室羨道部舗石(南から)  
3 石室奥壁設置状況(南から)  
4 石室羨道部舗石除去後(南から)  
5 石室玄室部舗石除去後(北から)  
6 石室玄室部内切子玉出土状況(南から)  
7 石室玄室部内切子玉出土状況(南から)
- PL8-1 墳丘南東部分断ち割り状況(南から)  
2 墳丘北東部分断ち割り状況(東から)  
3 墳丘北西部分断ち割り状況(北から)  
4 墳丘南西部分断ち割り状況(南から)  
5 墳丘南西部分断ち割り状況(東から)
- PL9-1 墳丘北部分礫除去中の状況(北から)  
2 墳丘西部分礫除去中の状況(南西から)  
3 墳丘東部分礫除去中の状況(東から)  
4 墳丘東部分礫除去中の状況(東から)  
5 墳丘内礫除去中の石室(南から)  
6 墳丘内礫除去中の石室左側壁背面(西から)  
7 墳丘内礫除去中の石室右側壁背面(南東から)
- PL10-1 墳丘内礫除去中の石室羨道部左側壁背面(南西から)  
2 墳丘内礫除去中の石室奥壁背面(北東から)  
3 石室羨道部左側壁石材101~108(東から)  
4 石室羨道部左側壁石材101~108除去後(東から)  
5 石室羨道部右側壁石材15~18(西から)  
6 石室羨道部右側壁石材15~18除去後(西から)  
7 石室玄室部右側壁石材186他(南から)  
8 石室玄室部右側壁石材186他除去後(南から)
- PL11-1 石室玄室部移築対象石材上端の検出状況(南から)  
2 石室玄室部右側壁石材374(西から)  
3 石室玄室部右側壁石材374除去後(西から)  
4 石室玄室部左側壁石材274・275(東から)  
5 石室玄室部左側壁石材274・275除去後(東から)  
6 石室玄室部左側壁石材274・275除去後(東から)  
7 墳丘内礫除去中の石室奥壁背面(北から)  
8 墳丘内礫除去中の石室奥壁背面(北から)
- PL12-1 墳丘基底面の礫と石室基底石検出状況(上空から)  
2 墳丘基底面の礫と石室基底石検出状況(北から)  
3 墳丘西部分基底面の礫検出状況(北から)  
4 墳丘基底面の礫除去中の状況(南から)  
5 石室玄室部基底石設置状況(南から)  
6 石室玄室部基底石設置状況(北から)  
7 石室基底石下の礫検出状況(南から)  
8 石室棚石下の礫検出状況(南から)
- PL13-1 石室基底石下の礫と墳丘構築面(南から)  
2 石室石材の据え方面(南から)  
3 1号土坑全景(東から)  
4 2号土坑全景(南から)  
5 墳丘南西部分古銭出土地点(南西から)  
6 墳丘北東部分板碑出土状況(北東から)  
7 F-7・8グリッド周辺遺物出土状況(東から)  
8 E・F-8・9グリッド周辺遺物出土状況(南から)
- PL14-1 E-7グリッドP-1土器出土状況(北西から)  
2 E-7グリッドP-1土器出土状況(南から)  
3 E-9グリッドP-1土器出土状況(南から)  
4 E-9グリッドP-1土器出土状況(北から)  
5 墳丘下遺物出土状況(南から)  
6 C-9グリッド遺物出土状況(南から)  
7 C-8グリッド遺物出土状況(南から)  
8 墳丘下遺物検出作業状況(南から)
- PL15- 円筒埴輪(1)  
PL16- 円筒埴輪(2)  
PL17- 円筒埴輪(3)  
PL18- 円筒埴輪(4)  
PL19- 家形埴輪・盾形埴輪(1)  
PL20- 盾形埴輪(2)・靱形埴輪  
PL21- 大刀形埴輪・人物埴輪  
PL22- 馬形埴輪・器種不明の形象埴輪(1)  
PL23- 器種不明の形象埴輪(2)・形象埴輪基台部  
PL24- 円筒埴輪ハケメの分類、石室内出土遺物、遺構外出土の弥生土器(1)  
PL25- 遺構外出土の弥生土器(2)  
PL26- 遺構外出土の縄文土器・弥生時代石器  
PL27- 遺構外出土の古墳・平安時代、中・近世の遺物  
PL28- 遺構外出土の中・近世の古銭

# 抄 録

書名ふりがな	はらこふん
書 名	原古墳
副 書 名	国道 462 号〈鬼石橋〉地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	476
編著者名	右島和夫 / 飯島義雄 / 大木紳一郎 / 徳江秀夫 / 長谷川博幸
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090918
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橋町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	はらこふん
遺 跡 名	原古墳
所在地ふりがな	ぐんまけんふじおかしおにしあざおちあい
遺跡所在地	群馬県藤岡市鬼石字落合 603-1
市町村コード	10209
遺跡番号	古 679
北緯（日本測地系）	360902
東経（日本測地系）	1390314
北緯（世界測地系）	360913
東経（世界測地系）	1390303
調査期間	20080401 - 20080731
調査面積	1446
調査原因	道路建設工事
種 別	墓
主な時代	弥生 / 古墳
遺跡概要	墓 - 古墳 - 古墳 1 - 埴輪 + 玉類 + 鉄製品 / その他 - 弥生 - 土器 + 石器 / その他 - 中世 - 古銭
特記事項	利根川の支流、神流川中流域にあたる藤岡市鬼石に築造された直径 9 m の円墳。墳丘の大半は礫石により構成されている。
(要約)	原古墳は、6 世紀中頃に築造された直径 9 m の円墳である。墳丘の大半は礫石により構築されていた。いわゆる積石塚古墳との関係を検討する必要がある古墳である。墳丘には埴輪が樹立されていたと考えられ、円筒埴輪、形象埴輪家・器財・人物・馬などが出土している。埋葬主体部は袖無型横穴式石室である。古墳の周辺には縄文時代・弥生時代の遺物包含層が存在し、弥生時代中期の土器が検出された。

# 第1章 発掘調査と遺跡の概要

## 第1節 発掘調査に至る経過

国道462号は、長野県佐久市を起点とし、群馬県伊勢崎市内の国道17号上武道路交差点を終点とする距離114.6kmの一般国道である。1993（平成5）年に新設された国道で、長野県佐久郡佐久穂町から群馬県多野郡神流町神ヶ原の間は国道299号と重複している。藤岡市内では神流湖上流の坂原から鬼石の市街地西方を迂回し、浄法寺で神流川を渡河、埼玉県神川町、本庄市方面に達している。

神流川の流路に沿ってその左岸を遡上する国道462号は、群馬県の多野・藤岡地域と埼玉・長野両県地域との連携を深めるとともに、沿線の産業振興、物流の効率化、生活環境の維持・安定などを図るなど地域の基盤を支えるための幹線道路として位置づけられ、これまでも沿線の改良・整備工事がくり返

し実施されてきた路線である。

原古墳の調査は、藤岡土木事務所により計画された鬼石橋特殊改良事業に伴うものである。国道の改良は、1964（昭和39）年に建設された三波川に渡架する鬼石橋の老朽化に伴う掛け替えとこれに係わる部分の路線変更・新設が目的である。

2003（平成15）年度の段階で藤岡土木事務所から群馬県教育委員会文化課に当該事業に係わる埋蔵文化財の取り扱いについての事業照会が提出された。計画路線内には主体部に横穴式石室を有する原古墳の存在が周知されていたことから、この古墳に対する保存・活用方法を含めたその取り扱いについて藤岡土木事務所と群馬県教育委員会文化課、鬼石町教育委員会による調整が開始され、協議が重ねられた。

その後、用地買収の進展を見たことから、平成19



第1図 原古墳の位置



## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

年度になり藤岡土木事務所と群馬県教育委員会文化課との協議を踏まえ、記録保存の措置を講ずるための調査実施が決定された。そして、藤岡土木事務所の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査に当たることとなった。

調査は、予算の繰り越しにより、履行期間を2008（平成20）年3月31日から9月30日とした。調査期間は2008（平成20）年4月1日から7月30日とし、4月1日から調査を開始する運びとなった。

また、原古墳の保存措置については、調査の進捗に合わせて、藤岡土木事務所と群馬県教育委員会文化財保護課、藤岡市教育委員会（平成18年1月に多野郡鬼石町が藤岡市に編入合併したため）が古墳の保存状態について把握した上で横穴式石室の移築保存を含む具体的方向を決定することとなった。

## 第2節 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地

原古墳は、群馬県藤岡市鬼石字落合603-1に所在する。最寄りの公共交通機関としてはJR八高線の藤岡駅から南南西に約11.1kmの距離にある。

本古墳の所在する藤岡市鬼石地区（旧鬼石町）は、群馬県の南西部に位置し、東経139度03分03秒、北緯36度09分13秒（原古墳の位置）を測る。地区の東部と南部は神流川を県境として埼玉県神川町・秩父市に、西部は神流町に接している。

周囲一帯には関東山地の山々が連なり、西方向には御荷鉾山（標高1286m）や赤久縄山（1522m）がその頂点をなしている。

鬼石地区の地形は神流川と三波川に沿った山地と谷地形により形成されているが、旧鬼石町の市街地周辺は鬼石盆地と呼ばれ、東西1km弱、南北1km余の小盆地地形が形成されている。この鬼石盆地では神流川によって形成された河岸段丘が発達しており、市街地の立地する平坦地は下位段丘Ⅱ面、その西側に下位段丘Ⅰ面と上位段丘面が続くとされる。原古墳は、旧鬼石町の市街地から西方向に位置し、古墳の築造された地点は下位段丘Ⅱ面の西端にあたる。

調査地内では北から南に向かって緩やかな傾斜を有していたが、その東側は傾斜を増しながら、住宅密集地へと段丘面が続いている。概略すると、原古墳は、下位段丘Ⅱの平坦地を見渡す位置に占地していると言えよう。

また、原古墳は、東御荷鉾山中に源を発し、鬼石地区の中央部を西から東に向かって貫流する三波川と神流川が合流する地点に築造されたと見られる。三波川は古墳の立地地点から下流100mで神流川と合流している。古墳所在地における標高は149.8mから151.4mを測った。

原古墳の立地する地点は、地質的には三波川変成帯の中にあり、基盤には三波川結晶片岩類が堆積している。三波川変成帯は埼玉県小川町から群馬県下仁田町付近までの関東山地の中を西北西から東南東の方向に帯状に分布しているとされる。原古墳南側には神流川による崖線が形成されており、河川敷との比高は10m以上である。西側の三波川の流路の両岸にも高さ10m以上の崖線が形成されている。これらの崖線には現在も黒色片岩の露頭を観察することができる。この基盤岩の上に礫層が堆積している。

周辺は国道462号に沿って宅地化が進行しているが、その間の限られた平坦地には畑地が見え隠れしている。礫を多量に含む表土は耕起・碎土には困難を伴うものと考えられる。かつては水田や桑園も存在したようであるが現在では全く見られない。

### 2 周辺の遺跡

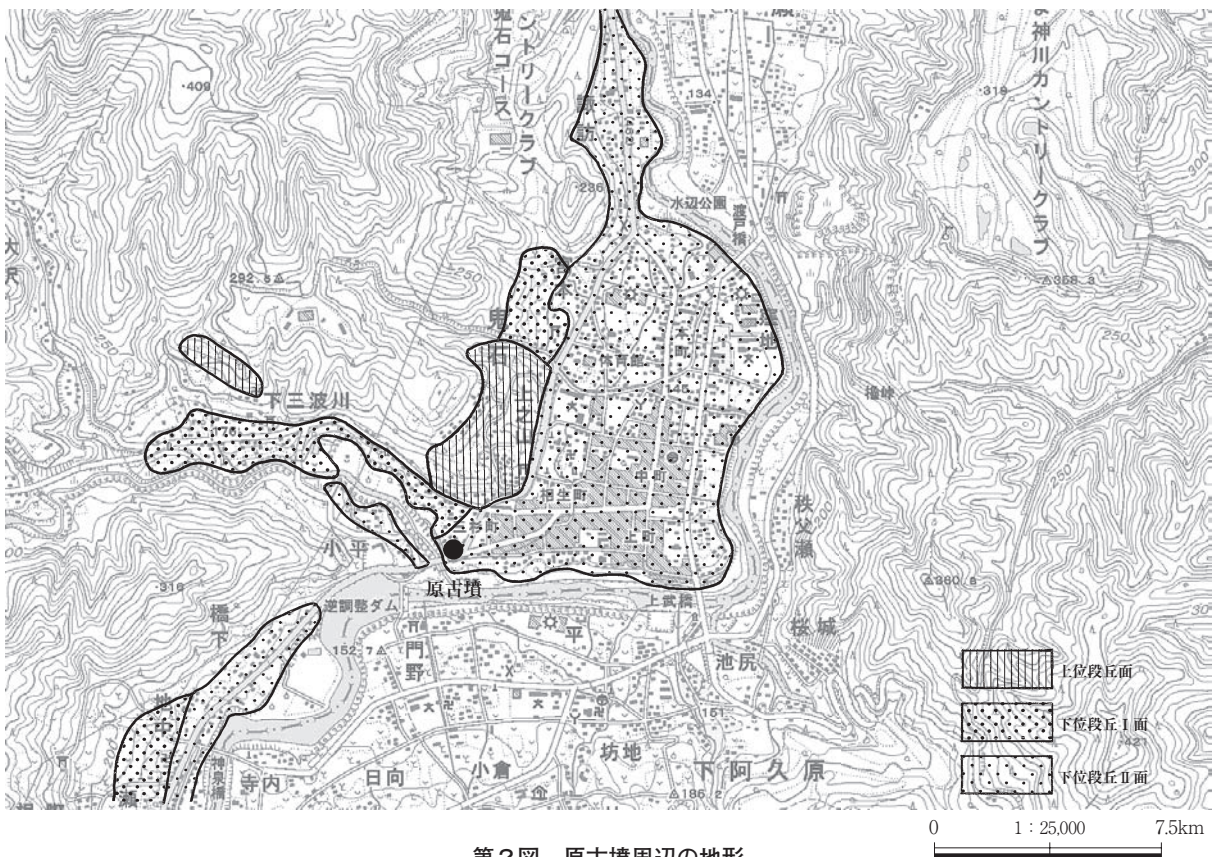
#### （1）概要

原古墳の周辺地域には、縄文時代以降各時代の遺跡が存在している。しかし、旧鬼石町地区における発掘調査事例は少なく、詳細不明な点が多くある。以下、各時代ごとに概観する。

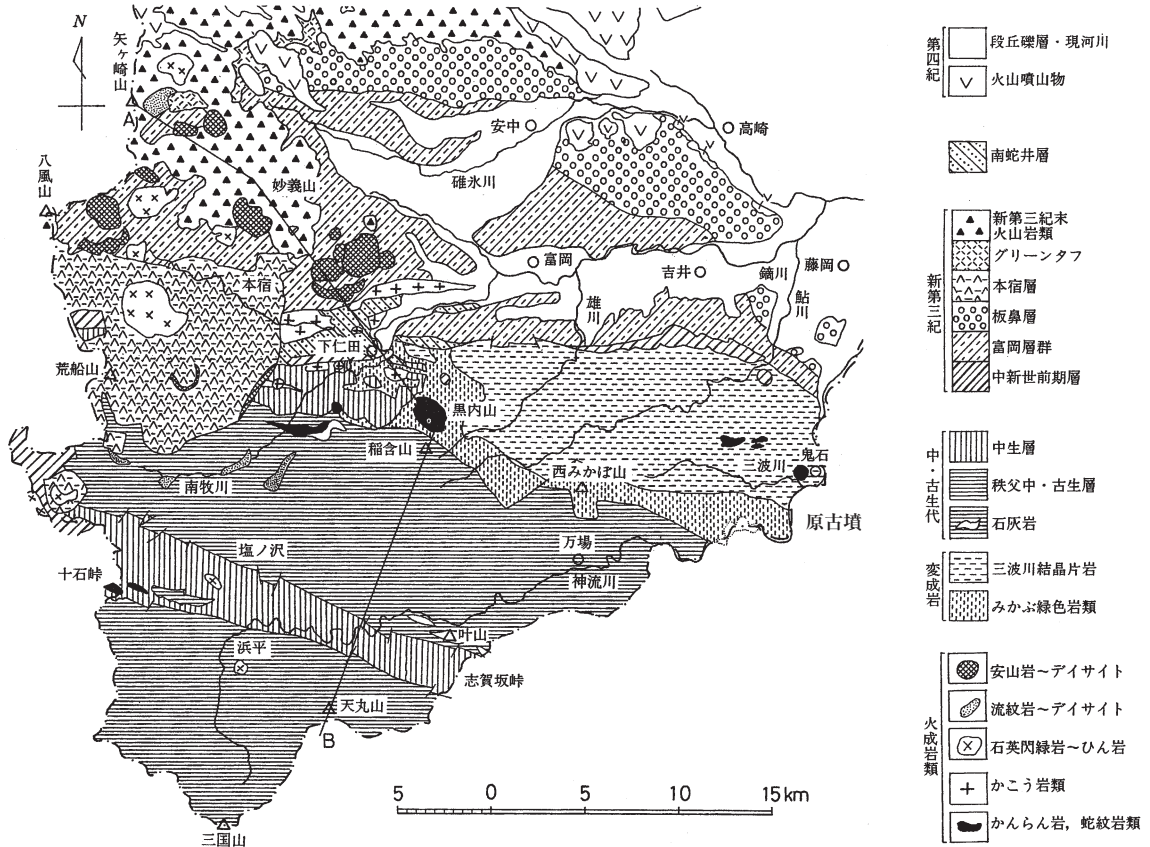
#### （2）旧石器時代

本県では、岩宿遺跡をはじめとするこの時代の重要な遺跡が多く発見されている。しかし、原古墳周辺では現在のところ保美地区で打越遺跡が確認されているだけである。

#### （3）縄文時代



第2図 原古墳周辺の地形



第3図 群馬県南西部の地質概図と原古墳の位置

## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

縄文時代には神流川や三波川の河岸段丘面の緩やかな台地上に遺跡や遺物散布地が広がっている。鬼石地区では鬼石小学校上遺跡（5）で後期の敷石住居が、浄法寺地区で、神流川河岸段丘上の台地に塚ノ本遺跡（25）・塚ノ本Ⅱ遺跡（24）・野栗遺跡（20）があり、前期から中期にかけての住居が検出されている。美原地区には、1940（昭和12年）に敷石住居を検出した譲原遺跡（17）がある。時期は縄文時代中期から後期初頭と考えられている。炉や敷石には緑泥片岩が使われていた。当遺跡は、国指定史跡となっていたが、1996（平成12）年に保存整備が実施され、恒久的な覆屋が建設された。これより上流域にも縄文時代の遺跡が多数分布するが、下久保ダム建設に先立って調査が実施され、晩期の住居を検出した保美濃山遺跡（19）が著名である。

また、神流川右岸の埼玉県神川町側の河岸段丘面では、平遺跡（45）・若宮遺跡（48）・坊池遺跡（52）など上阿久原・下阿久原地区に遺跡が集中しており、集落が多数形成されていたと考えられる。

### （4）弥生時代

原古墳を中心とする地域では、弥生時代の遺跡は極めて少ない。神田・三本木古墳群K-4号墳石室下からは前期末葉から中期初頭に位置づけられる縄文、条痕文施文の土器片が少量出土している。神流川右岸、神川町平遺跡（45）では、弥生前期に比定される再葬墓が確認された。再葬墓からは弥生前期、「沖式」期の壺形土器や甕形土器などがまとめて出土している。また、本遺跡からはやや距離を有するが、神川町前組羽根組遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓や住居とともに弥生時代中期の再葬墓3基が検出されている。1号再葬墓からは中期初頭、岩櫃山B群に平行する時期の土器が出土している。池田遺跡（38）では弥生時代後期末に位置づけられる住居が検出されており、吉ヶ谷式の系譜を引く壺形土器が出土している。図幅外の遺跡としては藤岡市小野地区の沖Ⅱ遺跡と神流町青梨の岩津保遺跡が知られる。沖Ⅱ遺跡は弥生時代前期末から中期初頭にかけての遺跡で、再葬墓27基が検出された。伴出

する土器は大半が条痕文系の壺で、これに工字文系の壺・甕が見られた。岩津保遺跡は洞窟遺跡で、縄文時代草創期から弥生時代中期にいたる複合遺跡である。弥生時代中期前半の埋葬人骨が6体出土している。共伴の土器は神保富士塚式である。

### （5）古墳時代

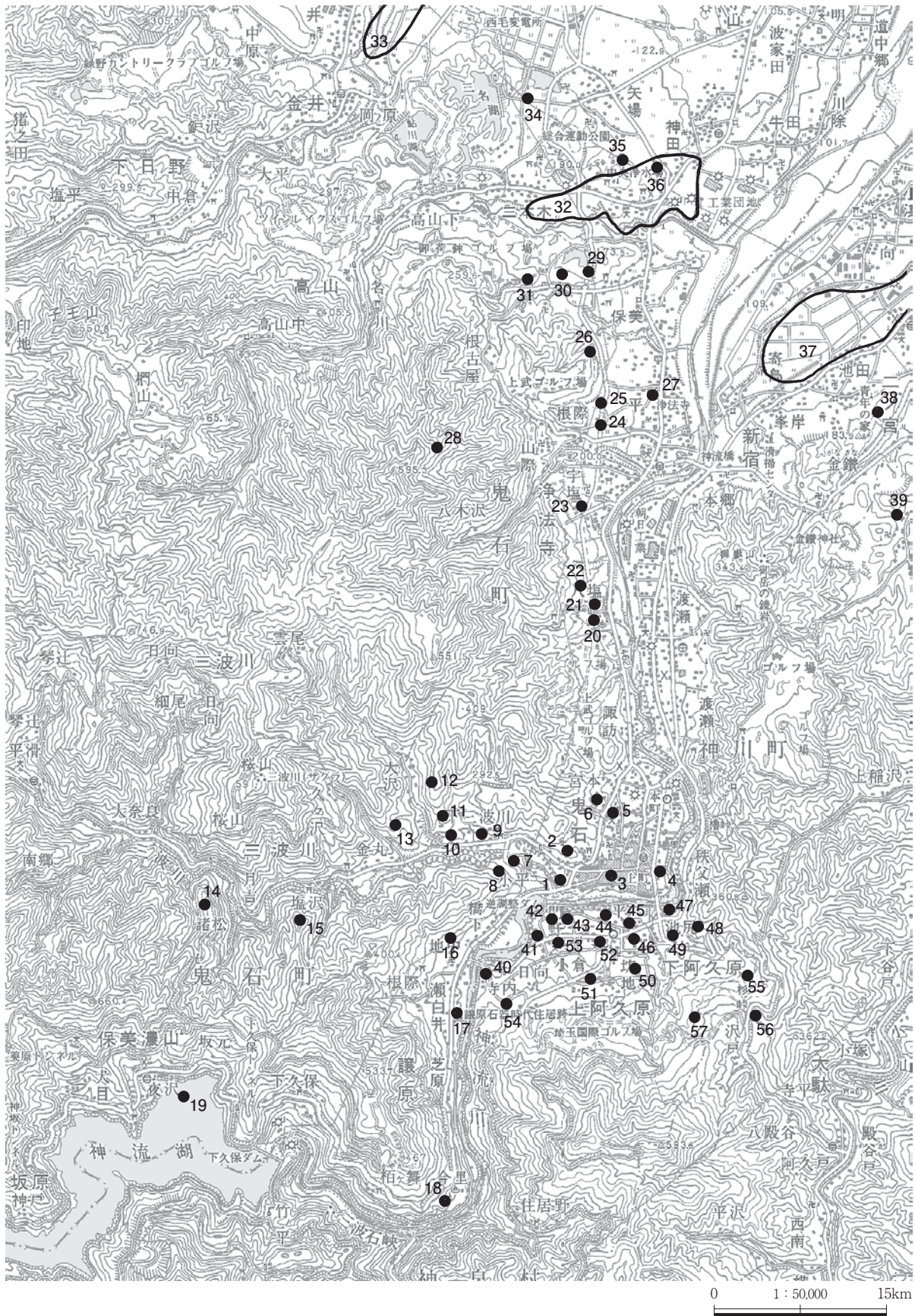
旧鬼石町地区では、1938（昭和10年）、『上毛古墳綜覧』作成時の悉皆調査で4基の古墳が確認されている。しかし、鬼石字川久保所在の鬼石町第三号墳と譲原字橋下所在の美原村第一号墳火の雨塚は古墳としては疑問視されており、確実視されているのは二基である。そのうち、鬼石町第一号墳は原古墳である。もう一基の鬼石町第二号墳は、本古墳より北に約300mに位置する大円櫓古墳（2）である。この古墳は、現状直径7m、高さ4mの円墳で、埴輪の散布は認められないが、未発掘調査のため詳細は不明である。なお、原古墳から北北西135mの地点には藤岡市教育委員会が行った分布調査により、古墳推定地が近接している。今後も新たに古墳の存在が確認される可能性は少なくない。が、いずれにし



写真1 大円櫓古墳



写真2 原古墳に近接する古墳推定地



第4図 原古墳周辺の遺跡分布

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1表 周辺遺跡の概要

番号	遺跡名	所在地	概要	文献
1	原古墳	藤岡市鬼石落合	本報告の遺跡。	1・7
2	大円櫓古墳	藤岡市鬼石上の山	現状で直径7m、高さ4mの円墳。未発掘調査。	1・7
3	新田遺跡	藤岡市鬼石新田	縄文時代遺物散布地。打製石斧出土。	2
4	鬼石相生遺跡	藤岡市鬼石相生	縄文時代遺物散布地。	2
5	鬼石小学校上遺跡	藤岡市鬼石	縄文時代後期集落。後期敷石住居を検出。	2
6	鬼石神社遺跡	藤岡市鬼石宮本	縄文時代遺物散布地。	2
7	小平遺跡	藤岡市三波川小平	縄文時代前～後期遺物散布地。	2
8	真下城（下山城）跡	藤岡市譲原橋下	中世城館址。	2
9	金剛寺遺跡	藤岡市三波川小平	縄文時代後期集落。後期敷石住居を検出。	2
10	枇杷尾根城跡	藤岡市三波川雲尾平	16世紀の城館址。縄文時代遺物散布地。	2
11	下三波川遺跡	藤岡市三波川下三波川	縄文時代後期集落。後期敷石住居を検出。	2
12	尾之窪城跡	藤岡市三波川下三波川	16世紀の城館址。	2
13	三波川金丸遺跡	藤岡市三波川金丸	縄文時代遺物散布地。	2
14	諸松城跡	藤岡市三波川中尾田	中世城館址。	2
15	塩沢城跡	藤岡市三波川塩沢川	16世紀の城館址。	2
16	橋下遺跡	藤岡市譲原橋下	縄文時代中～晩期遺物散布地。	2
17	譲原遺跡	藤岡市譲原	縄文時代後期集落。後期敷石住居を検出。	1・3
18	今里遺跡	藤岡市譲原今里	縄文時代前・後期遺物散布地。	2
19	保美濃山遺跡	藤岡市保美濃山向沢	縄文時代晩期集落。土製耳飾りを出土。中期遺物包含層。	4
20	野栗遺跡	藤岡市鬼石野栗	縄文時代前・中期集落。平安時代集落。	5
21	野栗Ⅱ遺跡	藤岡市鬼石野栗	平安時代土坑。	5
22	八塩遺跡	藤岡市浄法寺畑中	縄文時代後期集落。後期敷石住居を検出。	2
23	宇塩遺跡	藤岡市浄法寺宇塩	縄文時代遺物散布地。	2
24	塚ノ本Ⅱ遺跡	藤岡市浄法寺塚ノ本	縄文時代中期包含層。	5
25	塚ノ本遺跡	藤岡市浄法寺塚ノ本	縄文時代中期集落。平安時代の獣脚鋳型出土。	5
26	赤坂遺跡	藤岡市浄法寺赤坂	平安時代集落。	5
27	緑野教寺跡	藤岡市浄法寺	平安時代寺院。	1
28	三ツ山城跡（根小屋）	藤岡市浄法寺笹平	16世紀の城館址。	2
29	八王子遺跡	藤岡市保美八王子	旧石器時代・縄文時代・平安時代集落。	2
30	平塚台遺跡	藤岡市保美平塚台	縄文時代中期の集落。	2
31	南大谷遺跡	藤岡市保美南大谷	縄文時代早期土器。前期集落。	2
32	神田古墳群	藤岡市神田・三本木	高橋塚古墳が前方後円墳である他は横穴式石室を主体部に有する6から7世紀にかけての中小円墳、200基が群集する。	12
33	東平井古墳群	藤岡市東平井	前方後円墳を含む6・7世紀の群集墳。時沢・飛石・塚間・川破の4支群からなる。昭和56年段階で総数156基を数えた。	12
34	三本木中道東遺跡	藤岡市三本木	古墳時代後期・平安時代の集落。	6
35	矢場富士山遺跡	藤岡市矢場	古墳時代後期・平安時代の集落。	6
36	神田宿遺跡	藤岡市神田	縄文時代・平安時代包含層。	6
37	青柳古墳群	神川町大字二ノ宮・新宿・池田	6世紀初頭から7世紀後半にかけて形成された総数200を越える群集墳。城戸野・海老ヶ久保など11の支群に分かれる。	11
38	池田遺跡	神川町大字二ノ宮・池田	弥生時代後期集落。	8
39	背戸谷遺跡	本庄市児玉町宮内	縄文時代前期集落。古墳時代後期円墳。	8
40	前淵遺跡	神川町大字上阿久原	縄文時代中期・奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
41	門野遺跡	神川町大字上阿久原	奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
42	丹生神社南遺跡	神川町大字下阿久原	奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
43	中居遺跡	神川町大字上阿久原	縄文時代前～後期・奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
44	平西遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代前～後期・奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
45	平遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代前～後期集落・配石土坑。弥生時代前期再葬墓。奈良時代・平安時代集落。	9
46	幹沢遺跡	神川町大字下阿久原	奈良時代・平安時代土坑・溝。	8
47	秩父瀬遺跡	神川町大字下阿久原	奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
48	若宮遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代前期・中期土坑。平安時代集落。	8
49	池尻遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代・平安時代遺物散布地。	8
50	上ノ平遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代中期・奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
51	林遺跡	神川町大字下阿久原	奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
52	坊地遺跡	神川町大字上阿久原	縄文時代・奈良時代・平安時代集落。	8
53	鍛冶ヶ谷遺跡	神川町大字上阿久原	奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
54	木ノ下遺跡	神川町大字上阿久原	縄文時代中期・奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
55	東山遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代中期・奈良時代・平安時代遺物散布地。	8
56	橋ノ入遺跡	本庄市児玉町太駄	縄文時代中期・奈良時代・平安時代集落。	8
57	杉ノ嶺遺跡	神川町大字下阿久原	縄文時代中期土坑。古墳時代遺物包含層。	8

でも鬼石地区における古墳の分布状況は散在傾向にあったものと考えられる。

旧鬼石町地区から広く周辺部に目を向けると、藤岡市内には、6世紀から7世紀にかけての群集墳として、神田古墳群（32）、東平井古墳群（33）がある。神田古墳群は、37基が調査されている。高橋塚古墳1基が前方後円墳である他は横穴式石室を主体部とする円墳である。

東平井古墳群は、東平井の集落西方、鮎川右岸段丘上に展開している。1969（昭和44）年から1987（昭和62）年にかけて5回の発掘調査が行われ、18基の円墳が調査された。6世紀中葉から7世紀後半にかけての築造で、横穴式石室を主体部とし埴輪を樹立する古墳が多いことが明らかになっている。

神流川右岸では、神川町に、11の支群から形成される青柳古墳群（37）がある。多数の円墳と数基の前方後円墳から形成されている。その大半の古墳は横穴式石室であり、6世紀から7世紀にかけて築造されたものである。

原古墳は、現在のところ、神流川左岸において最上流域に位置する古墳である。一方、右岸は、原古墳からさらに上流に9.5km遡った埼玉県秩父市吉田（旧秩父郡吉田町）の塚山、標高830mから870mの地点に太田部古墳群が存在している。この古墳群は、前方後円墳1基、円墳11基から形成される積石塚古墳とされるが、詳細な調査は行われておらず、中・近世の塚とも考えられている。

鬼石地区における古墳時代の集落の存在は十分に想定できる場所であるが、その動向についてはその適地において市街化が進行しているため、原古墳や大円櫓古墳との対応関係について追跡することはできない状態にある。『鬼石町誌』に鬼石地区上山や浄法寺地区赤坂、八塩において土師器が出土していることが記載されているが遺跡の調査事例はない。対岸の神川町旧神泉村内においても古墳時代の遺跡は確認されていないようである。

神田古墳群に近接する三本木中道東遺跡（34）・矢場富士山遺跡（35）からは、古墳時代後期の住居

が検出されている。特に三本木中道東遺跡は6世紀末葉から7世紀初頭前後の集落と考えられる。

#### （6）奈良・平安時代

奈良時代は遺物散布地はあるものの、遺跡は未検出である。平安時代では保美地区の赤坂遺跡（26）や野栗遺跡、浄法寺地区の緑野教寺跡（浄法寺）（27）がある。緑野教寺は延暦4（785）年に勅願により創立されたとする。近接する塚ノ本遺跡は、緑野教寺創建時の寺域と想定された。遺構の検出はなかったものの、平安時代の獣脚鋳型が出土しており、寺院との関連性が指摘されている。神流川右岸の神川町では若宮遺跡（48）、坊池遺跡（52）等で集落が検出されている。

#### （7）中世

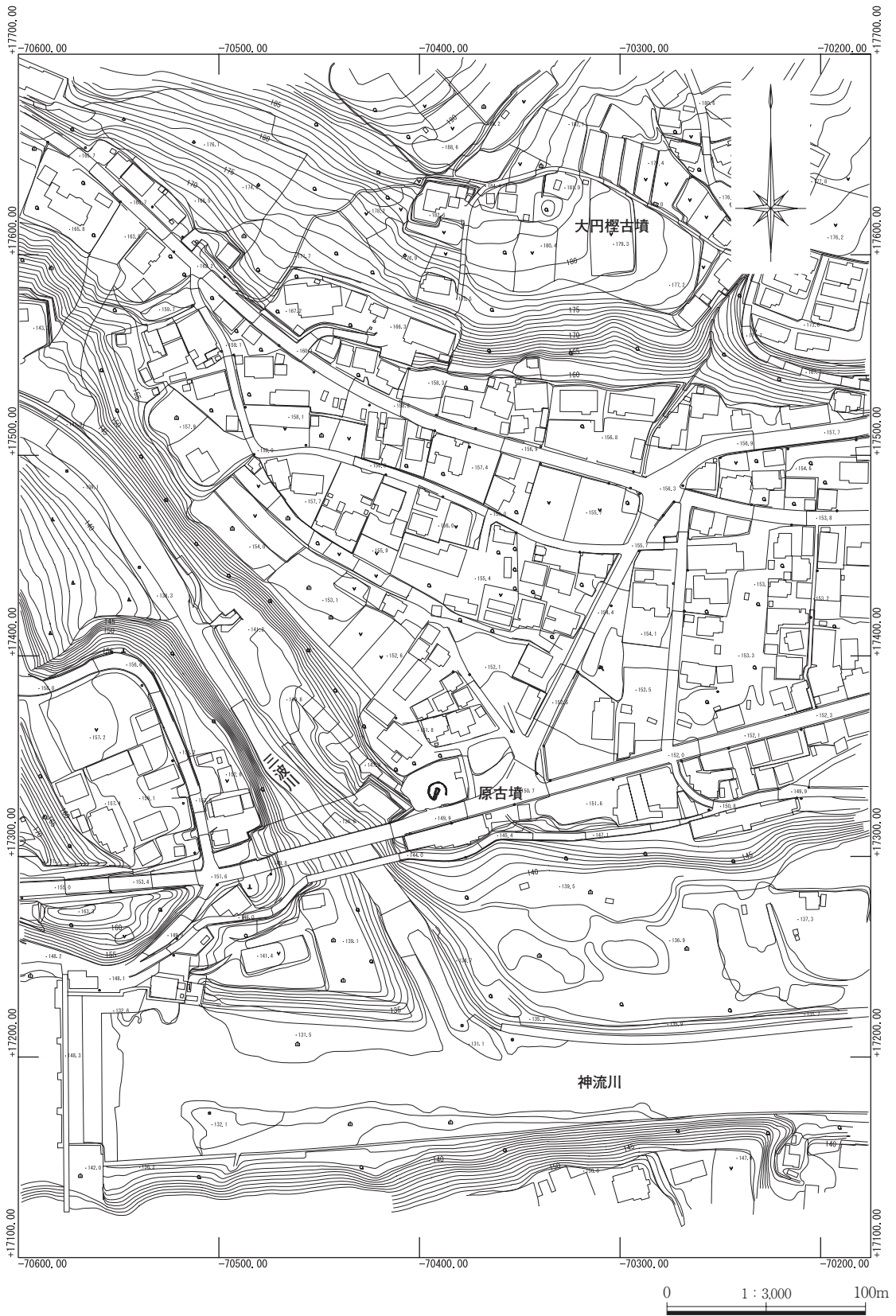
旧鬼石町周辺には中世城館跡が多く存在する。真下城（下山城）跡（8）をはじめ、諸松城跡（14）、塩沢城跡（15）などで16世紀前後の山城である。

### 第3節 発掘調査の方法と経過

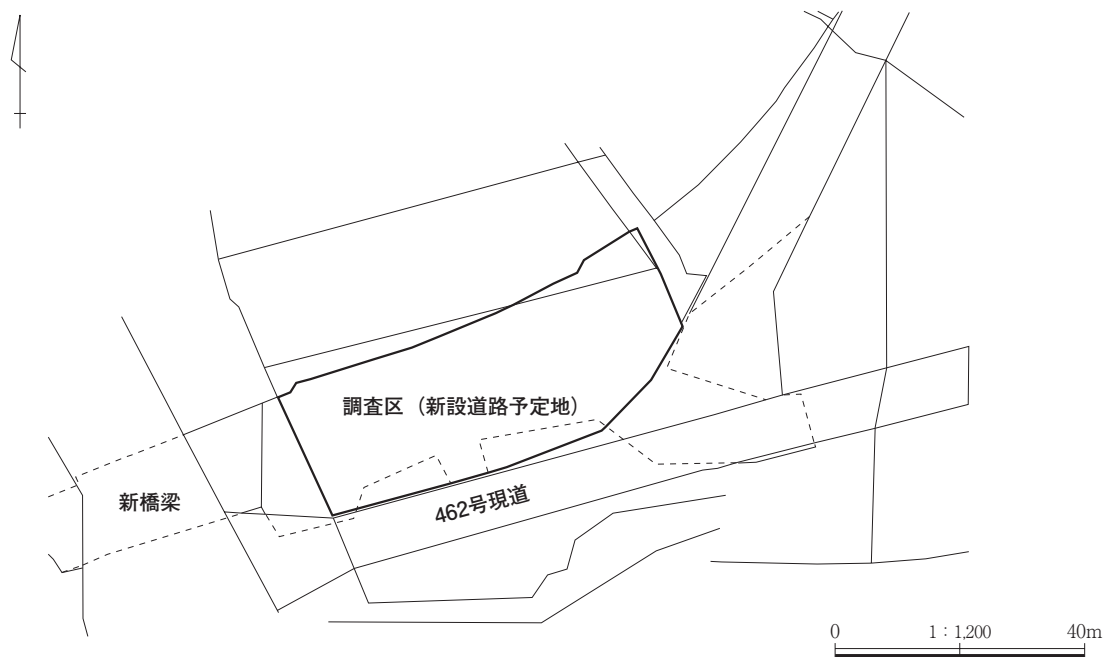
#### 1 原古墳の呼称

原古墳は、群馬県教育委員会が作成した文化財情報web版に藤岡市教育委員会台帳「古679」として掲載されている周知の古墳である。

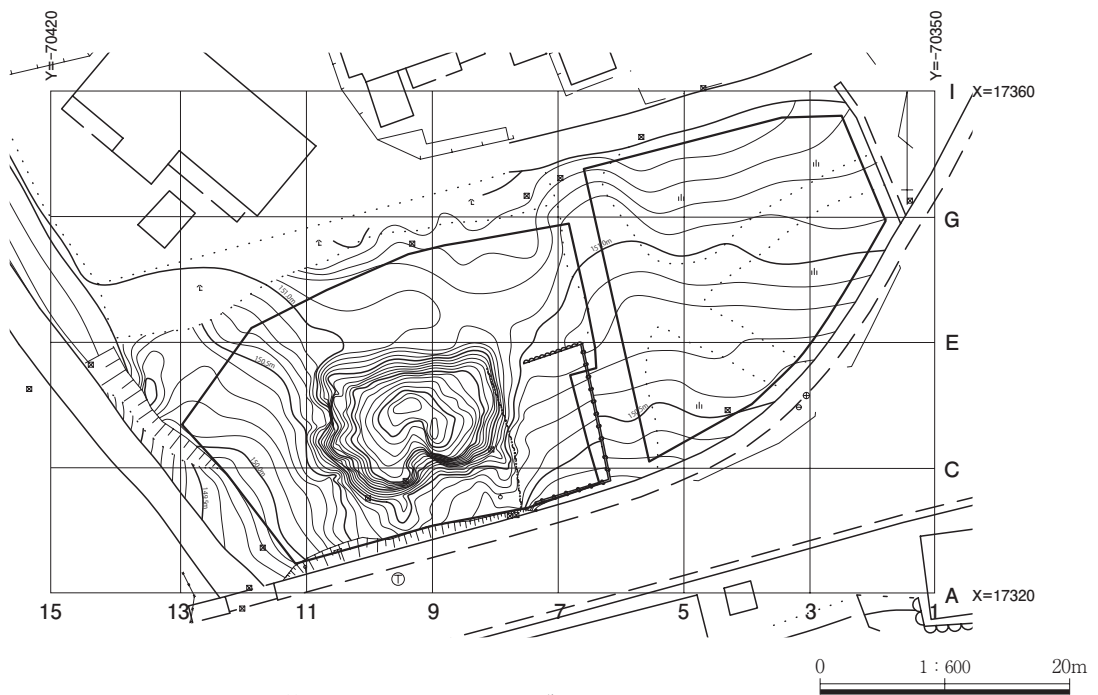
原古墳の呼称については、1938（昭和10）年の『上毛古墳綜覧』作成段階では鬼石町第一号古墳と記載されているだけである。1997（平成9）年刊行の桜澤重利氏の『上武国境地帯歴史以前の神流川溪谷』には原古墳の名称で記述があり、巻末の遺跡地名表には鬼石町大字鬼石小字原とある。1963（昭和38）年発表の桜澤氏の論文「考古学的調査による・歴史以前の神流川溪谷」を見るができないので何時の時点からこの名称で呼称されているのかは不明である。1984（昭和59）年刊行の『鬼石町誌』でも原古墳の名称で掲載されていることから本報告でもその名称を使用する。ただし、本古墳の所在地の字名は落合である。この東側に原の字名が見られることから、原古墳の命名において隣の字名を付した可能性が考えられることを付記しておく。



第5図 原古墳周辺の現況



第6図 原古墳の調査区と国道462号特殊改良工事



第7図 原古墳の位置とグリッドの設定

## 2 調査の方法

今回の調査対象地は東西約63mの長さを有していた。調査に当たっては、この範囲内について調査区南東隅の国家座標(世界測値系)のIX系、 $X = 17,320$  m、 $Y = -70,350$  mを起点として、調査区全域を網羅する形で5 m四方のグリッドを設定した。西方

向(X軸方向)へ5 mごとに1・2・…・15とアラビア数字を、北方向(Y軸方向)に5 mごとにA・B・…・Iとアルファベットを付した。グリッドの呼称は南東隅の交点をもってこれにあてた。遺物包含層の調査にあたってはこのグリッドを単位に分割した。

発掘調査に際しては、原古墳墳丘の東側・北側部



## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

分の遺構確認作業に伴う表土の掘削および古墳の周辺に放置された礫石の除去などについてはバックホーを使用した。その他は基本的に人力による遺構検出作業を継続的に実施した。

遺構の記録は、実測図化と写真撮影により行った。遺構の図化は、古墳、土坑、遺物包含層出土の土器とその状況に則して縮尺を変え、図化した。

遺構写真の撮影には、モノクロ写真用の6×7判撮影用カメラと1眼レフデジタルカメラを使用した。古墳の遠景や全景など広範囲な画角を対象とする場合は業者に委託し、ラジコンヘリコプターやリフティングケーブルを使用し、写真測量を兼ねた高所からの撮影を実施した。また、高所作業車を利用した写真撮影による記録も行った。

### 3 調査の経過

原古墳の調査は2008（平成20年）4月1日から7月31日の4箇月間にわたり実施した。

4月1日から事務処理を開始するとともに、4月4日以降調査地の確認を行い、調査開始に向けた準備を進めた。4月8日の藤岡土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課との打ち合わせの中で、古墳の保存については調査の進行する中で協議、決定するとされた。

4月16日に調査事務所を設営し、17日から発掘調査を開始した。調査は職員2名1班の体制で行い、掘削作業については株式会社シン技術コンサル前橋支店に委託した。

作業は原古墳の墳丘及びその周辺に繁茂していた立木・篠竹の除去から開始した。原古墳の東側に広がる平坦面については試掘を行い土層の堆積状況を確認後、表土を除去して遺構確認を行った。結果、この部分からは遺構の検出、遺物包含層の存在が認められなかった。

原古墳の調査は、第一に墳丘の現況確認を行い、平面図の作成を行った。合わせて既にその存在が確認されていた横穴式石室の残存状況を確認し、石室の開口方向の把握に努めた。この時点で、横穴式石室の天井石は全て除去され、存在しないことや開口

部右側は一部が破壊されていたものの左側は羨道部から奥壁に至るまで側壁が残存していることが確認された。

一方、墳丘は開口部右側から東側の約4分の1程が削平されていることや埴輪片の散布が確認された。また、古墳の周囲についても墳丘間近まで削平・攪乱が及んでいることが想定された。

調査は、墳丘の残存状況を把握するとともに周堀の存在を確認するため石室の開口方向に則してトレンチを設定、掘削を進めた。周堀の確認には最終的に8箇所のトレンチを配置した。

これに続き、墳丘・横穴式石室の残存状況の記録、埴輪の樹立状況の把握、墳丘・横穴式石室の解体作業と古墳構築過程の把握について順次作業を行った。6月の段階で石室の移築保存が確定したことから石室の解体作業には移築時の基礎資料の記録も加わった。

古墳の解体作業終了後、墳丘下の遺構・遺物の有無についての確認と記録作業を、古墳北側の縄文時代・弥生時代遺物包含層の調査とともにを行い、7月31日に全ての調査を終了、調査事務所を撤収した。

#### 調査日誌抄録

4月16日 調査事務所の設置。

4月17日 調査開始。

4月21日 調査対象地内の立木・篠竹の伐採作業開始。合わせて原古墳の現況測量図作成開始。

4月25日 原古墳、横穴式石室確認のため墳丘上南側部分の掘り下げ開始。合わせて墳丘北側の攪乱礫の除去を行う。

4月28日 原古墳、墳丘の南側攪乱部分の掘り下げ開始。

5月2日 墳丘上に調査トレンチを設定。横穴式石室の主軸方向に沿って南北トレンチを、これに直交する東西トレンチを配置。西側トレンチの掘り下げを開始、周堀、墳丘裾部の確認を行う。

5月8日 北側トレンチの掘り下げ開始。合わせて墳丘の南西・西側・北側の各箇所での墳丘の残存状況把握のための表土・礫の除去作業開始。

- 5月9日 北西トレンチの掘り下げ。
- 5月13日 石室羨道部閉塞状況を実測する。
- 5月15日 墳丘北西部分の表土・礫除去。これにより後世に積み上げられた石垣3段を検出。墳丘が著しく変形を加えられていることが判明した。横穴式石室の実測作業を開始する。
- 5月16日 墳丘南西部分の攪乱礫を除去する過程で、多数の古銭の出土を見る。同日、鬼石小学校6年生見学。
- 5月28日 石室床面の精査終了。写真撮影。
- 5月29日 原古墳の移築保存について群馬県教育委員会・藤岡市教育委員会と協議。
- 6月10日 地元自治会住民、鬼石小・鬼石北小・鬼石中学の児童・生徒向け資料作成、配布。
- 6月13日 墳丘全体を空中写真撮影・測量。
- 6月14日 墳丘解体作業を開始。
- 6月20日 文化財保護課と石室の移築作業について打ち合わせ。
- 6月24日 原古墳北側の調査対象地内にトレンチを設定、遺物包含層の調査を開始する。上毛新聞に調査状況について記事が掲載される。
- 6月30日 群馬県教育委員会文化財保護課により、藤岡土木事務所・藤岡市教育委員会・地元自治会・地元有識者に対する石室移築についての説明会が開催される。
- 7月1日 石室羨道部左壁から石室解体作業を開始する。石室の移築に備え、石材の記録を取りながら、調査地内に仮置する。
- 7月9日 墳丘基底面、石室基底石部分空中写真測



写真3 移築保存のための石室石材仮置状況

- 量実施。
- 7月14日 石室解体作業終了。
- 7月16日 石室基底石据え方検出。
- 7月22日 原古墳墳丘下、遺物包含層の調査開始。
- 7月29日 墳丘下、遺物包含層の調査終了。全ての調査を終了する。
- 7月30日 調査地内の片付け。発掘器材整理。出土遺物の整頓。
- 7月31日 調査事務所の撤収。

#### 4 整理作業の方法

原古墳の調査成果・出土遺物の整理作業、および報告書編集作業は2008(平成20)年10月1日から2009(平成21)年3月31日までの間に実施した。刊行作業は2009(平成21)年度に実施した。

遺構図面については、調査時作成の図面に編集作業を加えた後、トレース・版下作成・レイアウト等の作成作業を行った。その一部についてはデジタルトレースを外部委託した。

出土遺物については事前に水洗・注記作業を外部委託しておいたものを、出土遺構・地点ごとに分別、接合作業を行った後、報告書に掲載する遺物を選別・抽出した。実測に際しては、その一部について器械実測により素図を作成し、これを精図した。器形の復元が困難な資料については、断面のみ実測を行い、これに拓本を添付した。石器・石製品は石材同定を依頼した。作成した実測図は、トレース作業を行い、遺構図面と合わせ版下作成・レイアウト等の作業を行った。

記録写真類は、遺構写真については遺構・地点ごとに基礎整理を行った後、デジタル専門班で写真図版のレイアウト・版下作成作業を実施した。遺物写真は当事業団写真室でデジタルカメラで撮影し、デジタル班で図版作成を行った。

埴輪の胎土分析については外部委託を行い、その報告を第3章に掲載した。

掲載資料については、台帳作成後収納作業を行った。掲載を断念した土器・石器などは出土遺構・地点ごとに種別・器種の分類を行い、計数後収納した。

## 第2章 発掘調査の記録

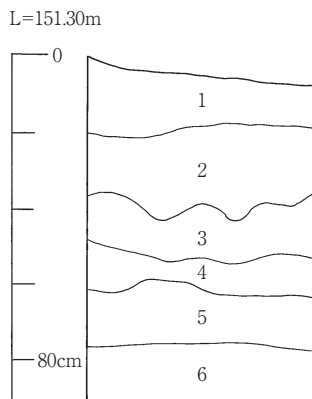
### 第1節 遺跡の概要

#### 1 基本土層

調査対象地は、第二次世界大戦終戦直後は桑畑であったようである。その後、原古墳の墳丘上と周囲は石材加工業者により作業場と材料置き場として利用された。その際に削平、攪乱を受け、その後、荒地化が進行したようである。また、墳丘の東端には三波石の石材展示場が造成され、これより東側部分は調査前は雑種地となっていた。

第2節でも記したように古墳の立地する地点は、結晶片岩の岩盤を基盤とする河岸段丘上にあり、岩盤の上には段丘礫層が堆積していた。礫層は、垂角礫を含む円礫から構成されており、5から20cmの礫が主体であったが50cmを超す礫も多数含まれていた。表土からこの礫層上面までの深さは一律ではなく、調査区東側部分で約80から100cmとやや深く、西側部分では約25cmであった。関東ローム層の堆積は認められなかった。調査地内の標高は149.8mから151.4m前後である。

第8図はF-7グリッド地点における土層の堆積状況である。上層から、1層表土、2層灰褐色土、3層暗褐色土、4層暗褐色土、5層褐色土、6層褐色土、7層砂礫の順に堆積していた。



第8図 原古墳の基本土層

原古墳は3層の暗褐色土層を造成・整地した上で構築面としていると考えられる。弥生土器は3層から出土し始め、4層の暗褐色土を中心に、5層褐色土までを包含層としていた。

#### 2 検出した遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は原古墳の他に土坑2基である。調査面積は、1446㎡である。

また、今回の調査で得ることのできた資料は、60×37×15cmの遺物収納箱に27箱である。本報告書で掲載した資料は合計542点である。その内訳は原古墳から出土した円筒埴輪156点・形象埴輪201点・切子玉3点・管玉2点・ガラス小玉5点、金属製品4点である。縄文土器7点、弥生土器66点、弥生時代石器23点、古墳時代から平安時代の土器4点、中・近世の古銭43点・陶磁器23点・板碑2点・金属製品3点については遺構外出土の遺物として扱った。

### 第2節 原古墳の調査

#### 1 墳丘及び外部施設

##### (1) 調査前の状況

調査前の原古墳は、崩落した礫石やその後周辺から寄せかけられた土砂などにより高さ2.3mの高まりが形成されていた。その裾部分は、土地利用の区割りに沿って直線的に削られ、あたかも方墳のよう

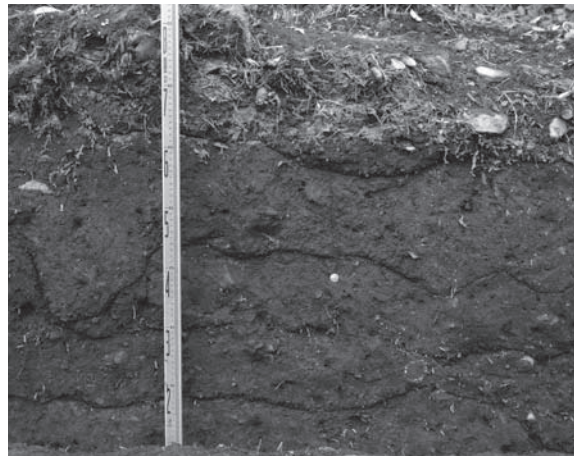


写真4 F-7グリッド土層堆積状況

な形状を呈していた。その規模は東西約16m、南北約12mを測った。以上のことから、墳形は、著しく変形をきたしているものと判断された。

墳頂部の南側部分には南北方向の陥没坑が認められた。これは、石室の天井石が除去されたことによるものであることが予想された。石室は早くから開口していたようであるが、前述の桜澤重利氏により1947・48（昭和22・23）年頃に作成された石室の略図には、天井石が奥壁寄りから4石分が記録されている。「天井には大きな平石を載せている」との記載もある。この時点では石室の長さは2.5mとある。幅は羨道部で0.8m、玄室部で1m、高さは1.1から1.2mとされている。石室の途中から室内に入りがなされていたようである。

### （2）墳丘

本古墳は円墳である。葺石の基底部分における墳丘規模は、主軸方向で9.35m、主軸直交方向で9.45mである。墳丘の中心は、横穴式石室の奥壁から羨道方向に1.2mの位置となる。高さは、石室の西側の残存部分と墳丘西側の基壇面との差が1.6mであった。石室の残存状況、天井石の設置状況などを

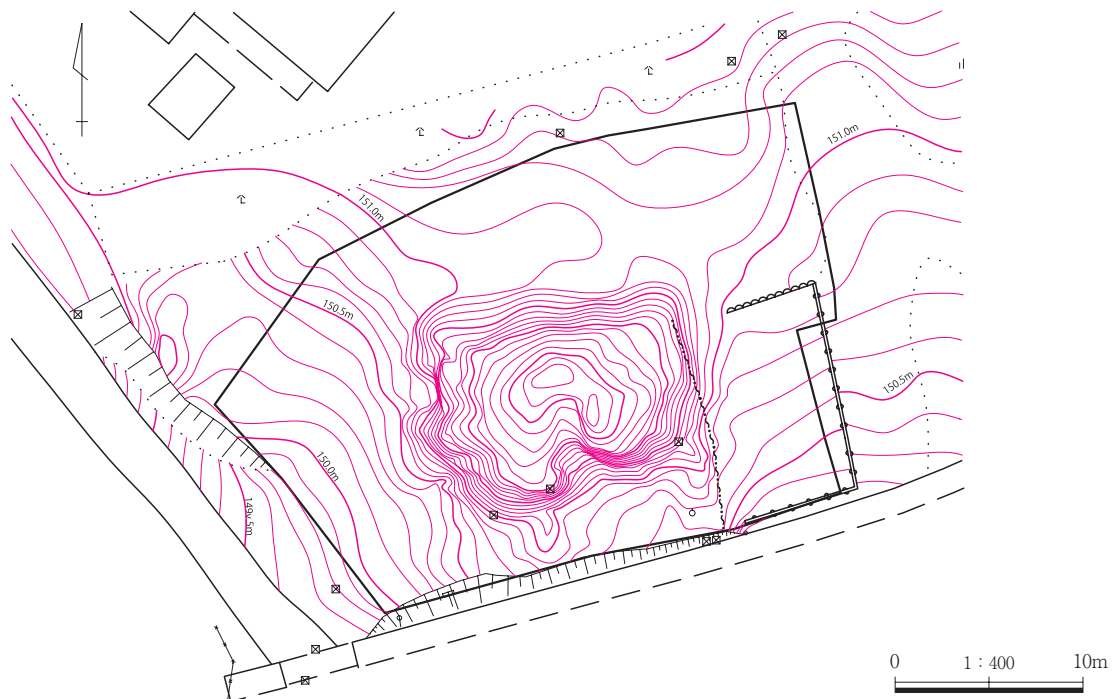
考えると築造時の原形では高さ2.0m以上を有していたものと推定される。

本古墳の墳丘は、一般の古墳の盛土に当たる土砂が全く無く、その全てが礫石を積み上げることにより築成されていた。調査開始前、墳頂部および墳丘斜面から裾部には礫石を主体とした土砂が堆積していた。墳丘を構成する礫石が、整然と組み上げられた様な状況ではなかったため、墳丘残存部分の検出については識別が困難であった。陶磁器や埴輪片の検出状況、黒味の強い暗褐色土と礫石の混在状況を観察する中で既に原位置を失っていると判断した石材を除去した。

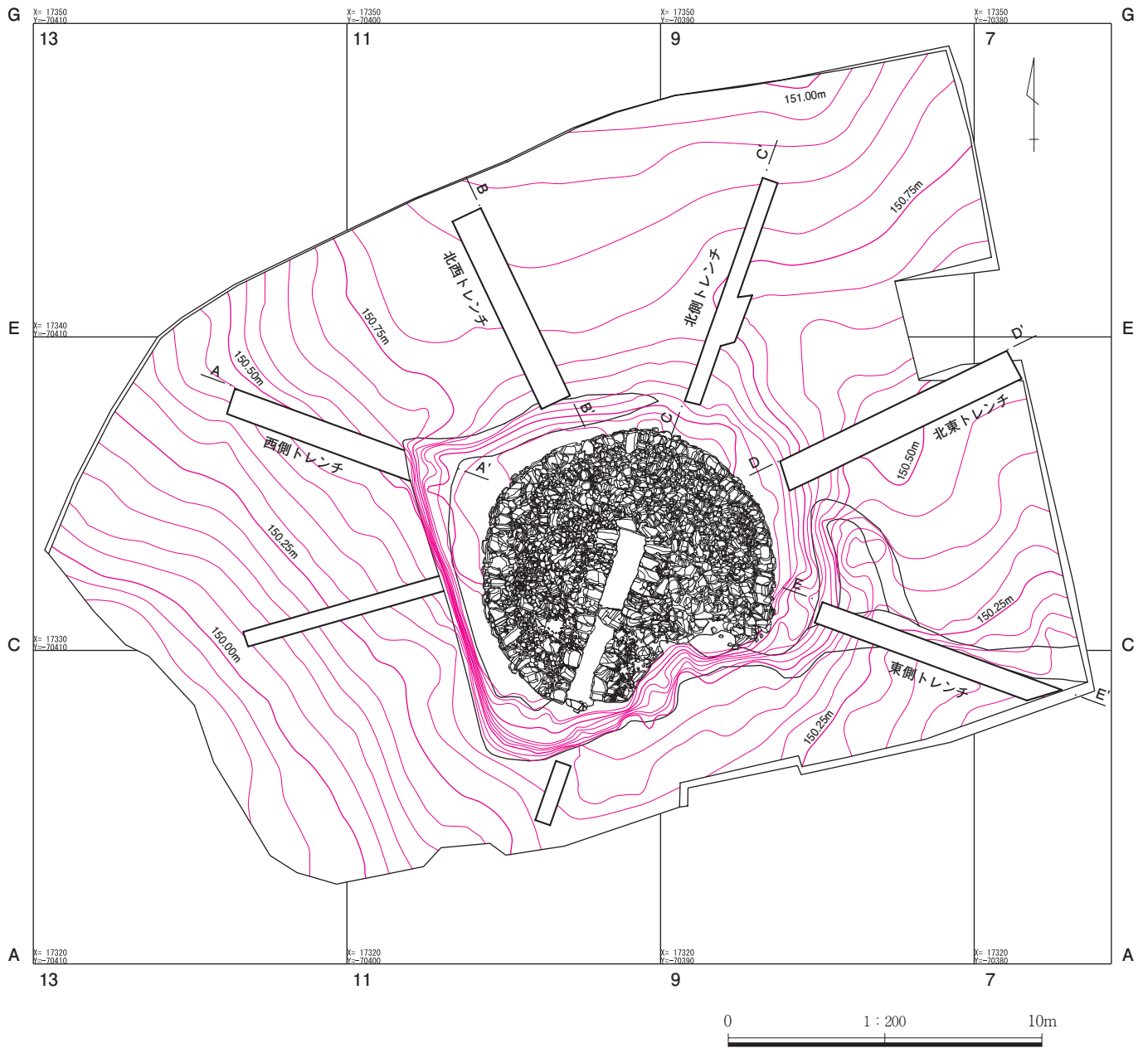
本古墳の墳丘構造は、高崎市吉井町神保下條遺跡1号古墳に類似している。「積石塚」との関係性については、第4章第2節の右島和夫氏の考察を参照されたい。

### （3）葺石

本古墳は、墳丘の表面の全面にわたり葺石が施されていたと考えられる。調査工程の都合から葺石の立面図を作成することができなかったが、遺存状態は北側を中心にあまり良好とは言えなかった。これ



第9図 調査前の原古墳



第10図 墳丘と周堀調査トレンチの位置

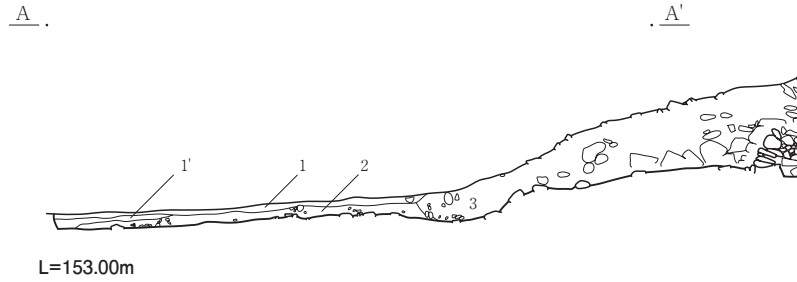
は傾斜が比較的急であったことに一因があったと考えられる。最も良好であったのは墳丘東側から北東側の部分で、高さ0.95mを測った。その他は、墳丘の南側から西側で0.55から0.8m前後、北側で0.4から0.55m前後、東側で0.6から0.7m前後であった。基底部分の高さは西側で標高151.1m、東側で151.0mを測った。

葺石に使用されている礫石は結晶片岩の転石や板状岩塊が主体であった。いずれの石材も墳丘を構成

する礫石と比較すると大振りなものが使用されているが、形状・規模ともに区々で不揃いの状態であった。基底の礫は、北側を中心に雲母石英片岩の中規模の転石が多く見られたが、根石を意識して特に大振りな礫が使用されているような状況ではなかった。横幅0.8m前後の大礫は、基底よりもむしろ2段目・3段目に使用されていた。

葺石の積み方は、最大面を上下の面にした小口積みが大半で、大礫の中には一部平積みが見られ

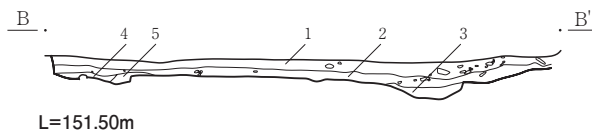
西側トレンチ



西側トレンチ土層注記

- 1 暗褐色土 表土。
- 1' 暗褐色土 1が堅く踏み固められている。
- 2 暗褐色土 茶味をおびる。
- 3 暗褐色土 やや黒味をおびる。中位から下位にかけて長軸20cm程の扁平な礫を多量に含む。礫は墳丘方向から流れ込んだような状況。特に組んだり、配列したような様子は見られない。しまりなく、埴輪や陶磁器片を混入する。

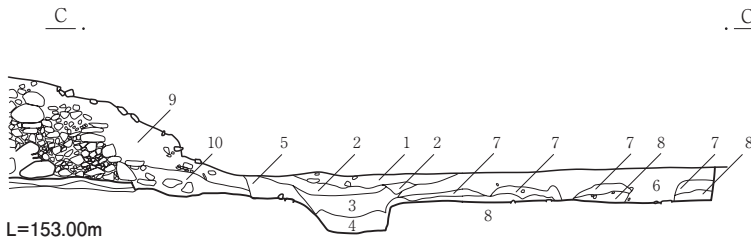
北西トレンチ



北西トレンチ土層注記

- 1 暗褐色土 表土。
- 2 暗褐色土 小礫を多く含む。上層は堅く踏み固められている。
- 3 暗褐色土 耕作に伴う新しい根切り溝の埋没土。
- 4 茶褐色土 炭化物散見。礫も含まれていた。倒木痕の可能性がある。
- 5 茶褐色土 地山か。

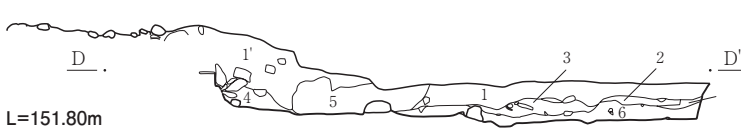
北側トレンチ



北側トレンチ土層注記

- 1 暗褐色土 表土。
- 2~4 暗褐色土 耕作に伴う新しい根切り溝の埋没土。
- 5 暗褐色土 茶味をおびる。しまりなし。礫の混入も少ない。
- 6 暗褐色土 1同様の表土層。小礫を含む。北側寄りでは7・8層を分断するように攪乱している。
- 7 黒褐色土 北側寄りで黒味を一層増す。軽石の混入は目立たない。
- 8 茶褐色土 地山か。
- 9 暗褐色土 黒味あり。砂礫を多く含む。しまりなし。
- 10 暗褐色土 やや茶味をおびる。

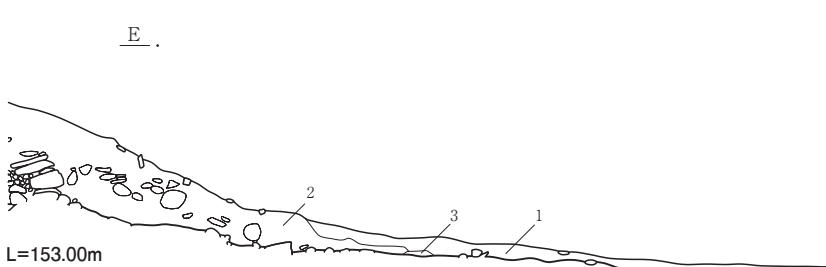
北東トレンチ



北東トレンチ土層注記

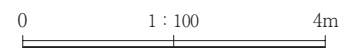
- 1 暗褐色土 表土。
- 1' 暗褐色土 表土。墳丘に近く、後世に石垣の構築があったため礫を多量に含む。
- 2 黒褐色土 灰白色の軽石を少量混入。しまり、弱い。
- 3 暗褐色土 黒味が強い。茶褐色土・軽石を少量散見。
- 4 暗褐色土 全体に粗い粒径。
- 5 攪乱。
- 6 茶褐色土 地山か。

東側トレンチ



東側トレンチ土層注記

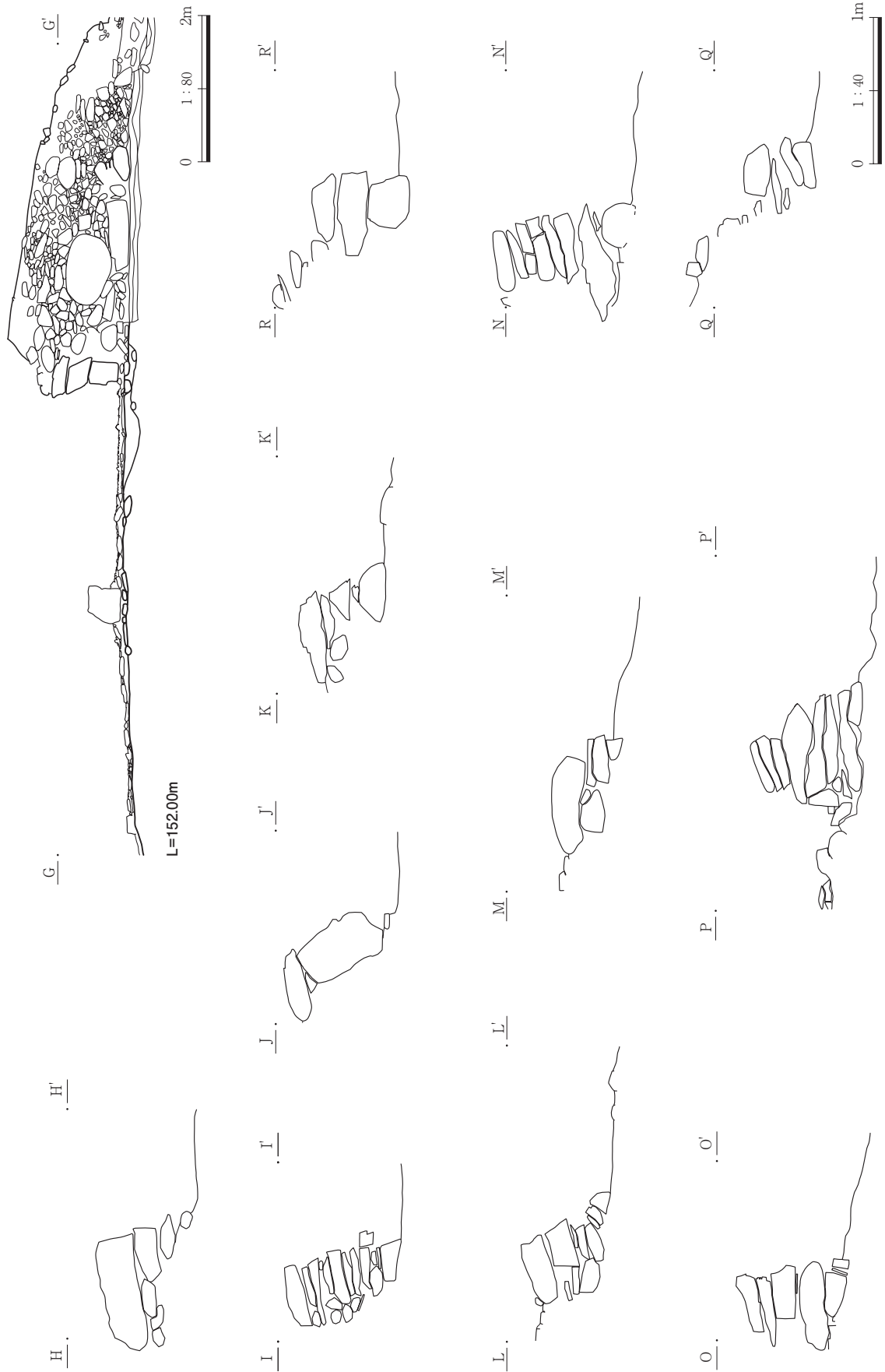
- 1 暗褐色土 灰色あるいは茶味をおびる。
- 2 暗褐色土 灰色味をおびる。
- 3 茶褐色土 地山か。



第11図 墳丘と周堀調査トレンチ土層断面図



第12図 墳丘平面図・断面図



第13図 墳丘断面図・葺石断面図

H ~ R L=151.80m



た。奥行き（ひき）は、長いもので0.7m、短いものでも0.4から0.5mを測った。墳丘内側にあたる端部のレベルを下げ、外表の面に傾斜を持たせている。背面に多少の小礫・小砂利をいれているがそれほど入念な調整があった様子は観察できなかった。

石積みの一部には、墳丘東側部分で断面実測を行ったP-P'のように縦方向に目地の通る箇所もあるが、これはむしろ例外的で、一定の間隔で目地が通るような状況にはなかった。縦方向、横方向のいずれも目地の通りをあまり意識した作業状況は見られなかった。大礫が据えられている箇所と小礫が多用されている箇所があるが、その観察からは作業単位を抽出することも困難であった。

石積みの傾斜は、断面を計測した11箇所のうち8箇所が墳丘の中心方向に傾くように70度から80度の角度を有していた。この傾斜を維持するために見粗雑な積み方の見える石積みも、大礫の間に小礫を巧みに組み込んだり、個々の礫の上端が平坦面を形成するような工夫が凝らされていることがわかる。

葦石の基底部分を平面的に見ると、外縁は必ずしも精美的な円形を描かず、北西部分では同心円上から約20cmも内側に入り込み、直線的になっている。墳丘西側の半周部分で9箇所、わずかに角をなす部分が見られる。これが作業単位の境界を示している可能性もあるが、特にこの箇所では石積みの目地通りなどは認められてはいない。部分的に大型の板状岩塊が使用されていることに起因することかもしれない。

#### （4）基壇面

再三にわたり記すが、本古墳は、後世の土地利用において南東部分をはじめ墳丘の周囲一体が著しく改変を受けていた。比較的残存状態が良好な面が見られたのは墳丘西側部分と北東側の一部分だけであった。墳丘西側は、西側トレンチを設定した部分にあたり、葦石の基底から外方に1.5mの範囲を精査した。北東部分は葦石の基底から外方に2.5m程の幅で旧地表を削りだしたような緩やかな傾斜面を検出した。しかし、両箇所とも基壇面の外縁を画するような列石、面を造成したような小礫や土砂の存

在は確認できなかった。

なお、墳丘検出の過程で、墳丘北西から北東部分にかけて、葦石裾部の外縁にこれに沿うように複数の礫を検出した。付け基壇の存在を考えたが、石積の状態が整然としておらず、隙間から埴輪片が出土したことなどから、その存在を否定、除去した経過がある。

#### （5）周堀

墳丘の周囲はいずれの箇所においても表層からの著しい攪乱を受けていた。周囲の8箇所にトレンチを設定し、掘り込みの存在と土層の堆積状態について確認した。その結果、後世に削平を受けた可能性も考えられるが明瞭な掘り込みやその痕跡を確認することはできなかった。

上記の状況から、本墳においては築造当初から周堀が存在しなかった可能性が高いものと考えられる。それは、本墳が墳丘の築造に際し、礫石を主体に構築されていることから、他の一般的な古墳のように周堀を掘削し、その排土を墳丘の盛土とする必要が生じなかったことが理由の一つとして上げられる。

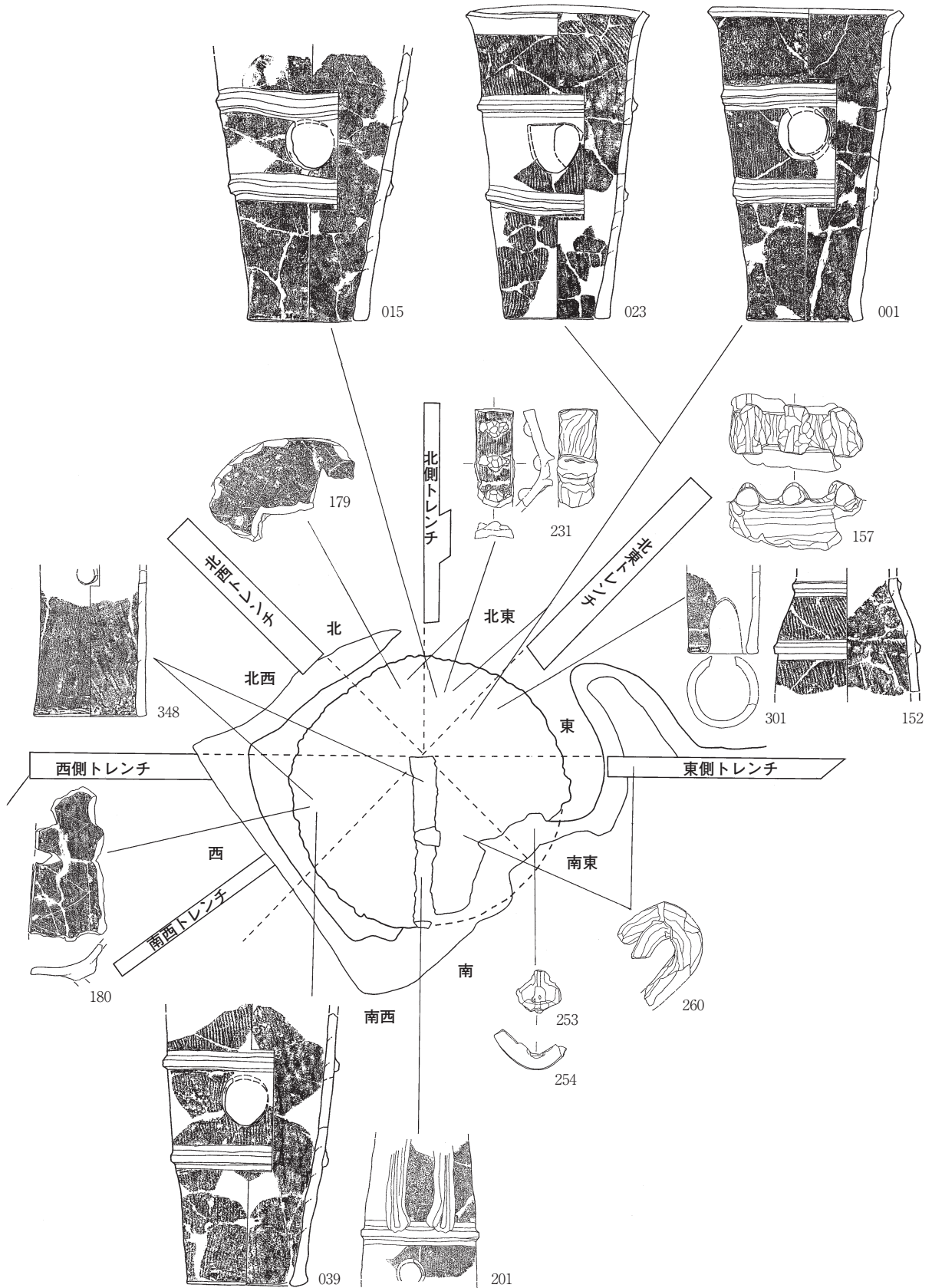
#### 2 埴輪の出土状況

本墳からは円筒埴輪、形象埴輪の家・盾・鞆・大刀・人物・馬が出土した。この他に器種を特定できないものの器財埴輪と考えられる資料の存在も認められた。

これらの埴輪は、基壇部分の残存状態が悪かったことにも原因すると考えられるが、結果として原位置で確認されたものは皆無である。そればかりでなく、原位置近くに横倒したと考えられるような出土状況さえも認められなかった。葦石基底の周囲に残存した基壇面を精査したが埴輪樹立に係わる掘り方などは検出できなかった。

墳丘の残存状況を確認する過程で、多量の埴輪片が崩落した墳丘・葦石を構成していた礫石に混じって出土した。これらは、細片化、器面の摩耗が顕著で、その出土状況は、墳丘周辺全体に四散したというような状態であったと言える。

調査に際して、第14図に示したように原位置を



第14図 埴輪出土位置概念図

失って出土した埴輪については、出土位置を大区分して取り上げを行った。観察表を参照していただくと分かるが、大半の埴輪は、墳丘斜面の区分の中で取り上げている。墳頂部としたものは、石室の調査着手時に現況平坦面を掘り下げた過程で出土したものが多し。裾部は、葺石の状況が把握された後、基壇面との関係で低位置から出土したものについて呼称したものである。

円筒埴輪は、墳丘の各所から出土しているが、後述する形象埴輪が墳丘の東側から北東側に多く出土しているのに対し、西側から北側部分においても多数見られた。口縁部から基底部までが接合・復元された001・023は、墳丘斜面北東から東側部分からの出土である。005は基底部の大型破片であるが、北東部分の墳丘縁部から3m離れた緩斜面からの出土である。

家形埴輪は、墳丘斜面の東側から北側を中心に出土している。172や173の下屋根の破片は墳丘西側からの出土で、破片が広範囲に散布していることがうかがわれる。盾や大刀などの器財埴輪も墳丘東側から北側を中心に出土している。

人物や馬形埴輪は、墳丘南東部分を中心に、南側の攪乱部分から墳丘北側に至る範囲で出土している。馬の277の一部や295の一部は墳丘・北側や北東部分からの出土である。

以上のような出土状況から、本古墳においては、原位置は確認できなかったものの、墳丘周囲の基壇面および墳頂部に円筒埴輪・形象埴輪が樹立されていたことが想定される。家形埴輪や各種器財埴輪は、他の古墳同様、墳頂部平坦面に樹立されたものであろう。人物や馬形埴輪は石室開口部の右側から墳丘側面の基壇面に樹立されたものと考えられるが、特定の集中箇所が存在するか否かなど具体的な状況については把握することが困難であった。

なお、今回の調査においては、古墳の築造時、あるいはその後執り行われた儀礼などに係わると考えられるような土師器・須恵器については全く出土していない。

### 3 埋葬施設

#### (1) 概要

本墳の主体部は、南側に開口する袖無型の横穴式石室である。石室の主軸は、N-19°15'-Eである。全長は6.14mである。前述のとおり調査開始時には既に天井石は全て取り外され、失われていた。壁体は、墳丘南東側部分が削平された際に石室開口部右側が破損を受けたものと考えられる。また、右壁は、羨道から玄室に移行する部分の長さ1.8m程で梱石を残して他の石材が抜き取られていた。これに対し、左壁は、開口部から奥壁にいたるまでその全面が比較的良好な状態で残存していた。

#### (2) 閉塞状況

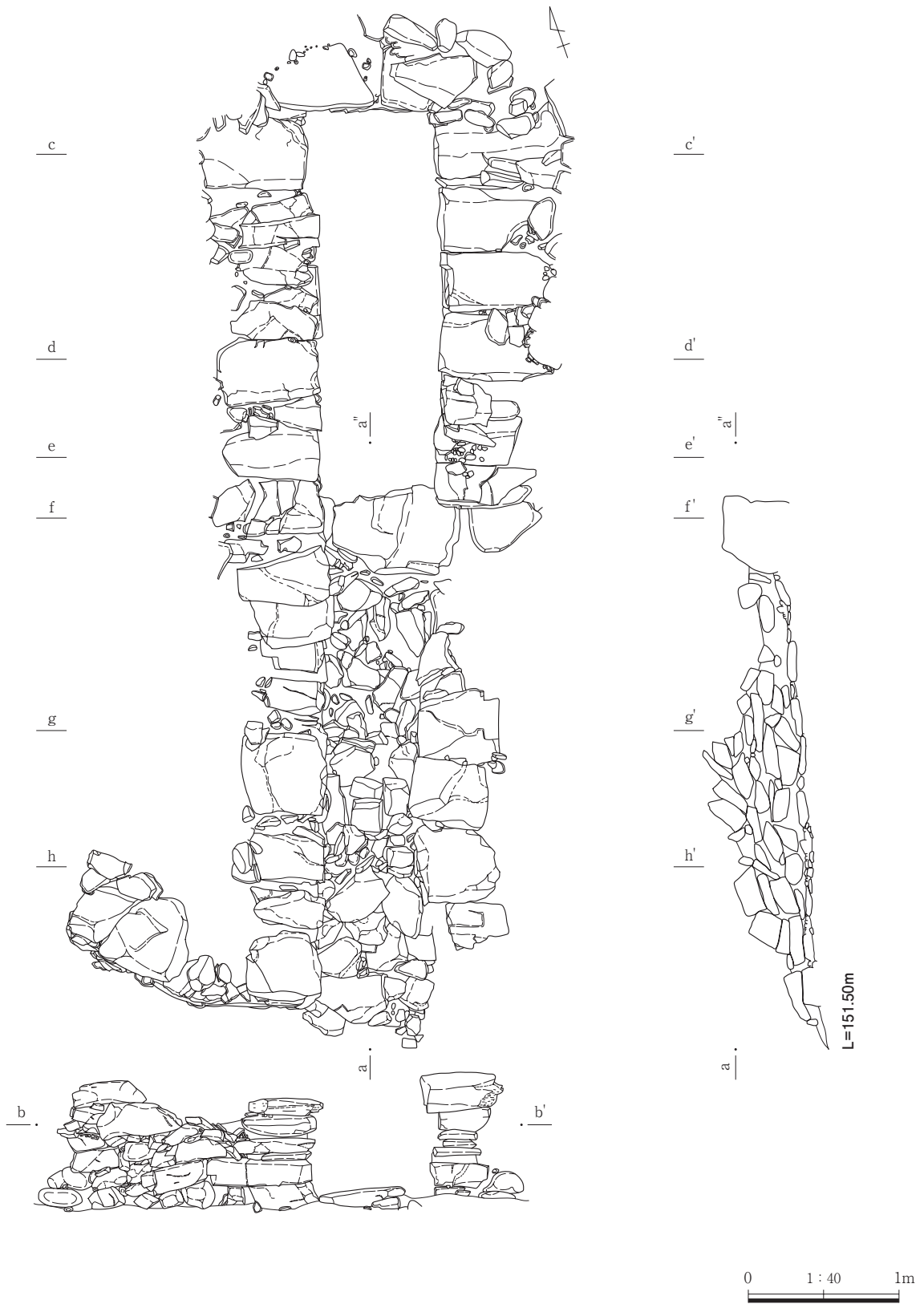
石室開口部から奥壁方向へ2.2mまでの範囲に礫石が積まれていた。梱石までは達していないものの、開口部から1.2mの位置に敷設された偏平な梱石を越えていた。奥側から手前に重なるように置かれてはいたものの丁寧に一石ずつ隙間無く詰め込んでいたような状況ではなかった。

#### (3) 石室

床面検出時における横穴式石室の規模は、全長6.14mである。その中程に据えられた奥行き0.5mを有する梱石を挟んで、羨道長は2.86m、玄室長は2.78mを測る。開口部寄りの幅は0.73m、奥壁部分の幅は1.15mである。

使用された石材は、黒色片岩・緑色片岩・白色（雲母石英）片岩の結晶片岩の転石および基盤層を形成する板状岩塊を主体としていた。大半が自然礫であるが、一部に加工痕を残すと考えられる石材が認められる。加工と言っても角閃石安山岩の削石や截石の石材のように新たに平滑な石面を造出するのではなく、板状岩塊の石材の石室内に向けた面に残された割れ口を部分的に微調整している程度である。

石室の平面形状は、全体的には羽子板状、開口部に向かって幅を狭める長台形を呈していた。羨道の幅は、開口部から梱石に向かって僅かに狭くなる箇所もあるが、大きな変化はない。玄室への移行は、羨道奥寄りの幅が0.73mであるのに対し、玄室手前



第15図 石室の残存状態と羨道閉塞状態

の幅が0.91mとなり、左右に、ほぼ均等に広がっているが、袖部は形成してはいない。玄室は、梱石から奥壁に向かって左右ほぼ等しく広がり、壁面は直線を指向している。最大幅の1.17mは、中央から奥壁寄りにあるが、奥壁部分においても1.15mを測る。

全体的な壁面構成を見ると、奥壁や開口部基底石、玄室基底石などの要所にやや大振りな石材が据えられていることが分かる。全体的に扁平で板状の石材が多用されている。ただし、主要な部分の石材には小口に平坦面を有する転石、亜角礫が使用されている。石材の間隙には小振りで扁平な小円礫や板状岩塊の細片、小砂利・土砂が充填されていた。

個々の石材は、石積み内に隠れる部分の面の広さが著しく大きいもので、石室内に向く面の広さと比較して、数倍から10倍近くにもなるものであった。石室背面方向への奥行き（ひき）は、全体的に上段になるほど長くなる傾向にあった。これらの石材は、材質が脆弱であったためか、石室解体時にはその大半が石積み内で既に破断して細片化が進行していたものが多く見られた。

石材の奥行き（ひき）は、玄室の基底石が0.4から0.5mであるのに対し、中段から上段の石材では0.6から0.9、1mも後方に奥行きを取っている。羨道では0.35から0.5m前後で、長いものは0.7mを測った。下段の石材背面に裏込めを寄せかけた上に長い奥行きの石材を据えるという工程を繰り返していたことがうかがえる。

石室解体時に判明したことであるが、石材と石材の間隙には砂礫・土砂が多量に挟み込まれており、石材のずれることの防止や天端の水平確保が図られ、石積みの安定化に努めていたことが分かった。

奥壁は、4段が残存していた。高さは、1.22mである。第1段は2石の基底石により構成されていた。右側に幅0.70m、高さ0.45mの大振りな石材を置く。この石材は石室全体の中では大型の部類に入るが、奥壁の面全体に占める割合は小さい。最大面が石室内に向くように平積みし、その面が垂直に立ち上がるよう下端で調整されていた。この礫は、奥行きが

0.3mであったが、この礫の背面にはこれに寄せかけるようもう1石石材が置かれ、この2石で上段の石積みを受けるようになっていた。

左側は2石を積み上げ天端の高さを右礫と揃えていた。第2段目には大礫1石を全面に渡していた。その上端、右側壁寄りには小礫を多数挟み、天端が水平になるように調整している。第2段目、第3段目と上段になるほど羨道方向に迫り出すように積まれていた。

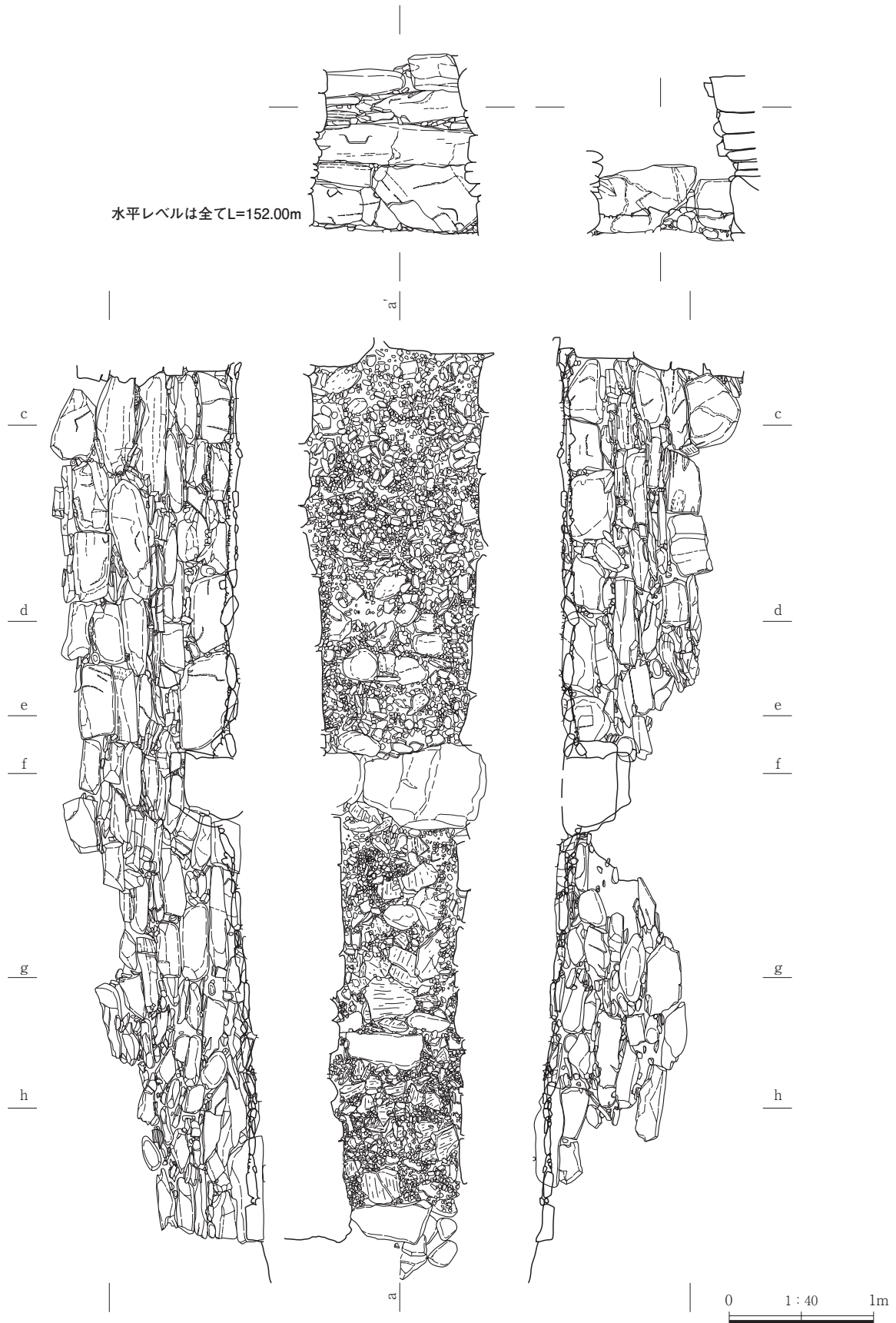
玄室左側壁の残存高は、奥壁寄りで1.23m、梱石寄りで1.01mを測った。

左側壁の石積みの状況を観察すると奥壁の構成に合わせるように4段あるいは5段の横方向の目地が見られる。玄室部分の壁体の構築は、4回ないし5回に分けて石積みを行った後に天井石を架け渡したものと考えられる。

ただし、調査工程の都合や、墳丘断ち割りの箇所が奥壁に近すぎたためか、石室背面の観察からは上記のような段階的な工程の存在を確認することはできず、石室構築工程と墳丘構築工程の関連性・整合性について確認することはできなかった。

石積みは、各段とも奥壁寄りに大型の石材が使用され、手前になるに従いやや小振りになる傾向が見られた。このため、目地は、奥壁側から羨道方向に向かって徐々に低くなっている。これは、天井石が架け渡される位置が、奥壁寄りで高く、羨道方向に向かって低くなることに合わせて、壁面の石積み作業の途上で既にその調整が開始されていたことが想定される。また、左壁の状況は、右壁と比較して、上段に至ってもその大きさの揃った石材が使用されている。下段とほぼ同規模の石材が載っているため、縦方向、あるいは斜め方向の目地も見える。

基底石は、中規模の転石3石とやや小振りの礫2石を並べている。石材の最大面を石室内面に向ける横積みの設置方法は右壁と同様であるが、法量に大小の相違がある。高さ0.3m程で天端を水平に調整している。奥壁に接して置かれた1石から手前1m程の間には中・小の礫が2段、3段積み、隙間を



第16図 石室壁面図・平面図(1)

調整している。

2段目は、玄室中程から梱石上方までの間において、その上端に高さ5cm程の板状岩塊が多用され、小口積みされていた。隙間には小砂利を敷き込み、細かな作業を加えて天端の調整を行っている。

上段の3段・4段目には基底石を越える大振りで、長い奥行きを有する石材が小口積みされていた。これは石材の自重で壁体を安定させようとする意図に法ったものと考えられる。

横方向の目地は、梱石を越した1石開口部寄りの羨道側まで延びており、石室の構築作業の区切りが梱石の位置ではなく、一つ開口部寄りまでを1単位としていたことがうかがえる。

残存壁最上端には天井石との隙間を調整するような板状礫が見られた。桜澤氏の記録に玄室の高さが1.2mとあることから、この上に天井石が載っていたものと考えられる。石室を被覆していたと考えられる白色粘土の存在については確認できなかった。

玄室右側壁の残存高さは、奥壁寄りでは1.19m、梱石寄りでは0.88mを測った。

玄室右側壁の構成においても横方向の目地が見られる。壁体の積み上げは、左壁同様の工程を採っていたと考えられるが、左壁と比較して石材の揃いが悪く、大小区々である。左右の側壁を対称に造作しようという意識は低かったようである。基底石は、左壁同様、奥壁1段目の石材の高さに対応するように幅0.3から0.5mの石材を横積みしている。奥壁から3石目と4石目の間の隙間には小礫を差し込んでいる。これらの石材の上端には天端の水平を保持するために薄い板状の石材が多用されている。

2段目以上は石材を小口積みしている。2段目は、基底石の上に高さ10から15cmの板状石材を置いている。3段目は奥壁の第2段に対応する段で、奥壁寄りの2石は中規模の石材が置かれているが、中程には下段同様の規模の石材の使用が見られる。4段目は幅40cmを越える石材が3石積み、横方向に目地が通っている。最上段は奥壁寄りの1石のみで他は抜かれていた。残存した石材は大礫で、奥壁の用材

に匹敵する規模である。

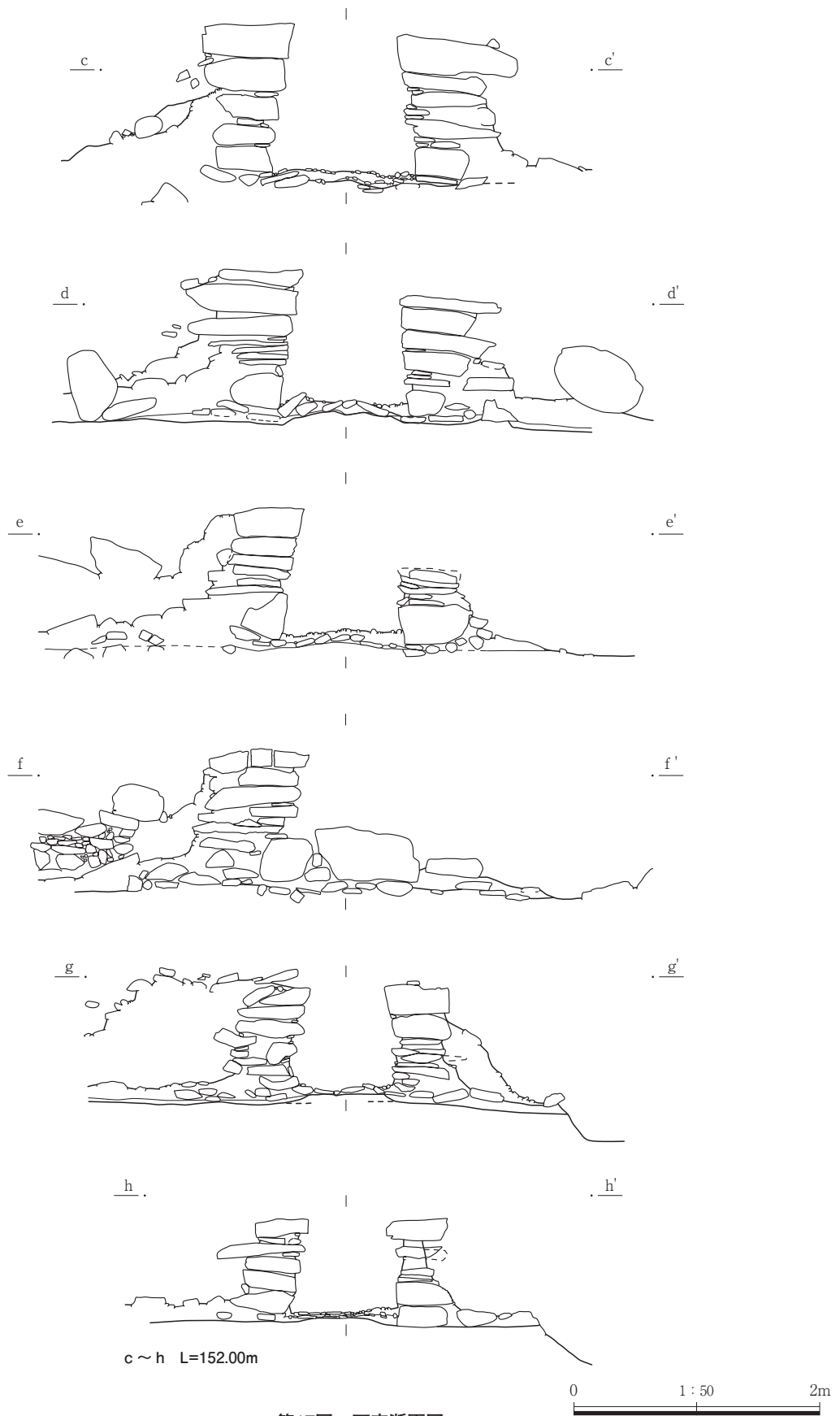
玄室部分の壁面は、持ち送りにより、80度から85度の傾斜が形成されている。面通しも意識されている。羨道でも玄室と同様の傾斜が形成されているが、下半部は比較的直立気味で、中位に至り弱く傾斜している。

羨道左側壁の残存高は、開口部で0.65m、梱石寄りでは1.11mを測った。右側壁の残存高さは、その中程で0.83mである。

羨道左側壁は、開口部の基底石に板状岩塊の大振りな石材が据えられているが、これを除くと梱石に向かつては基底石と呼ぶに相応しい石材の使用は見られない。石積みの横方向の目地は、開口部2段目と梱石の2石手前に置かれた板状岩塊の石材を結んだ高さに通っている。この目地のあり方には、石室の基底面が開口部方向に下がるのに対し、石積みの天端を一度、水平に調整しようとする意図が見える。これより上段では梱石寄りにやや大振りな転石を使用した石材が積まれているのに対し、前半部分には中・小の石材が多用されている。横方向の通目は、下部とは異なり、開口部方向に緩く下がるように積まれていることが分かる。玄室同様、天井石設置の位置との関係であろう。梱石上方の残存部最上位に残存した石材は、天井石の設置高にほど近い位置にあるものと考えられる。

羨道部右側壁の石積みについても、基底石は、開口部を除き玄室の石材と比較して著しく小振りの転石が多用されている。積み方は、玄室とは異なり小口積みである。この上に基底石よりもやや大振りな石材を1段または2段置いて天端を調整している。天端の高さは、梱石の上端、玄室基底石の高さとほぼ対応している。石材の規模は、千差万別の感があるが、石室内に向く石面が平坦面をなすように努められている。隙間には小振りの礫を差し込み、各石材の安定を図っている。

羨道部分における石材の使用状況を見ると玄室と羨道を区分しようという意図がうかがえる。玄室部分を先に築造し、ある程度の高さまで壁体を積み上



第17図 石室断面図



げた後に羨道部分の石積みが行われた可能性が考えられるが、石室背面の状況からはこれを明確に裏付けるような様子は見られなかった。

開口部の左側は6石が残存していた。基底石は、長軸を石室の軸線と平行にして設置されていた。第2段目は、今度は石室の長軸に直交する方向に長軸を向けており、算木積み状に石材を積んでいた。この状況は右壁も同様であったものと考えられる。この上には小口面を石室内に向けて4石積まれていた。いずれの石材も、天端が水平になるように調整が図られていた。

開口部を手前側から見ると石積みの前面が奥壁寄りに約80度の傾斜をなして積み上げられていた。この傾斜は、天井石最先端の位置との調整が図られた結果、このように造作されたものと考えられる。また、この傾斜面はそのまま左側に続き、葺石の傾斜面へと移行している。葺石の石積みを見ると開口部から左下がりの目地が見える。これは石室背面の築成に合わせて一体的に葺石の外表が積み上げられていった結果と考えられる。

石室全体をほぼ2分する位置に左右2石の梱石が並べられていた。奥壁に向かって右側の礫は、横幅0.85m、奥行き0.5m、高さ0.45mで、床面から0.3m上方に突出していた。左側は横幅0.42m、奥行き0.3m、高さ0.35mであった。2石は、玄室と羨道を明瞭に区分しており、玄門を意識したものと言えよう。2石とも側壁側の端部が壁外に0.2m程張り出して側壁内に組み込まれていた。石室を規格・設計する時点で、既にその設置が織り込み済みであり、壁体を構築する途中で2石とも設置されたことが分かる。

開口部には横幅0.67mの偏平な円礫が梱石として置かれていた。また、ここから1.2m奥壁寄りの床面にも横幅0.53mの円礫が石室主軸と直交する形で置かれ、梱石として羨道内を区分していた。

玄室床面は、石室の構築面から約10cmの高さに位置していた。全体的に大きな変化はなく水平を保っていた。梱石を挟んだ羨道床面との間にも段差は見られない。羨道床面は、梱石の手前から開口部に向

かって徐々に傾斜している。その差は0.22mである。

床面には2から10cm程の玉石が全面に雑然と敷き詰められていた。指示の不徹底から、羨道部分の一部除去してしまったところがあるものの、その厚さは全体に薄く、下面の舗石が顔を覗かせる部分もあった。

羨道においては玉石の下に長さ10から40cm、厚さ3から5cmの結晶片岩の板状岩塊片が、一部、重複しながら一面に敷き詰められていた。これらは石室基底石下から伸びるものもあったが、大半は石室構築後に敷かれたものと考えたい。

玄室においても長さ30cm前後、厚さ10cm以下の結晶片岩の偏平な円礫が平らに敷かれていた。床面の玉石を検出した際には認識できなかったが、舗石を検出した段階で、玄室の奥側半分近くに舗石の乱れている部分、欠失している部分があることが判明した。後世に盗掘を受けた痕跡である可能性がある。

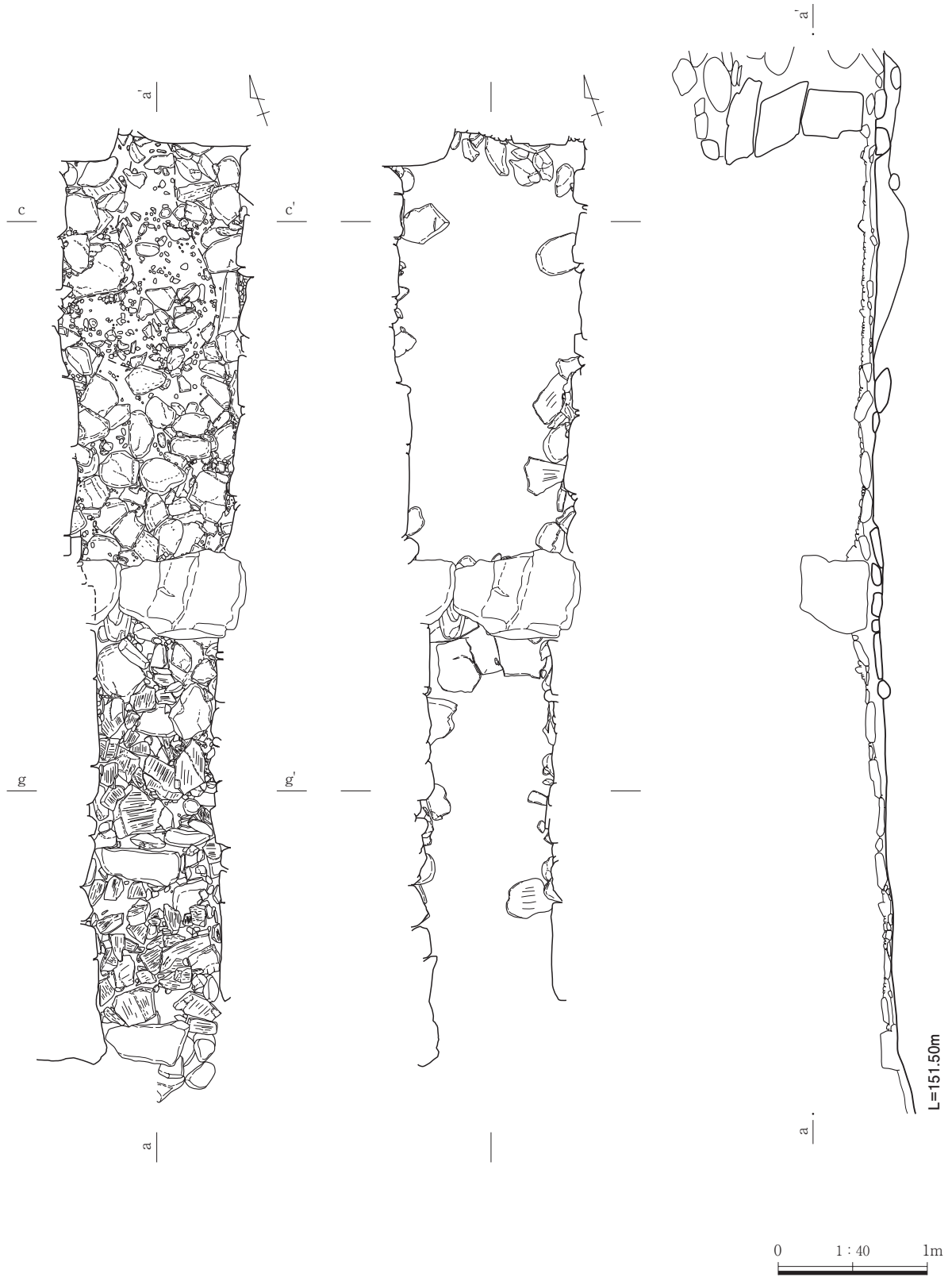
舗石を除去すると砂礫を多量に含む暗褐色土が顔を出した。この面までの高さは、玄室で5から10cmであったため玄室を構成する基底石の中で床面下に隠れた部分はほとんど無かった。羨道では10から15cmであったため最下段の薄い石材が隠れた部分もあった。

#### 4 古墳構築過程解明のための調査

##### (1) 墳丘の解体からの情報

墳丘の解体に際しては石室の北側に石室の主軸方向に則する形で一箇所（第12図G-G'）、主軸に直交する東西方向に一箇所（第12図F-F'）の断ち割りをいれて墳丘断面の観察を行った。

第12図と写真5に掲載した石室東側の墳丘断面では、玄室の壁石背面から葺石背面までの距離が約3.25mであった。右側壁基底石の背面から1m程外方に大型の円礫が据えられていた。この大礫と石室壁石背面の間は、墳丘の他所と比較して、人頭大の礫とともに小砂利・小礫が多く見られ、基底面近くにはやや大振りの板状礫・岩塊が敷かれていた。石室構築後大礫を基底面近くに置き、この礫と石室背面の間隙に裏込めの礫石を充填させる。ここまです



第18図 石室図平面図 (2)



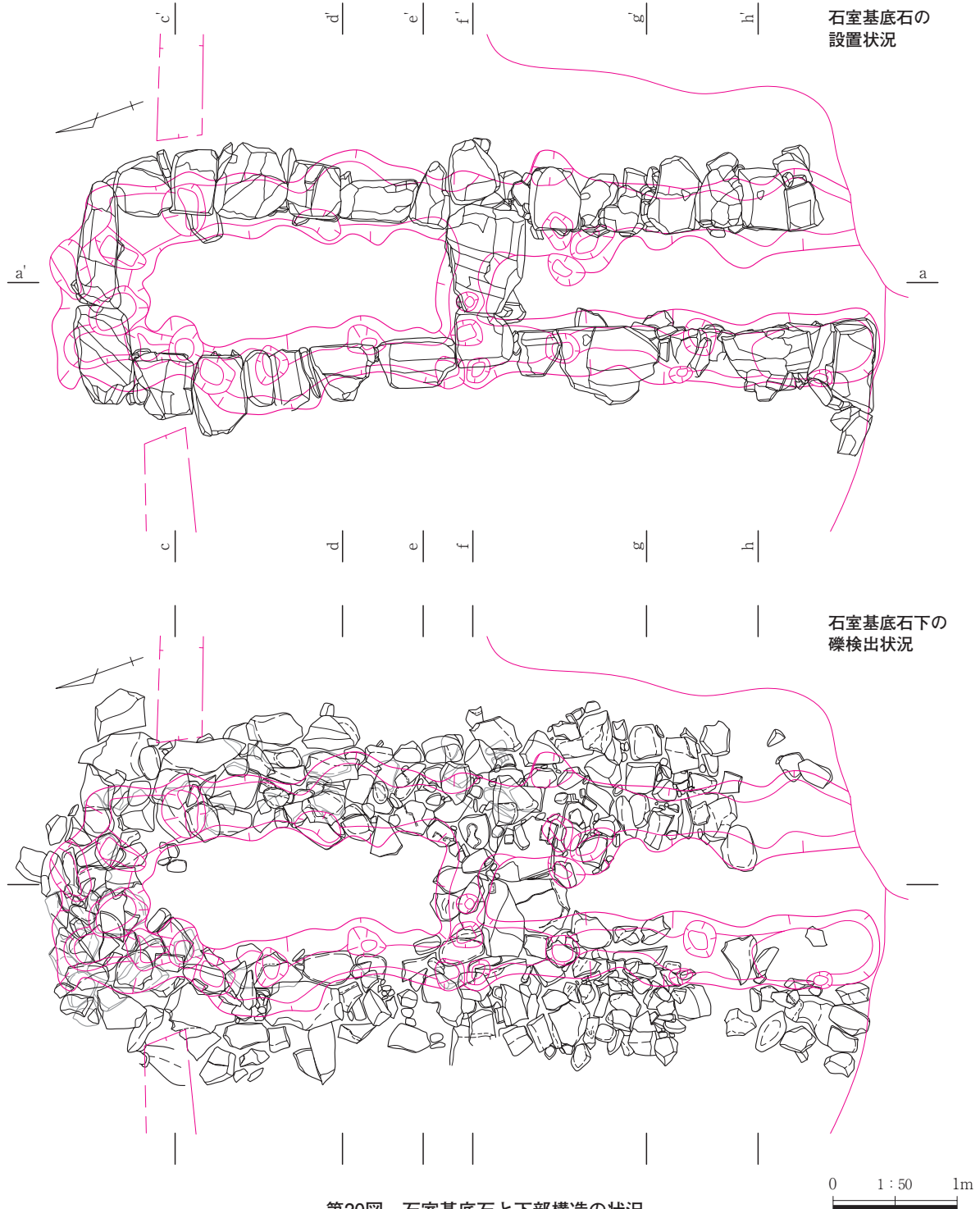
第19図 墳丘基底面の状況



写真5 墳丘東側断ち割り断面



写真6 墳丘北側断ち割り断面



第20図 石室基底石と下部構造の状況

墳丘築成の1単位になる可能性がある。

この大礫から外方に0.8mの位置に板状の礫が置かれているところまでがもう1単位と考えられる。板状礫の積み方が法面をなし、工程の区分となっているようにも見えた。基底面近くには細かな板状礫

が多く敷かれており、これより内側の礫石のあり方と対照的であった。ここから外側、葺石の石積みとの間では、基底面から約0.6mの高さの位置に板状礫2石が、墳丘内側の端を低くして積まれているのが見られた。このあり方は、垂直方向の石積み工程

の単位を示しているようにも考えられる。

17ページ第13図、石室の後方、墳丘北側の断ち割りを見ると奥壁背面と葺石までの距離が短かったためか2回程の工程で葺石背面に達していたことを推定させるような大礫のあり方が見られた。

石室は石積み状況から4ないし5工程で天井石を架け渡すまでに至ったと考えられる。墳丘の築造は、石室の構築と連動して進められたものと考えられる。墳丘内の解体を進めて行くと第19図の色線で示したよう玄室背面を中心に大礫を検出した。これらと東側墳丘断面の状況を合わせると石室を積み上げながら2ないし3回の段階を経て、その背面に順次、礫石を寄せかけるようにして同心円状に墳丘の規模を拡大していったものと考えられる。ただし長野県大室古墳群の積石塚古墳のように墳丘内に明瞭な列石の存在は確認できなかった。

なお、墳丘の断ち割り作業の中では礫石の積み方を特別に整えたり、土砂を入れ込んで整地をしたような状況は確認できなかった。このため天井石の架け渡しをはじめ、石室構築のための作業用斜路を検出するにはいたらなかった。

#### (2) 石室の解体からの情報

本古墳の築造は、石室の構築に当たり、神田・三本木古墳群や東平井古墳群で通有に採用された裏込め被覆の手法を取らないものであった。

石室の各壁面を解体していくと、P L10の7・8やP L11の1から6に見られるように、石材と石材の間隙に多量と表現して差し支えないほどの小円礫や土砂が介在されていることが明らかになった。このことは本古墳の石室構築における大きな特徴の一つといえよう。

基底石の設置状況から石室の構築手順について考えると、一番最初に奥壁の右側を置く。次に左側を置き、奥壁壁面の幅を決定する。その次に梱石の位置を定めている。それは、前述したように2石の梱石の端部が側壁面に組み込まれるように設置されていることから分かる。梱石の基底には板状の礫が調整材として敷かれ、玄室の基底石に則して、梱石の

高さや天端の水平が確保されていた。

奥壁と梱石を置くことにより玄室と墳丘との位置関係が決定される。本古墳においては墳丘の中央に玄室の中心がくるように設計されたことが分かる。

玄室の基底石は奥壁、梱石の両側から据えられているように見えた。左側は梱石側から3石を据えている。これらと前後関係は不明であるが、奥壁に寄せるようにして1石が設置され、両者との間隙には中・小礫が置かれていた。右側も梱石側から3石、奥壁側から2石据えられているようである。基底石より上段の石積みは基本的に奥壁寄りから順次積まれているようである。

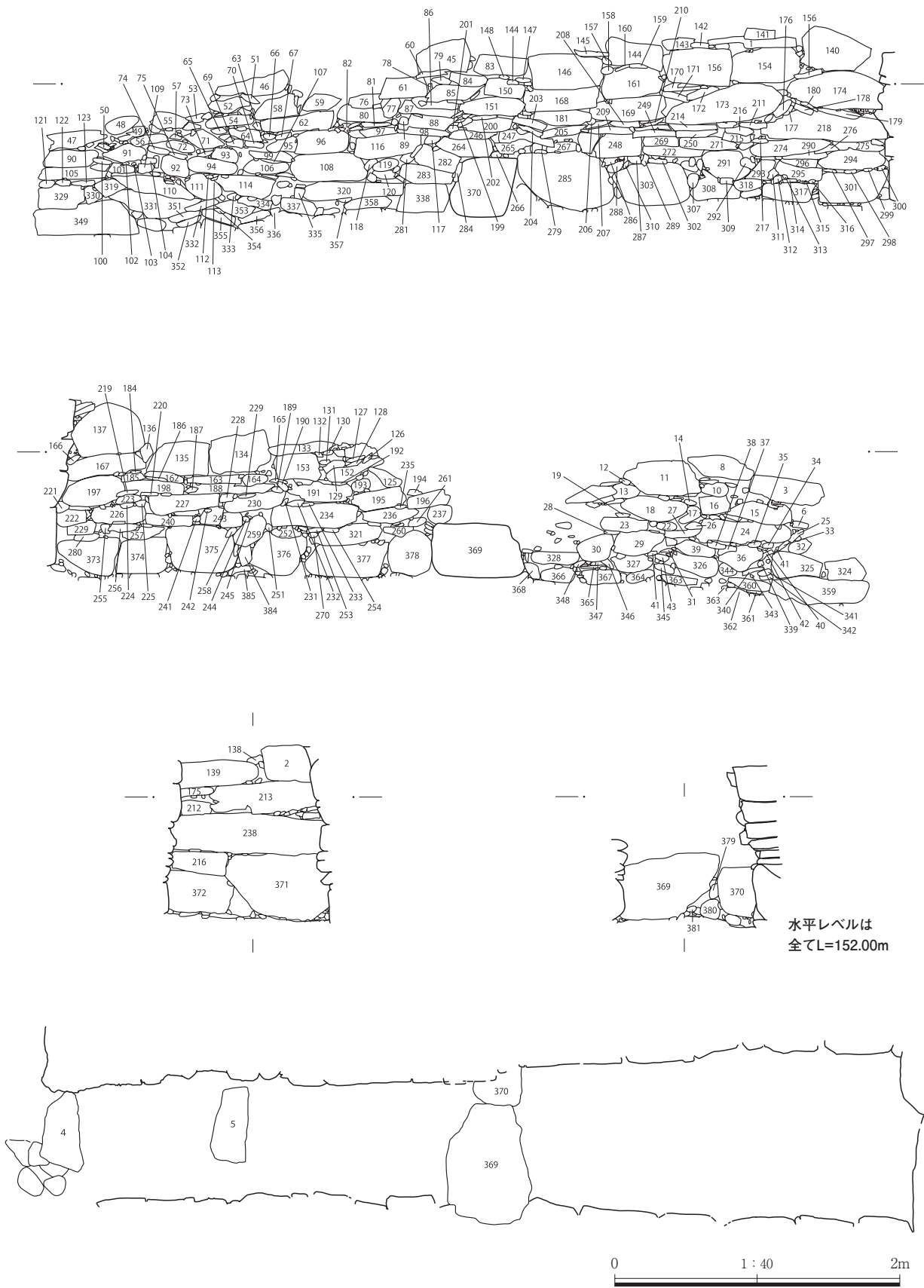
羨道部は、開口部の左右に板状岩塊の大礫を置き、これを起点に梱石の方向に順次礫石を置いていることが礫の重なりから分かる。

以上のことが本古墳の石室構築に際しては、奥壁、梱石、開口部の左右の基底石が基準となり、各所、各段の壁石が積み上げられていったものと考えられる。石室構築にあたっては何らかの基準尺度が存在したのと考えられるが、各壁面の基底石の平面形状には24cm一単位の方眼には適合せず、完尺値は得られなかった。

#### (3) 石室の壁体と下部構造

墳丘下に残された地山面は砂礫を多量に含む暗褐色土で、全体的には西北側から南東側に向かって僅かに傾斜していた。墳丘・葺石の基底石は当時の古墳構築面に直接設置することから始まっていると考えられる。ただし、砂礫の露出状況が異なることから、古墳の築造に先立って、墳丘と石室の予定範囲について旧地表面の整地が若干行われたものと考えられる。

石室の設置にあたっては、地山面を深く掘り下げた様子は確認できなかった。利根川以東の赤城山南麓を中心とした地域の古墳築造時に見られるような、地山を大きく掘り込むような掘り方は設けられなかったものと考えられる。また、利根川以西の神流川流域や鍋川流域の石室のように石室構築面全体に礫を敷き詰めるような基礎地形も行われていなかった。



第21図 石室使用石材の取り上げ番号







たものと考えられる。

石室の解体を進め、玄室の基底石を除去すると第20図下の図に示したようにその下位には多数の小礫が置かれていた。これは、基底石を安定的に据え付ける役割を果たしていたと考えられ、これに石室内面の向きや天端の水平などの細かな調整が図られることも付加されていたことであろう。基底石の背面側にもこれを包み込むように置かれていた。

基底石下の礫を取り外すと石室の壁体が設置された部分に相当する範囲内に、第20図に色線で描いたように幅40から70cmの布堀状の凹地が見られた。この部分は周囲よりも2から5cm低くなっていた。この凹地は、開口部から見て、平面逆U字状に、羨道、玄室各面の基底石が設置された下位に見られ、偏平な円礫が据えられていた。底面は礫の形状に則して更に下位に調整が施されていた。梱石設置部分も同様に低くなっていた。これらのことから石室築造に当たっては一定の企画に基づいて基底石の設置が進められたことが分かる。

#### (4) 石室の壁体と使用石材

石室に使用されていた石材については、前述のように、その一部が移築保存の対象となったこともあり、石室を解体する際に石室内から見た場合の縦・横・奥行きと重量について計測を行った。各々の法量と石材の積み方、種類について整理したものが、第2表の一覧表と第21・22図である。

番号を付して取り上げた石材は合計374石である(通番は381まで付したが欠番・重複が生じた)。この中で石積み間に詰められていた小礫を除くと各壁面を構成していた石材は、奥壁で9石、左壁で129石、右壁で81石を数えた。

使用された石材は、現地でその同定を依頼した飯島静男氏によれば、黒色片岩・緑色片岩・雲母石英片岩の結晶片岩の転石や基盤層を形成する板状岩塊を主体としているとされる。同定を受けた石材218点の種類別の数量は、黒色片岩121点、緑色片岩39点、白色(雲母石英)片岩54点、ひん岩1点、変玄武岩1点、珪質準片岩2点である。また、これらの石材

の中には、神流川流域で見られる輝緑凝灰岩や砂岩・チャート・安山岩などが使用されていないことから、古墳の占地在神流川と三波川の合流地点に近接しているにも係わらず、石室石材は、より古墳から至近の位置にある三波川で採取され、運搬されて来たものと推定されるという指摘も受けた。

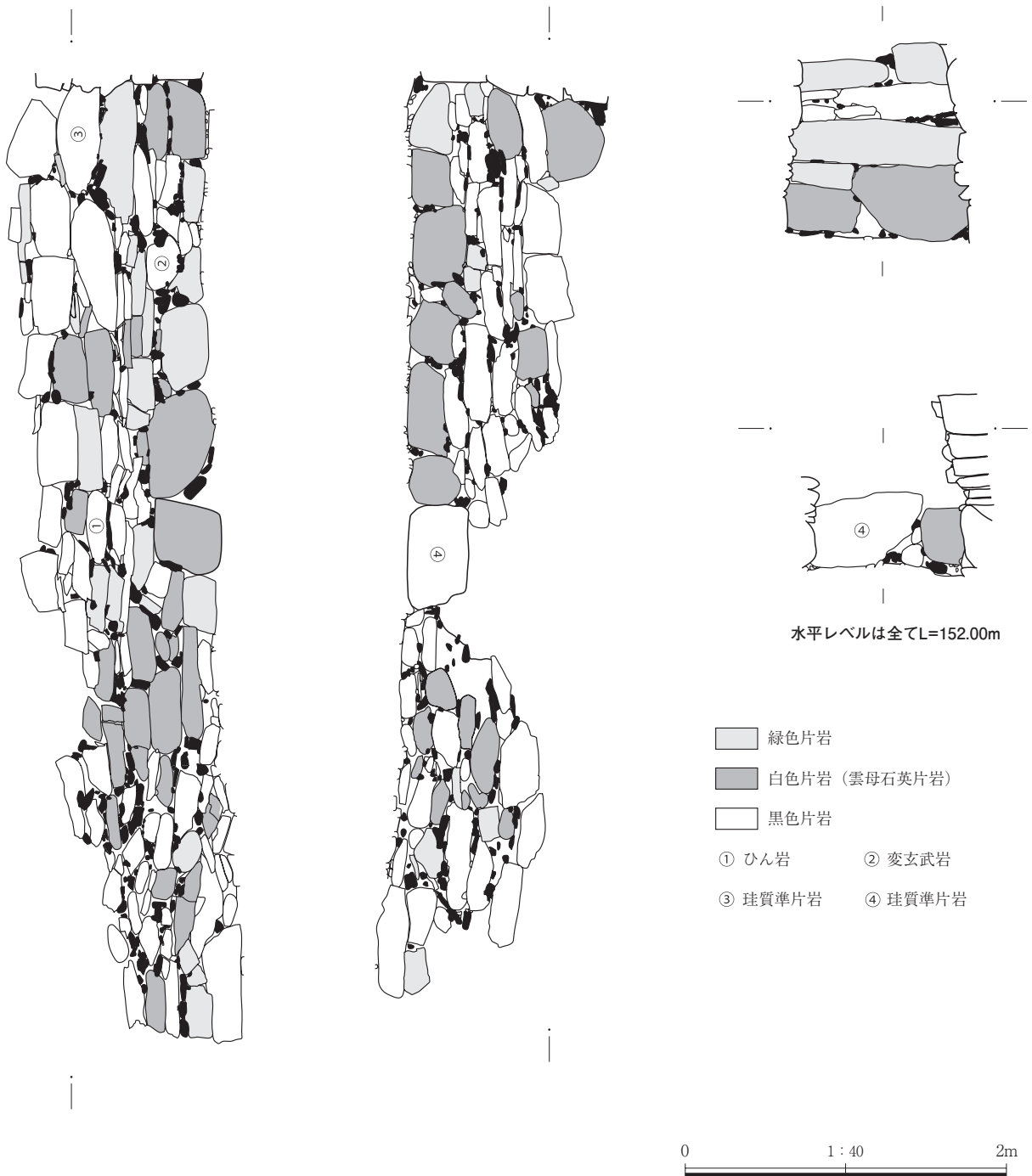
石材別の使用箇所について見ると、各壁の基底石には緑色片岩や白色片岩といった片岩の中でもやや硬質なものを選択されている。黒色片岩の中でも転石については壁面構成の主要な位置に使用されている。板状岩塊そのものの使用は少なかった。

奥壁や玄室の基底石には横積みをするのに適した形状を呈したものが、その他の石材は面の広さに関係なく、小口になる面に平坦面を有したものが使用されており、石室内の設置場所を意識した石材採取が行われていたことが分かる。

石材の積み方は、石材の最大面が上下にくる積み方が大半である。この中には石材の縦・横よりも奥行きの長い小口積みなもの(A、Bに分かれ、第2表、積み方の項Aは縦・横が伯仲するもの、Bは縦より横が長いもの)と縦より横や奥行きの長い横積みなもの(D)がある。石室内面に向く面を広くとり、平積みを意識した横積みなもの(E)は玄室側壁および奥壁基底石に見られる。縦・奥行きよりも横の長い平積み(C)は奥壁の371だけであった。

石材の規模は羨道よりも玄室の方が総じて大振りな石材を使用している。残存する石材の中で石室内を向く面が最大のものは、奥壁第1段に使用された第21図371の雲母石英片岩で、縦47cm、横103cmである。玄室左壁では173が縦28cm、横51cm、奥行き86cm、174が縦31cm、横70cm、奥行き80cmを測った。玄室右壁では375が縦39cm、横58cm、奥行き60cmである。

天井石については桜澤氏の記録によれば、玄室の2.4mの距離を4石の石材で覆っていたことになる。このことから天井石一石の規模は、奥行きが、石室の長軸方向に平均0.6から0.7mとなる。羨道まで含めると8石から10石を数えることとなろうか。横幅は、壁面に多少の持ち送りがあることを考えれば、



第22図 石室使用石材の種類

玄室の最大幅1.15mプラスアルファとなる。

石材個々の重量は、1kg以下から最大371kgまでを測った。最大重量の石材は、梱石のうちの1石、369である。壁面構成前全体を見た場合、極端に重いものは少なく、200kg以上のものが10石、100kg以上のものが22石を数えるほどである。第2表からは1から5kg程のものが93石使用されており、主要石

材の間隙を調整するために小礫、板状礫が多用されていたことが分かるが、全体を大別すると10kg未満、10kg以上40kg未満、40kg以上がそれぞれ3分の1ずつを占める割合であった。奥壁に使用された主要石材の総重量は1454kgである。比較的残存状態の良好であった左壁の石材の総重量は5608kgである。

5 出土遺物

(1) 埴輪

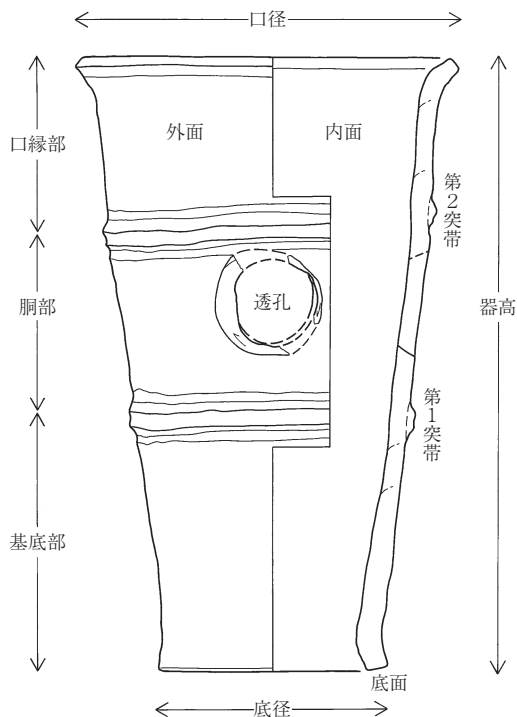
本項には円筒埴輪156点、形象埴輪201点を掲載した。円筒埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形埴輪が検出された。形象埴輪は、家形埴輪・器財埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・器種不明の埴輪が出土しており、これらを器種別に掲載した。資料選別に当たっては、円筒埴輪については全体形状、各部位の形状、器面調整、胎土などを中心に行い、これにヘラ記号の見られるものなどを補足した。形象埴輪については器種・個体の識別を主に行った。

円筒埴輪

円筒埴輪は普通円筒埴輪（以下、円筒埴輪）151点と朝顔形埴輪5点を資料化した。

円筒埴輪で全体形状の把握できた資料は001と023の2本だけであった。他資料の残存部位の状況から見て、全体構成は2条3段構成で、胴部の対向する位置に1対の透孔が穿たれていると考えられる。

法量については、001の器高が40.5cm、023が40.7cmである。他の資料も残存部位の観察からはこれと大きく異なるものではないように考えられる。口径



第23図 円筒埴輪の各部位の名称

は直接計測できたものは先の001と023の2点に過ぎず、各々25.5cmと23.8cmを測った。底径は023が13.8cm、001が15.1cm、006が16.8cmであった。他の復元値から見ても13・14cm代と16・17cm代の2者があるように見られた。

また、各段の高さについて比較してみると、基底部の高さが16.1～17.5cm、胴部の高さが11.0～12.6cm、口縁部の高さが6.2～13.1cmである。口縁部と胴部の長さの割合がほぼ1対1であるのに対し、基底部は胴部の1.35以上となっている。008と009は口縁部の立ち上がりが6cm代と短い。全体的には基底部の伸長化がやや始まっていると言えよう。

口縁部は単純に外反して立ち上がる形状であるが、先端の断面形状、外反の度合いなどにバリエーションが見られる。

基底部は下端近くで器形に歪みが生じているものが目立った。基底部は高さ7cmから9cmほどの粘土板1枚を製作し、これを筒状に丸めて基部とすることから成形が開始されている。その内外面には粘土板作成時についた横方向の木目状の圧痕がハケメのよう残されていたものが少数例見られた。粘土板の重ねは左右両方がある。

突帯は、総じて発達度合いが弱いものであった。突帯の幅は、下幅1.7から2.3cm、上幅0.7から1.2cmである。上幅0.4cmのものも見られた。高さは0.6・0.7cmを中心に0.4から1.2cmであった。

突帯の断面形状は、台形、M字形、三角形に分類できる。さらに上下の稜の高さの比較から観察表では7細別した。台形やM字形を呈するものが主体であった。突帯貼付にはやや粗雑な傾向が見られる。貼付後のヨコナデは基本的に上端・下端の両方に施されているが、少量、下端にナデが及んでいないものも見られた。突帯の裏側にあたる内面には指頭圧痕を伴うナデが施されている。

透孔は、円形と半円形の2種類がある。半円形の透孔は半円を指向する資料も含め一定量が樹立されていたものと考えられる。孔の切り込みは刀子状の工具による。

胎土は、砂粒の混入量に差異が見られた。010や011などは他の資料と比較して礫・砂粒を多量に含んでいた。これは原料の粘土本来の性質というより混和材として意識的に砂礫の混入量が増やされているように見える。分析結果でも指摘されているように総じて円筒埴輪のほうが形象埴輪よりも砂礫を多く含む状況が確認された。観察表では形象埴輪も含め、A（多量）からD（微量）へと混入量の度合いにより4分類した。その混入物には、結晶片岩を主体として、チャート・石英・赤色粘土粒などが見られる。角閃石や輝石・軽石の混入についてはほとんど見られない。海綿骨針化石の含入は目視でも確認できるが、器面の残存状態が良好でハケメやナデが施されている場合は観察することがやや困難である。

器面の色調は、赤褐色、明赤褐色、橙色を呈するものに大別できる。

焼成は全体的には良好であった。観察表ではA（良好）・B（普通）・C（不良）と1（硬質）・2（普通）・3（軟質）を組み合わせた記載を行った。中には少量、色調が灰色味を帯び、還元焰焼成状態を呈する不良品が少量含まれていた。焼成技術が不安定な状況下で製作された製品が供給されていたことが知られる。形象埴輪の馬にも同様の状況が見られた。

器面調整としては、外面はその全ての資料が、1次調整のタテハケであることが上げられる。口縁部の先端はタテハケ後最後にヨコナデを加えているものが大半である。少数、ヨコナデの調子が弱かったため、先端までハケメが残るものが見られる。器面にはハケメの開始に伴う工具痕を観察することがまれであることから、その多くは段間を通して工具が動き、上下のハケメの重なりは、突帯やその貼付に際して施されたヨコナデと重複しているものと考えられる。

ハケメ調整に使用された工具は大きく分けて6種類に分類できる。Iは001に代表される。木目の密な木板が使用されている。IIは008のようにIと比較して木目の細くなるもので、胎土はIと類似する資料に見られる。IIIは010に代表されるもので、

木目の極めて密な木板が使用されている。IVもハケメの密なもので、IIIとは胎土の異なる015などに施されている。Vは023に見られるように、いわゆる板状工具と呼称されることのある木目の間隔の開いた木板を使用したものである。VIは046のように工具の動きが微妙にずれてハケメが重ねられているため結果的に粗雑な印象を受けるものである。

内面は、基底部下端から胴部・口縁部下半までタテ方向のナデを施し、口縁部上半にナメハケを施すものが主体的である。少数例に胴部内面までハケメを施すものも見られた。細部について突帯裏の指頭圧痕を伴うナデが多くに見られた。

口縁部先端は全ての個体で、ハケメを消すようにヨコナデが加えられていた。客体的には強いナデのため、内面に稜をもち内彎気味に屈曲する形状のものも存在した。

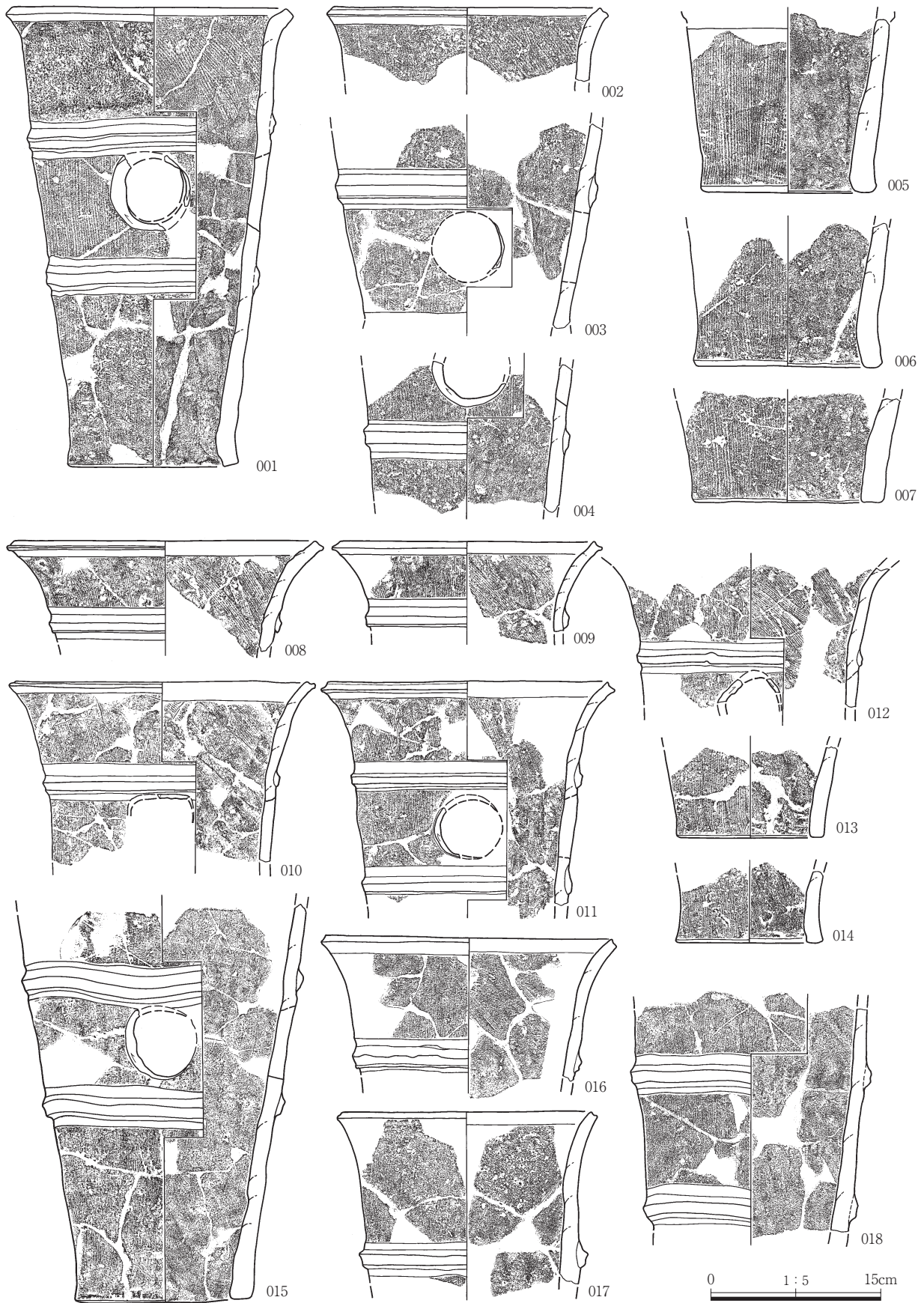
底部調整は確認できなかった。基底部外面にハケメを施す際に工具が器面を面取りするかのように動いている事例は少数見られた。

底面は丁寧にナデられており、棒状の植物圧痕や砂礫痕の見られるものは僅かであった。

赤色塗彩については、当該資料全体の器面が摩耗・摩滅の著しいものであったことから観察が困難であった。008や018、099のように口縁部外面に赤色顔料が塗布されていると考えられる資料もあるが判然としなかった。

ヘラ記号は、口縁部外面と胴部外面にヘラ状工具によって施された線刻が見られた。口縁部内面に施される例は無かった。破片資料が多くその全容を把握できる資料は少ないが015や018では「×」が、120では2条の直線が見られる。

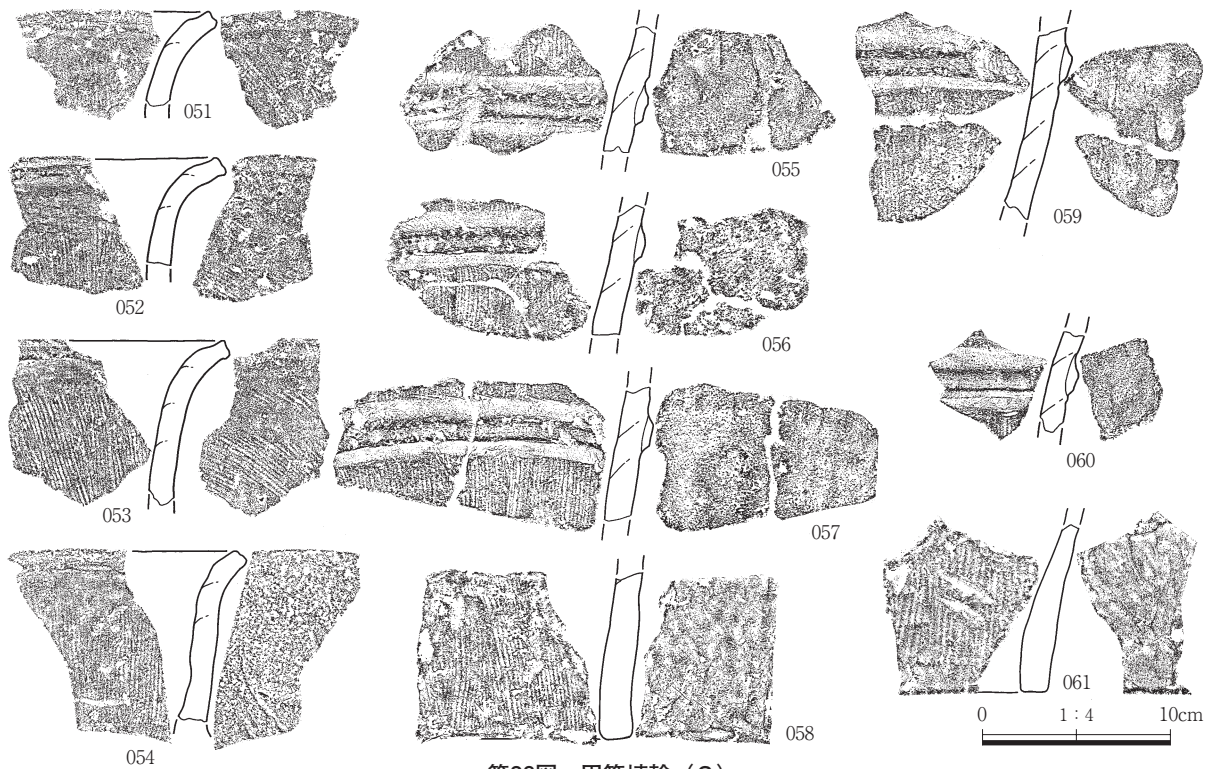
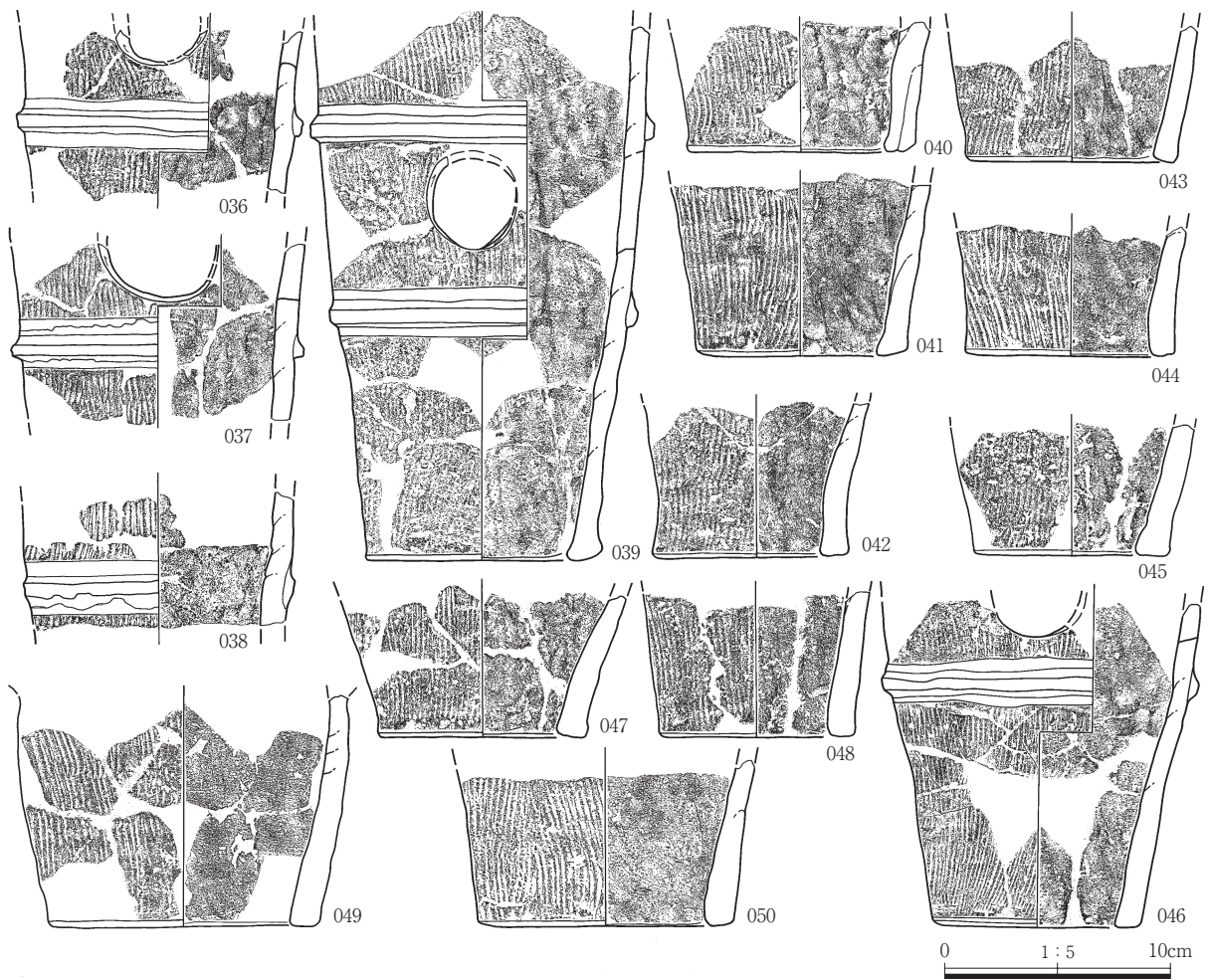
朝顔形埴輪については5点を掲載した。いずれも小破片で、全体形状・法量などを把握できるものは無かった。口縁部上半や基底部については普通円筒埴輪や形象埴輪の基部と識別を誤っている可能性がある。152は肩部周辺の破片である。154から156などの口縁部の破片では断面の観察から、成形時、疑似口縁を製作する工程が確認された。



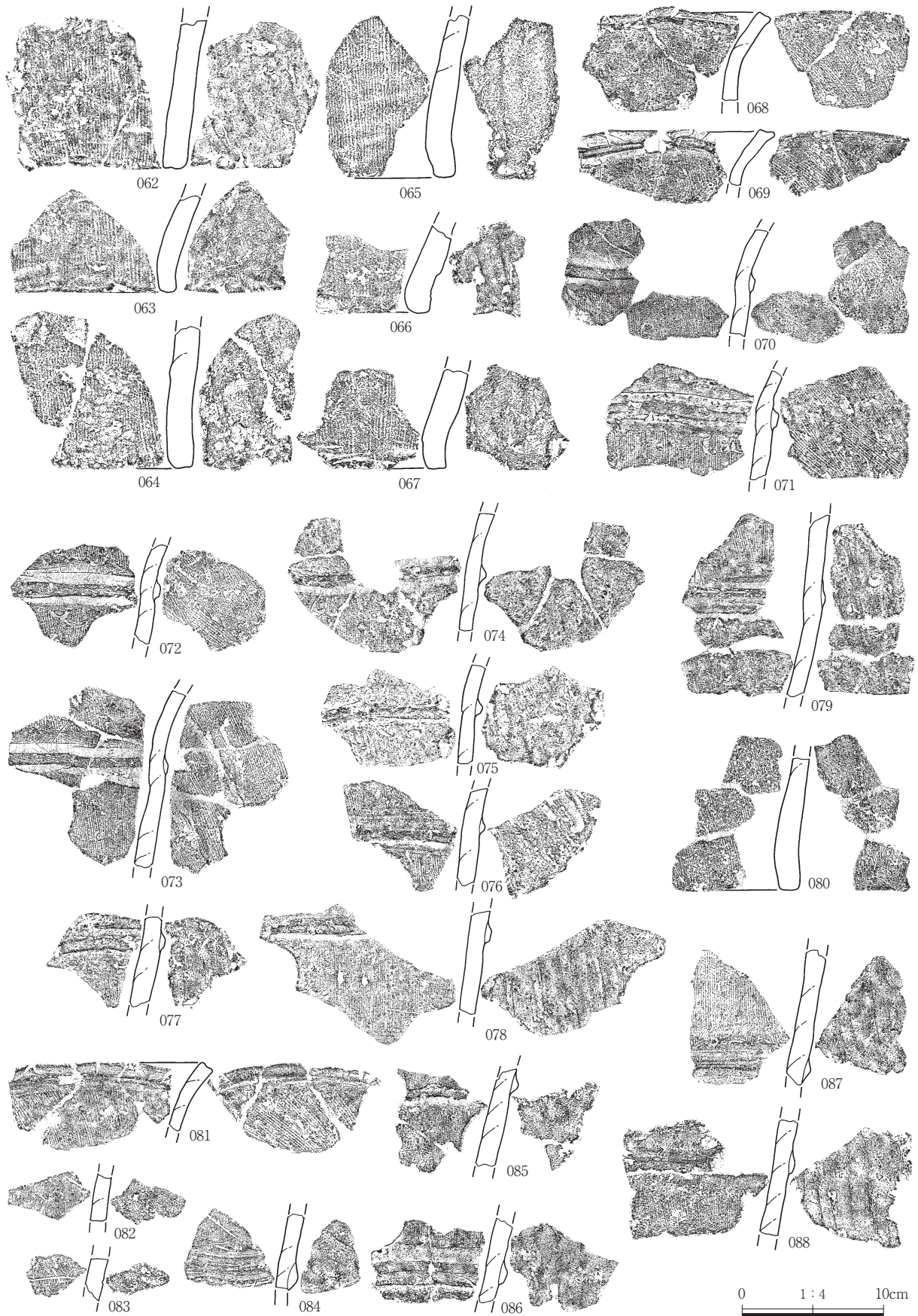
第24図 円筒埴輪 (1)



第25図 円筒埴輪 (2)

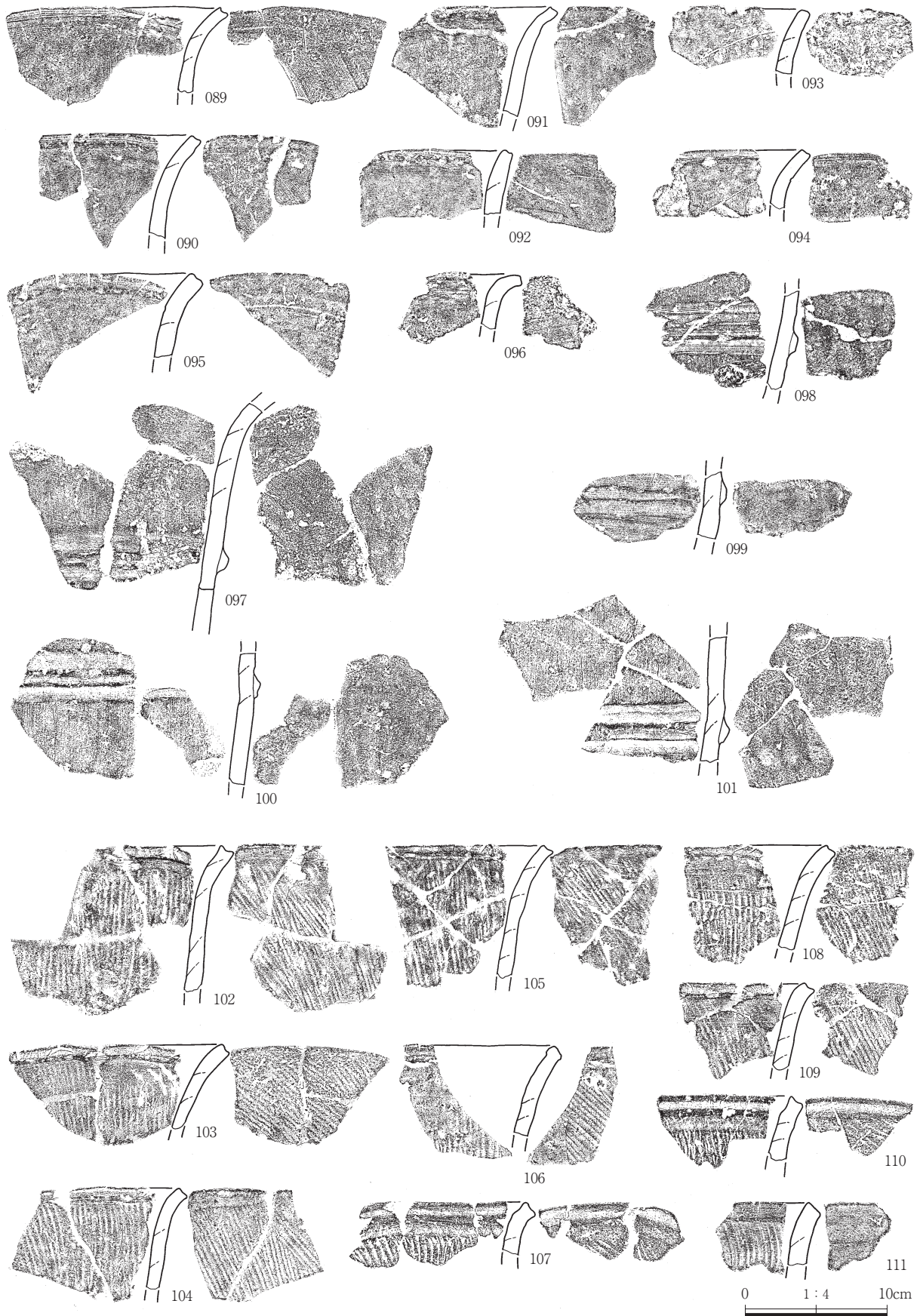


第26図 円筒埴輪 (3)

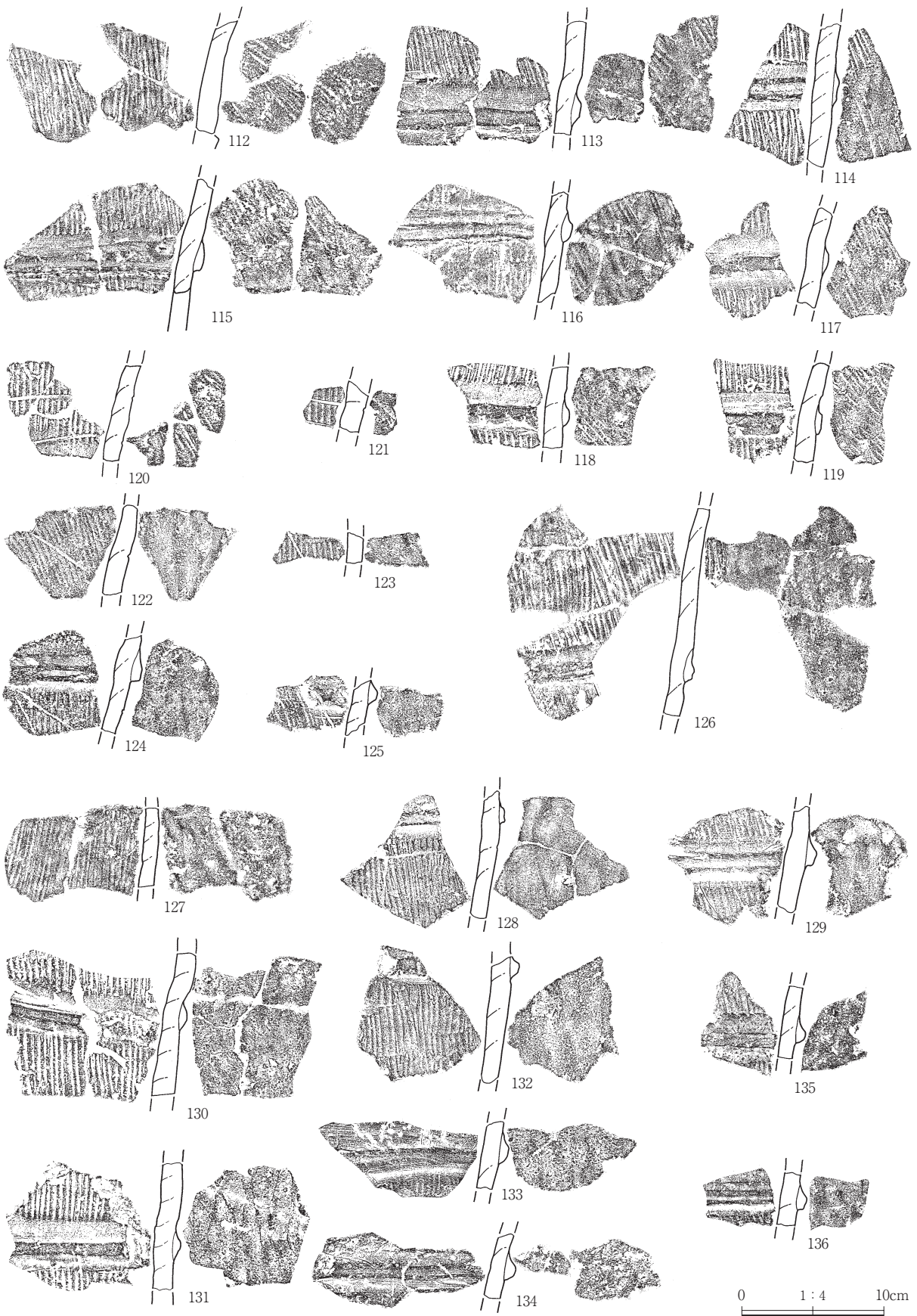


第27図 円筒埴輪 (4)





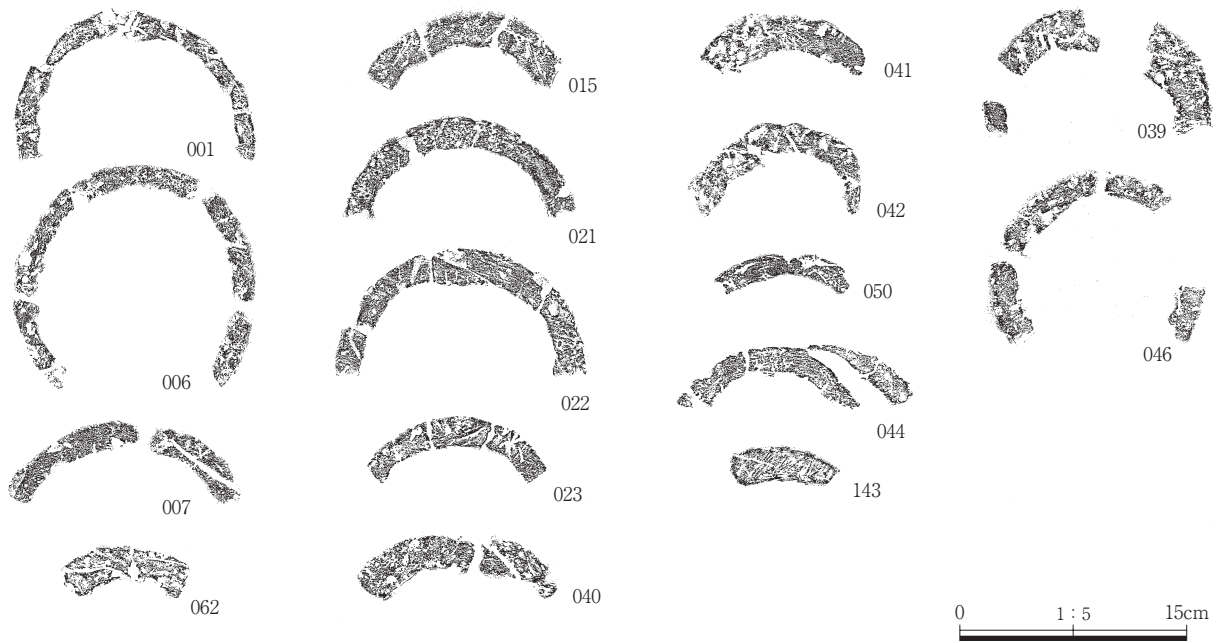
第28図 円筒埴輪 (5)



第29図 円筒埴輪 (6)



第30図 円筒埴輪 (7)



第31図 円筒埴輪 (8)

### 形象埴輪

本古墳から出土した形象埴輪の器種としては、家形埴輪、器財埴輪、人物埴輪、馬形埴輪がある。器財埴輪は盾、鞆、大刀の存在を確認した。鞆や翳、帽子などについては確認できなかった。本項では、器種ごとに順次、実測図を掲載し、観察の概要について記しておく。器財埴輪や人物埴輪の基台部を形成していたと考えられるものの破損後、本体から分離してしまったものについては形象埴輪の基台部とし、種類を確定し得なかった形象本体の部分とともに器種不明の形象埴輪として扱い、最後尾に掲載した。個々の観察内容については末尾の遺物観察表を参照されたい。掲載資料は合計201点である。個々の資料に付した番号は円筒埴輪からの通番である。

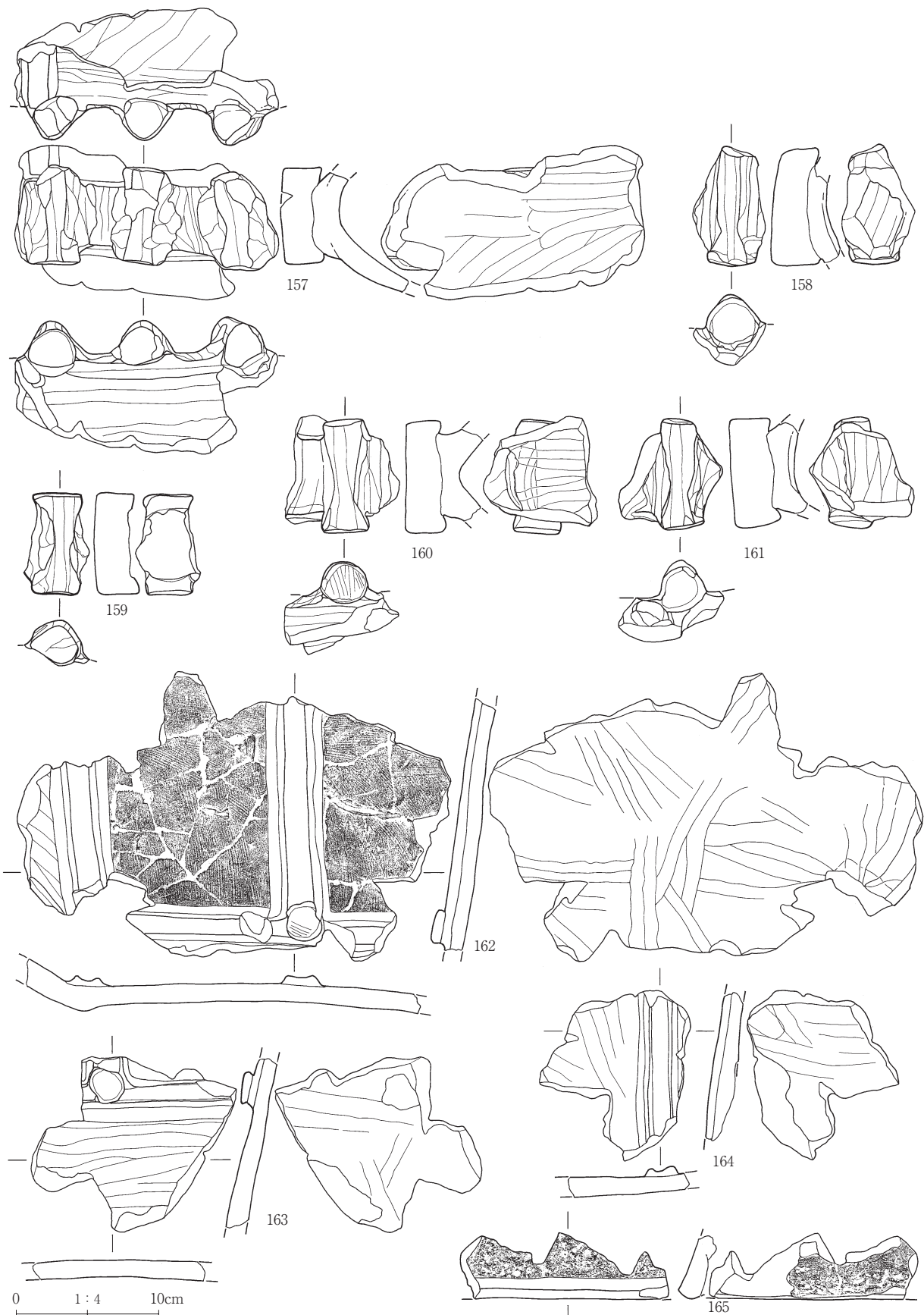
家形埴輪

157から178は、家形埴輪の破片と考えられる。

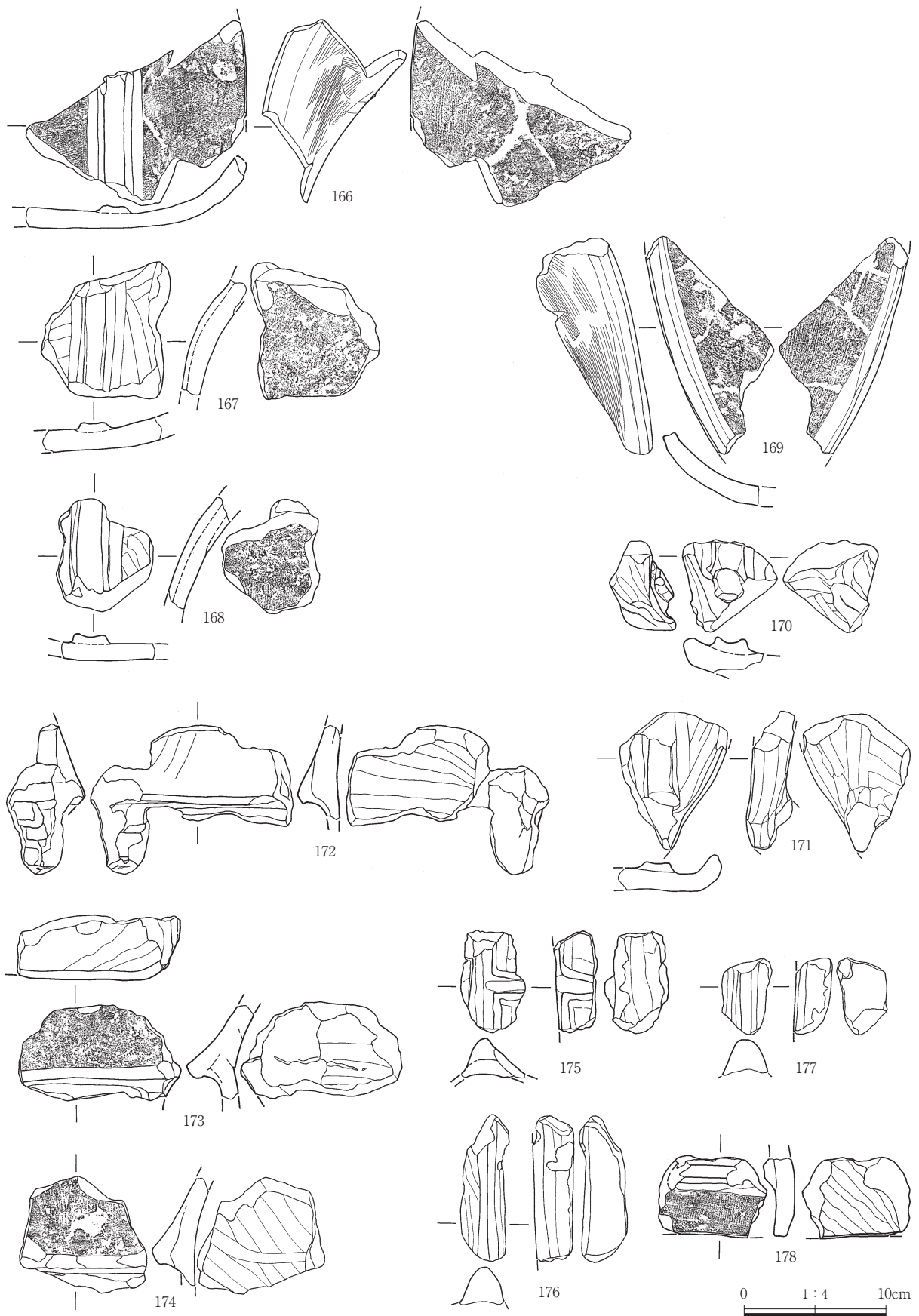
157から161は上屋根の棟頂部とそこに貼付された堅魚木である。堅魚木は9点が出土しているが2点は小破片であり、掲載資料から除外した。157は棟頂部の大型破片である。頂部には幅5cm程の平坦面が有り、3本の堅魚木が載っている。流れは、この面から垂直に、僅かに下がったところから内彎気味に傾斜が始まっている。この形状から、2面の流れ

の作る傾斜は急であることが分かる。上屋根は、妻側から見ると偏平な形状を呈し、側面観を強調した形状であったことが分かる。内面側の接合は、断面形がドーム状を呈しており、頂部に粘土を貼り足して補強がされていた状況が観察される。158から161においても堅魚木が見られる。これらの堅魚木は長さ6.5から8.0cmで、径3.3cm前後で、潰れた円柱状を呈する。棟頂部に乗せて強く押しつけるように接合されている。長さに若干の相違が見られるのは、妻寄りに長いものが、内側寄りに短いものが設置されていた可能性が考えられる。形状などに大差がないことから同一個体に帰属するものと考えられる。

162は上屋根流れの大型破片である。妻の状況から逆台形を呈していたと考えられる。棟頂部との位置関係は不明である。幅15cm程の間隔を置いて幅20cm前後の粘土帯が縦方向に貼付されている。この帯は157のあり方から棟頂部の堅魚木直下の位置まで伸びていることがわかる。粘土帯の下端は横方向の粘土帯と接したところで止まっている。両帯の接点にはボタン状の突起が貼付されている。163の破片からのあり方から流れは横方向の帯よりさらに9cm余り下方に延びることが知られる。残存部分で見限り、流れの器面にはへら描による鋸歯文や蕨手文



第32図 家形埴輪 (1)



第33図 家形埴輪 (2)

などの加飾は行われていないようである。赤色塗彩についても確認できなかった。163・164・168も上屋根の破片で、粘土帯が貼付されている。

166は上屋根の流れから破風に移行する部分の破片である。162同様の縦方向に下がる粘土帯が見られる。破風の反りは上位ほどその幅が大きい。169から171も破風の部分である。

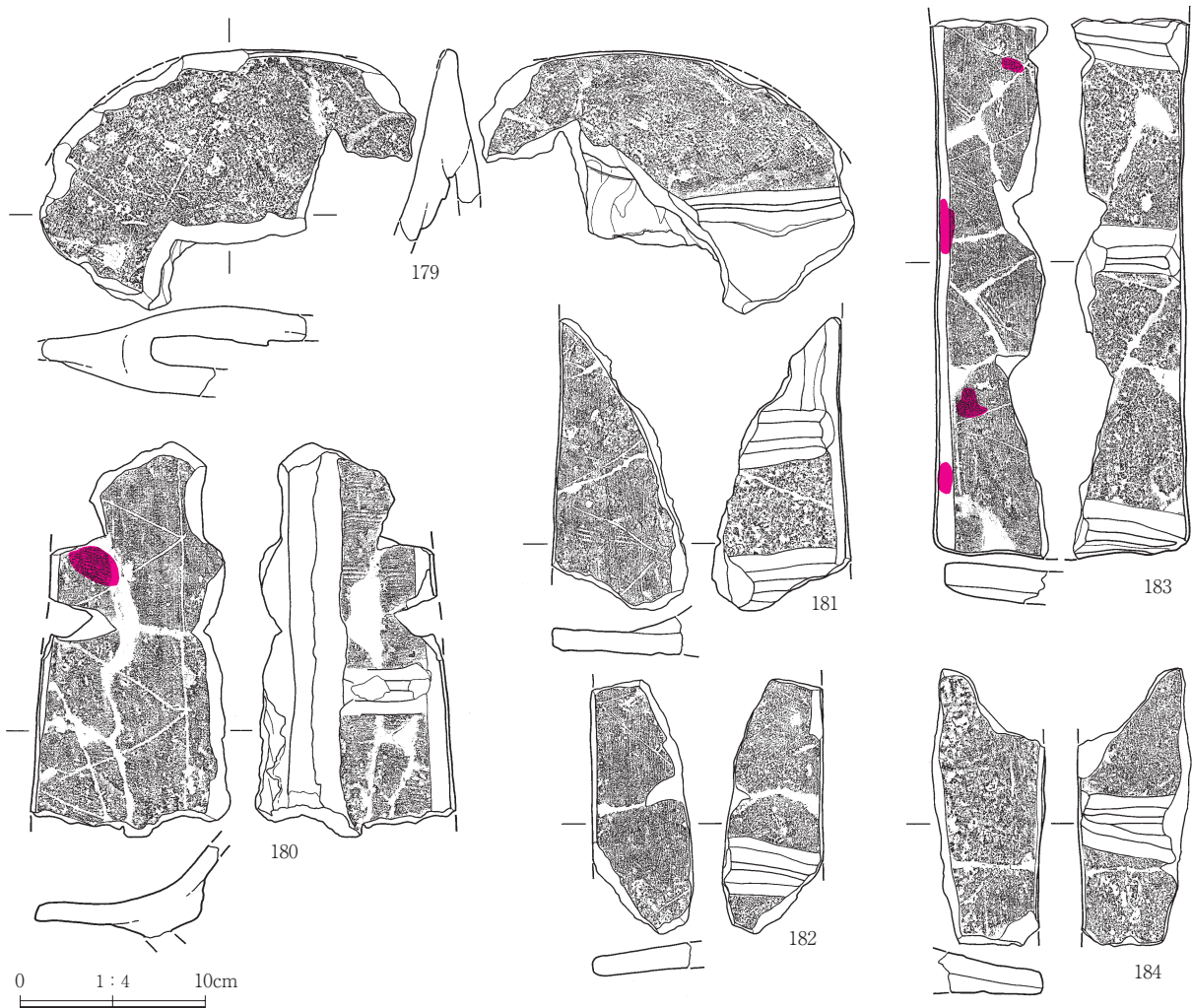
165は上屋根の下端部、軒先にあたる破片と考えられる。

172から174は下屋根の破片である。172と173は隅の部分にあたる破片で、四柱部の隅に縦方向に貼付された粘土帯が延びている。下屋根は、四柱部から続けて一体に造られた後、人物の上衣裾部の成形と同様、外側に粘土を貼り足すことにより軒先を形成している。軒は壁面から2cm程延びている。さらに

172では軒先の直下にあたる壁面に横方向の突帯貼付が見られる。

175から177は四柱部の一部である。

以上の破片資料の観察から、いずれの資料の色調も赤褐色味をおび、胎土も共通していることが分かる。このことから、本古墳には入母屋造りの家形埴輪1棟が樹立されていた可能性が高い。その形状は、上屋根を大きく誇張して成形され、妻側の端部が大きく反り、破風が表現されるものである。棟頂部には7本の堅魚木が設置されていた可能性が考えられる。堅魚木の接地間隔が6から6.5cmであることを勘案すると、上屋根の桁方向の長さは56cm程と想定される。高さは157・162・163の残存高から38cm以上となる。これに下屋根、四柱部が続いていたものと考えられる。



第34図 盾形埴輪（1）

なお、小破片のため掲載を見送った資料の中で部位の確認できたものとしては上屋根の破風部分4点、帯の貼付された破片20点余、四柱部隅の粘土帯3点などがある。

#### 器財埴輪

##### 盾形埴輪

179から192は盾形埴輪およびその可能性が考えられる資料である。何点かは大型破片の出土を見たもののいずれも断片的な資料で、全体形状を把握できるものはひとつも無かった。

179は盾面上辺突出部の破片である。山形に弧を描く盾面には鋸歯文が描かれている。後面には横方向に粘土帯が貼付されている。個体ごとに若干の相違が見られるものの他の資料にも共通する文様構成と成形技法である。粘土帯貼付は、盾面を補強する役割を果たしていたものと考えられる。実物の盾の枠（骨）組みを形象したものと考えerの必要もあろうか。この179の観察から、盾形埴輪上端の成形は、内区を形成する円筒部頂部を前後に押し潰すようにして袋状に閉じ、その間に粘土板を挟み込んで上方に伸ばし、盾面を形成していることが見てとれる。185と186も盾面左側外区上位の破片である。内面の観察からは189と同様、円筒部上位の成形状況が見られる。

180から192はヒレ状を呈する盾面外区の残存破片である。190・192は下端の破片である。

盾面に施された鋸歯文一辺の大きさに相違があることから複数個体が存在することがわかる。鋸歯文の一辺は180で8cm、183で5から7cmであるのに対し、182では13cmである。鋸歯文や側辺に赤色塗彩が施されていたことが判別できる資料もあったが全体的に器面の摩耗・剥離が著しく、残存状態は不良であった。

185は内区から盾面左側部分の残存である。この資料の観察からは内区円筒部分の横断面が前後の膨らみが弱い形状であることが分かる。また、内区と外区は1本のヘラ描き線で区画される。わずかでは

あるが横方向のヘラ描き線が残されており、内区が横線で細分されていることも分かる。

180は盾面左側の外区から内区までの距離、盾面の張り出しが7から8cmであることがわかる資料である。他の盾面もほぼ同規模であると想定される。190は右下隅の破片である。この2点の資料の割れ口の観察から円筒部の成形にいわゆる「切開再接合成形」あるいは「切開差し込み技法」と呼称される成形技法が採用されていることが認められる。

191は背面に小孔が穿たれている。盾面から基部にわたる破片がほとんど見られないので全体の構成が把握できないが、円筒状の基台部の上に盾面が乗り、両者の間を突帯により区分していたものと考えられる。

器面は全体的に残存状態が不良であることから整形については観察が困難であったが、盾面側は丁寧なナデが施されている。後面には横方向のハケメを施した後、側辺に沿ってナデを重ねている個体が見られる。

胎土は2種類以上ある。砂粒の混入は他の形象埴輪と比較するとやや多い部類である。

個体の識別についてであるが、外区の上位破片、下位破片の点数、これらの資料の文様構成、胎土などの観察により、最低5体以上を数えることができる。

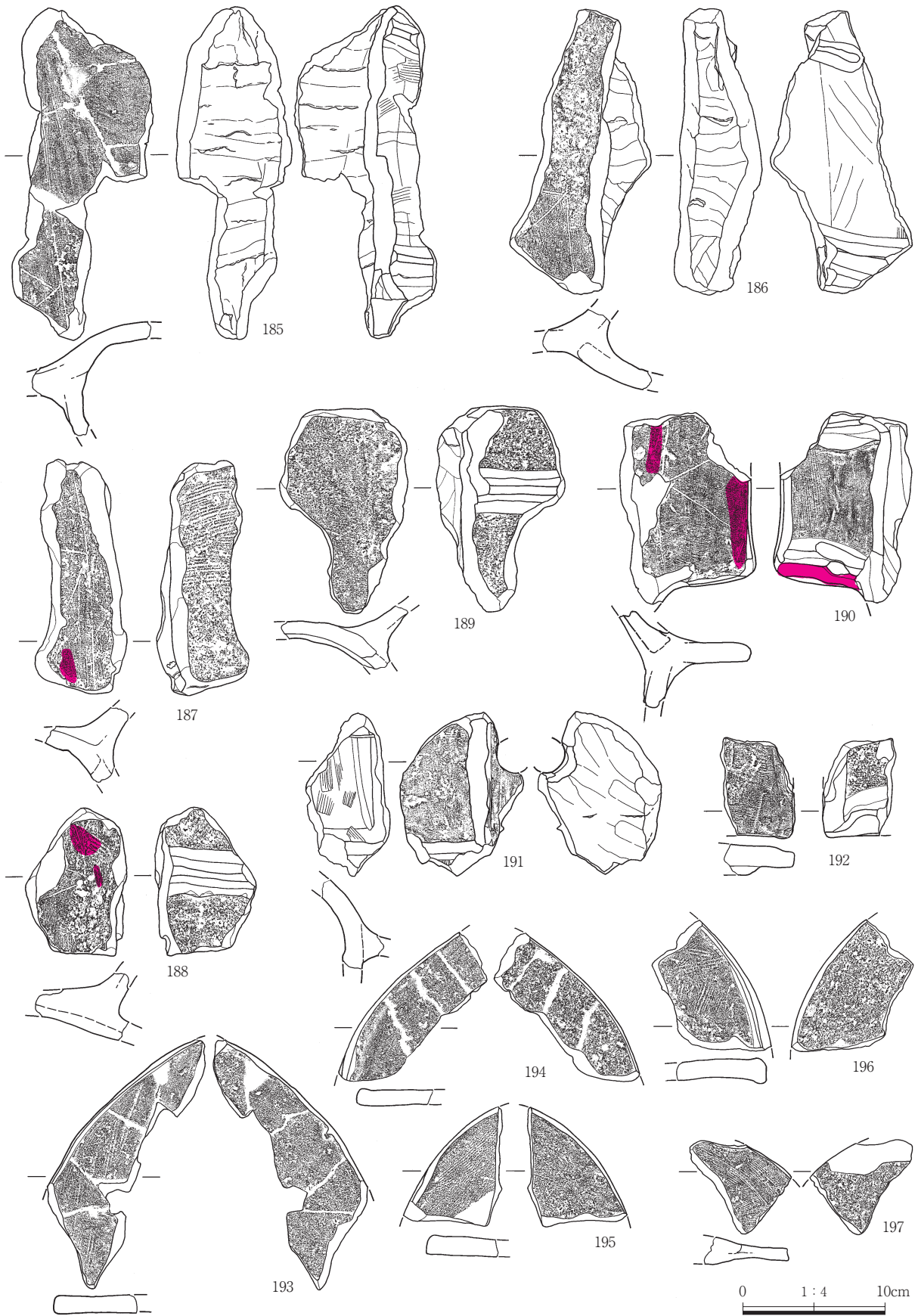
193から197は縁辺部が弧状を呈する板状の破片である。両面とも無文で、片面にハケメを、もう一面にはハケメを消してナデが施されることが共通する。馬形埴輪のたてがみや鞍橋とは調整の状況が異なるものであることから、器種不明ながら盾の上辺突出部である可能性も考え、ここに掲載した。

掲載資料の他に小破片のため掲載を見送った資料は70点余となる。

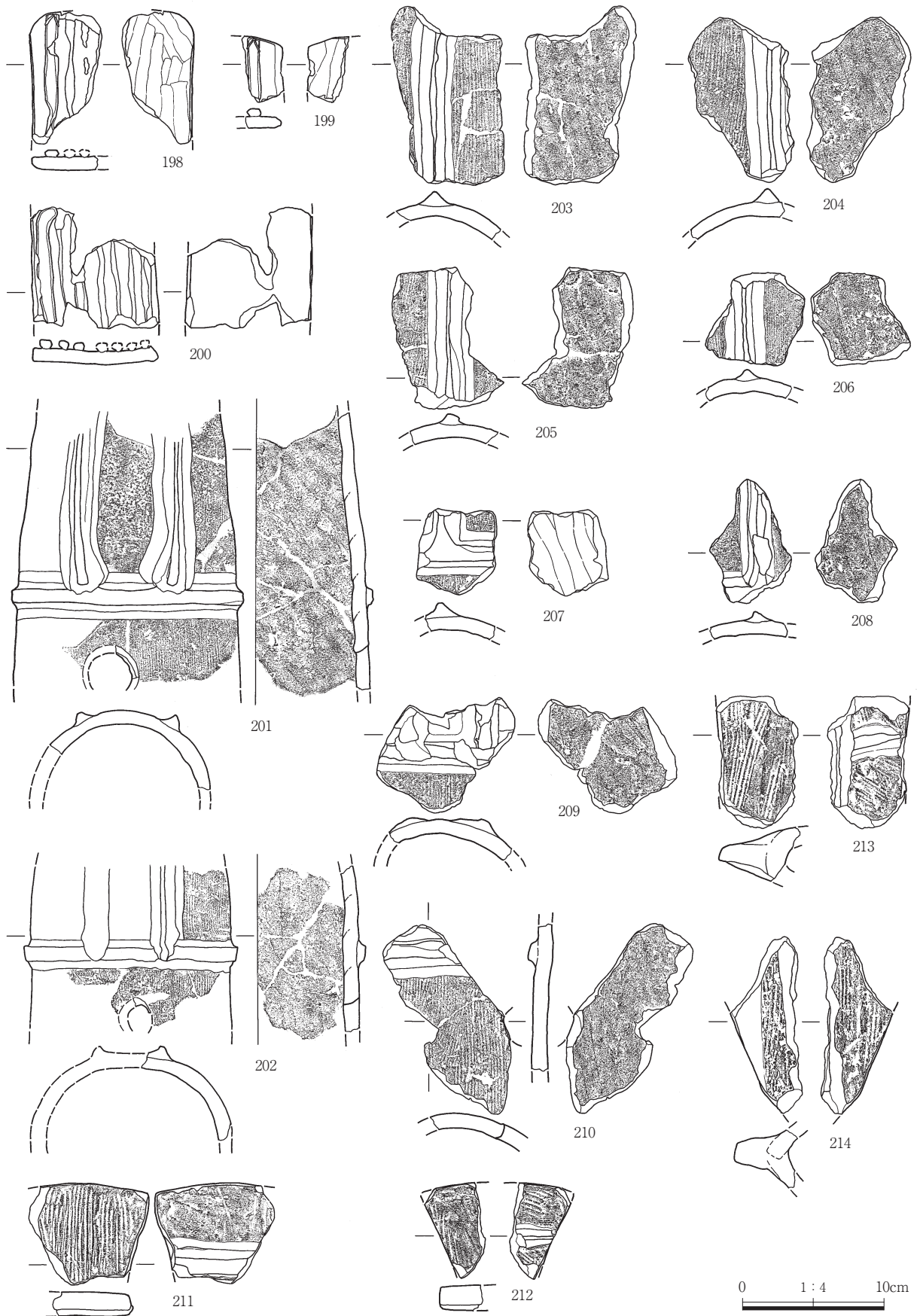
##### 靱形埴輪

198から223は靱形埴輪あるいはその可能性のある資料である。いずれも断片で全体形状を把握できるものは無かった。背負紐の表現部分などは認められなかった。これらの資料は、形状、胎土の共通性が

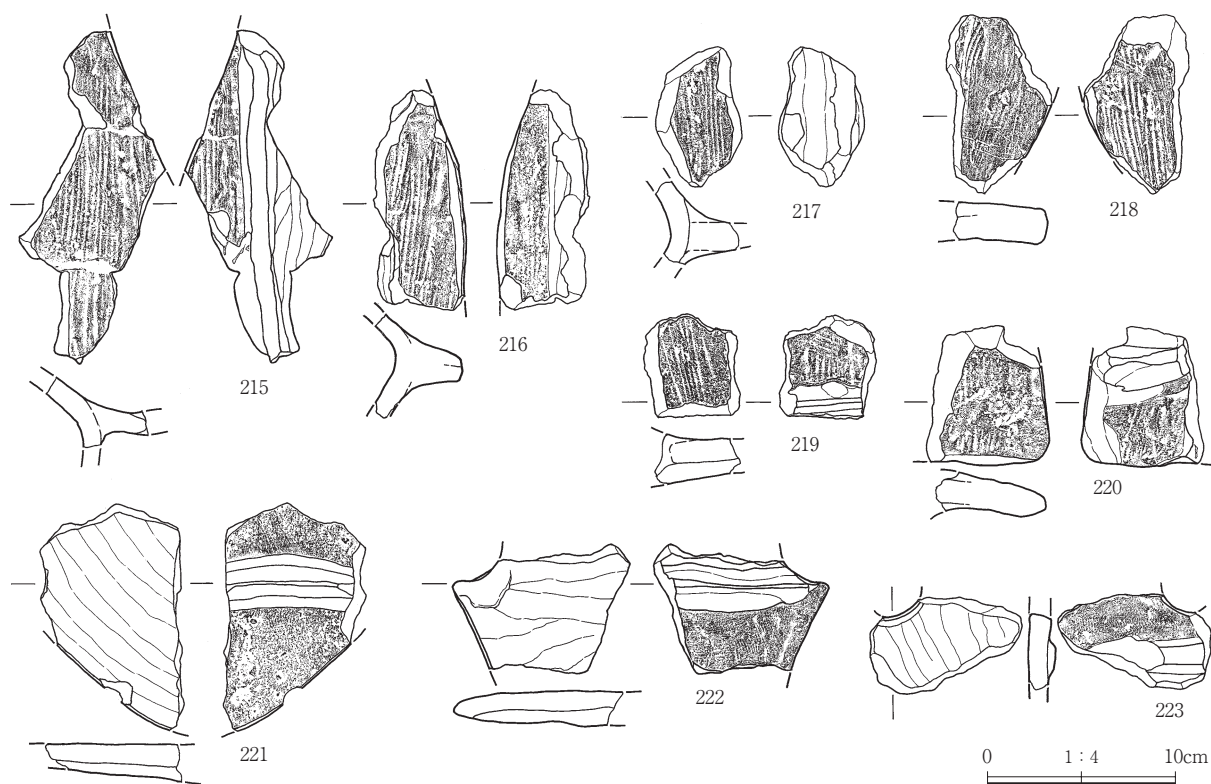




第35図 盾形埴輪 (2)



第36図 靱形埴輪 (1)



第37図 靱形埴輪 (2)

ら少なくとも2種類あるいはそれ以上に大別できる。

198から200は矢筒部から突出した矢柄が粘土紐の貼付で表現されている。198・199では粘土紐にヘラで刻みを入れ、鏃を表している。200は幅9.0cmの間に7本の矢柄が配されていたと考えられる。

201は矢筒部の破片と考えられる。下半から基部にかけての大型破片である。横方向の突帯を境に上位の矢筒部には断面三角形の突帯2本が縦方向に貼付されている。横断面は円形を呈しているが、この突帯は箱形の矢筒の四隅を意識した意匠と考えられ、原形では四隅に突帯が垂下していたものと考えられる。全体が残存していれば大泉町松塚13号古墳出土の靱と同形を呈していたと考えられる。202・209は、201と同様、2本の突帯が見られる。203から208は突帯1本が観察できる破片であるが、器面のハケメや胎土の特徴から201と同様な形状をなすものと考ええる。207・208は縦・横の突帯が接する部分の残存である。

上記の個体とは別に211から220の資料がある。こ

れらは靱の背板の上板・下板の一部にあたる破片と考えられるが断定はできない。器肉が厚く、器面の一方に縦方向のハケメが施され、もう一方の器面にナデが加えられていることが共通する。ただし、粘土板の張り出しが小さいことや通常の靱に見られる下板下端の粘土帯貼付が見られないなどの点が器種の断定に検討を必要とさせる点である。これらを取り付く本体部分は214から216などの残存状況から前後に扁平な筒形を呈するものと考えられる。

198から200は胎土が比較的精選されている。これに対し、201に代表される縦方向に突帯の垂下する一群と213に代表される一群はともに胎土中に砂礫の混入が多く見られるものである。色調は前者が赤褐色である。後者が橙色で、焼成もやや軟質である。

221から223は背板の破片の可能性を有する。後面には盾形埴輪と同様の粘土帯が補強に貼付されている。221と222には縁辺部に繰り込みの一部が見られる。靱以外の器種を考える必要も充分ある。

個体数の把握であるが、矢筒から突出した矢柄部

分の破片から2個体が確実に存在する。これに201の一群には基台部周辺の資料の残存から2個体以上の存在を推定することができる。

#### 大刀埴輪

224から252は大刀形埴輪である。224から238は勾金部分である。いずれも本体から剥落して破片化していた。柄頭との接合痕のある上位の破片、柄縁との接合痕のある下位の破片、中位の破片に分かれる。柄頭あるいは柄縁部分と接合関係にあるものは無かった。

勾金部分はその装飾方法により2者に大別される。前者は勾金を三輪玉で飾るもので、後者は勾金に楕円状の半球形の粘土を貼付したものである。

三輪玉の付く勾金部分の資料には、幅広で、緻密な胎土、橙色の色調のものと、幅が狭く、赤褐色で器面にハケメを残すものの2種類がある。幅広のものは部位の検討から最低2個体が確認できる。幅狭のものは部位、ハケメと胎土の状態から最低3個体が存在することがわかる。224は上端部破片で、端部が斜めに切られて収束している。これに対し、幅狭の231の上端部は横一線の成形である。

勾金に半球形粘土の装飾が付された資料はいずれも細片ばかりで、6点出土している。238は端部の破片で、上端を斜めに切っている。

239・240は柄頭の部分である。柄頭の平面形状は楔形である。振り環の表現や勾金上部の裏側には粘土の補強は見られなかった。いずれの勾金とも接合関係が認められないことから個体総数がさらに増加するものと考えられる。241は柄間部分で240と同一個体と考えられる。242・243は柄頭の一部である可能性がある。244も柄間の一部である。245・246は柄縁部分である。247・248・250・251は鞘部分である。形状は刃側の稜を意識したものではなく、横断面は円形を呈している。柄縁から鞘尻に向かって徐々に径を増している。249は鞘から基台部と考えられる。径がやや大きい、器面に施されたハケメが231などの勾金のハケメと類似することから大刀の一部である可能性を考えたい。

以上の観察から、本古墳に樹立されていた大刀形埴輪は勾金部分の識別から6個体以上、それにこれらの勾金と接合関係の見られない柄頭2点の存在から、合計8個体以上となる。

掲載資料の他に柄頭や勾金部分、鞘部分と考えられる小破片が20点前後ある。

#### 人物埴輪

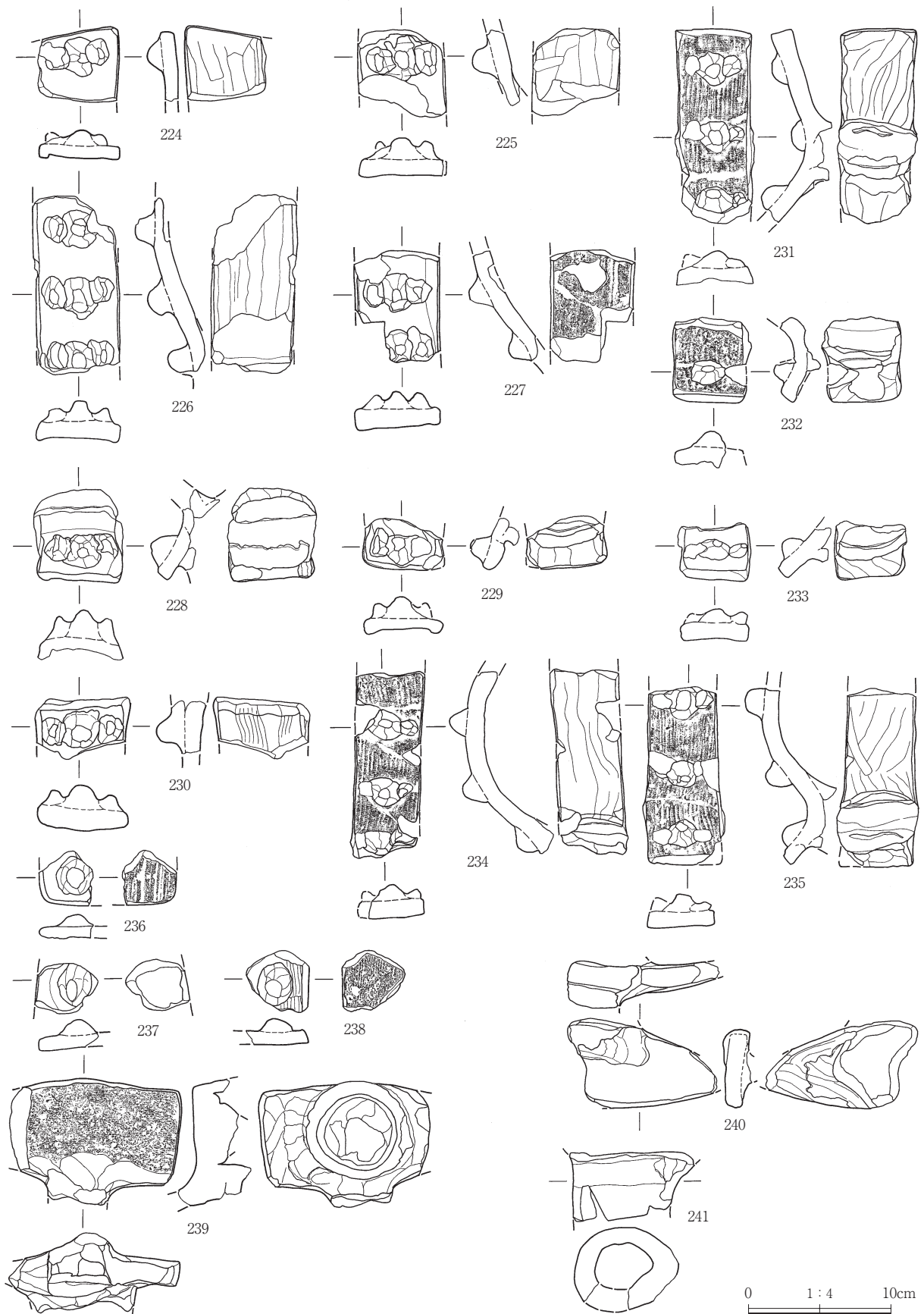
253から270は人物埴輪の一部と考えられる。いずれも小破片であった。

253・254は顔面の一部である。男女の区別は困難である。253は、鼻から口の上唇部分である。鼻梁は欠損している。鼻孔はヘラ状工具を刺突して表現している。254は顎部分で、口の下唇部分が認められる。頭部本体に粘土を貼り足したものが剥落したものである。口はヘラ状工具を複数回刺突することにより貫通させている。255は顎から頸にいたる破片である。256は後頭部の破片である。

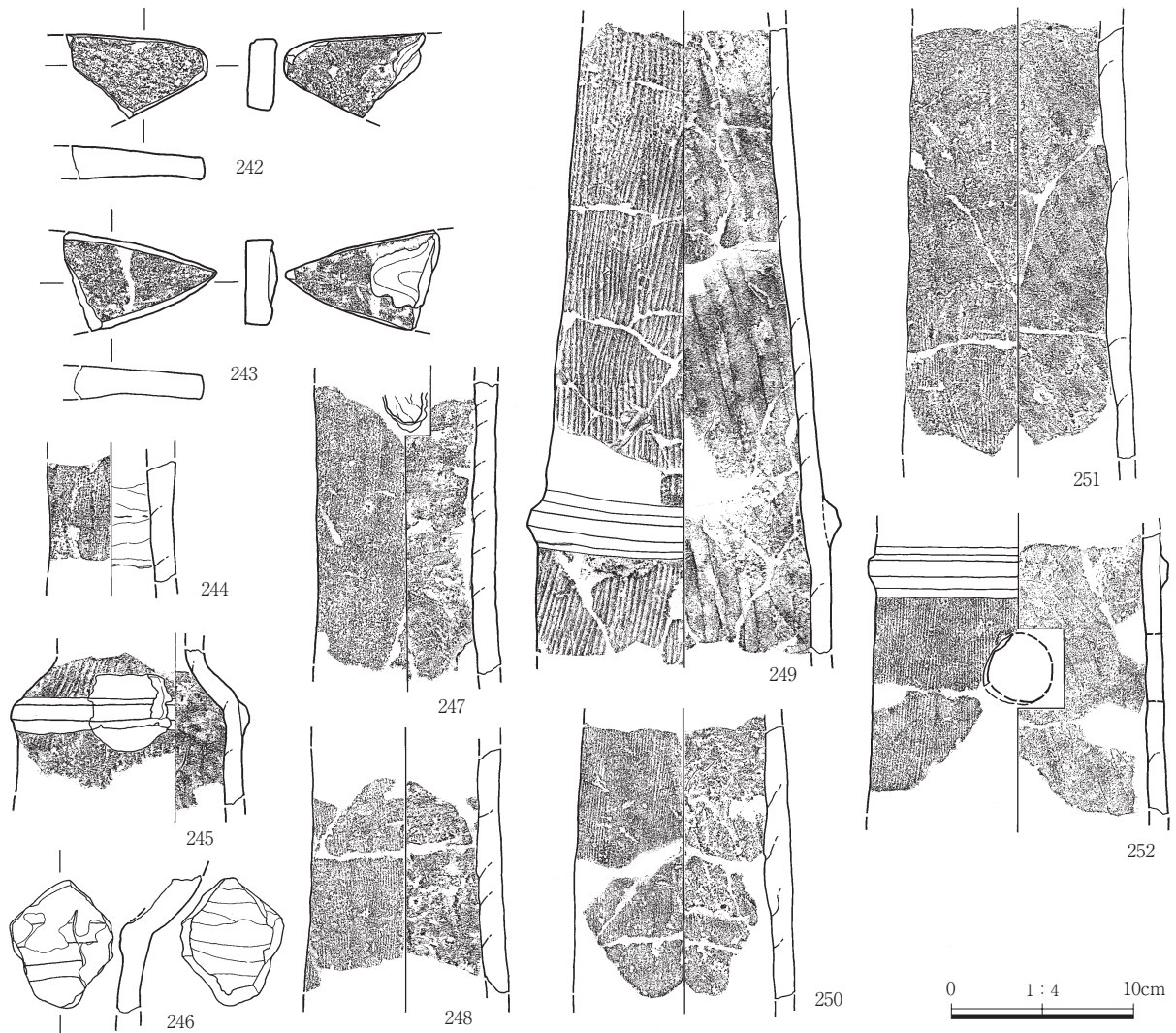
257・258は男子の美豆良の一部である。下端に向かって膨らみを増す中実の棒状粘土からなる。257は顔の左側を垂下していたものと考えられる。259も左側の下げ美豆良で下端はT字状を呈する。

260から263は腕とその周辺の破片である。いずれも中実で差し込み式である。器面は丁寧にナデられているが着衣の表現や赤色塗彩などは見られない。260は、左腕から一部脇の下にかかるもので、下端は手首から先を欠損する。261は右上腕部の破片である。262は左腕で、手首の手前で欠損している。263も左上腕部の残存である。264は右手首から手のひらにかけての残存で、指は親指のみの残存である。265は拳を表現したのと考えられ、細い棒状の粘土を掴んでいる。手首で破断している。

266は腰部分の破片と考えられる。横方向の突帯は帯紐を表現したのと考えられ、これに重なって一部残存する粘土紐と剥離痕の状況から腰に差した鎌を表現したのと考えられる。267は半身像の胴部下半から基部にいたる大型破片である。上衣の裾はその大半が剥落している。着衣の細部表現はない。268と269も上衣の裾部分と考えられる。



第38図 大刀形埴輪 (1)



第39図 大刀形埴輪（2）

270の粘土粒は本体から剥落した装身具、玉類の一つと考えたい。

これらの資料を整理すると3点の美豆良から2人ないし3人の男子の存在が確認できる。顎の破片からは3人を、3点の左腕、残存資料からも3人以上の人物の樹立が想定される。島田髻や乳房の部分が見られないため女子の存在を断定する資料はない。

いずれの資料も小破片であったため、具体的な所作について確認することは困難であったが、265からは手に手綱を握る馬史、あるいは楽器を握り、歌舞の仕草をする人物の存在が推定されることである。266の腰部破片は、馬形埴輪が出土していることから馬曳きの一部である可能性が高い。

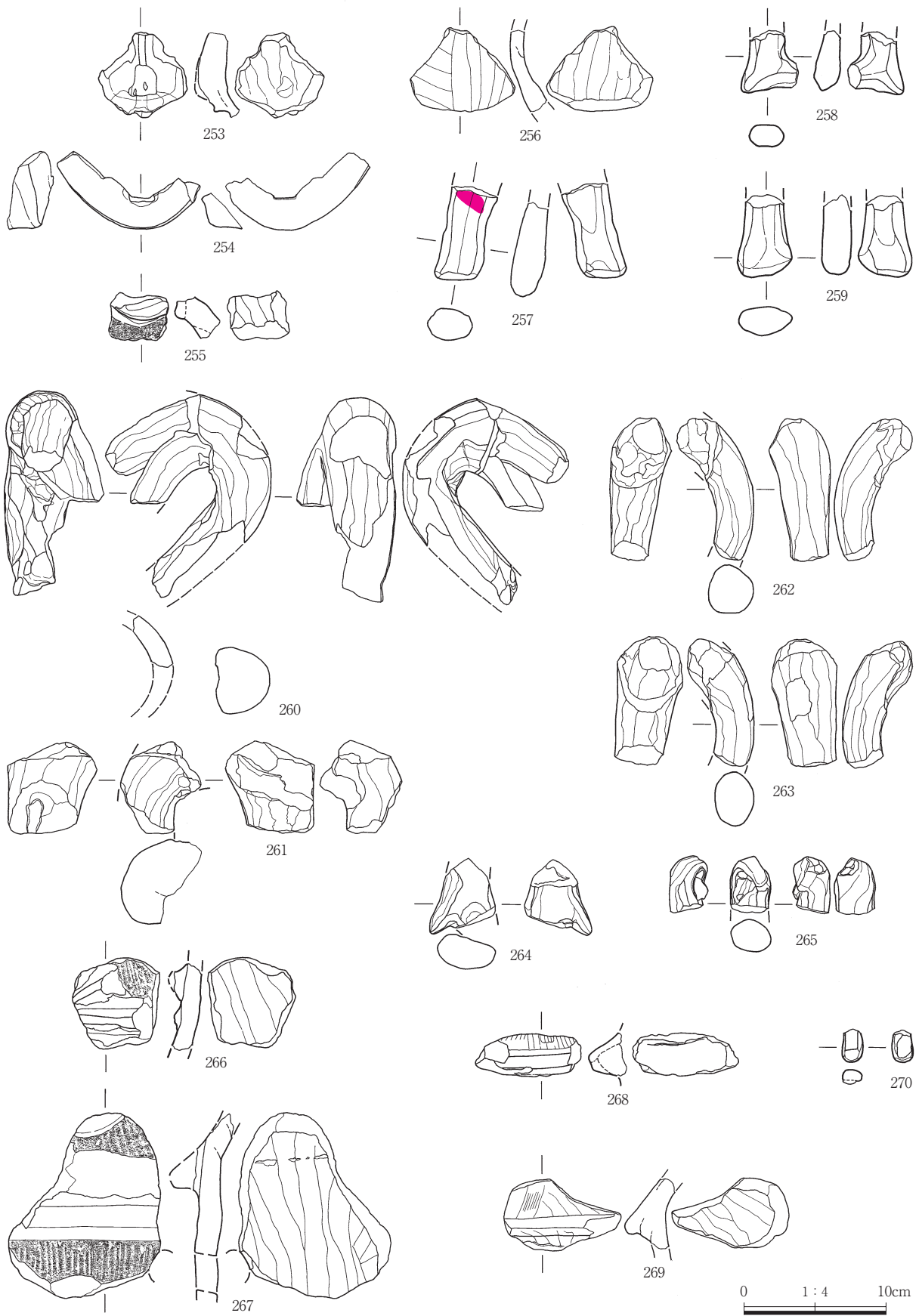
掲載を見送った資料としては肩口の可能性がある

破片2点、腕のほぞ部分2点、上衣の裾部分の可能性のある破片1点がある。

馬形埴輪

271から304は馬形埴輪の破片である。残存が確認されたのは頭部の耳・鼻先、轡の鏡板、頸から手綱、鞍、鐙、尻、腹、脚、鈴の各部位である。

271は耳の先端の破片である。272は頭部、鼻先の破片である。鼻孔の一部が残存していたが、口の切り込みは見られなかった。器面の剥離痕は鏡板が装着されていた痕跡と考えられる。273は目の周囲と考えられるが断定できない。274は轡の鏡板の破片と考えられる。原形はf字形鏡板を表現していた可能性が考えられる。周縁部に縁板を表現する粘土紐を貼り、間隔を保って鉤留を表す粘土粒を置いて

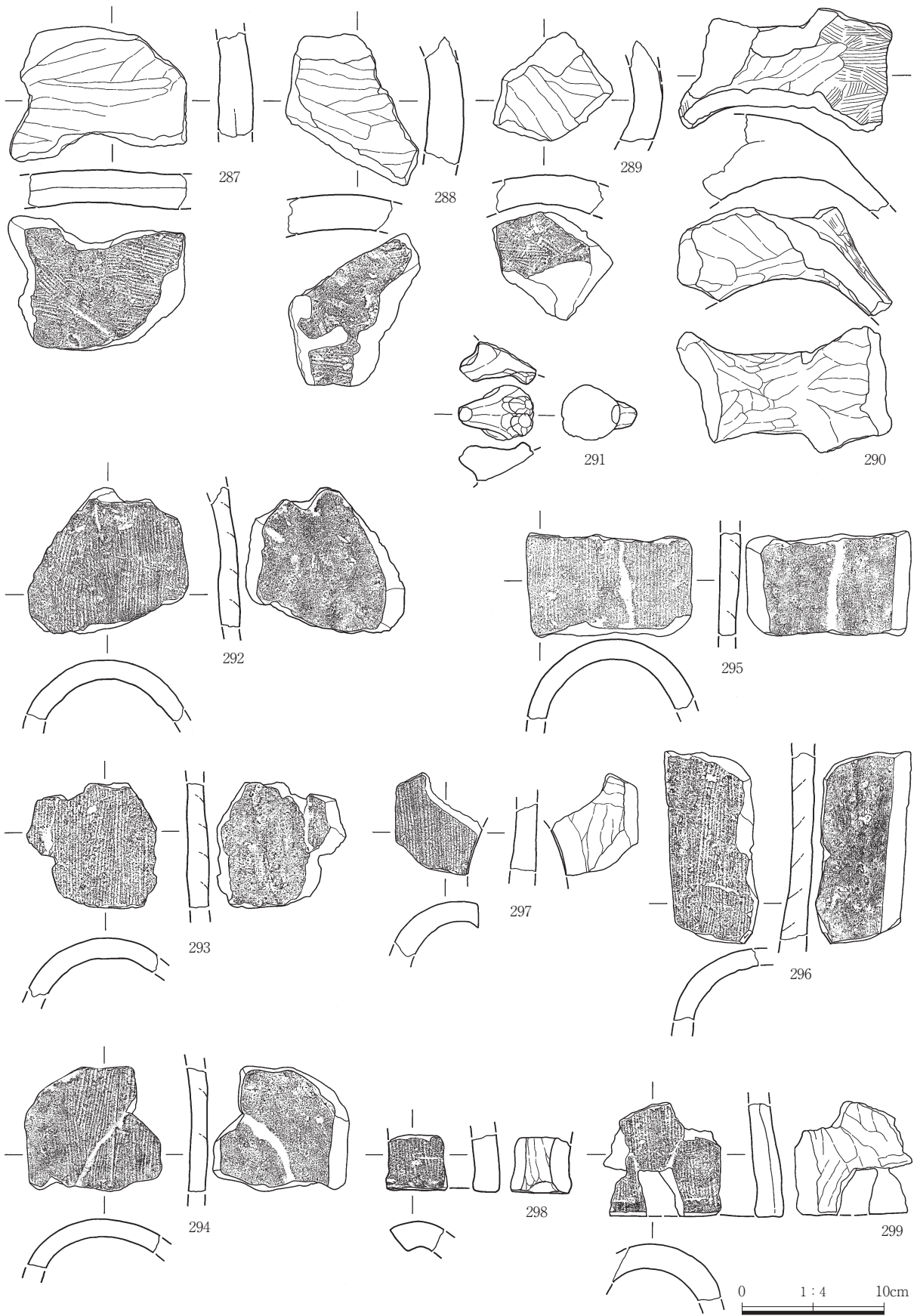


第40図 人物埴輪

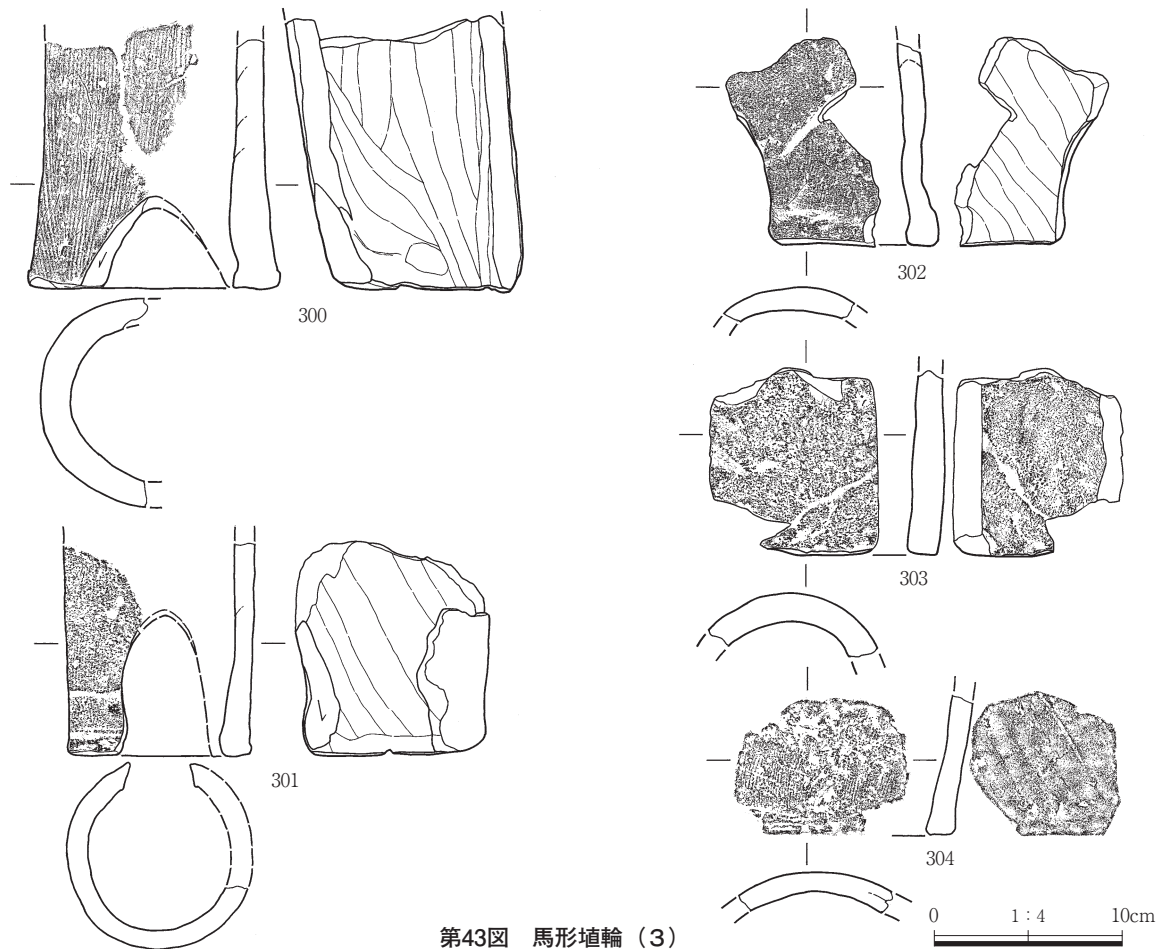


第41図 馬形埴輪 (1)





第42図 馬形埴輪 (2)



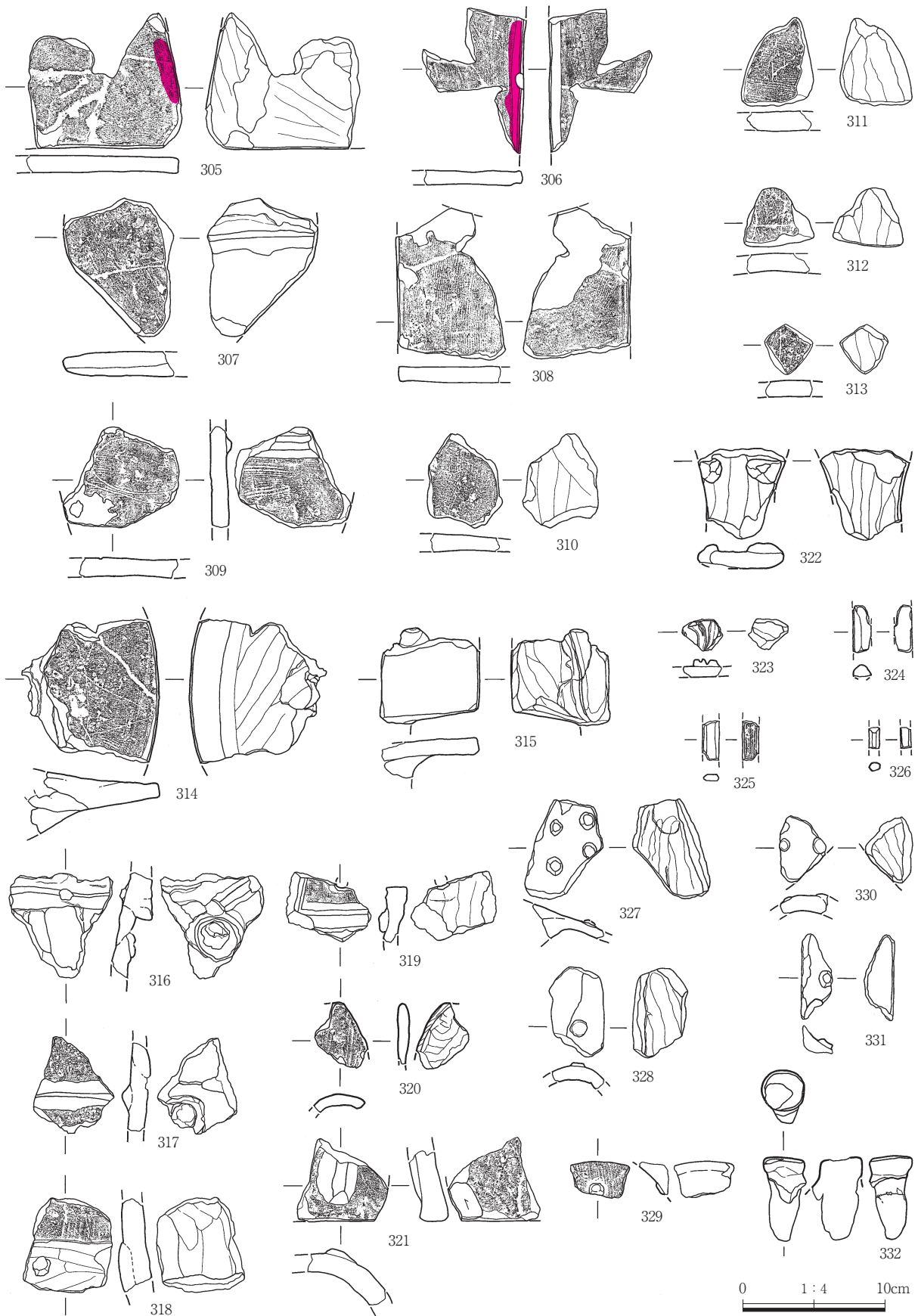
第43図 馬形埴輪 (3)

いる。275・276も同様の表現が見られることから鏡板あるいは辻金具などの飾り金具の破片と考えられる。284から286は鈴である。半球形を呈する中実品で、中央に横方向の刻みが入る。本体から剥落した痕跡が残ることから繫などに装着されていたものと考えられる。

277は胴部鞍周辺の大型破片である。鞍橋は前輪の右側の一部を除き、後輪ともども剥離、欠失している。居木や鞍褥の表現はない。側面には右側の鐙鞆上端の表現が残る。後輪の後方には幅0.7cmの粘土紐3本が伸びており、雲珠に向かう繫を表現していると考えられる。278は鞍橋の一部である。前輪左下部分か。周縁部には特別な装飾は見られない。279は繫の一部が見られるが、これに接し剥離痕が広範囲に見られる。280は輪鐙の上半部分が表現された破片と推定される。281は左側面の首から胸の部分の破片である。前輪の一部と幅2cm程の胸繫が

廻る。282は胴部の尻尾の付け根周辺の破片である。先端は欠失するが胴部との接合基部は中空であった。尻の孔を表す小孔の一部が残存していた。欠け口周辺の器面には尻繫が剥落した痕跡が認められる。283も同様の部位の破片である。287から289は腹部の破片と考えられる。290は股間部分の破片である。前脚・後脚の判別は困難であった。289は股間に近い部位である。291は体部から剥落した雄の生殖器である。

292から304は脚の破片である。この他にも多数の破片があったが、細片化が著しかった。外面にはタテハケが、内面にはナデが施されているだけで、脚個々の識別は困難であった。脚の長さは想定することが困難である。その中、蹄の切り込みが見られたものが7・8片あったが、蹄の全形が把握できたものはなかった。297から302を掲載した。300・301は縦長三角形を呈する蹄の切り込みの様子を比較的良



第44図 器種不明の形象埴輪

好に見ることができる資料である。

294から296・300・303の資料において、脚部の成形に特徴的な状況が見られた。それは、縦方向の割れ口に刀子状の工具を使用したと考えられる縦方向の切開痕が認められるということである。この切開痕は、山崎武氏らが指摘するところの「切開再接合技法」、すなわち脚部の成形に際し、最初に脚部を粘土紐の巻き上げあるいは積み上げで任意の円筒形に製作した後、馬の脚径に合わせて径を細くするため、円筒に切り込みを入れ、縦方向に余分な粘土を切り取る方法が採用されていたことを表すものと考えられる。切開面の再接合は円筒埴輪の基部のように粘土板のいずれか一方を他方の上に重ねるのではなく、両切開面が合い接するように接合し、内面に僅かに粘土を貼っていることがわかる。残存する資料の観察によれば、再接合箇所は1箇所と考えられる。300では蹄の切り込みと対向する位置で切開されていることが分かる。

脚部の形状と胎土の特徴から本古墳には少なくとも2体の馬形埴輪が樹立していたことが確認できる。1体は、300の脚部に代表される個体で、頭部・胴部の破片は整形・胎土・色調の比較からこれと同一個体を形成していたものと考えられる。もう1体は、301の脚部破片に代表される個体である。

なお、小片のため掲載を見送った資料としては胴部と考えられる破片が40点余、脚部中位の破片20点余があるが個体数の増加につながるものではないと考えられる。

#### 器種不明の形象埴輪

今回の調査において、原古墳に家、各々複数の盾・靱・大刀・人物・馬が樹立されていたことが確認されたが、この他に器種を特定することのできなかつた資料が多くある。ここではこれらの資料を一括して掲載する。

305から307は板状を呈する破片である。305は隅部を、306・308は端部を残す。307は背面に補強帯が見られる。309から313は表面にヘラ描きによる弧線文が見られる。盾や靱の可能性が考えられる。

314は縁辺が弧状を呈する。表面は内側に縁辺と同心の弧線をヘラ描きし、区画内を山形に区画する。盾面に類似するが粘土板の成形・接合が異なる。また、背面から穿った小孔を再度粘土塊で塞いでいる点が注目される。

315も板状品で背面に補強帯が見られる。316と317は外面に断面三角形の突帯が付く。粗雑な成形、一度穿った小孔を塞いでいる状況が共通している。

318は幅広の帯に粘土粒が重なる。319は、突帯と小孔が見られる。320は当初、馬の耳と考えたが端面にハケメが見られる。321は筒状の端部に切り込みが見られることから馬の蹄部分に類似するが、外面に帯状の粘土が貼付されている。

322は板状の残片で、ナデ調整の器面に揃いの粘土粒を貼付する。

323は粘土板にヘラ刻を伴う粘土紐を貼付している。靱の鏃を表現したものであろうか。324から326は粘土紐の小破片である。本体から剥落した痕跡が見られる。人物や馬装の一部であろうか。

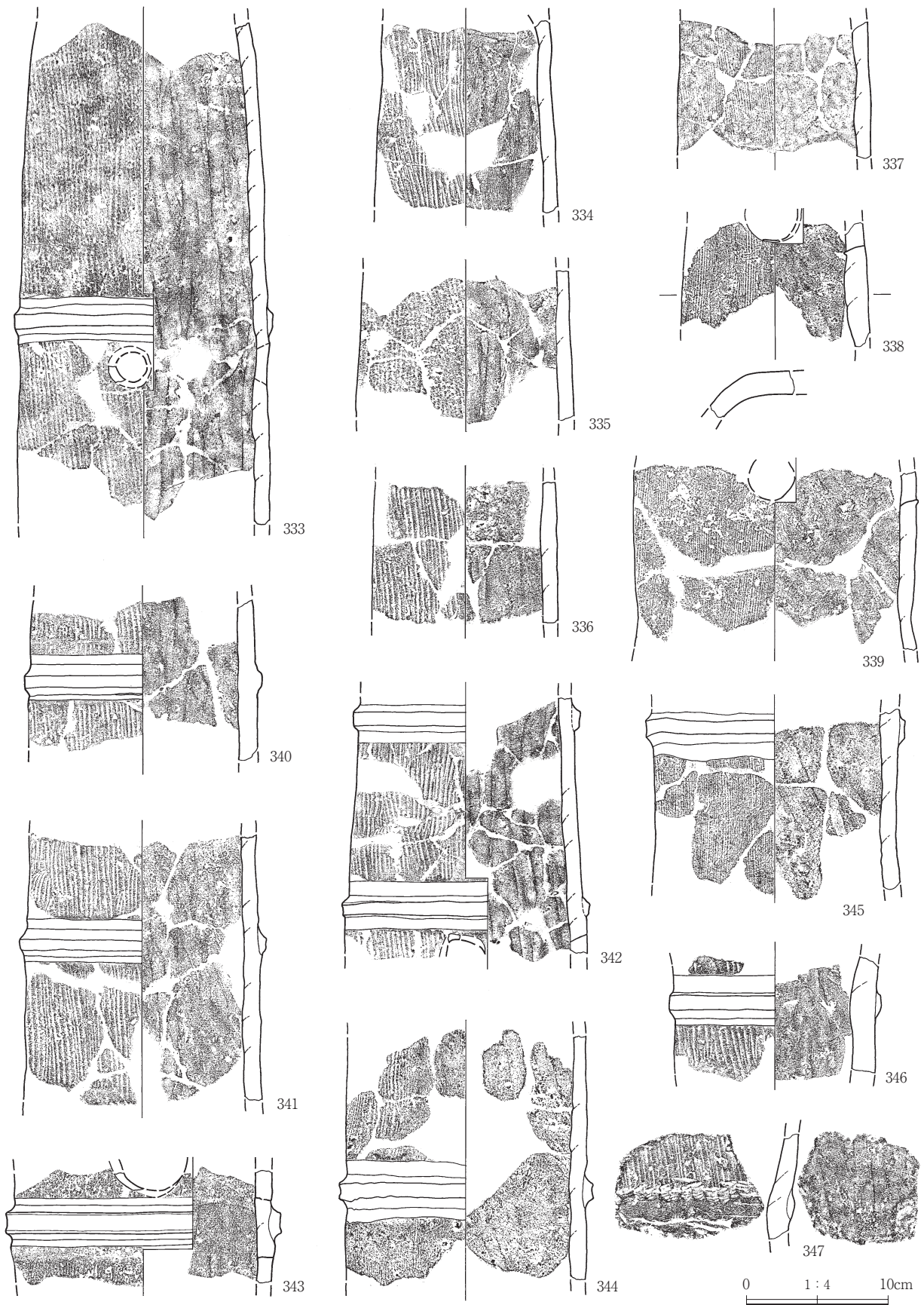
327から329は器面に粘土粒を貼付している点が共通している。327・329・331には本体からの剥離痕が見られる。本体と内面との間に空間が生じるような接合状況が想定される。いずれも胎土中の砂粒の混入が極めて少ない。馬鐸や鐙が想定される。

332は一端が平坦面をなす棒状の付属品で、器面の大半に接合痕が見られる。

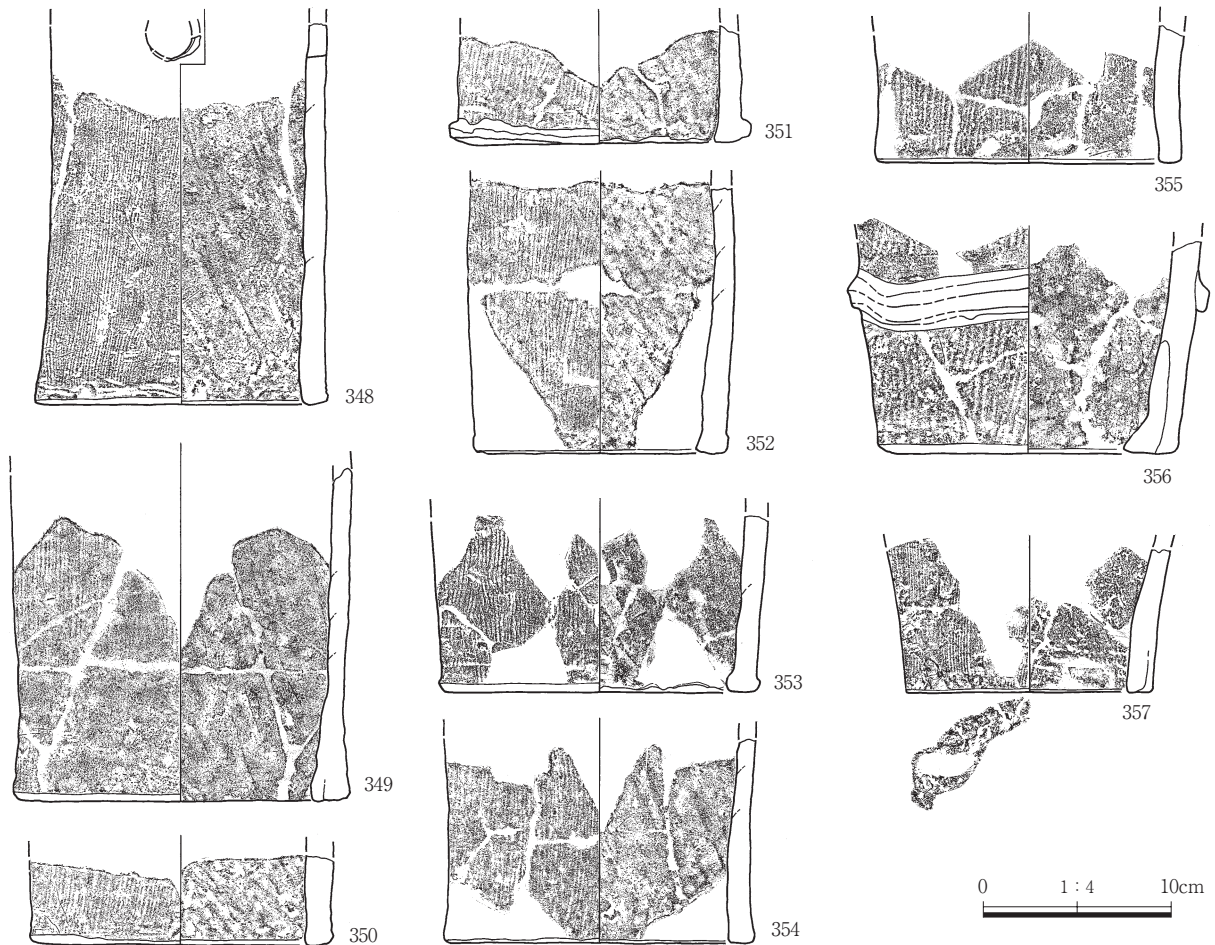
#### 形象埴輪基台部

ここには器財埴輪の基台部と考えられる資料を掲載しておく。円筒埴輪と比較してやや小径で、ほぼ垂直方向に立ち上がっている点が共通する。底面近くの器肉は円筒埴輪よりも薄く、一定で丁寧な造りである。中には348や353のように底面に礫や植物の茎と考えられる圧痕が見られ、整形が円筒埴輪よりもやや粗雑な印象をもつものも見られる。盾・靱・大刀・靱・翳などの基台部の可能性が考えられるが本体を特定することは困難であった。

333は残存長35cm、突帯直下の直径17.5cmを測る。突帯下に小径を穿っている。突帯から上位は上方に



第45図 形象埴輪基台部 (1)



第46図 形象埴輪基台部（2）

向かって僅かに径を細めている。大刀の鞘部分では径を有しすぎるとされるものである。

334から336は器面に粗いタテハケが施されており、明褐色を帯びている。337や338はそれよりもやや細かいハケメが見られる。339は下端近くの破片である。直径が他よりも大きい。器形が歪んでいるか。340・341は断面台形の突帯が廻っている。ハケメや色調は333に類する。342は段間13.5cmで2条の突帯が廻る。343は突帯を挟んで透孔が一對ずつ穿たれている。347は低い突帯の上稜部分にハケメの工具で刺突を連続したような工具痕が見られる。

348から357は底部の残存する資料である。底径は15cm前後である。348は底面から18cmの位置に小孔が穿たる。356は底面から8.2cmの位置に突帯が廻る。円筒埴輪の基底部分には見られない形状である。

まとめ

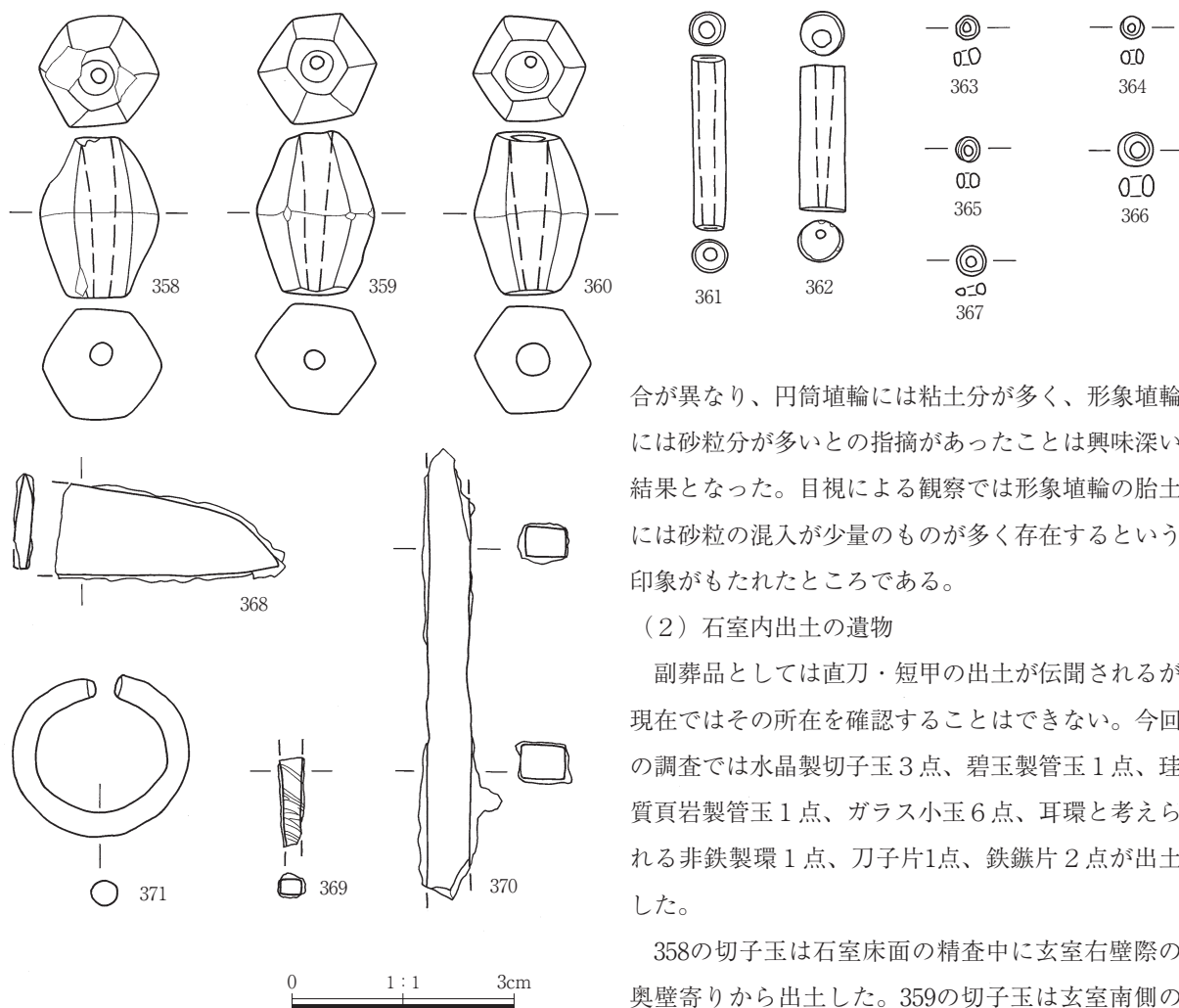
円筒埴輪については第4章で原古墳の時間的位置

付けを考えるにあたりふれるので、ここでは原古墳から出土した形象埴輪のあり方についてまとめておきたい。

今回の調査で確認された形象埴輪の器種としては家形埴輪、器財埴輪の盾形埴輪・靱形埴輪・大刀埴輪、人物埴輪、馬形埴輪があった。

家形埴輪は堅魚木を棟頂部に載せる入母屋形の個体1棟が確認された。下屋根、壁体部分の残存は不良であった。

器財埴輪の盾形埴輪は全体形状を知ることのできる資料は得られなかったものの、破片資料の観察から5個体以上の存在が確認された。また、成形の観察から盾面を円筒部に接合する際に「切開再接合技法」が採用されていることが分かった。靱形埴輪も全体形状を把握できるものは無かったものの、破片資料の観察から2種4個体以上の存在が想定される。矢筒の形状が大泉町古海松塚13号古墳出土資料と同



第47図 石室内出土遺物

形をなすものが存在する。大刀形埴輪は8個体以上を数えられた。勾金部分の装飾には三輪玉、楕円状半球形の装飾貼付の2種類が見られた。

人物埴輪は3人以上の存在が想定される。

馬形埴輪は脚部の特徴から2体以上の存在を確認した。うち1体は脚部の成形に「切開再接合法」が採用されていた。

原古墳から出土した埴輪については、「第3章分析、第1節原古墳出土埴輪の胎土分析について」において胎土分析の結果を掲載した。報告されているように円筒埴輪、形象埴輪ともに藤岡産である。ただし、今回の報告では具体的な埴輪窯に言及するまでにはいたらなかった。ただし、分析結果の中で、円筒埴輪と形象埴輪とでは材料粘土と砂粒の混合割

合が異なり、円筒埴輪には粘土分が多く、形象埴輪には砂粒分が多いとの指摘があったことは興味深い結果となった。目視による観察では形象埴輪の胎土には砂粒の混入が少量のものが多く存在するという印象がもたれたところである。

(2) 石室内出土の遺物

副葬品としては直刀・短甲の出土が伝聞されるが現在ではその所在を確認することはできない。今回の調査では水晶製切子玉3点、碧玉製管玉1点、珪質頁岩製管玉1点、ガラス小玉6点、耳環と考えられる非鉄製環1点、刀子片1点、鉄鏃片2点が出土した。

358の切子玉は石室床面の精査中に玄室右壁際の奥壁寄りから出土した。359の切子玉は玄室南側の床面からの出土である。368は刀子の切先破片である。玄室確認作業中に出土した。369は鉄鏃茎部破片で、玄室左壁際からの出土である。また、玄室床面下の土砂を篩にかけて選別した際に371の環1点、370の鉄鏃茎部破片1点、362の管玉1点、363から367のガラス小玉6点（うち1点是小破片のため非掲載）が出土した。この他に人歯の小破片1点が右側壁の奥壁隅の床面下から出土している。

石室確認作業中には玄室内から陶器灯明皿受皿の破片が出土している。羨道部奥側、梱石近くからは201の靱や333の形象埴輪基台部が大型破片の状態で出土している。何時の時点かに石室内に持ち込まれた可能性も考えられる。この他にも石室が開口していたり、天井石が撤去されたためか、崩落土に混じって多数の埴輪片や板状・棒状の金属片などが出土している。

第3節 原古墳以外の調査

1 概要

原古墳の調査においては、古墳の墳丘下から2基の土坑を検出した。また、古墳の墳丘下および古墳の北側部分に縄文・弥生時代の遺物包含層が存在し、この部分から、縄文土器、弥生土器、同時期の石器・石核・剥片などの出土を見た。

原古墳の調査を進める過程において、古墳築造後、墳丘の周囲に堆積したり、寄せかけられた土砂・礫石あるいは攪乱土と混在する状況の中、古墳時代から中・近世にいたる時代の遺物が検出された。

古墳時代の出土遺物としてはS字状口縁台付甕の破片がある。また、横穴式石室の石積みの裏側から土師器甕胴部上位の破片が出土しているが詳細な時期については断定できなかった。平安時代の遺物としては土師器杯2点がある。中・近世の遺物としては陶磁器・板碑・金属器・古銭が出土している。

今回の報告では原古墳や土坑に伴わない出土遺物については遺構外出土の遺物として扱った。これら

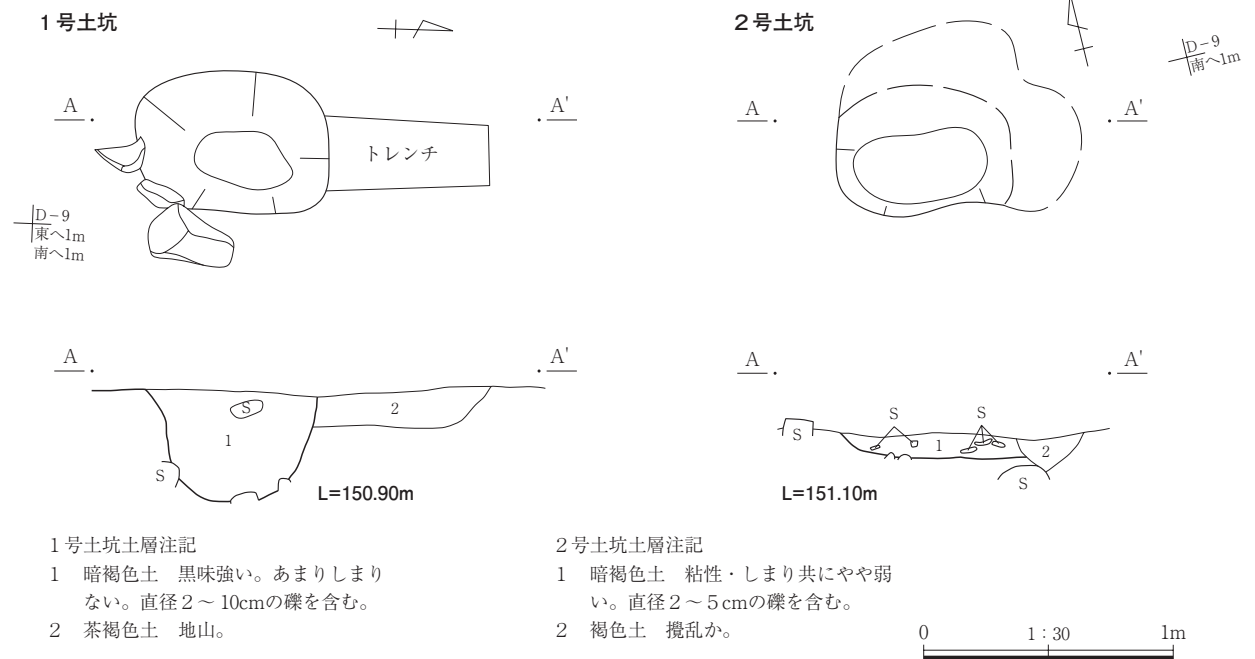
についてはその全てを資料化することは困難であったことから、時代・器種・成整形の特徴などを勘案し、必要と考えられるものについて選択し、資料化した。明治時代以降の製作と考えられる陶磁器をはじめとした土器類、金属製品についてはその対象から除外してある。以下、「4 遺構外出土の遺物」の項において、縄文時代から中・近世にいたるまでの遺物について、時代別に実測図を掲載し、観察表にその内容を記述しておく。

2 土坑

原古墳の墳丘下から2基を検出した。確認面は基本土層の5層上面である。共に5層を掘り込んでいるが、掘削時期について断定することは困難であった。

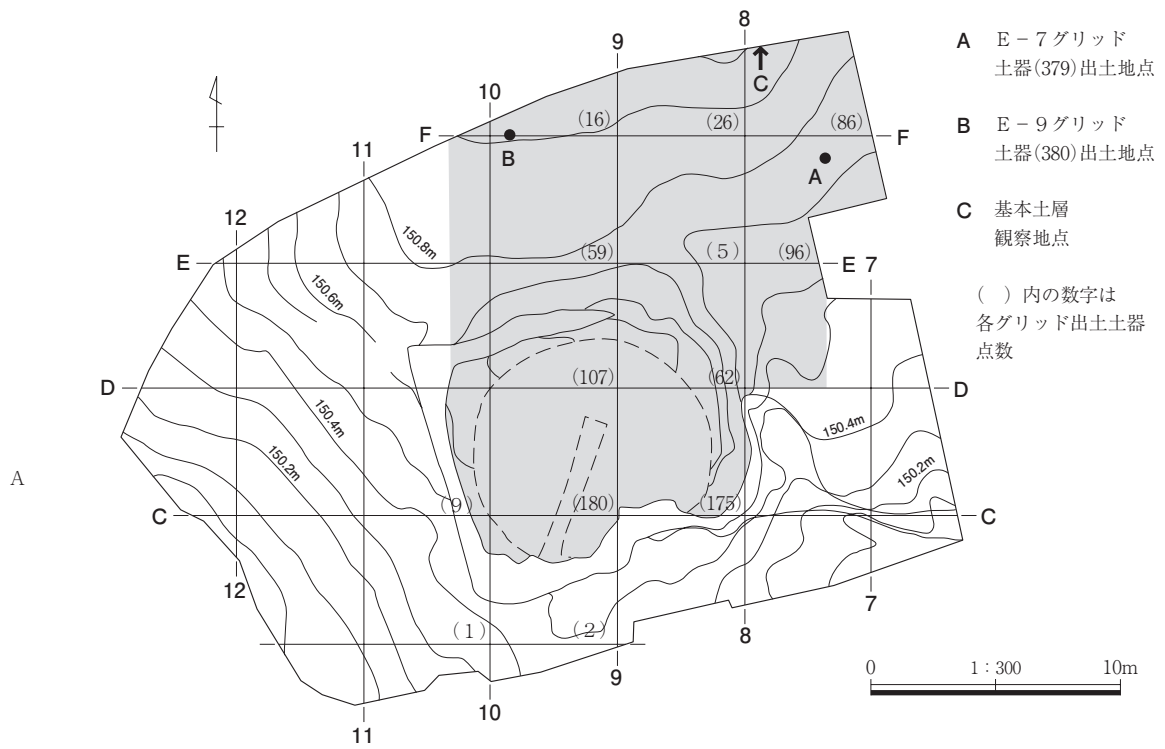
1号土坑は、C-8グリッド北西部分に位置する。平面形は長円形である。規模は長さ0.77m、幅0.56m、深さ0.41mである。埋没土は暗褐色土である。少量の土器片が出土したが資料化に足るものはなかった。

2号土坑は、D-9グリッド北東部分に位置する。平面形は長円形であるがあまり整然としたもの

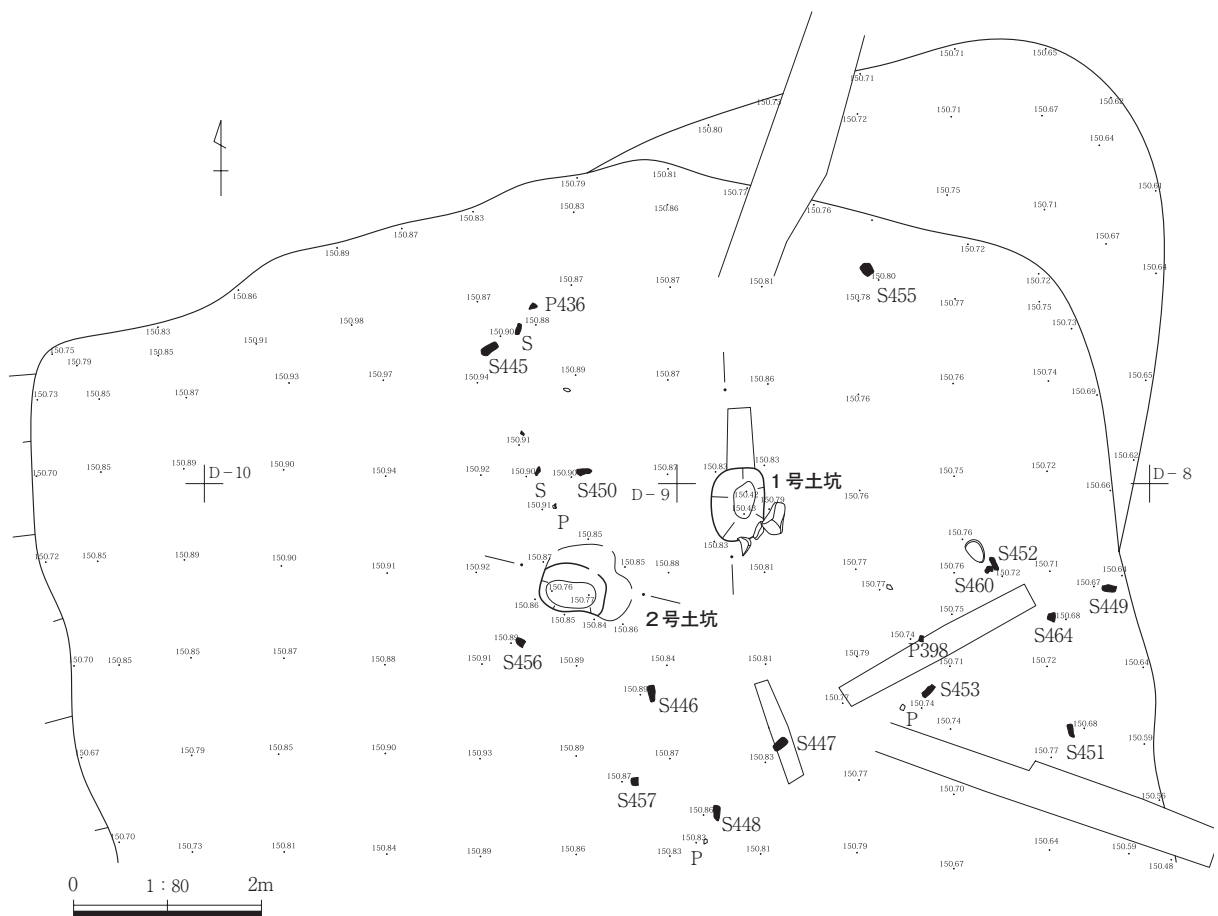


第48図 1号・2号土坑





第49図 遺物包含層の調査範囲



第50図 原古墳墳丘下遺物出土状況

ではなかった。規模は長さ推定0.70m、幅推定0.50m、深さ0.10mである。埋没土は暗褐色土である。少量の土器片が出土したが資料化に足るものはなかった。

### 3 遺物包含層の調査

原古墳の調査中、墳丘周囲に設定した北西トレンチや北側トレンチの掘り下げの際に縄文を施文する土器の出土が見られた。このことから、周囲に縄文時代の住居あるいは土坑などの遺構が存在する可能性が考えられた。そこで、古墳の調査の進捗に合わせて、古墳の北側部分について遺物の包含状況を把握することを目的とした調査を実施した。調査の範囲は、D～F-7～10グリッド部分で、対象とした土層は基本土層に示した4層を中心に、3層から5層である。対象面積は、その後行った原古墳墳丘下の部分と合わせて約225㎡である。

住居や土坑などの検出はなかったものの、調査区のほぼ全域にわたり、小破片となった弥生土器の出土が見られた。個別の出土点数を見ると1549点である。その中で、E-7グリッドとE-9グリッドにおいて完形・半完形の弥生土器が各1個体が出土している。なお、この範囲内では石器については全く検出されなかった。

E-7グリッド出土土器は379として掲載した。検出時この土器は、口縁部を上方に向けて、東側にやや傾斜した状態で検出された。底部の3分の2程は検出時に既に欠損していた。土器の周囲を精査したが土坑状の掘り込みは見られず、わずかに土器の形状に合わせるかのように地山の褐色土よりやや暗い暗褐色土の存在が認められた。これを掘り方と考えるとその南側はトレンチを設定し、土層の観察を優先したため検出できなかったが、上端の径約40cm、深さ27cmのピット状を呈していたことになる。土器の内部から出土した遺物は無かった。

E-9グリッド出土土器は380として掲載した。この土器は南方向に傾斜した状態で検出された。上位部分は上層からの攪乱により残存しなかった。底部も欠損していた。周辺を精査したがこちらも土坑状の掘り込みは見られず、東西の幅0.3m程で、土

器の形状に則したピット状の掘り込みが確認できた。この土器の直下には長さ3.1m、幅1.3m、厚さ0.2mの結晶片岩の板状岩塊が存在していた。土器の出土状況はあたかもこの岩塊上に置かれたように見えるような状態であったが、周辺の地山中にも多数の礫が混入しているため、この土器が岩塊上に意図的に埋置されたとは断定できない。

また、原古墳の調査終了後墳丘下の堆積土を対象に遺物の包含状況について調査を実施した。墳丘下では前述の土坑2基を検出したが、これとほぼ同じ層位で少量の縄文土器・弥生土器とともに打製の石鏃、打製石斧、スクレーパー、加工痕を有する剥片、石核などの石器・剥片類の出土をみた。出土の状況は第50図に示したとおりであるが、墳丘下東側に多く、西側部分には少量であった。

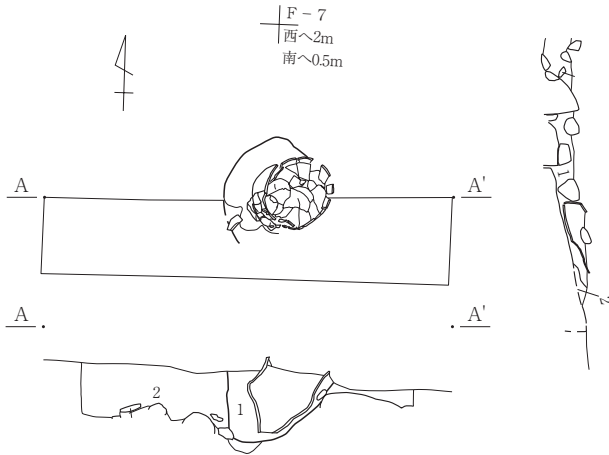
### 4 遺構外出土の遺物

#### (1) 縄文時代の遺物

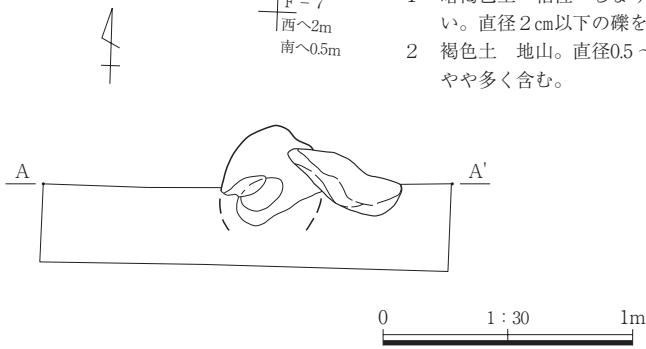
本遺跡の調査において、縄文時代の遺構は検出されなかった。包含層の調査の際に少量の土器が出土した。ここでは8点を掲載した。376の浅鉢形土器を除き、他は深鉢形土器である。

372はD-9グリッド出土の口縁部破片である。内外面に0段2条L縄文を横位に施文している。早期の所産と考えられる。373は北東トレンチ出土の胴部破片である。外面に横方向の沈線文が見られる。胎土中に繊維を含む。前期黒浜式に属する。374はF-7グリッド出土の口縁部の破片で端部は波状を呈している。外面にLR縄文を横位に施している。中期加曾利E3式に属する。375はC-10グリッド出土の口縁部破片である。粗製土器で、外面に粗いナデが見られる。後期堀之内2式と考えられる。376は墳丘西側斜面出土の浅鉢口縁部の破片である。先端に刻み目を伴い、内面には2条の凹線が見られる。後期堀之内式と考えられる。377はD-8グリッド出土の口縁部破片である。波頂部を有する。横位のLR縄文を施している。後期加曾利B式である。378は北西トレンチ出土の胴部破片で、沈線文が見られる。

E-7グリッド出土土器(379)

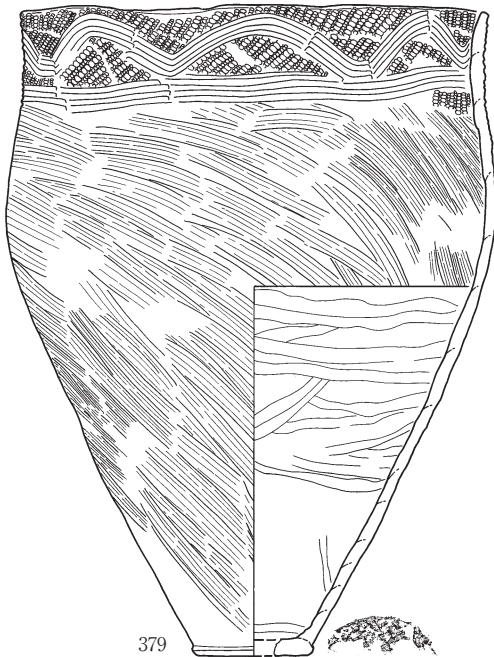


土器取り上げ後



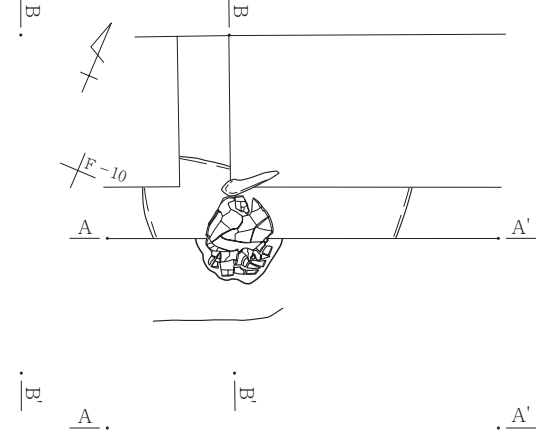
E-7グリッド出土土器土層注記

- 1 暗褐色土 粘性・しまり共にやや弱い。直径2cm以下の礫を含む。
- 2 褐色土 地山。直径0.5～8cmの礫をやや多く含む。

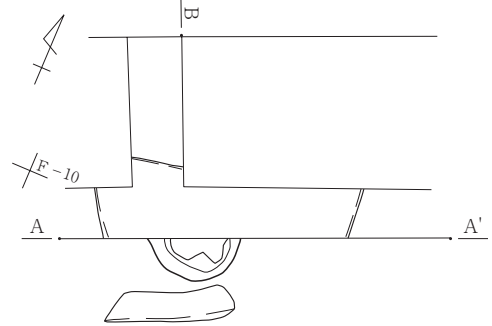


379

E-9グリッド土器(380)

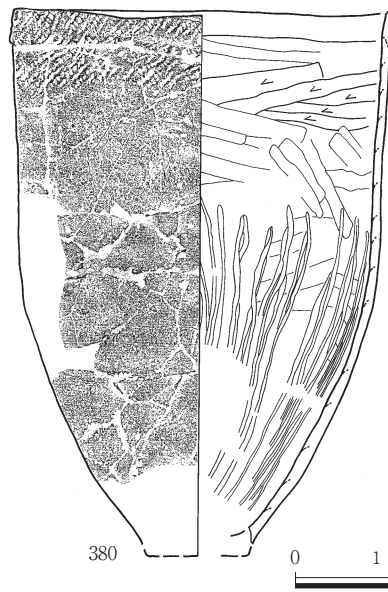


土器取り上げ後



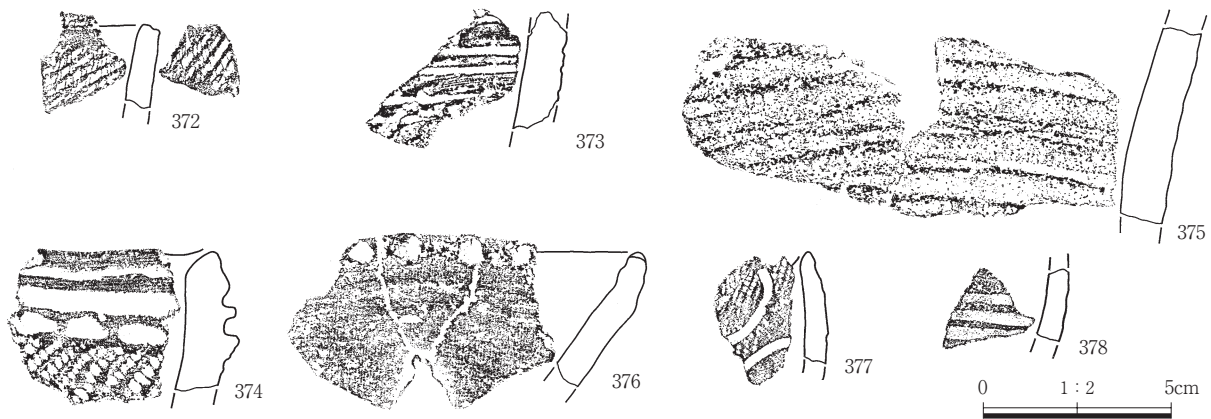
E-9グリッド出土土器土層注記

- 1 暗褐色土 粘性・しまり共にやや弱い。
- 2 褐色土 地山。



380

第51図 E-7グリッド・E-9グリッド出土土器とその出土状況



第52図 遺構外出土の縄文土器

## (2) 弥生時代の遺物

## 弥生土器

弥生土器は、壺・甕・鉢の各器種の出土を見た。資料化したものは壺48点、甕15点、鉢3点の合計66点である。出土位置、文様の特徴については遺物観察表を参照願いたい。この他に資料化たり得なかった破片は1483点である。

379の甕の顕著な特徴は、口縁部に幅広い文様帯をもつこと。この文様帯が縄文の地文に条痕系櫛描文で構成されること。晩期縄文土器から岩櫃山式へと継承される有文甕は、口縁端部と肩部に文様帯をもち、頸部を無文とするのが定型である。本例はこの系統では理解できない。波状文と横線文を組み合わせた櫛描文構成は、安中市注連引原Ⅱ遺跡土坑2出土の壺が早い例として知られる。甕では吉井町神保富士塚遺跡170号土坑に類例がある。口縁全体に縄文と櫛描文の組合せをもつ例は、石川日出志氏が神保富士塚式の甕3類Aとしたなかに見られる。

<sup>(1)</sup> 石川氏はこの甕3類の成立を、神保富士塚式の段階で、甕2類Aの櫛描文に縄文施文が合体した結果と理解する。ただし、本遺跡例のように幅広い口縁部文様帯のみの構成は、無文条痕甕をベースに縄文と櫛描文の折衷文様を採用したとの理解も可能だが、その場合に口縁部文様帯を重点的に装飾することの必然性について検討する必要がある。編年的位置づけは、類似した文様構成を持つ吉井町長根安坪遺跡140号土坑例<sup>(2)</sup>が胴部最大幅が下がった器形で、

文様帯が胴上位まで幅広いこと、条痕が省略気味であることから、これより古く中期初頭～神保富士塚式の範疇で捉えておきたい。なお、遺構外出土土器(第53・54図)でも、在地系条痕文壺(381・388)、神保富士塚式の筒形土器(398など)や浅鉢(433・435)の存在から、中期初頭から中期中葉の範囲中に概ねまとまるようだ。429の細かく整った羽状条痕や地文縄文に細沈線文様の組合せ(430・432)などは、時期的に下る要素とも考えられるが、細片のため明言は避けたい。

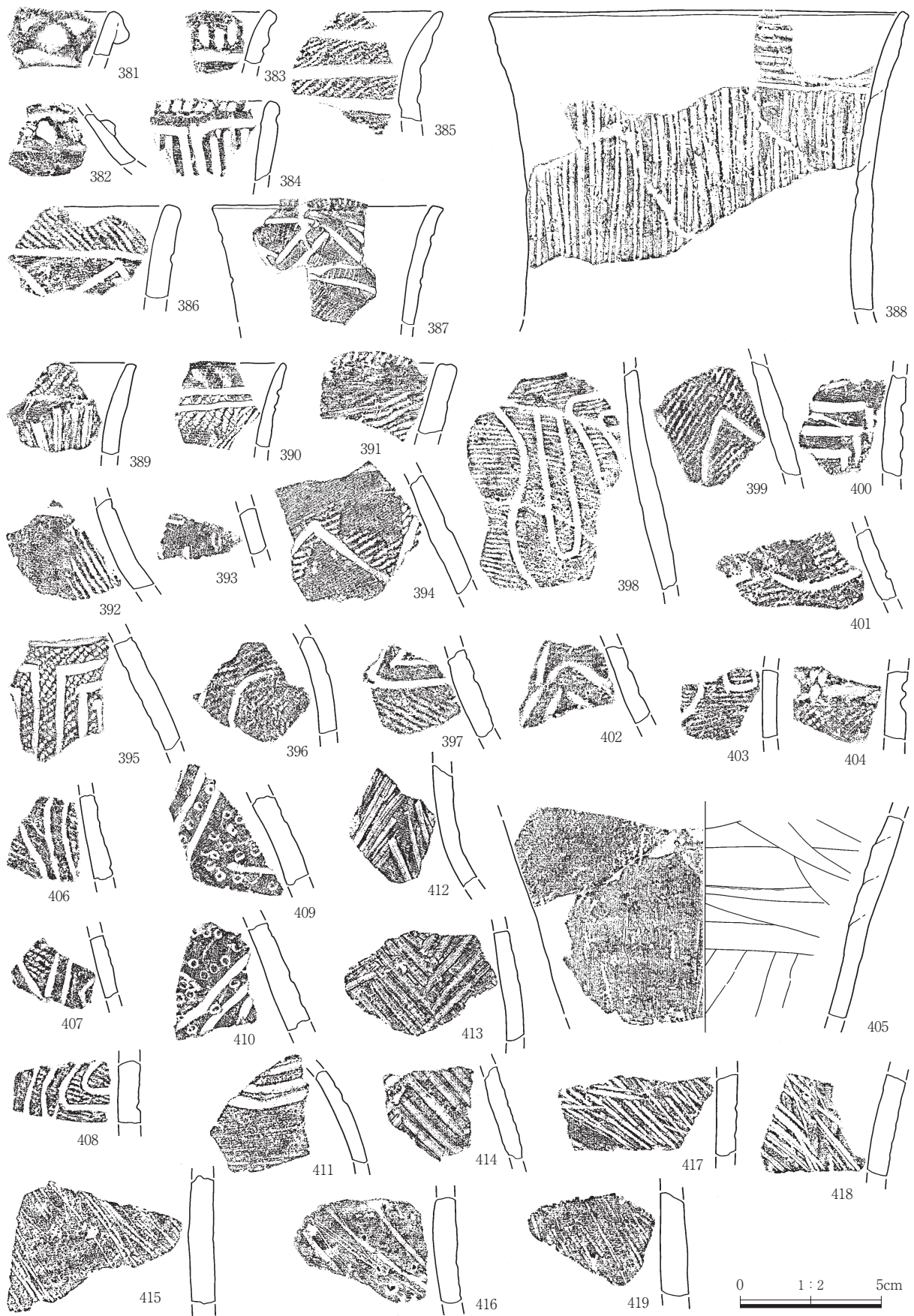
註

- 1 石川日出志2003「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』27
- 2 群馬県埋蔵文化財調査事業団『長根安坪遺跡』1997

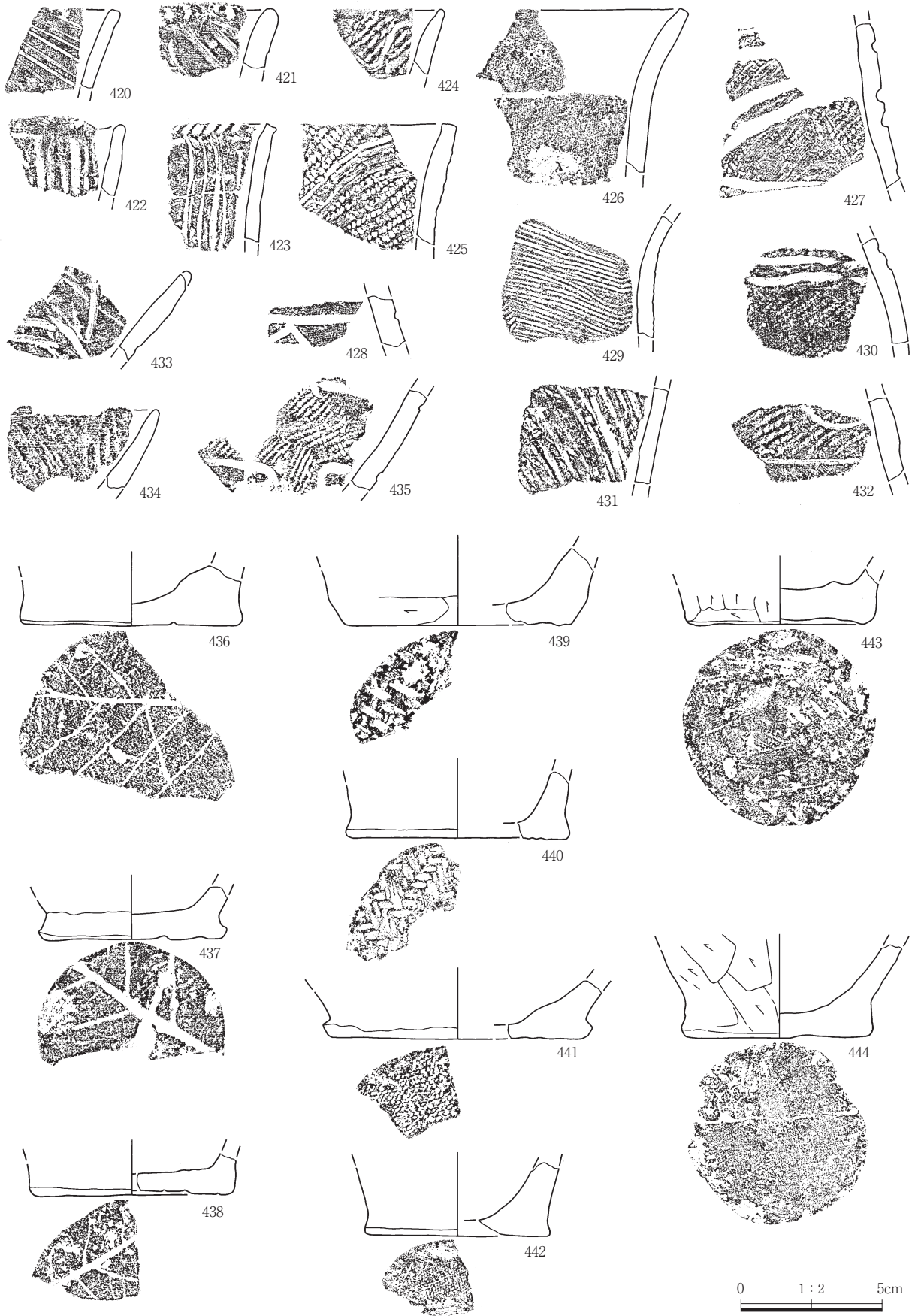
## 弥生時代の石器

原古墳の発掘区からは、墳丘下部の約7m四方の範囲を中心として、加工の痕跡があるものの器種の不明な資料の数点を除き、石鋤等の石器が23点出土している(第56・57図、遺物観察表P124・125)。445から453・455から458・460・464から467は原古墳墳丘下包含層からの出土である。この他の5点は古墳調査の過程での出土や表面採集によるものである。

その内訳は、石鋤12点、石鋤の可能性のあるもの1点、打製石斧2点、打製石斧の可能性のあるもの3点、石匙の可能性のあるもの1点、削器の可能性のあるもの1点、石核1点、二次加工のある剥片2



第53図 遺構外出土の弥生土器（1）



第54図 遺構外出土の弥生土器(2)

点である。

使用されている石材は、全点の65パーセントの15点が片岩系であり、遺跡の立地環境に強く規定されているものと考えられる。

風化の進んでいる例も有り、素材が片岩系の例の中に剥離面の認識が困難なものが含まれる。

石鍬(445～457)としたものは、長さが17～20cm、厚さが2～4cmと長くて厚く、長軸の端部に刃部を有する打製による両面加工の石器であり、基部から刃部にかけてわずかに開くバチ形(第55図A)と、基部から刃部にかけて幅にそれほど違いのない短冊形(第55図B)に分かれる。

石鍬では、自然面の残る剥片を素材とする例が多く、平面形が楕円状ないし長方形で角の取れた円礫から剥離した剥片を素材にして、基本的に長軸の端部を刃部と基部にしている。そのため、剥離面由来の面は比較的平坦で、自然面由来の面は短軸断面がカマボコ状で、長軸断面が凸レンズ状となる。刃部は両面調整が多いが、片面調整の例もある。また、使用痕である刃部のつぶれ、摩耗が全般的に著しい。そのつぶれ、摩耗の表裏における偏りがあるように見受けられる例もあるが、全体的にはその差異は顕著とは言えない。側縁部に着柄の際の痕跡と思われる例もあるが、その具体的様相を導き出すまでの資

料は得られなかった。また、刃部の再作出と考えられる例も多い。そのため、刃部の平面形が非対象の例があるが、製作当初からのものか、使用の結果によるものなのか、限定できなかった。石材は片岩系が13点中の11点で、85%近くを占める。

打製石斧(458・459、461～463)としたものは、石鍬より一回り小さい小型の両面加工の打製の石器であり、その中に分銅型が1点存在している。

また、安定した形ではないが、大型で基部をつまみ状に作出している粗製の石匙の可能性のある例(460)が1点認められる。

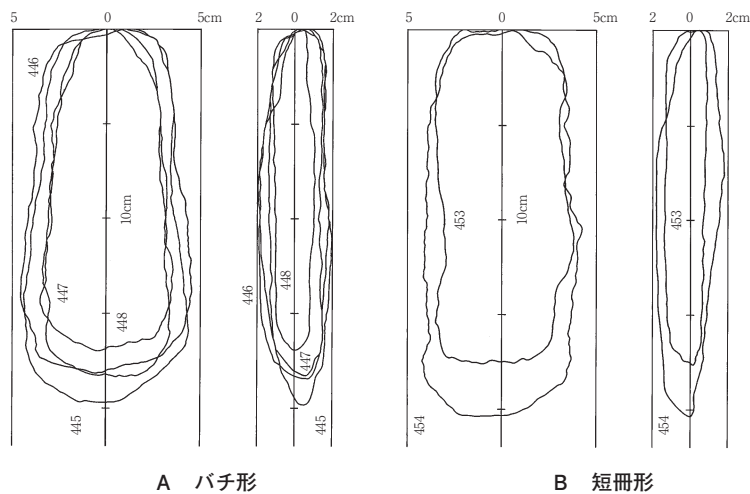
削器(465)としたものは打製石斧の刃部の欠損後に二次加工が加えられているように見え、他に石核(464)と二次加工のある剥片(466・467)がある。

これらの石器については、一部原古墳の墳丘から出土したものもあるが、主体は弥生時代中期の土器とともに古墳墳丘下から出土しており、一括性の強い石器群として把握される。

#### 古墳墳丘下出土の石器について

原古墳の墳丘下からは、前述のように23点の石鍬を中心とした石器が出土している。

この中で、石鍬及び石鍬の可能性のある合計13点の内、8点が完形もしくはほぼ完形である。しかし、全体的に刃部のつぶれや摩耗が著しい。さらに石鍬

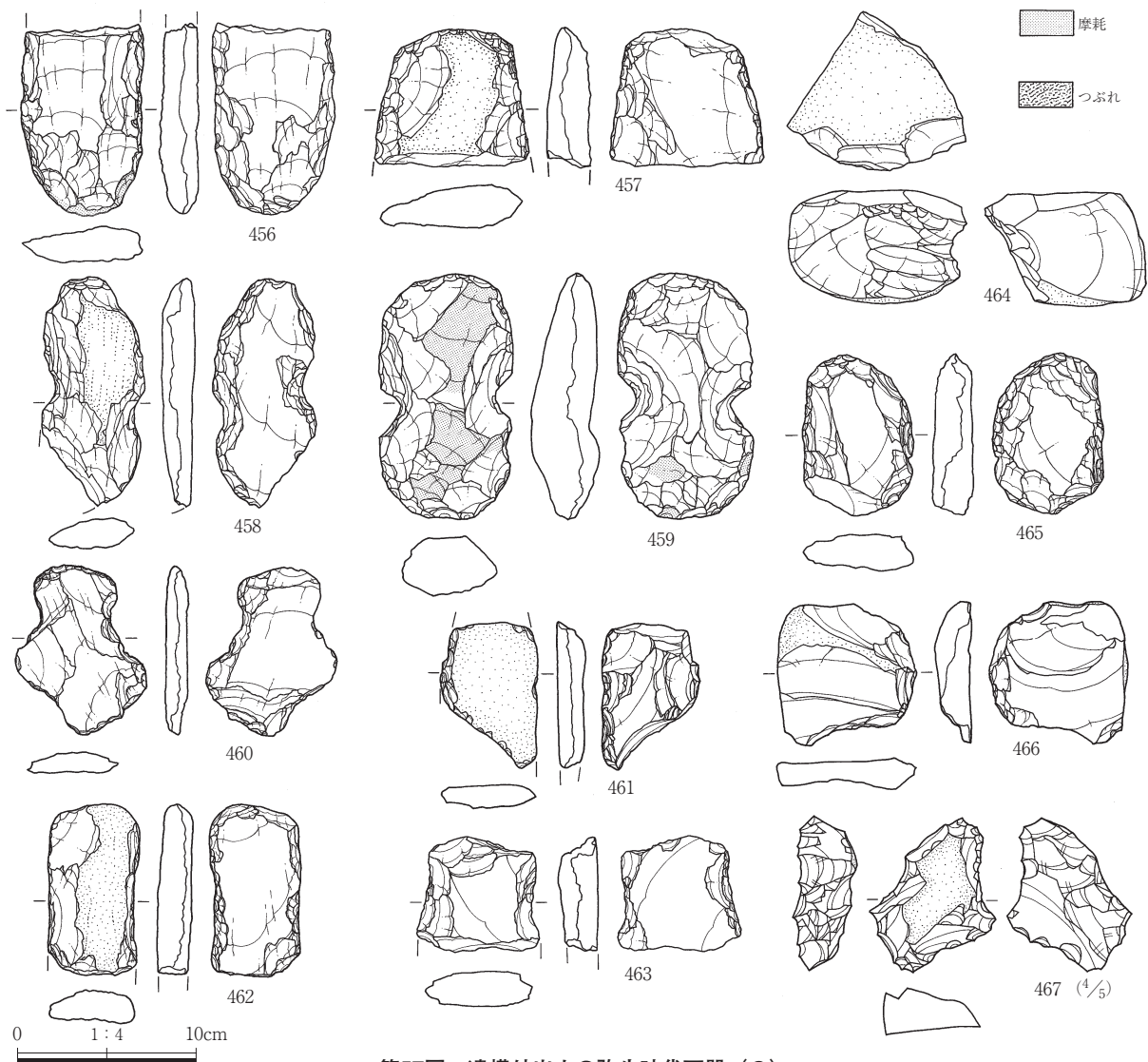


第55図 石鍬の外形比較



第56図 遺構外出土の弥生時代石器 (1)





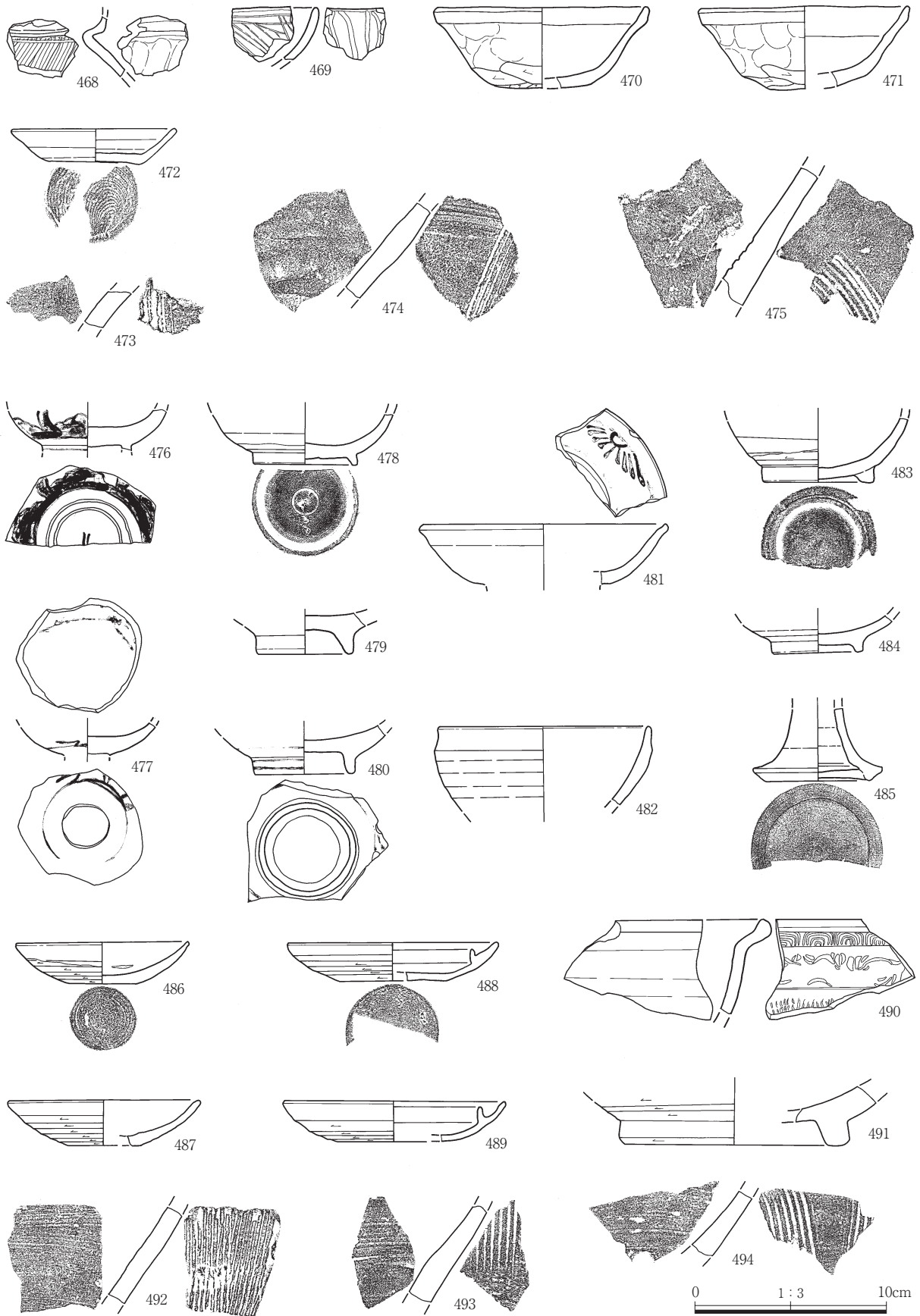
第57図 遺構外出土の弥生時代石器（2）

とした中には、刃部を再作出した例や刃部もしくは基部を欠損した例がある。つまり、刃部や基部を欠損した例はもとより、完形もしくはほぼ完形とした石鋏も、石鋏としての機能が果たせなくなったか、もしくは石鋏としての機能を停止させられたものとも言えよう。このように、一見完形品と見えても、石鋏としての機能は失われているのである。そうした観点で、他の出土石器を見ると、分銅形の打製石斧を含め、全体的にはそれぞれの機能が果たせなくなったか、機能を停止させられたものと考えても無理がないように思われる。

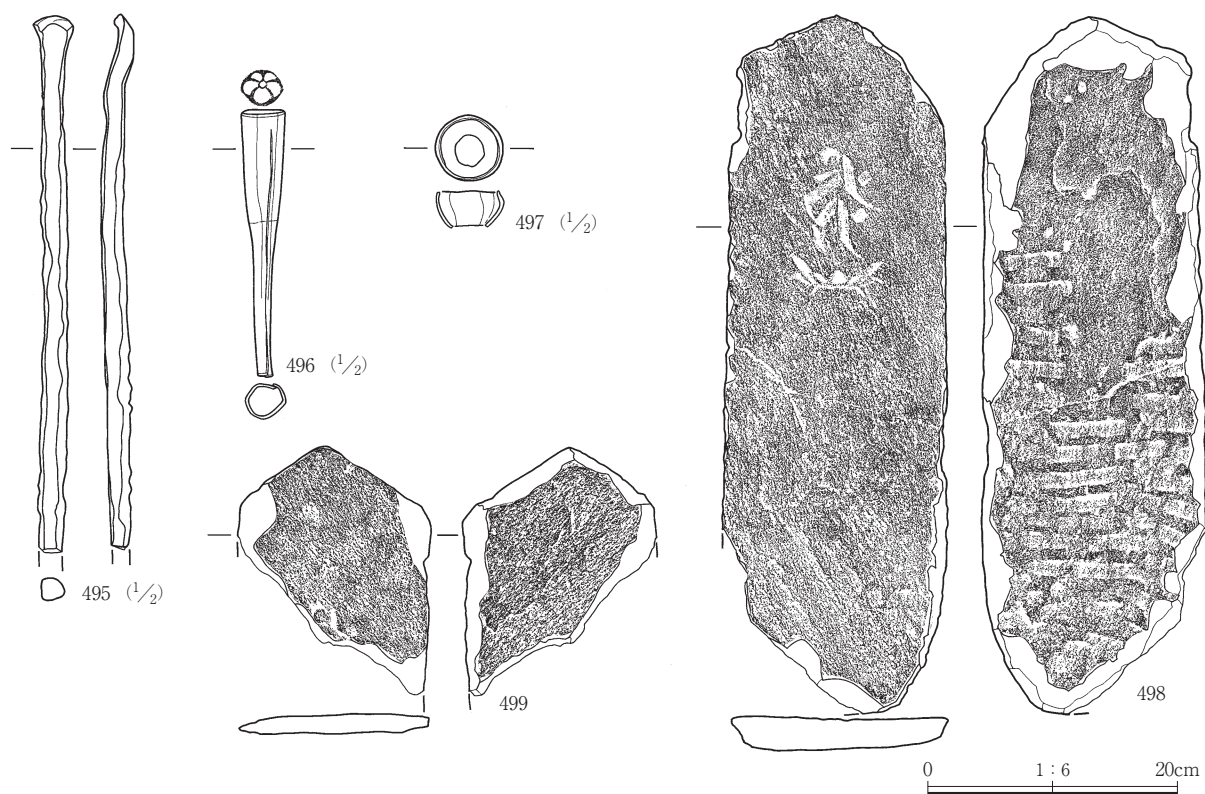
石材の中心が片岩系ということもあり、発掘区からは片岩系の石の破片は大量に出土した。それらが

人工的に剥離された結果であるか、自然の営力によるのかの判別は困難であるため、石器として抽出したものが、本来の石器群総体の如何なる部分であるかは確定できない。そのため、抽出した石器を基にして、これらの石器の出土した場の意味を積極的に考えて良いか問題はあると思われる。しかし、抽出した石器群は本来的に置かれた場所が後代に墳丘下となり、その後今日まで大きな攪乱を受けることなく遺存されてきたとも想定される。

そのため、今後他の遺跡での検証を待たなければならないが、本古墳の墳丘下を中心として出土した石器群は、弥生時代中期において石鋏等の本来の機能が果たされなくなったか、本来の機能が停止させ



第58図 遺構外出土の古墳・平安時代、中・近世の土器



第59図 遺構外出土の中・近世の石製品・金属製品

られたものである可能性があると、敢えて指摘しておきたい。そして、この想定が正しいとすれば、石器群の出土した場所は、弥生時代中期の人たちにとって、石器の廃棄の場であった、と言えよう。

(3) 古墳時代から平安時代の遺物

468はS字状口縁台付甕の口縁部の破片である。石室背面の礫中からの出土である。469は石室羨道部から出土した土師器杯の口縁部破片である。470・471は土師器杯である。470は墳丘東側斜面から、471は墳丘北東斜面から裾部にかけての出土である。10世紀代の所産と考えられる。

(4) 中・近世の遺物

今回の報告では陶磁器・軟質陶器27点、金属製品3点、板碑2点、古銭43点を資料化した。

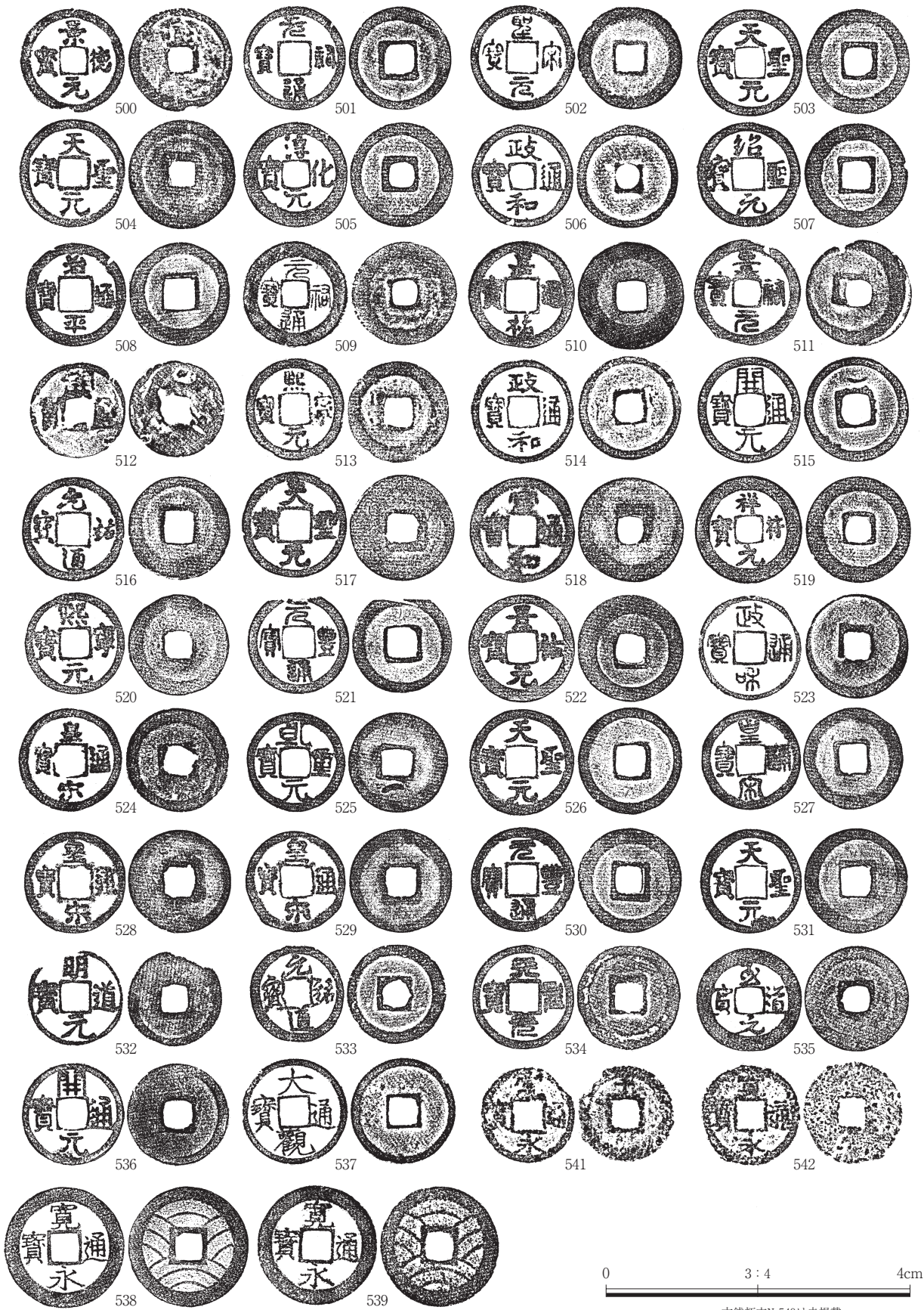
472は、墳丘斜面東側から出土した土師質土器の皿である。器面に炭素の吸着が見られ灯明皿として使用された可能性が高い。製作年代は不明である。473から475は軟質陶器の片口・播り鉢である。いずれも小破片である。在地産で中世の所産と考えられ

る。

476から494は墳丘及びその周辺各所から出土した陶磁器で、23点を掲載した。いずれも江戸時代の所産である。476は磁器碗である。この他は陶器である。477は仏飯器である。478から480と482から484は碗である。480は陶胎染め付けである。481は皿、485は灯明皿受台、490は皿または鉢である。486・487は灯明皿である。488と489は灯明皿の受皿で、石室内の崩落土中から出土した(488は墳丘東側斜面出土の破片と接合)ものである。19世紀瀬戸・美濃産である。492から494は播り鉢である。

495から497は正確には製作年代を特定することのできない金属製品である。497は墳丘北側斜面出土の煙管の雁首火皿部分である。496は墳丘東側出土の非鉄製の金具である。495は石室羨道部上層から出土した棒状鉄である。

498の板碑は墳丘北東部分からの出土である。原古墳の周囲に石垣が積まれた際にその用材の一つとして積み上げられたものと考えられる。裏面を外方



第60図 遺構外出土の中・近世の古銭

## 第2章 発掘調査の記録

に向けて出土していることから石垣の用材として墳丘から崩落した礫石とともに再利用されたものと考えられる。その場合、古墳に近接して板碑が立てられていた可能性も考えられるが、調査区内にはこれに係わるような遺構・遺物は発見されていない。499も墳丘北東部分から出土した板碑の破片である。

古銭は43点が出土している。その中で500から535の37枚は、墳丘南西部分C-9グリッド南西部分から出土した。いずれも中国渡来銭で、寛永通寶は含まれていない。古墳の墳丘状況を確認するため、攪乱を受け、上層に堆積した土砂と混在していた礫石を除去していた際の発見である。最初に確認された

のは墳丘残存面から0.5m程下位、標高151.8m前後の礫石中である。墳丘基底面との高さの差は1.1mであった。出土地点では、墳丘中の礫と比較して小さな円礫の集まる状況が見受けられたことから、周辺の精査をしたが埋納行為を示すような遺構の存在を確認することはできなかった。墳丘断ち割り作業中の礫内からも出土が見られた。

537の大観通寶は墳丘東側斜面からの出土である。

538から542は寛永通寶である。墳丘の調査中に各所から発見された。538と539は4文銭である。540から542の3枚は鉄銭である（540は脆弱であったため拓本は未掲載である）。

## 第3章 分析

### 第1節 原古墳出土埴輪の胎土材料

本遺跡出土の埴輪について、胎土素材となる粘土の産地を推定するために、株式会社パレオ・ラボに分析を委託したので、その報告を以下に掲げる。

#### 1 はじめに

土器や埴輪の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われることが多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器や埴輪胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1996；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層や周辺に分布するテフラ層と考えられる。胎土中の混和材は、砂層の特徴である可

株式会社パレオ・ラボ

能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

原古墳は、藤岡市鬼石に所在する6世紀中頃前後の築造と考えられている円墳である。調査では、埋葬主体部に横穴式石室を有し、円筒埴輪に加えて、家、大刀、盾、人物、馬等の形象埴輪の破片が出土している。ここでは、原古墳から出土した埴輪について、埴輪薄片の偏光顕微鏡観察による粘土および砂粒組成と特徴と蛍光X線分析による化学組成について調べた。

#### 2 試料と方法

試料は、原古墳から出土した円筒埴輪および形象埴輪の10試料である（第3表）。各埴輪は、埴輪薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。なお、埴輪薄片の偏光顕微鏡観察は藤根久と米田恭子が担当し、蛍光X線分析は竹原弘展が担当した。

[胎土薄片の顕微鏡観察]

埴輪は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作製した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂

第3表 材料を検討した埴輪とその詳細

試料No	種類	器種	部位	出土位置	法量 (残高、単位cm)	備考
1	円筒埴輪		基底部	墳丘斜面北部	9.5	表面還元気味
2	形象埴輪	不明	不明	墳頂部東側	7.1	天地不明、細かいハケメ
3	円筒埴輪		口縁部	墳丘南側	10.5	粗いハケメ
4	形象埴輪	家	基部?	墳丘斜面南部	8.3	断面三角形の突帯
5	形象埴輪	大刀	勾金	墳丘斜面南部	幅6.3	表面に勾玉
6	円筒埴輪		口縁部	墳丘斜面北東部	7.1	還元気味
7	円筒埴輪	不明	口縁部?	墳丘斜面北東部	8.6	細かいハケメ、形象の可能性も有り
8	円筒埴輪	朝顔形?	口縁部?	墳丘斜面北東部	7.2	還元気味、粗いハケメ
9	円筒埴輪		胴部	南東攪乱部分	6.5	粗いハケメ
10	円筒埴輪		基底部	墳丘北側トレンチ	5.3	

### 第3章 分 析

を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後スライドグラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片（プレパラート）は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面について微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

#### [放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

#### [珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 $\mu\text{m}$ 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻から環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種、淡水種）と分類した。

#### [骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。このことから、骨針化石は水成環境を指標する。

#### [植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 $\mu\text{m}$ 前後である。一

般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

#### [胞子化石]

胞子粒子は、直径約10～30 $\mu\text{m}$ 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積中で多く見られるが土壌中にも含まれる。

#### [石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。

#### [長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などのケイ酸分の多い深成岩などに産出する。ミルメカイトあるいは文象岩は花崗岩などに産出する。

#### [雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見えることが多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

#### [輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産

する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

#### [角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

#### [ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

#### [複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。

#### [片理複合石英類]

複合石英類は石英の片状に集合する粒子群である。主に結晶片岩などの変成岩類に見られる。

#### [砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

#### [不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

#### [蛍光X線分析による化学組成]

蛍光X線分析は、ガラスビードを作製して測定した（ガラスビード法）。

試料は、岩石カッターを用いて適量を切り取り、自然釉を排除した後、精製水にて超音波洗浄を行った。試料はセラミック乳鉢で粉末にした後、るつぼに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した。粉末試料1.8000g秤量し、無水四ホウ酸リチウム $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ とリチウムメタボレイド $\text{LiBO}_2$ を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合した。さらに、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーを用いて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

測定は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型）を用いた。なお、定量分析は、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計14種類を用いた検量線法で行った。

定量元素は、酸化ナトリウム（ $\text{Na}_2\text{O}$ ）、酸化マグネシウム（ $\text{MgO}$ ）、酸化アルミニウム（ $\text{Al}_2\text{O}_3$ ）、酸化ケイ素（ $\text{SiO}_2$ ）、酸化リン（ $\text{P}_2\text{O}_5$ ）、酸化カリウム（ $\text{K}_2\text{O}$ ）、酸化カルシウム（ $\text{CaO}$ ）、酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）、酸化マンガン（ $\text{MnO}$ ）、酸化鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）の主成分10元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の微量成分4元素の計14元素である。

### 3 結果

以下に、埴輪薄片の顕微鏡観察結果と蛍光X線分析による化学組成について述べる。

#### [埴輪胎土薄片の偏光顕微鏡観察]

胎土中の粒子組成は、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、第5表中において、◎が非常に多い、○が多い、△が検出、空欄が未検出である。

No.1:300 $\mu\text{m}$ ～1.5mmが多い（最大粒径2.36mm）。片理複合石英類）石英・長石類）雲母類）複合石英類、



第3章 分 析

複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、斜方輝石、単斜輝石、ザクロ石、ガラス質、放散虫化石、珪藻化石（海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石。

No.2:100 ~ 900 μmが多い（最大粒径2.16mm）。石英・長石類》片理複合石英類》雲母類》斜方輝石、複合石英類、複合石英類（微細）、角閃石類、単斜輝石、ガラス質、放散虫化石、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い。

No.3:150 ~ 700 μmが多い（最大粒径8.0mm）。石英・長石類》雲母類》片理複合石英類》角閃石類、複合石英類（微細）、複合石英類、斜方輝石、単斜輝石、放散虫化石多産、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石。

No.4:150 μm ~ 1.4mmが多い（最大粒径2.63mm）。石英・長石類》片理複合石英類》斜長石（双晶）、複合石英類、雲母類、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、ザクロ石、ガラス質、骨針化石、珪藻化石（海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属）、植物珪酸体化石多産。

No.5:100 ~ 250 μmが多い（最大粒径1.8mm）。石英・長石類》片理複合石英類》雲母類》複合石英類（微細）、複合石英類、単斜輝石、ザクロ石、角閃石類、ガラス質、骨針化石、植物珪酸体化石多産。

No.6:150 μm ~ 1.4mmが多い（最大粒径1.85mm）。石英・長石類》砂岩類》斜長石（双晶）、複合石英類、

片理複合石英類、雲母類、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、ザクロ石、ガラス質、放散虫化石、骨針化石、植物珪酸体化石。

No.7:90 ~ 900 μmが多い（最大粒径2.55mm）。雲母類》石英・長石類》複合石英類》単斜輝石》片理複合石英類、砂岩類、斜方輝石、複合石英類（微細）、ザクロ石、ガラス質、放散虫化石多産、骨針化石多産、植物珪酸体化石。

No.8:80 ~ 600 μmが多い（最大粒径2.7mm）。石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類、砂岩類、片理複合石英類、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、放散虫化石、骨針化石、植物珪酸体化石。

No.9:150 μm ~ 1.1mmが多い（最大粒径2.2mm）。雲母類》石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類、砂岩類、片理複合石英類、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ザクロ石、ガラス質、放散虫化石、珪藻化石（海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石。

No.10:100 ~ 750 μmが多い（最大粒径2.3mm）。石英・長石類》雲母類》複合石英類、片理複合石英類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、単斜輝石、ガラス質、角閃石類、ザクロ石、骨針化石、植物珪酸体化石多産。

[蛍光X線分析による化学組成]

主な元素では、酸化ケイ素（SiO<sub>2</sub>）が57.73 ~ 67.50 %、酸化アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）が18.00 ~

第4表 埴輪の蛍光X線分析による化学組成

No	Na <sub>2</sub> O (%)	MgO (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	SiO <sub>2</sub> (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	K <sub>2</sub> O (%)	CaO (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	MnO (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	1.57	3.57	19.06	61.52	0.148	2.33	1.30	1.21	0.151	9.23	100.1	100.7	88.6	31.3	148.2
2	1.52	0.47	18.00	67.50	0.058	0.84	0.55	0.94	0.087	8.89	98.9	46.8	63.5	16.6	125.8
3	1.50	3.38	20.20	58.39	0.175	2.08	1.78	1.32	0.123	10.19	99.1	85.1	130.3	30.7	159.8
4	1.42	0.86	18.91	67.32	0.041	0.99	0.39	0.98	0.096	9.52	100.5	58.1	48.1	19.4	124.7
5	1.51	0.67	18.69	67.14	0.065	0.87	0.49	0.99	0.106	9.39	99.9	47.6	55.8	16.9	128.6
6	1.29	3.49	19.73	60.86	0.127	2.14	1.18	1.26	0.111	9.88	100.0	96.2	96.0	32.3	154.6
7	1.39	3.62	19.07	60.48	0.192	2.30	1.54	1.30	0.175	9.64	99.7	99.9	101.5	30.1	156.6
8	1.30	3.73	19.73	60.49	0.145	2.24	1.30	1.27	0.123	9.98	100.3	100.4	97.8	31.5	152.5
9	1.33	3.21	20.54	57.73	0.185	2.18	1.69	1.33	0.102	10.49	98.8	91.5	123.9	28.9	161.4
10	1.58	0.76	18.43	66.66	0.033	0.96	0.77	0.96	0.074	9.23	99.5	60.0	68.1	15.6	127.2
最小値	1.29	0.47	18.00	57.73	0.033	0.84	0.39	0.94	0.074	8.89	98.8	46.8	48.1	15.6	124.7
最大値	1.58	3.73	20.54	67.50	0.192	2.33	1.78	1.33	0.175	10.49	100.5	100.7	130.3	32.3	161.4

20.54%、酸化鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が8.89～10.49%、酸化マグネシウム (MgO) が0.47～3.73%、酸化ナトリウム (Na<sub>2</sub>O) が1.29～1.58%、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) が0.84～2.38%であった。

また、微量元素ではルビジウム (Rb) が46.8～100.7ppm、ストロンチウム (Sr) が48.1～130.3ppmであった (第4表)。

#### 4 考察

##### i) 微化石類による材料粘土の分類

埴輪胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm、骨針化石が10～100μm前後である (植物珪酸体化石が10～50μm前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである (地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の粘土材料中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した埴輪胎土は、微化石類により、a) 海成粘土を用いた胎土、b) 水成粘土を用いた胎土に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

##### a) 海成粘土を用いた胎土 (8胎土)

これらの胎土中には、放散虫化石または海水種珪藻化石が含まれていた。また、海綿動物の骨格の一部である骨針の化石が含まれていた。なお、試料No.1、No.3、No.7、No.9では放散虫化石が多く含まれていた。

##### b) 水成粘土を用いた胎土 (2胎土)

これらの胎土中には、骨針化石が含まれていた。

##### ii) 埴輪胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した岩片は、構成する鉱物種や構造的な特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った (第5表)。岩石の推定は、片理複合石英類が片岩類、複合石英類が深成岩類、複合石英類 (微細) や砂岩質が堆積岩類、ガラス質がテフラ (火山噴出物) である。さらに、推定した起源岩石は、第6表の組み合わせに従って分類した。

分類した結果、片岩類を主体として堆積岩類などを伴うAc群 (5胎土)、堆積岩類を主体としたC群 (3胎土)、片岩類を主体としたA群 (1胎土)、堆積岩類を主体として片岩類を伴うCa群 (1胎土) であった。なお、いずれも堆積岩類や片岩類あるいは深成岩類から構成されている点では共通している。

##### iii) 化学組成による分類

第62図に各元素の分布図を示す。第62図では、大きく2群に分類され、試料No.10を除く円筒埴輪6試料

第5表 粘土および砂粒組成の特徴

試料No.	埴輪の種類	粘土の特徴							砂粒の特徴								鉱物の特徴				植物珪酸体化石	蛍光X線分析結果による分類	
		種類	放散虫化石	珪藻化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類			雲母類
1	円筒埴輪	海成	○	△				◎	△	Ac	◎	△	○				△			△	◎	△	I
2	形象埴輪	海成	△					△	△	Ac	◎	△	○				△	△	△	◎	◎	△	II
3	円筒埴輪	海成	○					○	△	Ac	◎	△	○				△		△	◎	◎	△	I
4	形象埴輪	海成		△				△		Ac	○	△	○				△	△	△	△	◎	△	II
5	形象埴輪	水成						△		Ac	○	△	○				△	△	△	○	◎	△	II
6	円筒埴輪	海成	△					△		Ca	○	△	◎				△	△	△	△	△	△	I
7	円筒埴輪	海成	○					◎		A	○	△	△				△	△	△	◎	△	△	I
8	円筒埴輪	海成	△					△		C	△	△	○					△	△	△	△	△	I
9	円筒埴輪	海成	○	△				△	△	C	△	△	○				△		○	◎	△	△	I
10	円筒埴輪	水成						△		C	△	△	○				△	△	○	○	◎	△	II

(試料No1、No3、No6～9)、円筒埴輪(試料No10)および形象埴輪(試料No2、No4、No5)であり、大半の元素において顕著な差異が見られた。

第61図にアルミニウム( $Al_2O_3$ )-ケイ素( $SiO_2$ )分布図を示す。小村・藤根(2001)は、東海地方の山茶

碗の材料的な検討において、粘土はアルミニウム( $Al_2O_3$ )が比較的多く、砂粒はケイ素( $SiO_2$ )が多いため、アルミニウム( $Al_2O_3$ )-ケイ素( $SiO_2$ )分布図における直線の変化は、粘土と砂粒の混合割合を表すとしている。第61図では、I群は酸化アルミニウムが多く、II群は酸化ケイ素( $SiO_2$ )が多く、従ってI群は粘土が多く、II群は砂粒が多いことを示す。

分析試料数が少ないが、円筒埴輪と形象埴輪では材料の粘土と砂粒の混合割合が異なることを示している。なお、試料No10は基底部試料であるが、形象埴輪の基底部である可能性を示している。

iv) 埴輪胎土材料の特徴

薄片の顕微鏡観察では、粘土は、放散虫化石などを特徴的に含む海成粘土を用いた胎土(8胎土)と水成粘土を用いた胎土(2胎土)であった。また、砂粒組成は、いずれも堆積岩類や片岩類あるいは深成岩類から構成され、片岩類を主体として堆積岩類などを伴うA c群(5胎土)、堆積岩類を主体としたC群(3胎土)、片岩類を主体としたA群(1胎土)、堆積岩類を主体として片岩類を伴うC a群(1胎土)であった。

一方、化学組成による分類では大きく2群に分類され、試料No10を除く円筒埴輪6試料(試料No1、No3、No6～9)、円筒埴輪(試料No10)および形象埴輪(試料No2、No4、No5)であった。

化学組成において2群に分類され、粘土の種類あるいは砂粒組成では大きな違いはなく、粘土と砂粒の混合割合の違いであることが判明した。

第6表 岩石片の起源と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

以上のことから、同一の粘土および砂粒からなる混和材が用いられ、円筒埴輪では粘土分が多く、形象埴輪では砂粒分が多いものと考えられる。

対象とした埴輪胎土中には、放散虫化石あるいは片岩類を特徴的に含むことから、この地質学的条件を持つ群馬県の西部地域や埼玉県北部地域などが想定される。県内においては、藤岡から富岡地域に前期～中期中新世の海成層の富岡層群が分布し、この富岡層群の南側に隣接して結晶片岩からなる変成岩類が分布する(松丸,1977など)。こうした基盤層が分布することから、この地域の第四紀に形成された段丘堆積物中には、放散虫化石を含む粘土や片岩類からなる砂粒を含んでおり、埴輪材料として利用されたことが推定される。

検討した埴輪は、6世紀中頃の古墳から出土した埴輪であるが、藤岡地域には埴輪窯として猿田埴輪窯と本郷埴輪窯が知られているが(志村ほか,2004)、地質学的条件からこれらの埴輪窯で製作される埴輪胎土の特徴は、原古墳で出土した埴輪胎土の特徴に類似しているものと推定とれる。

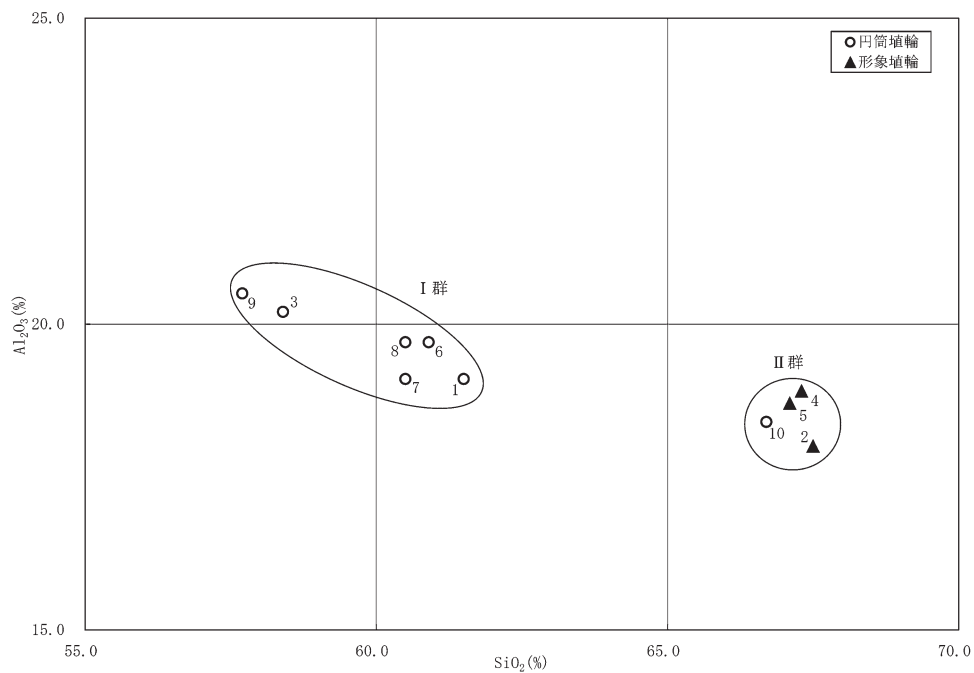
5 おわりに

薄片の偏光顕微鏡観察では、粘土は海成粘土と水成粘土に分類され、砂粒はいずれも堆積岩類や片岩類あるいは深成岩類から構成され4群に分類された。また、化学組成による分類では大きく2群に分類され、粘土と砂粒の混合割合の違いを反映している可能性が示された。なお、化学組成による分類により試料No10は形象埴輪の基底部である可能性が示された。

引用文献

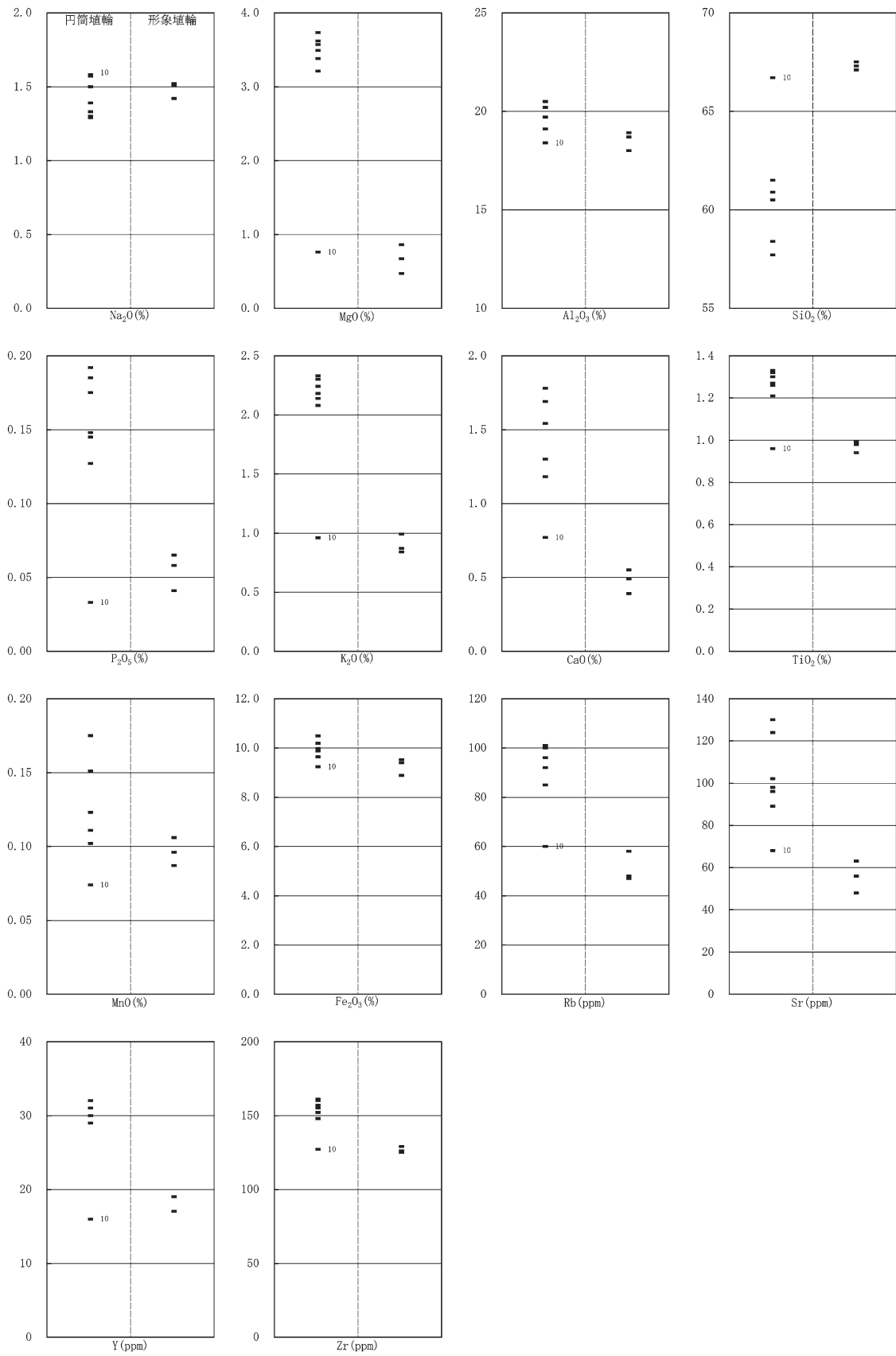
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42,273-88.  
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』, 平凡社, 1612p.  
 藤根 久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料. 第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117.  
 藤根 久・今村美智子（2001）第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴. 「波志江中宿遺跡」、日本道路公団・伊勢崎市・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.262-277.  
 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27,1-20.

車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－. 日本考古学協会第62回大会研究発表要旨、153-156.  
 小村美代子・藤根久（2001）須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価. 日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集,114-115,日本文化財科学会  
 小村美代子・藤根久（2002）山茶碗胎土の化学的評価. 日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集,60-61,日本文化財科学会  
 松丸国照（1977）関東山地北縁～北東縁の新第三系の層序. 地質学雑誌, 83, 213-225.  
 志村 哲（2004）第4節 藤岡産埴輪の供給について. 国立歴史民俗博物館研究報告, 第120集, 468-481.

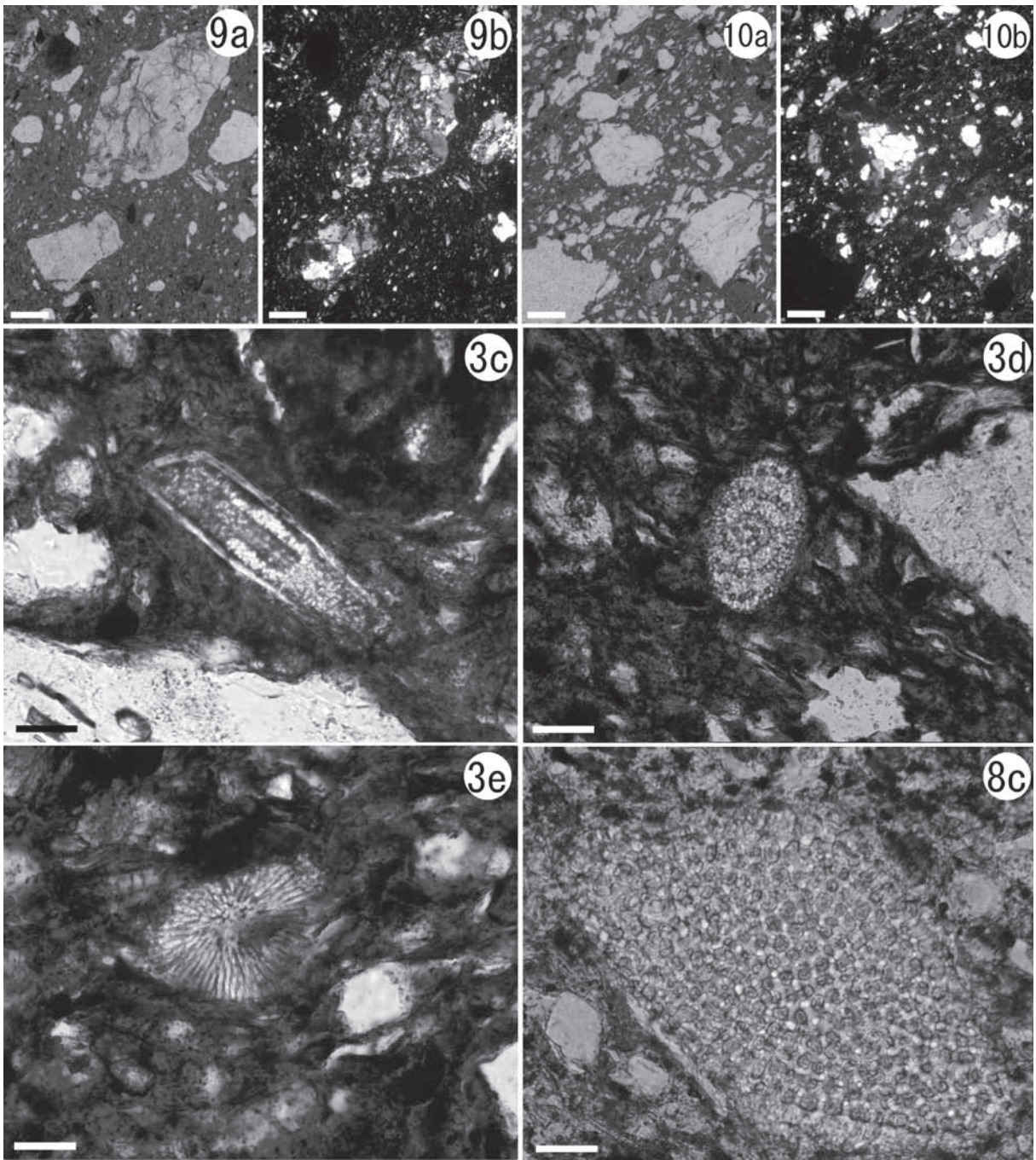


第61図 アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) - ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) 分布図

第3章 分 析

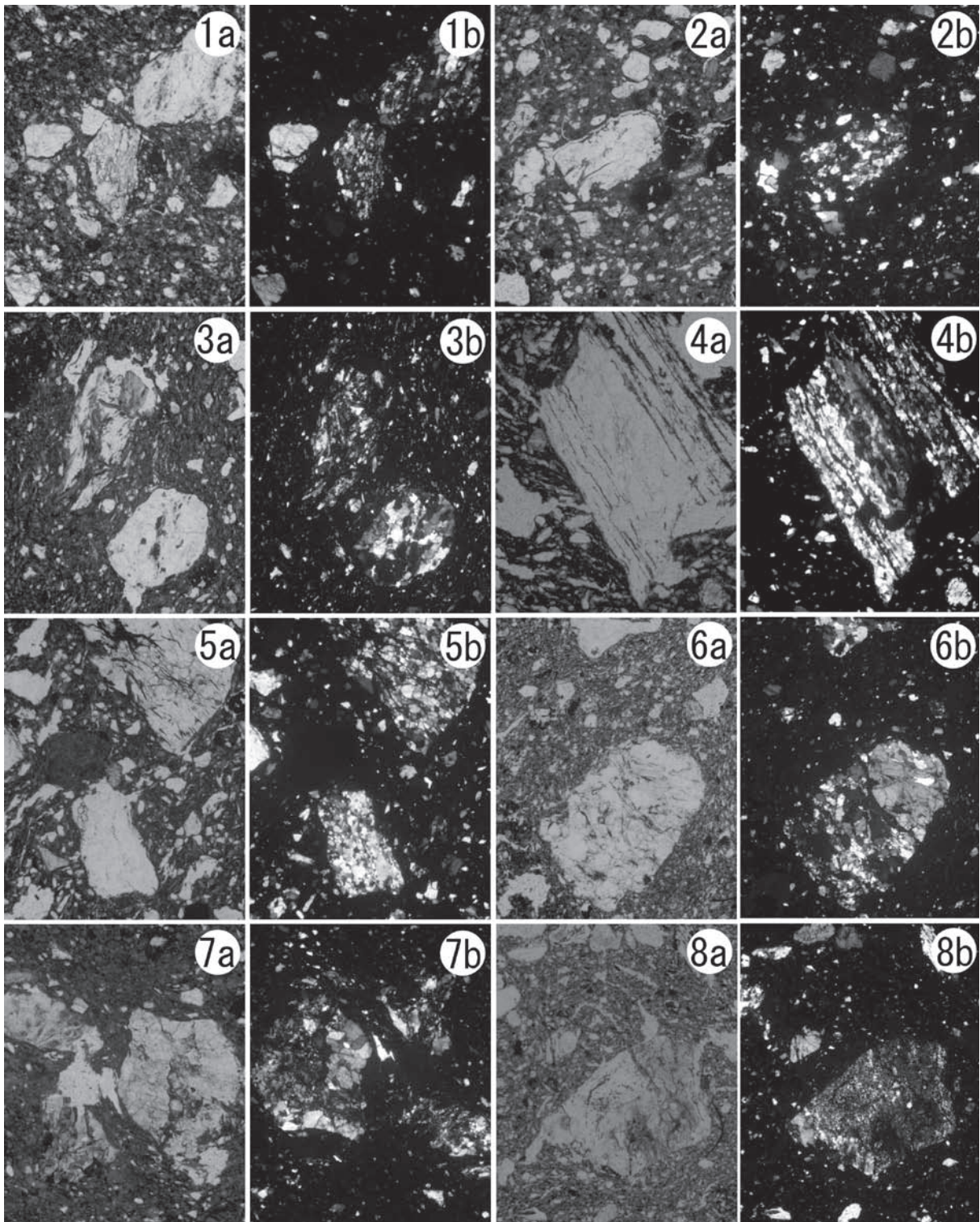


第62図 埴輪胎土中の各元素分布図



9a・9b. 試料No.9 10a・10b. 試料No.10  
3c. 骨針化石 (No.3, bar:50 $\mu$ m) 3d. 放射虫化石 (No.3, bar:50 $\mu$ m)  
3e. 放射虫化石 (No.3, bar:25 $\mu$ m) 8c. 放射虫化石 (No.8, bar:25 $\mu$ m)

写真7 埴輪胎土の顕微鏡写真(1) (スケール:250 $\mu$ m、a:解放ニコル、b:直交ニコル)



1a・1b. 試料No1 2a・2b. 試料No2 3a・3b. 試料No3 4a・4b. 試料No4  
5a・5b. 試料No5 6a・6b. 試料No6 7a・7b. 試料No7 8a・8b. 試料No8

写真8 埴輪胎土の顕微鏡写真(2) (スケール:250 $\mu$ m, a:解放ニコル, b:直交ニコル)

## 第4章 調査成果のまとめと考察

### 第1節 原古墳の編年的位置づけ

#### 1 調査成果のまとめ

第2章で報告したように原古墳は、葦石基底部分の直径が東西方向で9.45mを測る円墳で、墳丘は全て礫石から構成されていた。また、周堀を伴わない可能性が高いものと考えられる。

主体部は、全長6.14mの狭長な袖無型横穴式石室である。奥壁は、墳丘の中心より奥寄りに設置されており、玄室が墳丘の中心に位置していた。石材には古墳から至近の距離にある三波川から運搬されたと考えられる結晶片岩の転石や板状岩塊が使用されていた。

副葬品は既に石室が開口していたため切子玉、管玉、ガラス小玉などの装身具、耳環と考えられる非鉄製の円環、刀子、鉄鏃の破片が出土したにとどまった。他に直刀、短甲（挂甲の誤りか）の出土が伝えられている。

原位置での出土はなかったものの墳丘上には円筒埴輪、形象埴輪の樹立が想定される。円筒埴輪は2条3段構成である。普通円筒埴輪の他に朝顔形埴輪が見られた。形象埴輪の器種は家形埴輪、器財埴輪の盾・鞆・大刀、人物埴輪、馬形埴輪が確認された。この他にも器種不明の形象埴輪の破片が多数出土しているが、蓋形埴輪や軛形埴輪、翳形埴輪などについては現時点では確認することができなかった。

器財埴輪はいずれの器種も複数個体が確認された。これらは、家形埴輪とともに墳頂部に樹立されていたものと考えられる。このように人物・馬形埴輪と翳・軛を除いた盾・鞆・大刀からなる器財埴輪の組み合わせ状況は、右島和夫氏が考察した群馬県内における形象埴輪の組成変化の中の2期<sup>(1)</sup>（6世紀初頭から中葉）に相当するもので、6世紀前半から中葉の特徴を示している。

これらの出土埴輪は胎土の観察・分析から藤岡産

であることが明らかである。

本項では横穴式石室と円筒埴輪の様相から原古墳の築造年代について検討を試みたい。

#### 2 横穴式石室の様相から見た原古墳の位置づけ

群馬県内の横穴式石室の変遷について検討した右島和夫氏の成果によれば、群馬県における横穴式石室の受容は、6世紀初頭から前半にかけて、大型前方後円墳に両袖型横穴式石室が採用されたことを導入の契機とするとされる。県内各地の群集墳において横穴式石室が本格的に採用されるようになるのは6世紀後半になってからであるが、その導入期や定着期においても少数例ではあるが、前方後円墳への採用と併行して、帆立貝式古墳や円墳に袖無型や平面T字形やL字形の横穴式石室が採用される事例が知られている。

右島氏は、群馬県内の初期横穴式石室を横穴式石室の出現期（I-1期）、横穴式石室が広く浸透し始める定着期（I-2期）、石室の巨大化への移行の萌芽が見られる展開期（II期）に区分した<sup>(2)</sup>。原古墳も初期横穴式石室の一例となる可能性が考えられる。

群馬県内における袖無型横穴式石室の場合は陶器古窯址群の須恵器編年のMT15型式段階から、高崎市少林山台遺跡12号墳や御部入18号墳の石室のように、奥壁の幅と羨道部前部の幅に差があり、平面形が、奥壁から開口部に向かって徐々にその幅を狭める長台形のものが見られる。TK10型式段階では長台形、狭小な長方形の二者がある。前者の事例としては、高崎市山名土合II号墳、大道南13号墳、渋川市有瀬1号墳・2号墳、東吾妻町四戸I号墳などがある。後者の事例は渋川市伊能古墳やみなかみ町三峰神社裏M-1号墳、伊勢崎市漏峯岸山7号墳に代表される。長台形の石室の変遷は、TK43型式段階



にいたると奥壁幅の拡大化、側壁の胴張り化などの特徴が指摘されている。

この他に、右島氏はⅠ期からⅡ期への変化について、Ⅰ期では袖無型の場合、羨道部と玄室部の区分は梱石の設置のみでなされ、石室自体は平面的にも立面的にも明確な区分が認められなかったものが、Ⅱ期になると梱石を境にして羨道部から玄室部にかけて空間を大きく拡大させ、明確な区分が存在するようになるとしている。使用石材も奥壁の大型化などの他に壁面構成に縦・横に目地を通す通目積の傾向が認められるようになるという。

同じく群馬県西部における導入期の横穴式石室について検討を加えた田口一郎氏は、導入期から展開期にいたる石室の様相の変化について、使用石材の大型化、石室幅の拡幅化、玄室部の拡大による梱石の開口部方向への位置の移動、玄室部と羨道部の区別を石積の変化により区別することなどを指摘している<sup>(3)</sup>。

原古墳の石室は墳丘構造が類似する神保下條遺跡1号古墳の平面形状と基本的には類似するものの、神保下條遺跡1号古墳のほうが奥壁の幅が若干広くなると共に羨道部が短くなったことから狭長という印象は薄いである。原古墳がこれに先行するものと考えられる。神保下條遺跡1号古墳はTK43型式段階の築造と考えられている。

一方、神流川の右岸、埼玉県内の児玉・大里地域には、埼玉県における導入期の横穴式石室が多数分布することが知られている。埼玉県内における横穴式石室の受容と展開については増田逸朗氏の研究がある<sup>(4)</sup>。増田氏は、児玉・大里地域における横穴式石室受容の時期を6世紀初頭に遡るとした。そしてそれらの石室の平面形状は、短冊形の袖無型石室が狭長なものから徐々に胴張り化、さらには両袖化するとした。

増田氏の研究成果を受けて、近年、埼玉県北部における横穴式石室の動向と系譜について検討を行った小林孝秀氏は、導入期の第1期前半(MT15型式段階)には袖無型(小林氏は無袖式と表記)で、玄

室平面形が狭長な長方形であったものが採用されるとしている。次の第1期後半(TK10型式段階)になると袖無型石室で石室最大幅が奥壁部にあり、開口部に向かって幅を狭める長台形を呈するものが見られるとする<sup>(5)</sup>。第2期(TK43型式とTK209型式段階)には側壁の両側を内側に屈曲させて、袖部を形成することで玄室と羨道を区別する単室構造の両袖式になるという。

以上の先行研究に則して考えると、原古墳の袖無型横穴式石室は右島氏のⅠ-Ⅱ期の横穴式石室の特徴を有していると考えられる。小林氏の変遷に当てはめると、原古墳の平面形状は第1期後半の中に含まれるものと考えられる。

### 3 多野・藤岡地域における横穴式石室の変遷

第63図は多野・藤岡地域の横穴式石室の変遷を示したものである。多野・藤岡地域には神流川流域の神田・三本木古墳群、小林古墳群、鮎川流域の東平井古墳群、白石古墳群など横穴式石室を主体部に有する古墳が多数存在することが知られている。しかしながら、それらは6世紀後半から7世紀代の両袖型横穴式石室が主体である。

今回、改めて当該地域の古墳の動向をみると6世紀前半の築造とされる七輿山古墳と同時期、あるいはその前後に位置づけられる古墳の分布が希薄であることに気がつく。また、原古墳と同形の袖無型横穴式石室を主体部に有する古墳は少数である<sup>(6)(7)</sup>。

現在、当該地域で袖無型横穴式石室を有する古墳を上げると、小林古墳群の小林A号古墳、小林B号古墳、小林C号古墳、藤岡市288号古墳、神田古墳群中の美九里西小学校校庭古墳が知られている。

堀ノ内遺跡群FK-1号墳は主体部の内容が不明なもの、円筒埴輪、土師器の様相から6世紀中葉の築造とされる。

多野・藤岡地域における袖無型横穴式石室の変遷は群馬県西部地域における変遷と大勢で一致しているとされる。小林C号古墳の石室は半壊状態であったが、左壁が直線を構成しており、TK10型式段階の所産とされている。小林A号古墳の石室は羨道と玄

	藤岡地域の円墳 (両軸型)	藤岡地域の円墳 (軸無型)	藤岡市周辺の古墳 (軸無型)	埼玉県児玉地域の古墳 (軸無型)
500	1 原古墳 2 江原塚古墳 3 三本木A号古墳 4 東平井古墳 5 時沢枝原K-5号古墳 6 伊勢塚古墳 7 小林C号古墳 8 美九里西小学校校庭古墳 9 小林B号古墳 10 少林山台12号墳 11 御部入18号墳 12 一ノ宮4号古墳 13 山名土合II号墳 14 大道南13号墳 15 桐畑11号古墳 16 芝宮76号墳 17 神保下條1号古墳 18 下条遺跡7号古墳 19 北塚原2号墳 20 北塚原7号墳 21 広木大町15号墳 22 長沖28号墳 23 秋山諏訪山古墳 24 十二ヶ谷戸10号墳 25 長沖13号墳 26 広木大町4号墳 27 広木大町9号墳 28 天神塚古墳	1 原古墳 2 江原塚古墳 3 三本木A号古墳 4 東平井古墳 5 時沢枝原K-5号古墳 6 伊勢塚古墳 7 小林C号古墳 8 美九里西小学校校庭古墳 9 小林B号古墳 10 少林山台12号墳 11 御部入18号墳 12 一ノ宮4号古墳 13 山名土合II号墳 14 大道南13号墳 15 桐畑11号古墳 16 芝宮76号墳 17 神保下條1号古墳 18 下条遺跡7号古墳 19 北塚原2号墳 20 北塚原7号墳 21 広木大町15号墳 22 長沖28号墳 23 秋山諏訪山古墳 24 十二ヶ谷戸10号墳 25 長沖13号墳 26 広木大町4号墳 27 広木大町9号墳 28 天神塚古墳	10 11 12 13 14 15 16 17 18	19 20 21 22 23 24 25 26 27 28
550	七興山古墳 1 2 3	4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15 16 17 18	19 20 21 22 23 24 25 26 27 28
600	1 2 3 4 5	6 7 8 9 A19 228号墳	10 11 12 13 14 15 16 17 18	19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 (S=1:300)

第63図 原古墳横穴式石室の位置づけ

児玉地域の古墳については引用・参考文献5を参考とした

室を画する部分が見られ、両袖式とも考えられている。小林B号古墳や美九里西小学校校庭古墳の石室は奥壁の幅が増し、側壁も胴張り気味に彎曲しており6世紀後半の段階に位置づけられている。石室の平面形状の変遷からみると原古墳の石室は小林B号古墳より古く、小林C号古墳と同時期あるいはやや後出する時期に位置づけられよう。

石室の詳細な形状が不明であるものの6世紀中葉に位置づけられる藤岡市288号墳や美九里西小学校校庭古墳においては石室の構築にあたり裏込め被覆の構造が採用されている。この裏込め被覆構造は当該地域における横穴式石室においては継続的に採用され、7世紀代の築造とされる東平井古墳群や堀ノ内遺跡群中の諸古墳においても確認されているものである。

多野・藤岡地域周辺における裏込め被覆構造を採用する古墳の中においてはTK10型式からTK85型式段階に築造されたとされる富岡市富岡5号墳が早い時期の事例として知られていた。その後、他地域では赤城山南麓の前橋市前二子古墳や碓氷川流域の安中市後閑3号墳や上田中号1号古墳などMT15型式段階の古墳において既にその採用があったことが知られるようになり、古墳の構築方法が一元的に変化したものでないことが確認されている。

#### 4 円筒埴輪の様相から見た原古墳の位置付け

原古墳からは2条3段構成の円筒埴輪が多数出土している。いずれも細片化が進行しており、全体形状を把握することができた資料は001と023の2点にとどまった。

群馬県西部地域における窖窯焼成の円筒埴輪の編年については中里正憲氏の研究成果がある<sup>(9)</sup>。中里氏は、「円筒埴輪の変化は、口径・底径の矮小化、第1段の伸長化、第3段の短縮化の中におこっており、これらの変化から大きく3つに分類することができる。」とし、5世紀末以降の円筒埴輪を4期に区分、年代的に位置付けている。また、志村哲氏も藤岡産円筒埴輪の編年表を提示している<sup>(10)</sup>。本項ではこれらの先行研究を参照しながら原古墳の円筒埴輪の位置

づけについて検討してみたい。

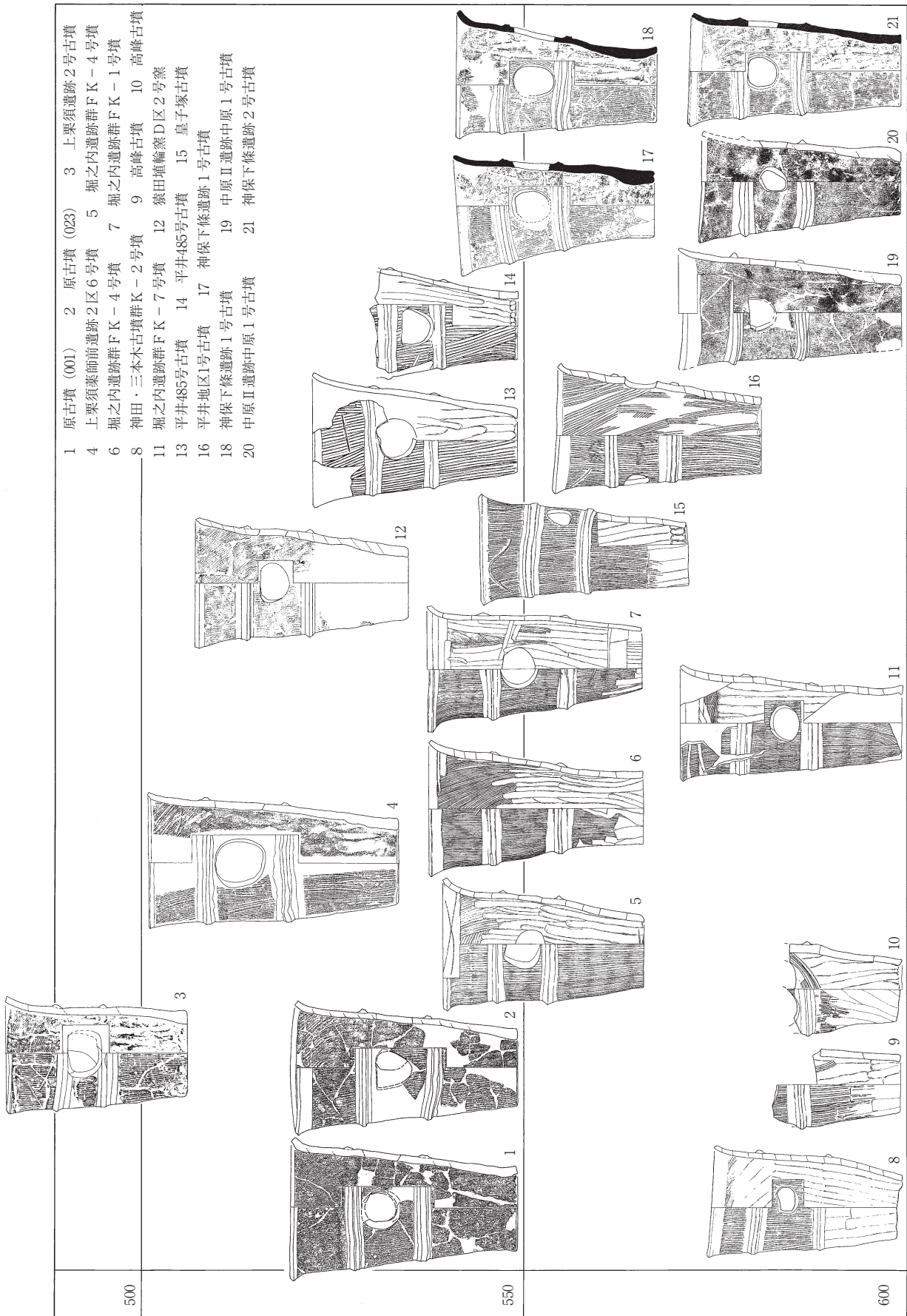
原古墳出土の001と023の円筒埴輪の各部位の数値を中里氏の行った計測分析の内容に則して算出すると001は、第1段が器高に対して42.4%、口縁部長が器高に対し25.4%となる。各段の長さの比率は、第1段、基底部：第2段、胴部：第3段、口縁部の比率が1.39：1：0.83となる。口径は25.5cmに復元され、底径は15.1cmを測る。023は、第1段が器高に対して39.6%、口縁部長が器高に対し33.9%となる。各段の長さの比率は1.39：1：1.05となる。口径は23.8cm、底径は13.8cmである。得られた数値からは001が中里氏編年の3期、023が4期に含まれることになる。

原古墳の円筒埴輪全体に見られる製作技法について改めて概括すると、外面調整は基本的には全てタテハケである。内面の調整は基底部、胴部にはナデ、口縁部にはハケメを施すものが主体であった。透孔は円形を主体に他に半円形、半円くずれがある。突帯の断面形状は突出が弱く、台形・M字形を主体に、三角形が見られる。ヘラ記号（線刻）は口縁部と胴部の外面に見られた。底部調整は認められないなどとなる。

第64図は、多野・藤岡地域の小古墳出土の2条3段構成の円筒埴輪を集成したものである。上栗須遺跡2号古墳出土例は、半円透孔を有する。5世紀末に位置付けられるとされる。

平井485号古墳出土例には円形透孔と半円透孔の例が見られる<sup>(11)</sup>。上栗須薬師前遺跡6号墳出土例は基底部の伸長化が進行している。共伴の馬形埴輪は丁寧な造作である。堀ノ内遺跡群FK-4号墳出土例には、基底部の1次調整タテハケを2次調整のタテ方向のナデで消しているものが見られる。中里氏編年の3期にあたろう。堀ノ内遺跡群FK-1号墳出土例は突帯の断面形状が三角形のものが主体で、内外面に底部調整が見られる。

皇子塚古墳、平井地区1号墳、高峯古墳出土の各出土例にも底部調整が施されており、高峯古墳出土例では第1突帯近くまでケズリがおよぶ例もある。



第64図 原古墳出土埴輪の位置づけ

平井地区1号墳は中里氏編年の4期にあてられている。いずれも6世紀後半の所産と考えられる。

原古墳と墳丘構造が類似する神保下條遺跡1号古墳出土例は計測内容、一部に板押圧による底部調整が認められることから中里氏編年の4期に区分され、6世紀後半の年代が付与されている。神保下條遺跡2号古墳出土例は底部調整が見られないが古墳の築造時期は1号古墳より新しいものと考えられている。

中原Ⅱ遺跡1号古墳の円筒埴輪は半数近くに半円形透孔が、3分の1に底部調整が認められるとされる。築造年代は6世紀第4四半期と考えられている。

以上のように藤岡市とその周辺地域の古墳から出土した円筒埴輪の変遷状況などを考え合わせ、008や011のように口縁部の長さが著しく短くなる資料の存在も加味すると、原古墳の円筒埴輪は、6世紀中葉段階の特徴を有していると言えよう。

#### 5 原古墳の築造時期

横穴式石室、出土円筒埴輪の検討から原古墳は、6世紀中葉に築造されたものと考えられる。横穴式石室を有する小古墳としては多野・藤岡地域において比較的古い時期に位置づけられる古墳の一つであることが確認された。時間的には旧藤岡市南部の古墳に横穴式石室の採用が定着するのと前後する時期に、ピンポイントで神流川をさか上った鬼石地区に原古墳が築造されたということになる。また、同時期に築造された群馬県内の円墳の中では袖無型横穴式石室の規模、円筒埴輪の法量ともに平均値を上回っていることも分かった。これらのことから、原古墳は、単に群集墳を構成する（実際には構成されていないが）一古墳の築造者ではなく、鬼石地区の中核的な有力者層により造営された墳墓であるとの認識が必要となる。

原古墳は、神流川右岸にある埼玉県秩父市吉田町塚山古墳群の存在が気になるところであるが、左岸、群馬県側では現時点で神流川最上流地点に位置する古墳とすることができる。ただしこのことはすぐに河川流域の最奥部という言葉で冠して原古墳の立地を理解してよいということではなかろう。埼玉県の

北武蔵や秩父地域との関係も充分考慮すべきであろう。現状では、藤岡産の埴輪が供給されていることを考えると、小林・本郷・神田など旧藤岡市南部の地域との関連性の中で考えていくことが順当であろうか。

周辺の遺跡の動向でも記されたよう、原古墳の所在する鬼石地区は古墳時代全般を通じて、集落遺跡、生産遺跡の調査事例がないことから築造時の歴史的環境を推し量ることが困難となっている。古墳の分布は散在的である。原古墳は、古墳時代中期の古墳の存在が知られない、また、後期・終末期にいたっても群集墳が形成されないという前後に不連続な状況の中で完成された形の横穴式石室が受容されていたことになる。原古墳の築造は、古墳時代の鬼石地区にとって極めて画期的な出来事であったに相違ない。その築造の契機は何であったのか。原古墳の被葬者、あるいは古墳造営主体者の経済的基盤となったものは何であったのか。通例的に考えれば農耕基盤の充実が考えられるところであるが、その他の生業との関わり、『日本書紀』の「緑野屯倉」の設置記事についても検討する必要がある。今後の課題とする点である。

#### 引用・参考文献

- 1 右島和夫「2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴」『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 2 右島和夫「第3章 上野の初期横穴式石室の研究」『東国古墳時代の研究』1994
- 3 田口一郎「群馬県西部における初期横穴式石室の様相」『東日本における横穴式石室の受容』第2分冊群馬県考古学談話会、千曲川水系古代文化研究所、北武蔵古代文化研究会 1989
- 4 増田逸郎「埼玉県における横穴式石室の受容」『信濃』第29巻第7号 1977
- 5 小林孝秀「北武蔵における横穴式石室の動向とその系譜」『専修史学』第44号 2008
- 6 志村哲「藤岡市」『群馬県内の横穴式石室Ⅰ』（西毛編）1998
- 7 長井正欣・小林修「群馬県 中期古墳から後期古墳へ」『シンポジウム』中期古墳から後期古墳へ』2001
- 8 藤岡市教育委員会「8. A19 288号古墳」『年報 (23)』2007
- 9 中里正憲「群馬県西部の円筒埴輪編年」『埴輪研究会誌』第6号 2002
- 10 志村哲「猿田Ⅱ遺跡の調査、第4節藤岡産埴輪の供給について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 2004
- 11 志村哲「藤岡台地における埴輪の様相」『埴輪の変遷』群馬県考古学談話会、千曲川水系古代文化研究所、北武蔵古代文化研究会 1985

## 第2節 原古墳の墳丘構造をめぐって

－群馬県におけるいわゆる積石塚の検討を中心にして－

群馬県文化財保護審議会委員 右島和夫

### 1 はじめに

原古墳の発掘調査により、神流川流域の最上流部に所在する後期古墳の様相を明らかにすることができた。本稿では、本書の調査報告の章で明らかにされた具体的内容を基にして、本墳の調査結果が提起するいくつかの問題について検討してみたい。

本墳が有する顕著な特徴としては、墳丘構造と横穴式石室を挙げることができるだろう。

そのうち、墳丘構造について見てみると、これを構成する石材が、すべて神流川・三波川から得られる結晶片岩を中心とした河川礫のみで構成されていることが極めて特徴的である。この視覚的現象のみから考えるならば、原古墳の墳丘は、いわゆる「積石塚」古墳と呼称されている一連の古墳の範疇に属するものと考えていいだろう。

しかし、原古墳を取り巻く状況や、群馬県地域における同様の古墳例を検討していくと、ことはそう簡単には割り切れないのではないかと考えている。その原点に立ち返るならば、そもそも「積石塚」とはなにかという命題に行き着くことになる。原古墳の墳丘構造から、この問題に検討を及ぼしていきたい。

次に、原古墳の横穴式石室について見てみよう。本墳の横穴式石室は、袖無型石室に属している。原古墳については、報文でも検討されたように、その築造時期は6世紀第2四半期を前後した時期と考えられる。現在までに知られている古墳例で見ると、本墳の横穴式石室は、多野・藤岡地域における横穴式石室の初現期に属するものと思われる。おそらく、今後の調査の中で、当該地域では、原古墳と同時期か、先行する横穴式石室が確認される可能性は十分ある。

ところで、積石塚の可能性のある原古墳について、横穴式石室と墳丘構造の相関で見ていくと、西毛地

域の各地に類似の構造を有するものが散見するのに気づく。しかもいずれも、小型円墳であり、小型の袖無型横穴式石室を共通にしている。この種の古墳が、初現期に近い時期の小型横穴式円墳と思われることを踏まえると、古墳間で共通の技術的基盤に支えられた造墓活動であった可能性も十分考えられるところである。その観点から、積石塚と理解している墳丘構造についても再検討していく必要があるはしないだろうか。いわゆる積石塚ではなく、構築技術上の構造的要請が結果したものである可能性があるからである。このことについても、考えてみたい。

### 2 原古墳の墳丘構造と積石塚

**墳丘構造の特徴と問題点** 原古墳の墳丘の調査で、墳丘構成材のすべてが結晶片岩の川原石であることが明らかにされたことは前述した通りである。そして、その表面には、斜面全面にわたって丹念に葺石が施されていた。そのため、視覚的には、多野・藤岡地域で従来確認されている、原古墳に近い規模の群集墳を構成する通有の中・小型円墳と何ら変わるところはない。後者の墳丘は盛土により築成されることを基本としているが、墳丘表面を見てみると、やはり原古墳と同様に丹念にびっしりと葺石が施されている。葺石構造には、両者の間でまったく差がないので、完成した古墳として視覚にうつるものは、同じ円墳に見える結果となるわけである。この点が、果たして原古墳を所謂「積石塚」と称されているものの範疇に、躊躇なく含めてよいかどうかに疑問を持っているゆえんである。

「積石塚」とは まず、積石塚はどのような墳丘構造の特徴を有しているのかを考えてみたい。積石塚の議論が展開される時、長野、山梨などとともに群馬県の地域も、検討の俎上によくのぼる。当地域が、積石塚が盛んに築造された地域としての印象が強い

からである。尾崎喜左雄氏が『信濃』誌上に発表した「群馬県発見の積石塚」の論考も、この理解に大きく寄与しているものと思われる。一方で、古墳時代後期における積石塚の議論には、半島との関わりの可能性が視野に入ってくることも確かである。それゆえ、時に積石塚=渡来人という極論もさほど不自然でなく存在する。

ところで、群馬県地域の近年の古墳研究で、積石塚が議論に上ったのは、榛名山東～東南麓一帯で確認される5世紀後半の一連の古墳への注目が契機になっている。ここで検討されている該当古墳の構造的特徴は、群馬県地域に6世紀初頭に横穴式石室が入ってきて以降に築造される古墳で積石塚と位置づけられている有瀬1号墳をはじめとする一連の古墳とは、必ずしも構造的に連関せず、同一系譜上にある可能性もほとんどないと言ってよさそうである。この点は、これら5世紀後半のものと、6世紀初頭の横穴式石室導入以降に属する一群について、もう一度細部に渡って比較検討をし、その関係性について見ていく必要性を示している。

何をもって積石塚とするのかは、古くて新しい検討課題である。筆者がこのことに積極的に発言できるほどに基礎作業を積み上げてきているわけではないので、ここでは従来の上野地域で積石塚あるいはその可能性がある指摘された古墳について、いくつか気づいた点を述べてみることにする。

なお、桐原健氏が墳丘表面を葺石で覆うものすべてを積石塚と理解しているのを除けば、大勢が墳丘を土ではなく石で構成するものを積石塚と規定している立場を踏襲して論を進めることにする。

**5世紀後半の方墳と積石塚の区分をめぐる** 黒田晃氏は、高崎市剣崎長瀬西遺跡で調査された5世紀後半の初期群集墳について検討する中で、縦穴式小石槨の周囲を礫敷きで方形（あるいは長方形、円・楕円形もある）に区画し、その上に若干量の礫を積み上げるものを「積石塚」とし、同遺跡5号墳のように、墳丘第1段（基壇）は土による本体の墳丘表面に葺石を整然と施し、第2段に相当する部分に前

述した「積石塚」部分が乗るものは「方墳」としている。この区分に従えば、黒田氏も指摘しているように、高崎市（旧箕郷町）谷ツ1号墳は後者の「方墳」の構造に共通することになる。

一方、橋本博文氏や大塚昌彦氏は、谷ツ1号墳、あるいはこれと構造的特徴を共通にしている可能性がある渋川市東町古墳も積石塚と理解しているので、その区分に従えば、剣崎長瀬西遺跡5号墳や、同遺跡9・10号墳も積石塚と捉えられることになる。

ところで、黒田氏も指摘しているところだが、剣崎長瀬西遺跡の初期群集墳を構成する円墳の第2段部分も、氏が積石塚と称しているものに相当する構造になる可能性がある。このことについては、大塚氏が渋川市の半田南原遺跡の5世紀後半の円墳（26・27号墳）で確認された墳頂部の縦穴式石槨の構造分析から、坂下町古墳群の1～5号墳のような構造（積石塚）が円墳の墳頂部に乗ったもので、空沢古墳群の5世紀後半の円墳群も同様の構造であったと推定している。

とするならば、谷ツ1号墳・東町古墳と半田南原遺跡の円墳との差は、基本的には墳丘部分（または墳丘第1段）が円形か方形かだけの違いに過ぎないことになる。筆者も、墳丘第1段（基壇）が盛土（小型のものでは地山整形のみの場合もある）でその表面に葺石を施した谷ツ1号墳や剣崎長瀬西遺跡5・10号墳を積石塚とするのには賛成しない。

一方、黒田氏が「積石塚」と分類したものは、同一の構造のものが渋川市空沢古墳群でも確認されている。これらに共通するのは、小規模であり、剣崎長瀬西遺跡の場合では、方墳の傍らに付随するように位置し、空沢古墳群では円墳と円墳の間隙を埋めるように占地している。これらは古墳群の主たる構成古墳としての位置を占めるものではなかった可能性が十分ある。このことは、これらのいわゆる積石塚と称されているものが、前方後円墳を頂点とした古墳システムの中に確固としたとした位置を占めるものであったかどうかの議論も、そもそも必要ないように思われる。

ところで、これらの付随的な埋葬施設は、他の初期群集墳にも認められる。伊勢崎市（旧境町）下淵名塚越遺跡の初期群集墳は、5世紀後半を中心とした円墳13基から構成されるが、その円墳と円墳の間隙から、周堀を伴わない竪穴式小石槨・土壙墓が5基確認されている。同様のものは、前橋市（旧粕川村）の白藤古墳群でも確認されているところである。構造的な差こそあれ、古墳群内においては、空沢古墳群で積石塚と称されているものと同一の位置づけが可能であると考えられる。それゆえ、筆者は下淵名塚越遺跡の報告の中では、埋葬施設のみで周堀を伴わない、ひいては墳丘を伴わない（もちろん築造当時は施設を覆う程度の土山はあった可能性はある）これらの埋葬施設を古墳としては扱わなかった。

最初に述べたように、墳丘を土の代わりに石で構成する古墳を「積石塚」とするならば、横穴式石室登場以前に当たる5世紀後半の時期の上野地域には、これに該当する古墳はなかったことになる。

ただし、だからと言って、一方の議論である渡来人との関係性についても排除するべきということではない。この点については、方墳という墳丘原理について渡来系との関係で、積極的に評価していく必要性を感じている。この点については、別の機会に具体的に検討することにしたい。

### 3 横穴式石室を有する積石塚をめぐって

次に、原古墳に直接関係してくることだが、横穴式石室を主体部とする古墳における「積石塚」の議論について見てみよう。

原古墳で確認された墳丘構造は、前項で検討した5世紀後半の初期群集墳で指摘されたいわゆる「積石塚」とされた埋葬施設とは、明らかに基本的構造を異にするものである。前述したように、当該遺構については、筆者は果たして古墳の範疇に含めうるものかどうか疑問を呈したところである。そこへいくと、原古墳は、まぎれもなく前方後円墳を頂点とした古墳システムの中で明確に位置を占めていたと考えられる。ここで筆者が指摘しておきたい点は、

5世紀後半に登場する竪穴式系の埋葬施設を有する初期群集墳中の「積石墓」（古墳としての「積石塚」と区分するために、ここではこの呼称を使用したい）と6世紀前半から登場する横穴式石室を有し、古墳としての積石塚の可能性が指摘されている一連の小型円墳とは、明らかに系統・位置づけを異にするものである。それゆえ、上野地域において、5世紀後半以来の連続的な流れの中で共通して「積石塚」と理解することには問題があると考えている。

その意味のみの延長上では、原古墳を「積石塚」と呼称することには、なんら躊躇することはないし、問題はないように見える。

しかし、実はこちらはこちらで積石塚と即断してしまうのには、やはり躊躇させるいくつかの構造的な問題が横たわっている。そのことを具体的に見てみることにしよう。

**原古墳の墳丘構造の特徴と類似古墳** 筆者は、西毛地域の横穴式古墳の調査に直接たずさわる機会がなんどかあった。そこで得られた一般的な古墳構造を整理してみよう。当該地域の石材環境の特徴としては、平野部に面する一部の地域を除けば、極めて豊富で恵まれている点が指摘できる。典型的な横穴式古墳のあり方を見てみると、構築面は平坦地形を利用して、そこに墳丘築成と併行・構造補完をしながら進行させる。このことは、基本的に石室掘り方を伴わない特徴を意味している。これに対して、赤城山南麓等では、南下がりの斜面地形に占地し、掘り方を穿って石室を構築する流れが基本形である。

西毛地域の横穴式円墳では、石室壁石材の背後の「裏込め」構造のいちばん外側の面を葺石状の構造で押さえる「裏込め被覆」構造を有する点が顕著な特徴である。そして、この裏込め被覆のまわりにさらに盛土構造による補強がなされ、その外側が、完成時の墳丘表面として視認される葺石構造となるわけである。

このことからすると原古墳は、盛土構造は欠くが、石室と裏込めと葺石から構成される小型円墳として目にうつる。筆者はこれを、裏込め被覆と盛土を省



略した墳丘構造と考えている。

#### 利根川上流域で積石塚の可能性が指摘される小型横

**穴式円墳** 渋川市から子持村を経て昭和村に至る利根川上流域には、6世紀前半から中頃にかけて、主体部を横穴式石室とし、整然とした葺石の内側はすべて中小の石で構成されている円墳がある。渋川市空沢遺跡5号墳（墳丘直径5.96m）、同（旧子持村）伊熊古墳（同8m）、同（旧子持村）有瀬1号墳（同7.40m）、昭和村諏訪平3号墳（同7.30m）等が主なものである。いずれも墳丘が石のみによって構成されていることから、これこそ積石塚とするのにふさわしいとされてきている。

これらの横穴式古墳は、その他にも共通した構造的特徴がある。まず、墳丘規模が極めて小さいことである。次に横穴式石室は小型の袖無型で構造的にも類似している。墳丘と石室との位置的相関を見ると、石室奥壁の位置が墳丘の中心より大分奥寄りとなっている点も共通している。この墳丘との位置的相関は、墳丘規模が極めて小さいことと関係している点を注意する必要がある。

これらの古墳は、6世紀中頃に降下した榛名山の噴火軽石層に直接覆われているもの（伊熊・有瀬1号、諏訪平3号）、軽石層を取り除いて構築しているもの（空沢5号）という時期差はあるが、共通した古墳築造手法を取り、構造的特徴を共有することを踏まえると、軽石降下後といっても、降下時期とされている6世紀中葉を大きく下ることは考えられない。

ところで、これらの古墳を外見的に見ると、規模が小さいこと以外、西毛地域に特有の横穴式古墳と異なる点はない。墳丘形態、葺石もしかり、横穴式石室もしかりである。違いは、盛土相当部分が石であることと、墳丘に対する奥壁の位置の違いだけである。他の同期の横穴式古墳の場合、奥壁の位置は墳丘の中心にくるのが一般的である。その分、墳丘が一回り大きくなっている。これらの墳丘構造を見てみると、石室の構成石材の背後に裏込めの石が厚く置かれ、その外側に裏込め被覆と称している葺

石状の構造で覆い、さらにその外側に盛土が施され、最後に葺石が施される前述した一般例につながるわけである。

**吉井町神保下條1号墳の墳丘構造** 筆者はかつて高崎市（旧吉井町神保）で墳丘が石のみで構成される小型横穴式円墳（神保下條1号墳、径7.40m）を調査する機会があった。やはり、袖無型石室で奥壁の位置は墳丘の中心より奥寄りにあった。調査の過程で石室の背後の構造を丹念に調べてみると、葺石と石室の主要構成材との間にくる多量の石は、単なる盛土に代わる墳丘構成材ではないことがわかった。石室の背後に裏込めを施し、さらにその背後に順次石を寄せかけて同心円状に規模を拡大していくものである。その最後に当たる墳丘表面が葺石で整然と覆われることになる。このことは、葺石が裏込め被覆を兼ねていることになる。そのため、この古墳はいわゆる積極的な意味での「積石塚」ではなく、当地域に一般的な横穴式円墳から裏込め被覆・盛土が省略された形態と考えた。

原古墳や前述した利根川上流域の積石塚と考えられている諸古墳も、横穴式石室自体が石室幅・高さとも1m前後であり、横穴式石室としては極めて小規模なものである。その底流には、なるべく省力化、簡易化したかたちで古墳築造を実現しようとしている意図を読みとることができる。

積石塚古墳といった視点からの位置づけをまったく否定するものではないが、構築手法・構造的要請に基づいた特徴の可能性も検討する必要があると考えているゆえんである。

そこで、これまで検討してきた原古墳やこれと構造的に共通する小型円墳を、いわゆる「積石塚」と区分したい意図を踏まえ、「積石塚状」横穴式円墳と仮称して、話しを進めることにしたい。

**積石塚状横穴式円墳の成立背景** これまでの検討で、原古墳の墳丘構造は、盛土と裏込め被覆が省略されたものと理解した。裏込め被覆の方は、あるいは、省略というよりも、墳丘表面の葺石に機能を兼ねさせていると言った方が、構造的にはふさわしいかも

しれない。

原古墳と共通した墳丘構造を有する古墳は、現在までのところ、旧吉井町、渋川市、旧子持村、昭和村の地域で確認されていることを指摘した。

これらの古墳の年代観であるが、最も古いと思われる事例が有瀬1号墳、伊熊古墳で、陶器古窯跡群の須恵器編年のTK10の型式的特徴を有する須恵器を伴っている。また、同じ旧子持村の丸子山古墳も、石室部分は破壊が著しく不明確であるが、墳丘構造は同様のもので、やはり軽石層に厚く覆われていた。昭和村の諏訪平3号墳も調査時には大幅に削平されてしまっていたが、軽石層下の可能性が指摘されている。このように見てくると、空沢5号墳も、榛名山の軽石層を掘開して築造されたと報告されているが、旧子持村の諸古墳や昭和村の古墳と近い地域に所在していることから、軽石降下後さほど時を隔てないで掘開・築造がなされたと考えていだろう。

一方、吉井町神保下條1号墳は、人物動物埴輪が横穴式石室の入口部脇から基壇面に列状に配される直前の状態であり、神保下條2号墳の列状配置の前段階にあることを示している。確実な列状配置の例としては、6世紀第3四半期の富岡5号墳、観音山古墳に認められることから、おそらく6世紀中葉を前後した時期に列状配置への転換があったものと考えられる。それゆえ原古墳と類似の墳丘構造を有する神保下條1号墳もTK10併行期の所産の可能性が考えられるところである。

このように見てくると、積石塚状横穴式円墳が築造された時期は、6世紀中葉を前後した時期と考えることができよう。

ところで、群馬県地域の横穴式古墳には、これまで見てきた「裏込め」の外側を葺石状におおう「裏込め被覆」の構造が、横穴式石室出現の初期の段階から完成されたかたちで成立していることを知ることができる。その良好な事例を、前橋市大室古墳群の前二子古墳や、高崎市(旧榛名町)本郷稲荷塚古墳(本郷の場E号墳)、安中市後閑3号墳等で知ることができる。これは、6世紀初頭に求められる当

地域の初期横穴式石室が、基本的に当時の地表面を構築面としており、掘り方を持たない構造が影響しての裏込めの構造と考えていだろう。すなわち、裏込め構造の外側を葺石状に補強する裏込め被覆構造が、当初から成立する構造的要請がある程度あったと言えるわけである。現在までのところ、群馬県地域のものに匹敵する丹念で強固な葺石状の「裏込め被覆」構造の存在を、列島の他地域では見ないところなので、群馬県地域で、横穴式石室導入に伴い、独自に開発された構造上の手法と位置づけられる可能性もあるだろう。

裏込め被覆は最初の横穴式石室から、すでに存在した構造であり、葺石ももちろん横穴式石室の最初から存在した手法である。ただし、この両者が合体したような積石塚状横穴式古墳は、その当初から存在したものではない。その最大の理由は、群馬県地域における横穴式石室導入当初は、その築造対象が、主として前方後円墳とそれに準ずる中・大型古墳に限られていたことがある。それゆえ、築造される円墳も比較的規模が大きいものであり、石室-裏込め-裏込め被覆-盛土-葺石という構造であったわけである。その時期、群集墳を構成する小型円墳の大勢は、前代からの竪穴式小石塚が依然として主体部形式として採用されていた。

積石塚状横穴式円墳が登場するのは、横穴式石室導入期からしばらく経った時期である。その過程で、横穴式石室が小型円墳にも採用されるようになる流れがあったわけである。そして、直径が10mに満たない小型墳への横穴式石室の採用の中で、墳丘盛土を省略し、裏込め被覆と葺石の機能を兼ねた積石塚状円墳が成立したものと思われる。

このような成立背景を持っていたため、大型円墳でこの構造を取るものは、一例も存在しない。

ここまで縷々述べてきたが、従来積石塚古墳の可能性が指摘されてきた原古墳と類似の一連の古墳をいわゆる「積石塚」の範疇に含めないことが明らかになったものと思われる。

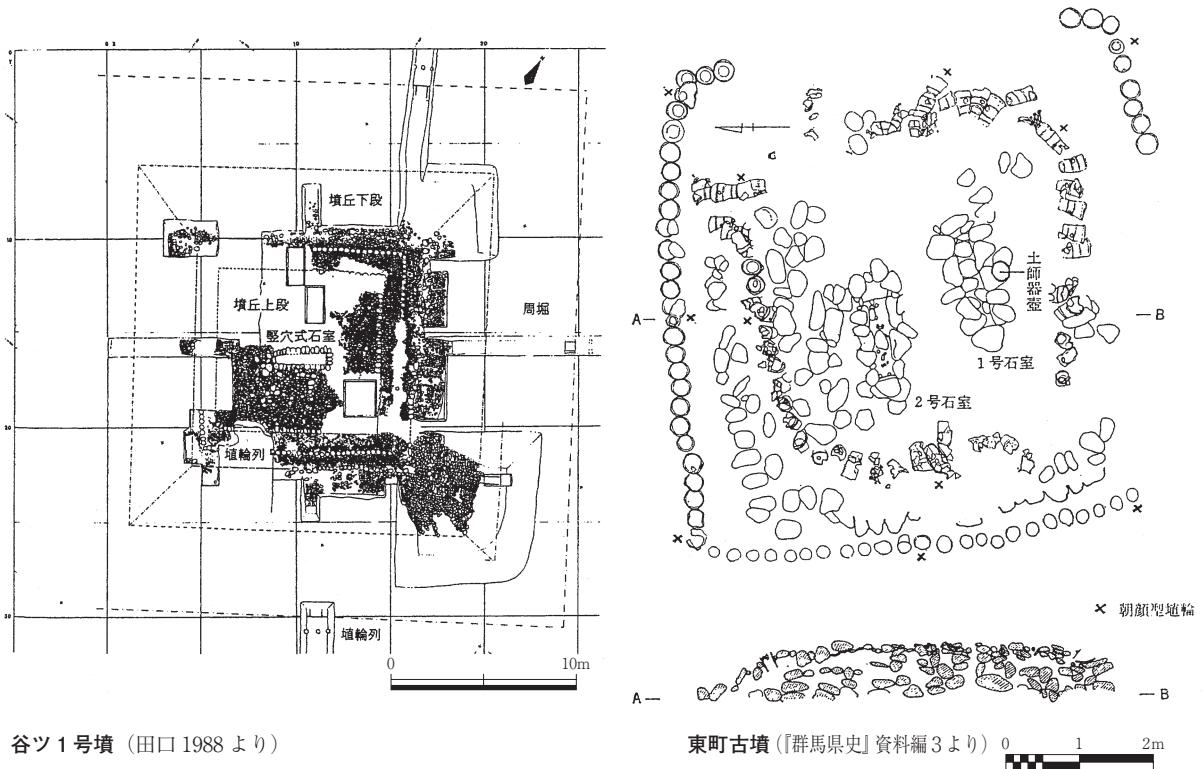
第4章 調査成果のまとめと考察

参考文献

尾崎喜左雄「群馬県発見の積石塚」『信濃』13-1 1961  
 大塚昌彦『空沢遺跡二・三・五・〇地点・七次発掘調査概報』  
 洪川市教育委員会 1980・82・85・87・88  
 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』10集  
 九州古文化研究会1983  
 田口一郎「下芝谷ツ古墳」『日本考古学年報』39 日本考古学協会  
 1988  
 桐原健『積石塚と渡来人』東京大学出版会 1989  
 小島純一『白藤古墳群』柏川村教育委員会1989  
 小林良光『空沢遺跡八次発掘調査概報』洪川市教育委員会1989  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下淵名塚越遺跡』1991  
 右島和夫『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団1991  
 右島和夫「上野における群集墳の成立」『関西大学考古学研究会  
 創設40周年記念論文集』1993  
 小村正之『川額軍原Ⅰ遺跡』昭和村教育委員会1996  
 大塚昌彦「群馬の積石塚(1)」『群馬考古手帳』9 1999  
 黒田晃「剣崎長瀬西遺跡と渡来人」『高崎市史研究』12 1999

橋本博文「上野の積石塚再論」『東国の積石塚古墳』1999  
 黒田晃『剣崎長瀬西遺跡Ⅰ』高崎市教育委員会2001  
 右島和夫「岩下清水1、2号古墳をめぐる諸問題」『岩下清水古  
 墳1群』昭和村教育委員会2002  
 石井克巳・太田国男『宇津野・有瀬遺跡』子持村教育委員会 2005  
 石井克巳・太田国男『丸子山遺跡』子持村教育委員会 2005  
 千田茂雄『九十九川沿岸遺跡群3』安中市教育委員会 1994  
 前橋市教育委員会『大室古墳群』2005  
 大江正行『本郷の場古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990  
 専修大学文学部考古学研究室『剣崎長瀬西5・27・35号墳』2003

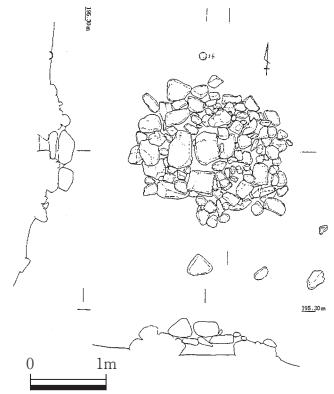
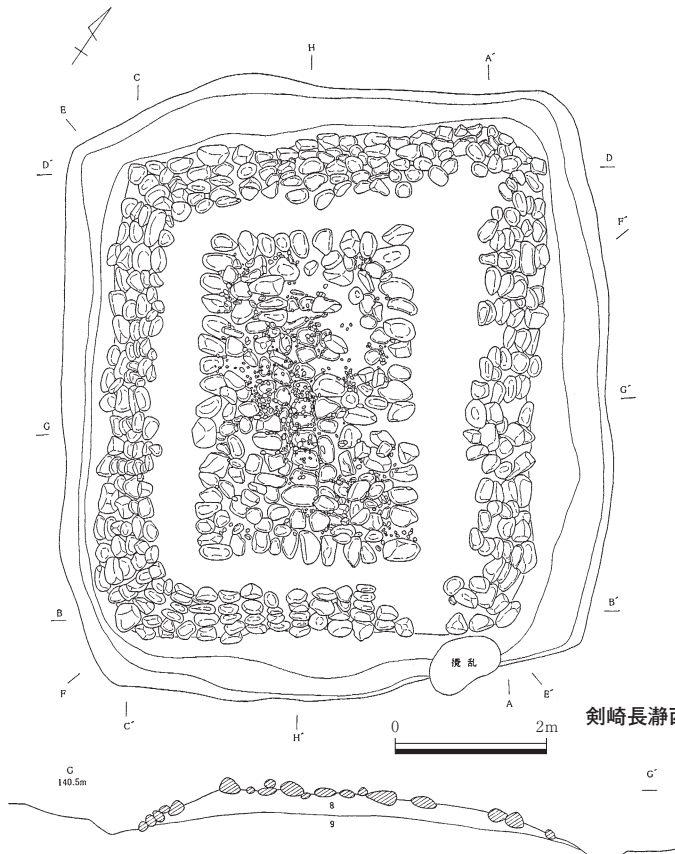
本稿を草するにあたり、土生田純之、石井克巳、  
 徳江秀夫、若狭徹、深澤敦仁、太田国男、小林修の  
 各氏から教示を受けるところがあった。記して感謝  
 申し上げる次第である。



谷ツ1号墳 (田口1988より)

東町古墳 (『群馬県史』資料編3より) 0 1 2m

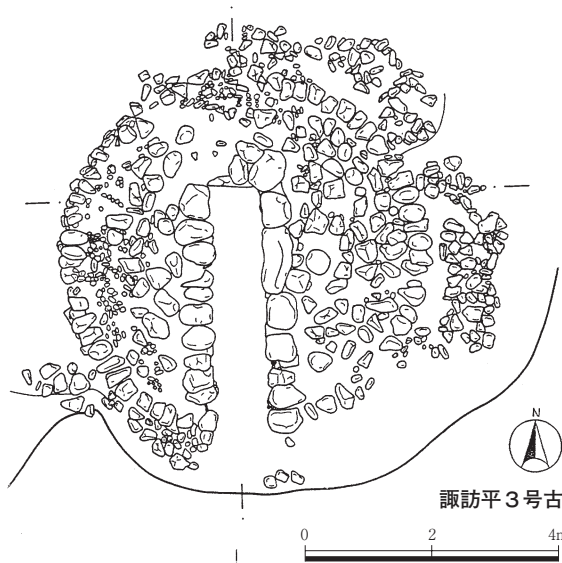
第65図 谷ツ1号墳・東町古墳墳丘図



空沢遺跡 36 墳 (渋川市教委『空沢遺跡第5次』より)

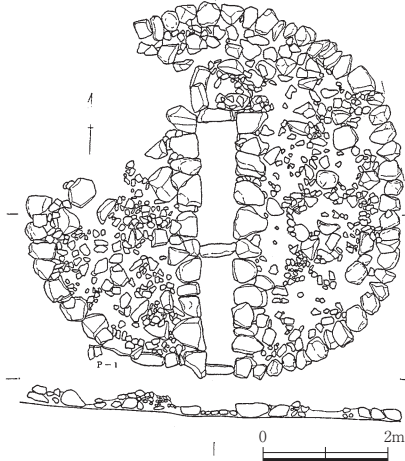
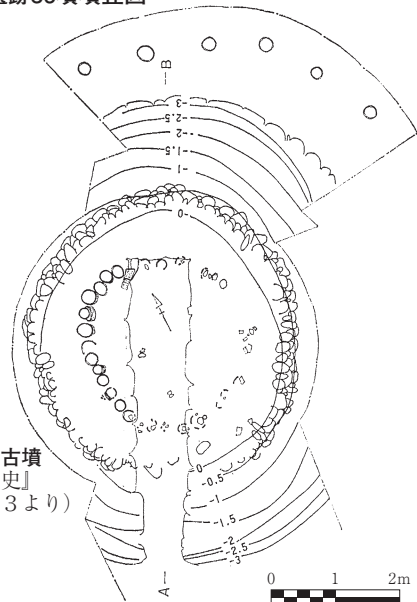
剣崎長瀬西遺跡 5号墳 (専修大学考古学研究室 2003 より)

第66図 剣崎長瀬西遺跡 5号墳・空沢遺跡36墳墳丘図



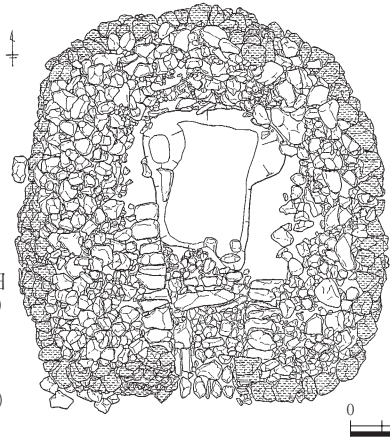
有瀬 1号古墳  
(『群馬県史』  
資料編3より)

諏訪平 3号古墳 (小村 1996 より)



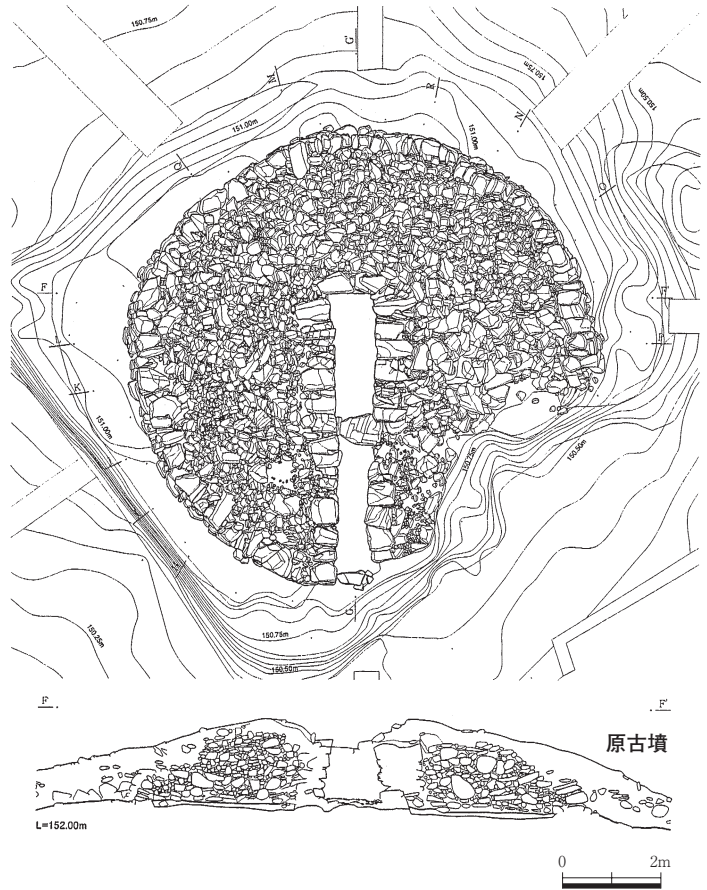
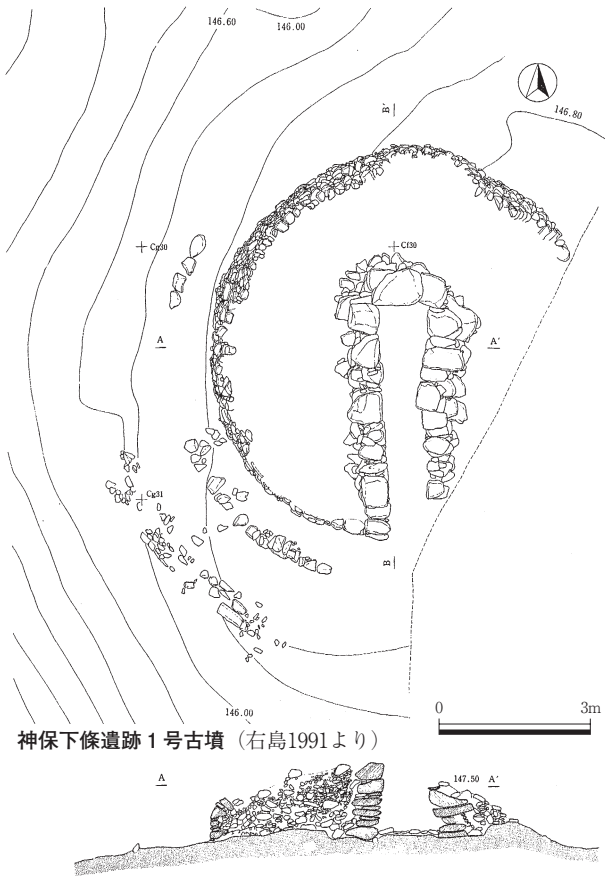
空沢遺跡 5号墳  
(渋川市教委『空沢遺跡』より)

丸子山古墳  
(石井・太田  
2005 より)

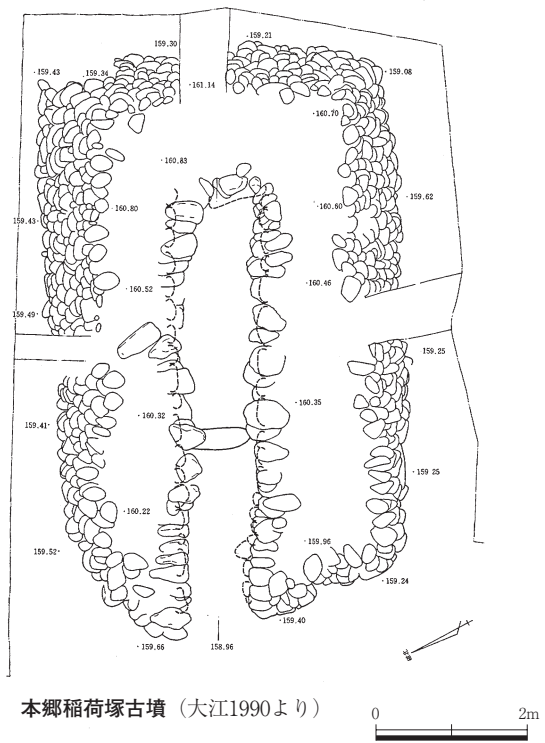
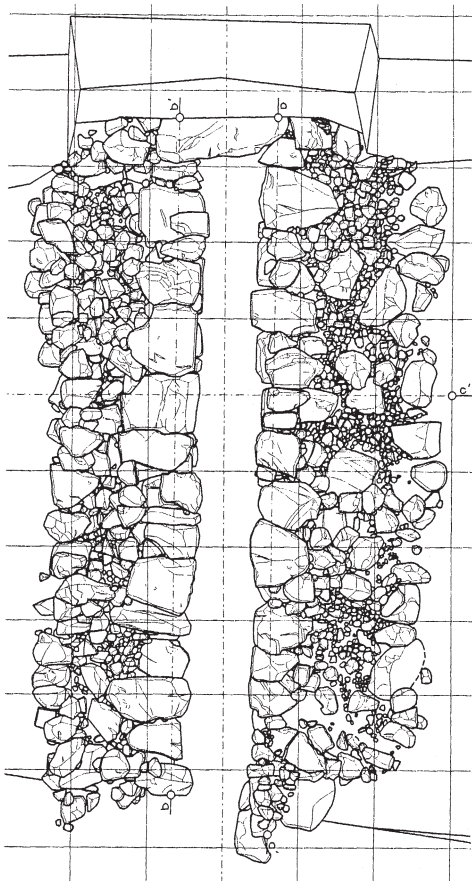


第67図 積石塚状横穴式円墳の諸例 (1)

第4章 調査成果のまとめと考察



第68図 積石塚状横穴式円墳の諸例 (2)



本郷稲荷塚古墳 (大江1990より)

前二子古墳 (前橋市教2005より)

(1:100)

第69図 初期横穴式石室の裏込め・裏込め被覆

## 参考文献

- 1 鬼石町誌編さん委員会『鬼石町誌』1984年
- 2 群馬県教育委員会『群馬県文化財情報 web 版』
- 3 鬼石町教育委員会『国指定史跡「譲原石器時代住居跡」保存整備事業報告書』1996
- 4 下久保ダム水没地埋蔵文化財調査委員会『下久保ダム水没地埋蔵文化財調査報告書』1968
- 5 鬼石町教育委員会『群馬県鬼石町赤坂遺跡・塚ノ本遺跡・塚ノ本Ⅱ遺跡・野栗遺跡・野栗Ⅱ遺跡』2004
- 6 藤岡市教育委員会『東京電力中東京幹線一部増強に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2004
- 7 櫻澤重利『上武国境地帯歴史以前の神流川溪谷』1997
- 8 埼玉県教育委員会『埼玉の遺跡マップ』
- 9 神泉村教育委員会『平遺跡発掘調査報告書』2007
- 10 書上元博 柿沼幹夫 駒宮史朗 坂本和俊 関 義則 利根川章彦「神川村前組羽根倉遺跡の研究」『埼玉県立博物館紀要 - 12』1985
- 11 神川町教育委員会『青柳古墳群城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷・二ノ宮支群』1997
- 12 藤岡市史編さん委員会『藤岡市史』資料編原始・古代・中世 1993
- 13 群馬県埋蔵文化財調査事業団『神保下條遺跡』1992
- 14 群馬県埋蔵文化財調査事業団『多田山古墳群』2004
- 15 群馬町教育委員会『保渡田八幡塚古墳』2000
- 16 群馬町教育委員会『保渡田Ⅶ』1990
- 17 高崎市教育委員会『金子如来古墳群』2006
- 18 藤岡市教育委員会『東平井古墳群平地前遺跡』2000
- 19 群馬県農政部土地改良課『土地分類基本調査 万場・寄居』平成6年
- 20 稲村繁「群馬県における馬形埴輪の変遷 - 上芝古墳出土品を中心として -」『MUSEUM』第425号 1984
- 21 井上裕一「馬形埴輪の研究 - 画期の設定 -」『古代探叢』Ⅳ 1995
- 22 鴻巣市教育委員会『鴻巣市遺跡群Ⅲ生出塚遺跡 (D・E地点)』1994
- 23 志村哲「関東における盾形埴輪について - 群馬県を中心として -」『埴輪研究会誌』第4号 2000
- 24 大泉町教育委員会『古海松塚古墳群』2002
- 25 古墳時代研究会『群馬県内の器財埴輪Ⅰ』2007
- 26 古墳時代研究会『群馬県内の器財埴輪Ⅱ』2008
- 27 中里正憲「群馬県における大刀形埴輪の変遷」『群馬考古学手帳』13 2003
- 28 中里正憲「群馬県西部の円筒埴輪編年 - 2条3段円筒埴輪を中心に -」『埴輪研究会誌』第6号 2002
- 29 志村哲「藤岡市」『群馬県内の横穴式石室Ⅰ』(西毛編) 1998
- 30 志村哲「藤岡市 (2)」『群馬県内の横穴式石室Ⅳ』(補遺編) 2001
- 31 藤岡市教育委員会「8. A 19 288号古墳」『年報 (23)』2007
- 32 小林孝秀「北武蔵における横穴式石室の動向とその系譜」『専修史学』第44号 2008
- 33 増田逸郎「北武蔵における横穴式石室の変遷」『信濃』第29巻第7号 1977
- 34 川井箱石遺跡調査会『川井箱石遺跡』1999



# 遺物 觀 察 表



## 凡 例

1. 遺物番号は本文中に掲載した実測図・写真図版中写真に付した番号と一致しており、挿図の順に掲載している。
2. 円筒埴輪の表については以下のとおりである。
  - a. 残存率・残存部位・法量の項で②は口縁部の直径を、③は底部の直径の計測値を表し、( ) の付くものは復元径であることを表す。④は器高の計測値を表し、〈 〉 の付くものは残高を表す。
  - b. 突帯の項の段間長の①は底部から第1突帯上端までを、②は第1突帯上端から第2突帯上端までを、③は第2突帯上端から口縁部先端までの計測値を表す。

断面形状については①は第1突帯、②は第2突帯をさす。台・M・三は、断面形状がそれぞれ台形、M字形、三角形を呈すること。1・2・3は1が突帯の上稜が下稜より高く突出していること。2は両者がほぼ同じ高さのもの、3は下稜が上稜より高いことを表す。
  - c. 透孔の項の形状は円は円形、半円は半円形のことをさす。縦は最大長を、横は最大幅を計測した。〈 〉 の付されたものは残存値である。
  - d. 胎土については形象埴輪も含め、砂礫の混入の度合いにより、A（多量）からD（微量）まで4分類をした。
  - e. 焼成は器面の観察からA良好、B普通、C不良と1硬質、2普通、3軟質に分類した。
  - f. ハケメの項のIからVIは本文中の分類内容を示している。数値は2cmあたりのハケメの本数である。
  - g. 成形・整形の特徴については外面はいずれも1次調整のタテハケが施されていることからその記述については省略している。
  - h. 基部粘土板の重ね合わせの上下は埴輪の底面側から見たときの状態を示している。
3. 形象埴輪の表については以下のとおりである。
  - a. 法量の項の①はタテ、②はヨコ、③は奥行き、④は器厚、⑤は直径の計測値を表し、〈 〉 は残存値、( ) は復元径であることを表す。
  - b. 胎土・焼成の項の分類は円筒埴輪のそれと同様の内容である。
  - c. ハケメの項の数値は2cmあたりのハケメの本数である
4. 弥生土器の表中の胎土の項の記号については表欄外に記したとおりである。
5. 古墳時代以降の土器の表中の法量については口は口縁部の直径を、底は底部の直径を表し、( ) は復元径であることを表す。高は器高を表し、〈 〉 は残高を表す。
6. 中・近世の古銭の表については計測値のうち、銭径A・Cは方孔の左上～右下の対角上で外径・内径を、銭径B・Dは右上～左下の対角上で外径・内径をノギスで計測した。銭厚は①は方孔の上、②は右、③は下、④は左の位置で同じくノギスで計測した。

円筒埴輪

円筒埴輪 (1) (第24図、P L 15 ~ 17)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量 (②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
001	墳丘斜面北東・東側、裾部北東側	①D3/4 ②25.5 ③15.1 ④40.5	①17.2 ②12.4 ③10.3	①M 1 ②M 1	円	(6.5) ×7.0	①C②B 2 ③橙	I 9	各段の割合は、基底部分がやや長く、胴部と口縁部の長さはほぼ同一である。内面は基底部下端から口縁部下位までは縦方向のナデを、それより上位にはナナメハケを施す。	外面は摩耗。基部粘土板の長さは9cm。第31図。
002	墳丘斜面東側	①口縁部上半 ② (25.0) ④ (6.5)					①C②B 2 ③明赤褐	I 10	他より先端の器肉が厚い。	器面はやや摩耗。
003	墳丘斜面北東・東側	①口縁部下半～胴部1/3 ④ (18.2)		①不明 ②M 1	円	(4.4) ×	①B②B 2 ③明赤褐	I 9	内面は縦方向に工具痕を残す様な強いナデ。	器面は摩耗。
004	墳丘斜面北東・東側	①胴部下半～基底部上半 ④ (13.1)		①台 2	円か	(3.9) × (6.2)	①C②B 2 ③明赤褐	I 7	外面はタテハケ。内面はナデ。	器面は摩耗。
005	墳丘外北東	①基底部1/4 ③ (15.4) ④ (15.3)					①C②A 2 ③橙	I 10	下端の形状はやや歪みくの字状に屈曲して立ち上がる。	基部粘土板の高さは9.0cm。
006	墳丘斜面東側	①基底部下半3/4 ③16.8 ④ (12.7)					①C②A 2 ③明赤褐	I 10	下端はわずかに歪むか。内面はナデ。	器面は摩耗。第31図。
007	墳丘斜面東側	①基底部下半1/4 ③ (17.0) ④ (9.2)					①C②A 2 ③明赤褐	I 10	基部粘土板近くで破断している。	底面に植物の茎状の圧痕。第31図。
008	墳丘斜面西側、西側トレンチ	①口縁部～胴部上位1/4 ② (28.0) ④ (9.8)	③6.2	①台 1			①A②A 2 ③橙	II 15	口縁部の先端は外縁がつままれた様に延びる。	
009	墳丘斜面西側	①口縁部破片 ④ (7.9)	③6.6	②台 3			①B②A 2 ③明赤褐	II 14	成形・整形ともに008に類似。	
010	墳丘斜面西・北西側、西側トレンチ	①口縁部～胴部上位1/3 ② (27.0) ④ (15.8)		②台 1	半円		①A②A 2 ③にぶい橙	III 17	口縁部の成形・突帯貼付は粗雑。突帯の断面形は三角形に近い。口縁部内面はハケメ。	胴部外面へラ記号。
011	墳丘斜面北・東・南東側	①口縁部～基底部上位1/4 ② (26.2) ④ (19.5)	②9.5 ③8.3	①台 1 ②台 1	円	(4.5) ×	①A②A 2 ③にぶい橙	III 15	010に比して小径。内面はナナメヨコハケをナデ消す。	
012	墳丘斜面西・南側	①口縁部上位～胴部上位1/4 ④ (12.3)		②台 1	円	× (5.5)	①B②A 2 ③明赤褐	III 15	透孔の切開は粗雑。内面は上半にナナメハケ。	
013	墳丘西側トレンチ	①基底部下位1/4 ③ (13.0) ④ (8.0)					①B②B 1 ③にぶい赤褐	III 15	内面下端に基部粘土板作成時についた木目痕を残す。	底面の調整は丁寧。
014	墳丘斜面西・南側	①基底部下位破片 ③ (13.0) ④ (6.4)					①B②B 1 ③にぶい赤褐	III 16	内面はナデ。	底面の調整は丁寧。
015	墳丘斜面西・北・北東側、北側トレンチ、墳頂部北側	①口縁部下半～基底部1/2 ③ (15.7) ④ (3.5)	①17.5 ②11.0	①台 1 ②台 1	円	(6.4) ×6.2	①C②A 2 ③橙	IV 19	内面は口縁部の一部にタテハケを残す。	口縁部外面へラ記号。第31図。
016	墳丘斜面北側	①口縁部～胴部上位破片 ② (26.2) ④ (20.7)	③10.8	①M 1			①C②A 2 ③橙	IV 18	内面は下半にナデ。上半にナナメタテハケ。	
017	墳丘斜面西側、墳頂部東側	①口縁部～胴部上位破片 ② (23.0) ④ (15.2)	③12.5	①M 1			①B②A 2 ③橙	IV 18	突帯貼付後のヨコナデの範囲は広い。	内面はやや摩耗。
018	墳丘斜面東・南側、裾部南側	①口縁部下半～基底部上位 1/3 ④ (19.4)	②11.9	①M 1 ②M 1			①C②A 2 ③橙	IV 19	内面は一部にナナメハケ。	口縁部外面へラ記号。

円筒埴輪 (2) (第25図、P L 15・17)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量 (②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
019	墳丘斜面北・北東側、北側トレンチ、墳頂部北側	①胴部下位～基底部中位 ④ (14.2)		①台 1	円か		①B②C 1 ③橙	IV 20	突帯貼付はやや粗雑。外面のタテハケは1単位が長い。	器面の一部還元状態に。
020	墳丘斜面北東側	①胴部下位～基底部上位1/3 ④ (14.0)		①台 1			①B②B 2 ③橙	IV 18	内面は突帯の裏側、やや上位に指頭圧痕。	内外面、やや摩耗。
021	墳丘斜面西側、西側トレンチ、墳頂部東側	①胴部下位～基底部3/4 ③ (13.1) ④ (20.7)	①15.8	①M 1	円か		①C②B 2 ③橙	IV 18	透孔は段間の下位に位置するか。	外面は摩耗。第31図。
022	墳丘斜面北東・東側、東側トレンチ	①胴部下半～基底部1/3 ③ (15.8) ④ (23.2)	①16.9	①M 1	円か	(2.8) × (7.2)	①C②B 2 ③灰褐	IV 19	内面は底面近くを強くオサエてからナデ。基部粘土板の高さは8.5cm。重ねは右を上。	第31図。

遺物観察表

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
023	墳丘斜面北東・東側	①1/3 ②23.8 ③13.8 ④40.7	①16.1 ②11.6 ③12.2	①M1 ②M1	半円	〈4.0〉 ×〈6.2〉	①C②B2 ③橙	V5	形状は一方に傾斜している。各部の長さは、口縁部と胴部はほぼ同率、基底部長い。内面は、基底部から3回に分けてナデ。口縁部にはナナメハケを施す。	胴部外面ヘラ記号。基部粘土板の高さは9cm。左を上重ねる。第31図。
024	墳丘斜面北東・東側	①口縁部～胴部1/2 ②(26.0) ④(21.8)	③11.2	②M2	半円	〈6.1〉 ×〈5.7〉	①C②B2 ③明赤褐	V5	口縁部は先端にいたり外反。内面は突帯の裏側に強い指頭圧痕。	
025	墳丘斜面北東・東側、北東トレンチ	①口縁部～胴部上半 ②(28.3) ④(16.7)	③10.5	②台1	半円		①B②B2 ③にぶい赤褐	V6	口縁部の先端は断面M字状を呈する。	
026	墳丘斜面北側	①口縁部～胴部上位 1/4 ②(24.2) ④(15.9)	③11.3	①台2	半円		①C②A2 ③にぶい赤褐	V6	口縁部は緩やかに外反する。	内面は摩耗。
027	墳丘斜面北・北東側、北側トレンチ	①口縁部～胴部上位 1/3 ②(26.0) ④(16.5)	③13.1	②台1 か			①C②B3 ③内面橙	V6	口縁部は長く立ち上がり、大きく外反。突帯貼付後のヨコナデは粗雑。口縁部内面はハケメをナデ消す。	
028	墳丘斜面北側	①口縁部上位1/3② (26.0) ④(4.5)					①C②B3 ③橙	V6	先端は断面M字状。内面に強い調子のヨコナデ。	外面にヘラ記号。
029	墳頂部東側、墳丘斜面～裾部北側	①口縁部上半1/4 ②(25.0) ④(7.8)					①C②B2 ③明赤褐	V6	外面先端のヨコナデは弱く、ハケ目が残る。	器面の一部、摩耗。
030	墳丘斜面北東・北側	①口縁部上位破片 ②(26.0) ④(8.0)					①C②B3 ③内面橙	V6	先端は平坦面をなす。	
031	墳丘斜面北・東側	①口縁部～胴部上位 1/4 ④(10.1)					①C②B2 ③橙	V5	口縁部先端は外縁が強く突出する。	
032	墳丘斜面北・西側	①口縁部～基底部上半 1/4②(25.0) ④(33.0)	②11.2 ③13.1	①台2 ②台2			①C②A2 ③橙	V6	口縁部先端は緩やかに外反して立ち上がる。	第1段突帯に布目痕。
033	墳丘斜面西側	①口縁部下位～基底部 上位④(21.7)	②12.6	①M1 ②台1			①B②B2 ③明赤褐	V6	内面は口縁部にハケメ。以下はナデ。	胴部以外の外面は摩耗。
034	墳丘裾部北側	①胴部下位～基底部 上位1/4 ④(12.0)		①台1	円か		①C②B2 ③明赤褐	V6	内面はナデ。一部に接合痕を残す。	小径か。
035	墳丘斜面南側	①口縁部～胴部上位破 片 ④(11.6)		②M1	円か		①C②B2 ③明赤褐	V6	内面は口縁部にナナメハケ。	口縁部外面にヘラ記号。

円筒埴輪(3)(第26図、PL15・16・18)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
036	墳丘斜面東側	①胴部下位～基底部 上位1/4 ④(11.8)		①台1	円か	〈2.2〉 ×〈6.0〉	①C②B2 ③明赤褐	V6	突帯貼付は粗雑。内面はナデ。	小径か。
037	墳丘斜面東・南側、 墳丘南東攪乱部分	①基底部～胴部1/4 ④(11.5)		①台2	円か	〈3.7〉 ×〈7.5〉	①C②B2 ③橙	V5	内面はナデ。突帯裏側には一部ヨコ方向のナデ。	
038	墳丘斜面北・東側	①口縁部下位～胴部 上位破片 ④(8.8)		②台1			①C②C1 ③内面橙	V6	内面にナデ、指頭圧痕が見られる。	小径か。外面、灰褐。
039	墳丘斜面西側	①口縁部下半～基底部 1/2③(15.8) ④(35.4)	①12.3 ②16.6	①台1 ②M2	円 縦長	〈6.2〉 ×5.9	①B②B2 ③明赤褐	V6	器形は歪み、一方に傾く。基部粘土板の厚さも不均等。	器面摩耗。基部粘土板は6.0cm。第31図。
040	墳丘斜面西・北側	①基底部下半1/4 ③(15.0) ④(8.6)					①C②A3 ③褐灰	V6	内面は粗雑なタテナデ。基部粘土板の重ねは右が上。	第31図。
041	石室崩落土	①基底部下半1/4 ③(14.0) ④(11.4)					①C②A2 ③明赤褐	V6	器形は一方に傾いていた可能性が考えられる。基部粘土板の高さは9.0cm。	底面に針状の工具による刺突痕。第31図。
042	墳丘斜面西・南側	①基底部下半1/3 ③(12.0) ④(10.2)					①C②B2 ③明赤褐	V6	基部粘土板の重ねは右が上。	器面はやや摩耗。第31図。
043	墳頂部西側、墳丘 斜面北側	①基底部下半1/4 ③(14.0) ④(9.0)					①C②C1 ③明褐	V6	基部粘土板の高さは7.0cm。	内面灰褐。
044	墳丘斜面北側	①基底部下半破片 ③(14.0) ④(8.6)					①C②C1 ③灰褐	V6	基部粘土板部分で破断、粘土板の高さは7.8cm。	
045	墳丘斜面東側、北 東トレンチ	①基底部下半破片 ③(13.0) ④(8.6)					①C②B2 ③明赤褐	V6	内面はナデ。	器面はやや摩耗。

円筒埴輪

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
047	墳頂部・墳丘斜面 北側	①基底部下半破片 ③ (14.0) ④ (9.4)					①C②B 2 ③赤褐	V 6	基部粘土板部分で破断か。	器面は摩耗。
048	墳丘斜面西側	①基底部下半1/4 ③ (13.0) ④ (9.6)					①C②B 2 ③明赤褐	V 6	基部粘土板の高さは7.5cm、重 ねは右が上。	
049	墳頂部北側、墳丘 斜面西・北・東側	①基底部下半破片 ③ (18.0) ④ (15.3)					①C②C 1 ③橙	V 6	直径が他より大きいのは形状が 歪んでいるためか。基部粘土板 の高さは7.0cm。重ねは右が上。	内面灰褐。
050	墳丘斜面北側	①基底部下半1/4 ③ (17.0) ④ (11.0)					①C②C 1 ③明褐	V 6	基部粘土板の高さは7.8cm。重 ねは右が上。	焼成著しく不良。 内面灰褐。第31図。
051	墳丘斜面北東側	①口縁部破片 ④(5.0)					①C②B 2 ③明褐	I 9	内面は先端に強い調子のヨコ ナデ。	
052	墳丘斜面西側	①口縁部破片 ④(5.7)					①C②B 2 ③明赤褐	I 10	先端は著しく強く外反。	
053	墳丘斜面西側	①口縁部破片 ④(8.2)					①C②A 2 ③明赤褐	I 11	先端は強く外反。	
054	墳丘斜面東側	①口縁部破片 ④(9.0)					①C②B 2 ③明赤褐	I 10	外面は先端に幅広くヨコナ デ。	内面は摩耗。
055	墳丘斜面北東側	①口縁部下位～胴部上 位 ④ (6.6)		②M 2			①C②B 2 ③明赤褐	I 10	突帯は幅広く突出度が弱い。	
056	墳頂部東側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④ (6.9)		①台 1			①C②B 2 ③明赤褐	I 11	基部外面のタテハケは面取 りをするかの様に工具が動い ている。	器面やや摩耗。
057	墳頂部南側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④ (7.0)		①M 1			①C②B 2 ③明赤褐	I 12	外面はタテハケ。内面はナデ。	形象基部の可能性 あり。
058	墳丘斜面東側	①基底部下半破片 ④ (8.7)					①B②C 1 ③橙	I 10	基部粘土板の高さは8.0cm。	
059	墳丘斜面北東・東 側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④ (10.3)		①M 1			①C②B 2 ③明赤褐	I 10	外面はタテハケ。内面はナデ。	器面は摩耗。
060	墳丘斜面東側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④ (5.3)		②M 2			①C②A 2 ③明赤褐	I 10	突帯貼付後周辺を幅広くヨコ ナデ。	
061	墳丘斜面東側	①基底部下半破片 ④ (8.8)					①C②B 2 ③明赤褐	I 9	基部粘土板の高さは9.0cm。重 ねは右が上。	

円筒埴輪 (4) (第27図、PL16)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
062	墳丘斜面東側	①基底部下半破片 ④ (10.4)					①B②C 2 ③橙	I 8	ハケメの残存は良好。8本1 単位の施文具を使用か。基部 粘土板の高さは8.0cm。重ねは 右が上。	第31図。
063	墳丘斜面北東側	①基底部下半破片 ④ (6.8)					①C②B 2 ③明赤褐	I 10	下端で形状がやや歪む。	底面に植物の茎状 の圧痕。
064	墳丘北側トレンチ	①基底部下半破片 ④ (9.9)					①C②B 2 ③明赤褐	I 12	基部粘土板の高さは8.5cm。	
065	墳丘斜面東側	①基底部下半破片 ④ (11.3)					①C②A 2 ③明赤褐	I 12	底面近くで形状が歪んでい る。基部粘土板の高さは8.5cm	
066	墳頂部東側	①基底部下半破片 ④ (6.1)					①C②B 2 ③明赤褐	I 10	底面寄り外側に歪む。基部 粘土板の高さは9.0cm。	
067	墳丘斜面北側	①基底部破片 ④ (6.8)					①C②A 2 ③明赤褐	I 12	底面近くで形状が大きく歪 む。内面は強い調子のナデ。	
068	墳丘斜面北・東側	①口縁部上位破片 ② (24.0) ④ (6.2)					①B②B 2 ③明赤褐	II 14	口縁部の先端は断面M字形を 呈するが008とは異なる。	
069	墳丘斜面北側	①口縁部上位破片 ④ (3.9)					①B②A 2 ③明赤褐	II 12	口縁部は短く立ち上がり、先 端は外稜がつままれた様に延 びる。	
070	墳丘斜面西側、西 側トレンチ	①胴部上位～口縁部下 位破片 ④ (7.5)		①台 1	円		①B②B 2 ③橙	II 15	内面はナナメヨコハケに一部 ナデを重ねている。	突帯の上幅は狭 い。
071	墳丘斜面東側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④ (7.5)		②台 1			①B②B 2 ③橙	II 16	内面は全面にナナメヨコハ ケ。	

遺物観察表

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
072	墳丘上	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈6.9〉		②台1	円		①C②B2 ③橙	II14	内面は全面にナナメヨコハケ。	
073	墳丘斜面東側	①口縁部下位～胴部上半破片 ④〈12.4〉		②M1	円か		①C②B2 ③明赤褐	II17	突帯の幅は狭い。突帯貼付後のヨコナデは上稜側で2回に分けて調整している。	
074	墳丘斜面東側、墳丘南東攪乱部分	①口縁部下位～胴部上半破片 ④〈8.2〉		②三	円		①B②B2 ③橙	II17	内面はナデ。わずかにハケメが見られる。	
075	墳丘斜面北側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈6.9〉		②三			①B②B2 ③橙	II16	突帯の一部は断面が台形を呈する部分もある。	
076	墳丘斜面西側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈6.8〉		②三			①B②B2 ③橙	II15		074・075と同一か。
077	石室崩落土	①胴部下位～基底部上位破片 ④〈6.3〉		①台1			①C②A2 ③明赤褐	II16		朝顔形か。
078	墳丘斜面西側	①口縁部下位～胴部上半破片 ④〈7.3〉		①台1	円		①C②A2 ③橙	II16		胴部外面ヘラ記号。
079	墳丘斜面西側	①胴部下位～基底部上半破片 ④〈12.4〉		①台1	円		①C②B2 ③明赤褐	II16		外面に黒色の付着物。
080	墳丘南東攪乱部分	①基底部下半破片 ④〈9.2〉					①B②B2 ③橙	II16	器肉は薄い。	
081	墳丘斜面西側	①口縁部上位破片 ④〈4.8〉					①B②A2 ③明赤褐	III15	口縁部先端の外稜は鋭く成形されている。	
082	墳丘斜面南側	①口縁部破片か ④〈3.3〉					①C②B2 ③明赤褐	III20	形象の可能性はあるか。	外面にヘラ記号。
083	墳丘斜面北側	①口縁部破片か ④〈3.0〉					①C②B2 ③明赤褐	III20	形象の可能性はあるか。	外面にヘラ記号。
084	墳丘斜面北側	①口縁部～胴部上位破片 ④〈5.2〉		②M1			①C②B2 ③橙	III20	形象の可能性はあるか。	外面にヘラ記号。
085	墳丘斜面北側	①胴部上位破片 ④〈6.8〉		①M1か	円		①A②A1 ③明赤褐	III16		外面にヘラ記号。
086	墳丘斜面東側	①胴部下位～基底部上位破片 ④〈6.0〉		①M1	円か		①A②A1 ③明赤褐	III16	突帯の断面形は三角形に近い。透孔は段間の下位に位置する。	
087	墳丘斜面東側	①胴部下位破片か ④〈9.5〉		①M1か			①B②A1 ③明赤褐	III16	突帯の断面形は三角形に近い。	
088	墳丘斜面東側	①胴部下位～基底部上位破片④〈8.0〉		①三			①A②A1 ③明赤褐	III16	突帯貼付後広い範囲にヨコナデ。	

円筒埴輪(5)(第28図、PL16・17)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
089	墳丘斜面北側	①口縁部上位破片 ④〈6.0〉					①C②A2 ③明赤褐	IV18	先端は断面M字状。先端内面のヨコナデの範囲広い。	
090	墳丘斜面北側	①口縁部上位破片 ④〈7.1〉					①B②A2 ③橙	IV18	外面の先端は幅広いヨコナデ。	
091	墳頂部北側	①口縁部上位破片 ④〈7.7〉					①B②A2 ③橙	IV18	内面はナナメハケの一部にナデを重ねる。	外面は摩耗。
092	墳丘斜面東側	①口縁部上位破片 ④〈4.5〉					①C②A2 ③明赤褐	IV18	外面の先端はタテハケ後幅広いヨコナデ。	
093	墳丘斜面北・北東側	①口縁部破片か ④〈4.5〉					①C②A2 ③明赤褐	IV20	先端は欠損。	外面にヘラ記号。
094	墳丘斜面北側	①口縁部上位破片 ④〈4.1〉					①C②A2 ③橙	IV24	先端は器肉が薄い。	外面にヘラ記号。
095	墳丘南東攪乱部分	①口縁部破片か ④〈5.7〉					①C②B3 ③橙	IV19	先端は器肉が厚い。先端のヨコナデの幅は広い。	
096	墳丘斜面北側	①口縁部上位破片 ④〈3.8〉					①C②A2 ③明赤褐	IV16	先端は外方に強く屈折して立ち上がる。	
097	墳丘斜面西・東側	①口縁部上位～胴部上位破片 ④〈13.1〉		②台1	円		①B②B2 ③明赤褐	IV18		
098	墳丘斜面北・北東側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈6.9〉		②M1	半円		①C②B2 ③橙	IV19	突帯貼付後強い調子のヨコナデ。	

円筒埴輪

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
099	墳丘斜面東側	①口縁部～胴部破片 ④〈4.6〉		②M1	半円		①C②A2 ③橙	IV19	突帯貼付後広い範囲にヨコナ デを重ねる。	形象か。外面に赤 彩か。
100	墳丘斜面東・南側	①口縁部下位～胴部中 位破片 ④〈9.2〉		②M1	円		①C②B2 ③橙	IV18	内面は突帯の裏側に指頭圧 痕。	
101	墳丘斜面北側	①胴部上位～基底部上 位1/4 ④〈12.0〉		①台1	円		①B②A2 ③明赤褐	IV18	内面にはナデ。突帯の裏側 には指頭圧痕。	
102	墳丘東側トレンチ	①口縁部上半破片 ④〈10.2〉		②M2	円		①C②B2 ③橙	V5	先端は大きく外反する。断面 形はM字状を呈する。	内外面、摩耗。
103	墳丘斜面西側	①口縁部上半破片 ④〈5.9〉					①C②B2 ③明赤褐	V6	先端は器肉が整っている。断 面形はM字状を呈する。	内面は摩耗。
104	墳丘斜面東側、墳 丘南東攪乱部分	①口縁部上半破片 ④〈7.0〉					①C②B2 ③橙	V6	器肉薄く、形状は整っている。 内面はナナメタテハケ。	
105	墳丘斜面北側、墳 丘南東攪乱部分	①口縁部上位破片 ④〈9.3〉					①C②B2 ③明赤褐	V6	先端は平坦面をなす。内面は 幅広くヨコナデ。	朝顔形か。
106	墳丘斜面西側	①口縁部上位破片 ④〈6.3〉					①C②C2 ③明赤褐	V6	先端は平坦面を形作るが粗 雑。	焼成、還元済み。
107	墳丘斜面～裾部北 側、北側トレンチ	①口縁部上位破片 ④〈3.7〉					①C②C3 ③明赤褐	V5	先端は強く外反。内面には強 い調子のヨコナデ。	焼成は不良で、還 元焼成状態。
108	墳丘斜面西側	①口縁部上半破片 ④〈7.3〉					①C②B2 ③明赤褐	V6	先端は断面形がM字状を呈 する。	器面はやや摩耗。
109	墳丘斜面～裾部東 側	①口縁部上位 ④〈6.1〉					①C②B2 ③明赤褐	V6	先端は断面形がM字状を呈 する。	内面は摩耗。
110	墳丘斜面～裾部北 側	①口縁部上位破片 ④〈4.4〉					①C②A2 ③橙	V5	先端は断面M字状。	
111	墳丘斜面北側	①口縁部上半破片 ④〈4.4〉					①C②B2 ③橙	V6	外面のタテハケは先端間近ま で見られる。	

円筒埴輪 (6) (第29図、PL16～18)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
112	墳丘斜面東側	①口縁部下位破片 ④〈7.9〉					①C②A2 ③明赤褐	V6	内面はナナメヨコハケ。	内外面、摩耗。
113	墳頂部・墳丘斜面 北側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④〈7.9〉		②台1	半円か		①C②C1 ③明赤褐	V5	突帯貼付後のヨコナデは上稜 側が強い調子で施されてい る。内面はナナメタテハケに ナデを重ねる。	118・131と同一個 体。
114	墳頂部東側、墳丘 東側トレンチ	①胴部下位～基底部上 位破片 ④〈10.0〉		①M1			①C②C1 ③明赤褐	V6	内面はナナメタテハケにナデ を重ねる。	
115	墳丘斜面西側	①口縁部～胴部上位破 片 ④〈7.8〉		②台2	半円		①C②B2 ③明赤褐	V6	内面は口縁部にナナメハケ。	
116	墳丘東側トレンチ	①口縁部下位～胴部上 位 ④〈7.7〉		①M1	円		①C②B2 ③橙	V5		102と同一個体。
117	墳丘裾部北側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④〈7.0〉		②台2 低い	円か		①C②B2 ③明赤褐	V6	内面はナナメハケ。	
118	墳頂部北側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④〈5.7〉		②台1			①C②C1 ③橙	V5		
119	墳丘斜面西側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④〈7.0〉		②台1	円		①C②C1 ③明赤褐	V6	113と同様。	
120	墳丘斜面～裾部北 側、北側トレンチ	①口縁部下位破片 ④〈6.7〉					①C②C3 ③明赤褐	V6	内面にもハケメ。	外面にヘラ記号。
121	墳丘斜面北側	①口縁部破片 ④〈3.6〉					①C②B2 ③明赤褐	V5		外面に2条のヘラ 記号。
122	墳丘斜面東側	①胴部破片 ④〈6.2〉					①C②B2 ③明赤褐	V6		外面にヘラ記号。
123	墳頂部東側	①胴部破片 ④〈2.1〉					①C②B2 ③明赤褐	V6		外面にヘラ記号。
124	墳丘斜面西側	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④〈7.0〉		②M1	円か		①C②B3 ③橙	V5		胴部外面にヘラ記 号。
125	墳丘東側トレンチ	①口縁部下位～胴部上 位破片 ④〈3.9〉		①台1			①C②B2 ③明赤褐	V6		胴部外面にヘラ記 号。

遺物観察表

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量 (②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
126	墳丘東側トレンチ	①胴部～基底部破片 ④〈14.5〉		①M1	円		①C②B2 ③橙	V5		102と同一個体。
127	墳丘斜面北東・東側	①胴部破片 ④〈5.5〉			円か		①C②B3 ③橙	V5	内面はナデ。	内外面、やや摩耗。
128	墳丘斜面北東側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈8.8〉		①M2			①C②B2 ③明赤褐	V6		胴部外面にヘラ記号。
129	墳丘斜面東側	①胴部下位～基底部上位破片 ④〈7.5〉		①M1			①C②B2 ③明赤褐	V5	内面にナデ、指頭圧痕が見られる。	
130	墳丘斜面北側、北西トレンチ	①胴部下位～基底部上位破片 ④〈10.0〉		①台1			①C②C1 ③橙	V6	131と同様。	
131	墳丘斜面北側	①胴部下位～基底部上位破片 ④〈8.9〉		①台1	半円か		①C②C1 ③橙	V6	内面は縦方向にナデを施すが一部に接合痕を残す。	
132	墳丘斜面西側	①胴部破片 ④〈8.9〉		①台2	円か		①C②B2 ③明赤褐	V5		内面は摩耗。
133	石室右壁背面	①胴部下位～基底部上位か、破片 ④〈5.6〉		①台1		(40) ×(6.7)	①C②B2 ③明赤褐	V6	突帯貼付は粗雑。	朝顔形か。
134	墳丘斜面東側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈4.6〉		②台2			①C②B2 ③明赤褐	V?		突帯に線刻か。
135	墳丘斜面東側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈5.1〉		②M1			①C②A2 ③橙	V5	突帯貼付後のヨコナデは丁寧に施される。	
136	墳丘斜面西側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈4.2〉		②M1	半円		①C②A2 ③橙	V5	内面はナデ。	

円筒埴輪 (7) (第30図、PL18)

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量 (②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
137	墳頂部北側、墳丘斜面北・北東側	①基底部下半破片 ④〈13.6〉					①C②C1 ③橙	V5	底面には丁寧なナデ。基部粘土板の高さは7.0cm。	
138	墳丘斜面北・北東側、裾部北側	①基底部下半1/4 ④〈12.5〉					①C②B3 ③明赤褐	V6	外面は下端で形状がやや歪む。底面に成形時の工作台の木目痕が見られる。	
139	墳頂部北側	①基底部下半破片 ③〈14.0〉④〈9.8〉					①C②A2 ③明赤褐	V6		底面に礫の圧痕。
140	墳丘斜面東側	①基底部下半破片 ④〈9.4〉					①C②B3 ③橙	V5	下端は形状が歪みくの字状に外折する。	
141	墳丘上	①基底部下半破片 ④〈8.2〉					①C②B2 ③明赤褐	V6	基部粘土板の高さは9.0cm。	
142	墳丘斜面南側	①基底部下半破片 ③〈14.0〉④〈9.0〉					①C②B2 ③明赤褐	V6		
143	墳丘斜面北東側	①基底部下半破片 ④〈9.4〉					①C②B3 ③明赤褐	V7	底面に成形時の工作台の木目痕が見られる。	外面は摩耗。第31図。
144	墳丘斜面～裾部北・北東・東側	①口縁部～胴部上位破片 ④〈12.9〉		②台1			①C②B2 ③明赤褐	VI9	先端は欠損する。	朝顔形か。
145	墳丘斜面北側	①口縁部～胴部上位破片 ④〈9.1〉					①C②B2 ③明赤褐	VI8	突帯は突出度が強い。	朝顔形か。内面は摩耗。
146	墳丘斜面北側、北側トレンチ	①口縁部～胴部上位破片 ④〈7.0〉		②M2			①C②B2 ③明赤褐	VI11	内面にはナデ、指頭圧痕。	朝顔形か。
147	墳丘斜面北側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈10.5〉		②台2			①C②A2 ③明赤褐	VI8	突帯は幅が狭く、その貼付は粗雑。	
148	墳丘上	①口縁部～胴部上位破片 ④〈3.0〉					①C②B2 ③明赤褐	VI13	突帯は突出度が強い。	外面にヘラ記号。
149	墳丘斜面西側	①胴部中位破片 ④〈4.2〉			半円か		①C②B2 ③明赤褐	VI8		
150	墳丘斜面東側	①胴部上位～基底部下位破片 ④〈5.6〉		①台2			①C②B2 ③明赤褐	VI7	突帯は上稜・下稜とも丸みをおびている。	
151	墳丘斜面東側	①口縁部下位～胴部上位破片 ④〈4.3〉		②台1			①C②B2 ③明赤褐	VI11		内面は摩耗。

番号	出土位置	①残存部位・残存率 法量(②口径③底径 ④高) cm	突 帯		透 孔		胎 土① 焼 成② 色 調③	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
			段間長	断 面 形 状	形 状	縦×横				
152	墳頂部・墳丘斜面 東側	①肩部～胴部上半1/2 ④(14.7)		上台1 下台2	半円		①C②A 2 ③にぶい赤 褐	V 6	肩部の張りは弱く、頸部もし まらない。内面はナナメハケ にナデを重ねるが、粘土紐の 接合痕を残す。	朝顔形。胴部外面 にヘラ記号。
153	墳丘斜面西側	①口縁部下位破片 ④(5.1)		M 1			①C②B 2 ③赤褐	I か 8	断面に疑似口縁の接合状況が 見られる。	朝顔形。
154	墳丘斜面西側	①口縁部下位破片 ④(6.2)		M 1			①C②B 2 ③明赤褐	不明	断面に疑似口縁の接合状況が 見られる。	朝顔形。器面は摩 耗。
155	墳丘斜面東側	①口縁部下位破片 ④(6.6)		台 1			①C②B 2 ③明赤褐	不明	断面に疑似口縁の接合状況が 見られる。	朝顔形。内面は摩 耗。
156	墳丘斜面北東側	①頸部破片 ④(4.0)		M 3			①C②B 2 ③明赤褐	—	くびれ部に突帯が貼付されて いる。	朝顔形。内面は摩 耗。

## 形象埴輪

### 家形埴輪 (第32・33図、P L 19)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎 土 ②焼 成 ③色 調	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備 考
157	家 棟頂部、堅魚木	墳丘斜面東側	①(9.5) ②(18.4) ③(10.3)	①B②B 2 ③明赤褐	—	中実の堅魚木が3箇所貼付される。その芯心間の距離 は約6cm。堅魚木の法量は長さ6.5～7.0cm、幅3.2cmと3.3 cmである。内面の断面形状はドーム形を呈し、一部粘土 を充填し補強が図られている。	器面、やや摩耗。
158	家 堅魚木	墳丘斜面東側	①(3.7) ②(4.9) ③(8.3)	①B②B 2 ③明赤褐	—	棟頂部から剥落したもの。円柱状を呈しており、棟頂部 の一部も残る。	
159	家 堅魚木	墳丘斜面北側	①(3.1) ②(4.6) ③(7.6)	①B②B 2 ③明赤褐	—	棟頂部から剥落したもの。横断面形状は隅丸の山形である。	
160	家 棟頂部・堅魚木	墳丘斜面北側	①(5.4) ②(7.9) ③(7.6)	①B②B 2 ③明赤褐	—	内面には粘土を貼り足し補強を行っている。堅魚木の長 さは8.0cm、幅は3.3cmである。	
161	家 棟頂部・堅魚木	墳丘斜面東側	①(5.4) ②(7.4) ③(7.8)	①B②B 2 ③明赤褐	—	堅魚木の長さは7.8cm、幅は3.5cm。	
162	家 上屋根流れ下半 部	墳丘斜面北東・ 東側	①(20.2) ②(30.3) ④2.4	①B②B 2 ③明赤褐	16	左端の一部は破風へ移行するため反り返っている。下幅26 cmの粘土帯2本は約15cmの間隔を保ち垂下し、横方向の幅 2.0～2.2cmの粘土帯に接している。この部分にはボタン状 の円形貼付文が付く。外面は不定方向にハケメ。内面はナデ。	内面は摩耗。
163	家 上屋根流れ	墳丘斜面東側	①(12.3) ②(14.5)	①B②B 2 ③明赤褐	不明	縦方向の帯と横方向の帯が接する部分の破片である。ボ タン状の円形貼付文が見られる。	
164	家 上屋根流れ	墳丘斜面東側	①(11.8) ②(10.6)	①B②B 2 ③明赤褐	不明	縦方向の帯が認められる。	
165	家 上屋根	墳丘上、詳細不 明	①(4.8) ②(14.6)	①B②B 2 ③明赤褐	不明	上屋根の軒先と考えられる破片である。内面の剥離痕は 下屋根との接合痕と考えられる。	外面は摩耗。
166	家 上屋根流れ～破 風	墳丘斜面東側	①(13.0) ②(15.4) ④1.6	①B②B 2 ③明赤褐	17	妻部分は大きく外反して破風板となる。流れの部分には 縦方向の粘土帯が垂下する他は内外面とも文様は施され ていない。流れの外面にはハケメ。内面にはナデ。破風 は妻側にハケメ。反対側はハケメをナデ消している。	赤彩あるか。
167	家 上屋根	墳丘斜面東側	①(9.5) ②(9.0)	①B②B 2 ③明赤褐	不明	棟頂部または妻側に近い流れ部分の破片か。下幅2.4cmの 粘土帯が縦方向に貼付されている。	器面は摩耗。
168	家 上屋根流れ	墳丘斜面東側	①(8.0) ②(6.9)	①B②B 2 ③明赤褐	16	縦方向の帯が認められる。内面に縦方向のハケを残すこ とから破風に近い部分と考えられる。	
169	家 上屋根破風	墳丘斜面東側	①(15.2) ②(9.0)	①B②B 2 ③明赤褐	17	妻部分の中位に取り付く破風の部分と考えられる。器面 にハケメを施す。	
170	家 上屋根破風	墳丘斜面東側	①(6.5) ②(6.7)	①B②B 2 ③明赤褐	—	171と同様の部位の破片である。外面には円形の貼付文を 重ねた粘土帯が見られる。	
171	家 上屋根破風	墳丘斜面北東側	①(9.7) ②(9.7) ④1.8	①B②B 2 ③明赤褐	—	妻部分下位に付く破風の破片である。反りはわずかにな る。外面には上方から垂下する下幅2.4cmの粘土帯が見ら れる。内面側の割れ口は下屋根との接合痕と考えられる。	
172	家 下屋根～壁体	墳丘斜面西側	①(10.5) ②(14.2) ④2.9	①B②B 2 ③橙	不明	下屋根の軒先部分から壁面に移行する部分の破片である。 下屋根は壁体部分と一体に連続して成形した後人物の 裾部と同様、外側から粘土を貼り足し、軒の傾斜を作っ ている。四柱部を形成する粘土帯が延びている。壁体には 下屋根直下に横方向の突帯が延びている。	器面は摩耗。



遺物観察表

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
173	家 下屋根	墳丘西側トレンチ	① (6.8) ② (11.4) ④2.9	①B②B 2 ③明赤褐	不明	下屋根の隅部分に当たる。成形は172と同様である。下位に四柱部として延びる粘土が残っている。	器面は摩耗。
174	家 下屋根	墳丘斜面西側	① (8.2) ② (9.0) ④3.0	①B②B 2 ③橙	不明	下屋根の一部である。成形は172と同様である。外面にハケメを残す。	器面は摩耗。
175	家 四柱部隅	墳丘斜面南側	① (7.1) ② (4.6) ④2.6	①B②B 2 ③にぶい橙	—	四柱隅に縦方向に貼付された粘土帯である。途中から横方向の延びる突帯が見られる。裏面に剥離痕が見られる。	天地不明。
176	家 壁体	墳丘斜面西側	① (10.2) ② (3.2) ④2.7	①B②B 2 ③にぶい黄橙	—	四柱部の破片である。横断面は三角形に近く、一面には壁体からの剥離痕が見える。	器面は摩耗。
177	家 四柱部隅	墳丘斜面南側	① (5.4) ② (3.6) ④ 2.4	①B②B 2 ③橙	—	横断面三角形の突帯状を呈した粘土紐である。一面は本体かへの剥離痕が見られることから四柱部の破片と考えた。	
178	家 四柱部下端	石室崩落土内	① (5.8) ② (7.5) ③ (2.1)	①B②B 2 ③明赤褐	—	外面には横方向の突帯が貼付される。外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。	

盾形埴輪 (第34・35図、P L 19・20)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
179	盾 上辺突出部	墳丘斜面北側	① (14.2) ② (20.27) ③ (5.0)	①B②B 2 ③橙	—	円筒部上端は徐々に狭まり、上辺突出部の粘土板を前後から挟み込んで閉じられている。外面にヘラ描きによる鋸歯文が見られる。	器面は摩耗。やや摩耗。
180	盾 右側破片	墳丘斜面西側	① (21.2) ② (10.4) ③ (5.0)	①B②B 2 ③明赤褐	12	正面には外区と内区を区画する縦方向のヘラ描き沈線と外区に配された鋸歯文の一部が見られる。	赤彩。
181	盾 右側破片	墳丘斜面北側	① (15.7) ② (7.3) ④2.0	①B②A 2 ③赤褐	不明	外区にはヘラ描き沈線による鋸歯文が見られる。後面には横方向の粘土帯2条。	天地不明。後面は摩耗。赤彩。
182	盾 右側破片	墳丘斜面東側	① (13.7) ② (5.5) ④1.4	①B②A 2 ③赤褐	—	正面、外区の鋸歯文は一辺約13cm。後面には横方向の粘土帯を貼付。	天地不明。
183	盾 右側破片	墳丘斜面北・北東・東側	① (29.0) ② (6.2) ④1.4	①B②A 2 ③赤褐	不明	外区にはヘラ描き沈線による鋸歯文が見られる。鋸歯文の一辺は約7cm。後面には横方向の粘土帯3条。	後面は摩耗。
184	盾 左側破片	墳丘斜面南側	① (14.8) ② (6.1) ④1.4	①B②B 2 ③赤褐	—	外区に鋸歯文。後面に粘土帯。内外面ともナデ。	器面は摩耗。
185	盾 内区右側破片	墳丘斜面西側	① (23.3) ② (9.9) ③ (8.1)	①C ②B 2 ③赤褐	12	正面には外区と内区を区画する縦方向のヘラ描き沈線と外区に配された鋸歯文の一部が見られる他に内区を上下に区分する沈線文の一部が見られる。	赤彩か。
186	盾 内区右側上位から外区	墳丘東側トレンチ	① (20.0) ② (9.8) ③ (5.5)	①B②B 2 ③橙	—	外区と内区を区画する縦方向のヘラ描き沈線と外区に配された鋸歯文の一部が見られる。	器面は摩耗している。
187	盾 右側破片	墳丘斜面東側	① (16.3) ② (6.5) ③ (5.2)	①B②B 2 ③明赤褐	11	正面には外区と内区を区画する縦方向のヘラ描き沈線と外区に配された鋸歯文の一部が見られる。後面は横方向のハケメが一面に施される。	
188	盾 内区右側上位から外区	墳丘斜面東側	① (10.4) ② (7.1) ③ (4.7)	①B②B 2 ③明赤褐	8	正面は内区・外区を縦方向の2本のヘラ描き沈線で区画。外区には鋸歯文が配されている。後面には横方向の粘土帯が見られる。	赤彩か。器面は摩耗。
189	盾 右側破片	墳丘斜面東側	① (14.3) ② (9.0) ③ (4.4)	①B②B 2 ③明赤褐	—	円筒部から盾面にいたる破片。後面に粘土帯を貼付する。	器面は摩耗。
190	盾 左側破片	墳丘東側トレンチ、墳頂部	① (13.4) ② (9.3) ③ (6.7)	①C②A 2 ③明赤褐	—	外区下端の残存である。内区との間を縦方向のヘラ描き沈線で区切り、鋸歯文を配する。	赤彩。
191	盾 内区左側破片	墳丘斜面東側	① (10.4) ② (5.9) ③ (6.2)	①B②B 3 ③橙	14	内区左隅周辺の破片である。下端には低い粘土帯が貼付され、縁辺部を強調している。後面に直径2.5cm程の小孔が穿たれている。	
192	盾 左側破片	墳丘斜面東側	① (7.1) ② (15.2) ④2.1	①B②A 2 ③赤褐	—	隅は鋭角をなす。正面は無文でハケメあるいは粗いナデを施す。後面に粘土帯貼付。	後面はやや摩耗。
193	盾か	墳丘斜面南側	① (17.5) ② (11.0) ④1.2	①B②B 2 ③赤褐	10	縁辺部が弧状を描く板状の破片である。一面にハケメを残すが、もう一面にはナデが施される。	天地不明。
194	盾か	墳丘東側、東側トレンチ	① (10.4) ② (9.8) ④1.0	①B②B 2 ③赤褐	不明	縁辺部が弧状を描く板状の破片である。器面の調整は193と同様である。	天地不明。器面はやや摩耗。
195	盾か	石室崩落土内	① (8.3) ② (7.0) ④1.3	①B②B 2 ③赤褐	18	縁辺部が弧状を描く板状の破片である。器面の調整は193と同様である。	天地不明。
196	盾か	墳頂部東側	① (9.2) ② (6.3) ④1.8	①B②B 2 ③赤褐	11	縁辺部が弧状を描く板状の破片である。器面の調整は193と同様である。	天地不明。器面はやや摩耗

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケ メ	成形・整形の特徴	備 考
197	盾か	石室崩落土内	① (6.6) ② (7.3) ④2.0	①B②B 2 ③赤褐	—	縁辺部が弧状を描く板状の破片である。器肉は均一ではない。器面の調整は193と同様である。	天地不明。片面は摩耗。

靱形埴輪 (第36・37図、P L 20)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケ メ	成形・整形の特徴	備 考
198	靱 矢尻部分	墳丘斜面北東側	① (9.2) ② (5.1) ④1.4	①C②A 2 ③明赤褐	—	矢筒の口から飛び出した矢柄を表現した板状破片である。鏝は紐状の粘土を貼付している。先端に刻みを入れ矢尻を意識している。他に剥離痕2本が見られる。	
199	靱 矢尻部分	墳丘斜面北東側	① (4.6) ② (2.9) ④1.4	①C②A 2 ③にぶい橙	—	矢筒の口から飛び出した矢柄が1本表現されている。198と同一個体と考えられる。	後面は摩耗。
200	靱 矢尻部分	墳丘斜面南東・南側	① (8.4) ②9.0 ④1.5	①C②A 2 ③明赤褐	—	矢筒の口から飛び出した矢柄を表現した板状破片である。鏝は紐状の粘土を貼付している。2本が残存。他に5本の剥離痕が見られる。	
201	靱 矢筒部～基台部	石室崩落土内	① (19.4) ⑤ (15.5)	①B②A 2 ③明赤褐	14	矢筒部と基部は突帯を境として区分されている。矢筒部は側面に7cm程の間隔を開けて断面三角形の粘土帯が2本、縦方向に貼付されている。これは矢筒の隅を強調するために貼付されたものと考えられる。外面は縦ハケ。内面はナデ。基部には小孔が穿たれている。	
202	靱 矢筒部～基台部	墳丘斜面西・南側	① (11.5) ⑤ (14.0)	①C②A 2 ③明赤褐	14	201と同様、矢筒部には縦方向に2本の粘土帯が貼付されている。基部に小孔が見られる。	
203	靱 矢筒部	墳丘南東側攪乱部分	① (12.5) ② (7.9) ④1.3	①C②C 2 ③にぶい赤褐	10	矢筒部には断面三角形の粘土帯を縦方向に貼付する。外面は縦ハケ。内面は縦方向のナデ。	横断面は円形とは断定できない。
204	靱 矢筒部	墳丘斜面東側	① (11.6) ② (7.0) ④2.0	①C②B 2 ③明赤褐	10	203と同様の粘土帯が縦方向に貼付されている。	
205	靱 矢筒部	墳丘斜面南側、墳頂部南側	① (9.9) ② (7.8) ④1.6	①C②C 2 ③にぶい橙	9	203と同様の粘土帯が縦方向に貼付されている。	
206	靱 矢筒部	墳丘斜面西側	① (6.5) ② (7.0) ④1.6	①B②B 2 ③にぶい橙	14	203と同様の粘土帯が縦方向に貼付されている。	
207	靱 矢筒部	墳丘斜面南側	① (6.0) ② (5.5) ④2.0	①C②B 2 ③にぶい褐	16	203と同様の粘土帯が縦方向に貼付されている。	
208	靱 矢筒部	石室崩落土内	① (8.7) ② (5.3) ④1.6	①C②B 2 ③にぶい橙	10	矢筒部と基部は断面台形の突帯を境とする。矢筒部には断面三角形の粘土帯を縦方向に貼付する。	
209	靱 矢筒部～基台部	墳丘斜面北側	① (8.0) ② (9.7) ④1.7	①C②B 2 ③橙	12	201と同様、縦方向に2本の粘土帯が貼付されている。	
210	靱 基台部	墳丘斜面南側	① (13.3) ② (9.0)	①C②C 2 ③にぶい褐	12	基部、突帯から5cm程下位には小孔が穿たれている。外面はタテハケ。内面はナデ。	
211	靱か 背板上板か	墳丘斜面東側	① (7.0) ② (8.4) ④1.7	①C②B 2 ③明赤褐	8	鋭角な隅部を残す板状の破片。後面には粘土紐を貼付。正面にはハケメ。後面にはナデ。	
212	靱か 背板上板か	墳丘北側トレンチ	① (6.7) ② (4.3) ④1.9	①C②B 2 ③明赤褐	7	鋭角な隅部を残す板状の破片。後面には粘土紐を貼付。器面はハケメを一部ナデ消している。	
213	靱か 背板上板か	墳丘南西部側攪乱部分	① (9.3) ② (5.8) ③ (3.7)	①C②B 3 ③明赤褐	8	本体から短く延びる板状の破片。後面には粘土帯が貼付されている。器面にはハケメが施される。	
214	靱か 背板上板か	墳丘斜面東側	① (12.5) ② (4.9) ③ (4.1)	①C②B 3 ③明赤褐	8	円筒状の本体から鱗状に板状部分が突出している。器面には縦方向のハケメを施す。	
215	靱か 背板下板か	墳丘斜面東・南側	① (17.4) ② (7.8) ③ (3.7)	①C②B 3 ③橙	8	円筒状の本体から鱗状に板状部分が突出している。器面には縦方向のハケメを施す。	
216	靱か 背板下板か	墳丘斜面北側	① (11.6) ② (4.6) ③ (5.5)	①C②B 3 ③橙	8	円筒状の本体から鱗状に板状部分が突出している。器面には縦方向のハケメを施す。	器面は摩耗。
217	靱か 背板下板か	墳丘北側トレンチ	① (7.4) ② (4.6) ③ (4.3)	①C②B 3 ③橙	8	本体から鱗状に延びる板状の破片。器面にはハケメを施す。	
218	靱か 背板上板か	墳丘斜面東側	① (9.5) ② (5.6) ④2.2	①C②B 3 ③明赤褐	8	縁辺部の一部が残存する板状の破片。器面はハケメ、一部にナデを重ねる。	天地不明。
219	靱か 背板下板か	墳丘斜面東側	① (5.5) ② (5.7) ④2.8	①C②B 3 ③明赤褐	8	板状の破片。後面には粘土帯が貼付される。器面にはハケメ。	
220	靱か 背板下板か	墳丘斜面東側	① (7.4) ② (6.5) ④2.0	①C②B 3 ③明赤褐	8	鋭角な隅部を残す板状の破片。後面には粘土紐を貼付。正面にはハケメ。後面にはナデ。	

遺物観察表

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
221	靱か	墳丘斜面東側	① (12.0) ② (7.5) ④2.0	①C②A 2 ③明赤褐	10	板状の破片である。器肉は縁部に向かって徐々に薄くなっていく。後面に粘土帯が貼付されている。	
222	靱か	石室崩落土内	① (7.0) ② (9.3) ④1.8	①C②A 2 ③明赤褐	—	板状の破片。縁部に小さな縞り込みが見られる。後面には粘土紐が貼付されている。	外面は摩耗。
223	靱か	石室崩落土内	① (5.1) ② (8.1) ④1.4	①C②B 2 ③明赤褐	不明	縁部に小さな縞り込みが見られる。器面はナデ。	一部炭素吸着。

大刀形埴輪 (第38・39図、P L 21)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
224	大刀 勾金	墳丘斜面北側	① (5.2) ② (5.7) ④2.0	①C②B 2 ③橙	—	上端の破片である。上端は斜めに切り込まれて収束する。三輪玉1個が貼付されている。外面はナデ。	赤彩か。
225	大刀 勾金	墳丘斜面東側	① (6.2) ②6.0 ④2.6	①C②B 2 ③橙	—	中位の破片である。三輪玉1個が貼付される。	
226	大刀 勾金	墳丘斜面東側	① (12.5) ②5.9 ④2.6	①C②B 2 ③橙	—	中位の破片である。幅5.5cm、厚さ1.0cmの板状粘土から成形されている。器面は丁寧なナデられている。外面に三輪玉3個が貼付される。裏面には柄との接合痕が見られる。	外面と側面に赤彩。225と類似。
227	大刀 勾金	墳丘斜面東側	① (7.8) ②5.8 ④2.5	①C②B 2 ③にぶい橙	—	226と同一個体と考えられる。器面は丁寧なナデ。外面に三輪玉2個が貼付される。	赤彩か。
228	大刀 勾金	墳丘斜面東側	① (6.6) ②5.9 ④2.8	①C②B 2 ③にぶい橙	—	下端の破片と考えられる。外面に三輪玉1個が装着されている。裏面には柄縁との接合痕が見られる。	
229	大刀 勾金	墳丘斜面東側	① (3.6) ②5.7 ④2.3	①C②B 2 ③橙	—	下端の破片と考えられる。外面に三輪玉1個が装着されている。裏面には柄縁との接合痕が見られる。	赤彩か。
230	大刀 勾金	墳丘斜面東側	① (4.3) ②6.6 ④3.2	①C②B 2 ③橙	—	下端の破片。三輪玉1個が貼付される。裏面に柄部との接合痕が見られる。	
231	大刀 勾金	墳丘斜面北・北東・東側	① (13.6) ②5.0 ④2.0	①C②B 2 ③橙	9	柄頭より先端の部分である。三輪玉3個が貼付されている。外面には縦方向のハケメ。裏面に接合痕。	
232	大刀 勾金	石室崩落土内	① (6.0) ②5.0 ④2.5	①C②B 2 ③明赤褐	9	下端の破片。三輪玉1個が貼付される。裏面に柄縁との接合痕が見られる。	
233	大刀 勾金	墳丘斜面西側	① (4.1) ②4.8 ④2.1	①C②B 2 ③にぶい赤褐	9	下端の破片。226より幅の狭い板状粘土から成る。外面は縦方向のハケメ後三輪玉1個が貼付される。裏面に柄部との接合痕が見られる。	
234	大刀 勾金	墳丘斜面北・西側	① (13.0) ②4.7 ④2.3	①C②B 2 ③明赤褐	9	中位の破片。外面は縦方向のハケメに三輪玉3個を貼付。裏面の下位に接合痕が見られる。	
235	大刀 勾金	墳丘斜面北・北東側	① (12.4) ②4.8 ④2.3	①C②B 2 ③明赤褐	10	中位から下位の破片である。外面には縦方向のハケメ。三輪玉3個が貼付される。裏面に接合痕。	
236	大刀 勾金	墳頂部北側	① (3.6) ② (3.7) ④1.7	①C②B 2 ③明赤褐	10	中位の破片。外面に長円形の粘土が貼付されている。裏面にはハケメを残す。	238と同様。
237	大刀 勾金	墳丘斜面南側	① (3.5) ② (4.2) ④2.0	①C②B 2 ③橙	10	下端の破片。長円形の粘土が貼付される。裏面にはハケメを残す。	238と同様。
238	大刀 勾金	墳丘斜面南側	① (4.0) ② (4.4) ④1.9	①C②B 2 ③明赤褐	16	上端の破片。斜めに切られて収束している。外面に長円形の粘土が貼付されている。裏面にハケメ。	他の勾金より粘土板が薄い。赤彩。
239	大刀 柄頭	墳丘斜面北側	① (5.7) ② (12.0) ③8.8	①C②B 2 ③明赤褐	—	直径7cmの柄間の先端は厚さ1.7cmの楔形柄頭で閉じられている。側面には勾金の剥落痕が見られる。	
240	大刀 柄頭	墳丘斜面東側	① (13.3) ② (10.4) ③ (6.3)	①B②B 3 ③橙	—	楔状の端部を有する板状破片。緩やかに反り返る。柄頭の部分でその面に勾金を接合するために粘土を貼付した様子が見られる。	241と同一個体と考えられる。
241	大刀 柄間	墳丘斜面東側	① (5.0) ② (8.4) ③5.7	①C②B 2 ③明赤褐	—	柄頭に近い部分。筒状の破片。横断面が卵形を呈する。	器面は摩耗。
242	大刀か 柄頭か	墳丘斜面北東側	① (4.5) ② (7.8) ④1.6	①C②B 2 ③明赤褐	—	楔状の端部を有する板状破片。裏面には粘土が貼り足されている。	
243	大刀か 柄頭か	墳丘斜面南東側	① (5.2) ② (8.5) ④1.8	①C②B 2 ③橙	—	楔状の端部を有する板状破片。裏面には粘土が貼り足されている。	
244	大刀 柄間	墳丘斜面東側	① (6.5) ⑤7.0	①C②B 2 ③赤褐	12	直径6cm前後の筒状を呈する。外面はタテハケ。	外面は摩耗。
245	大刀 柄縁	墳丘斜面東側	① (8.4) ⑤ (13.0)	①B②B 3 ③明赤褐	8	突帯を挟みこれより上位は急速に径を減じている。突帯部分には幅5cm以上の剥離痕が見られる。勾金が剥落した痕跡と考えられる。	胎土中に赤色粘土粒の混入が顕著。
246	大刀 柄縁	墳丘斜面東側	① (7.1)	①C②B 2 ③橙	—	外面に剥落痕が見られる。外面はナデ。	224と胎土同じ。

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケ メ	成形・整形の特徴	備 考
247	大刀鞘	墳丘斜面西側	① (15.8) ⑤9.8	①C②A 2 ③赤褐	—	筒状を呈する。上端に粘土痕がある。外面はナデ。	
248	大刀鞘	墳丘斜面南側	① (13.3) ⑤10.2	①C②A 2 ③明褐	13	筒状を呈するが、下位に至るにつれて徐々に径を増している。外面はタテハケ。内面はナデ。上位は横方向にナデを施すが粘土紐の接合痕を残す。	
249	大刀鞘	墳丘斜面西・北西・北・北西側、西・北西トレンチ	① (34.8) ⑤11.2 ~ 16.0	①B②B 2 ③赤褐	8	中位の突帯を境にこれより上位は上方に向かって徐々に径を細くしている。外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。	胎土中に赤色粘土粒の混入が顕著。
250	大刀鞘	墳丘斜面北側	① (4.8) ⑤11.9	①C②B 2 ③明褐	13	筒状を呈する。外面はタテハケ。内面にはナデを施すが粘土紐の接合痕を残す。	
251	大刀鞘	墳丘斜面西側	① (23.5) ⑤12.7	①B②A 2 ③赤褐	12	筒状を呈するが横断面は正円とはならない可能性がある。外面は一部にタテハケを残すが大半はナデ。内面はナデ。	
252	大刀か鞘～基部か	墳頂部西、石室崩落土	① (15.3) ⑤ (16.0)	①C②A 2 ③赤褐	15	断面台形の突帯が貼付されている。外面はタテハケ。内面はナデ。基部には小孔が見られる。	

人物埴輪 (第40図、P L 21)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケ メ	成形・整形の特徴	備 考
253	人物顔	墳丘南東側攪乱部分	① (6.0) ② (6.4)	①C②A 2 ③橙	—	鼻は頬から徐々に高くなる。鼻孔は刺突により表現される。口は上唇の一部が残存し、内面まで貫通していることがわかる。	
254	人物顔	墳丘南東側攪乱部分	① (5.5) ② (9.9)	①C②A 2 ③明褐	—	頭部本体から剥落した顎の部分。厚く粘土を貼り、顎の線を明瞭に形作っている。口はヘラ状の工具で複数回刺突し内面まで貫通させている。	
255	人物顔	墳丘南東側攪乱部分	① (3.4) ② (4.1) ⑤3.2	①C②A 2 ③明赤褐	—	顎から積み上げた頭部本体に粘土を貼付し顎の線を作り出している。	
256	人物後頭部	墳丘南東側攪乱部分	① (6.0) ② (7.3) ④1.5	①C②B 2 ③明褐	不明	上方に向かって弱く開く。	器面は摩耗している。
257	人物美豆良	墳丘南東側攪乱部分	① (6.8) ②3.2 ④2.2	①C②A 2 ③橙	—	左の下げ美豆良の下半と考えられる。扁平な棒状粘土で下方に向けてその幅を広げている。	器面は摩耗。
258	人物美豆良	墳丘斜面東側	① (4.4) ②4.0 ④1.8	①C②B 2 ③橙	—	扁平な棒状粘土。下端は前後に枝状に伸び、T字状を呈する。一面には頭部に接していた痕跡がある。	
259	人物美豆良	墳丘南東側攪乱部分	① (5.8) ②3.8 ④2.1	①C②B 2 ③にぶい橙	—	左の下げ美豆良の下半部である。扁平な棒状粘土で一面には頭部に接していた痕跡が見られる。	赤彩により飾り紐を表現したか。
260	人物左腕周辺	墳丘斜面南側、東側トレンチ、南東側攪乱部分、羨道内	① (14.3) ②3.5 ④4.6	①C②B 2 ③橙	—	先端は手首から先を欠損する。中実の棒状粘土、端部を長いほぞ状に作り、胴部に差し込んでいる。手は腰に添えられていたか。器面はナデ。	
261	人物右肩から腕	墳丘斜面北東側	① (6.4)	①C②B 2 ③橙	—	上腕部周辺の破片。中実。	器面は摩耗。
262	人物左腕	墳丘斜面東側	① (10.0) ②3.1 ④3.3	①C②B 2 ③橙	—	手首の手前で欠損。先端をほぞ状に作り胴部に差し込んでいる。	
263	人物左腕	墳丘斜面東側	① (9.0) ②2.7 ④3.9	①D②B 2 ③橙	—	上腕部である。やや扁平な棒状粘土を彎曲させている。外面には丁寧なナデを施す。	
264	人物右手	墳丘斜面南側	① (5.3) ④2.1	①D②B 2 ③橙	—	手首から手のひらにかけての残存。五指は親指のみ残存する。	
265	人物右手	墳丘斜面東側	① (4.0) ②2.8 ④2.3	①B②B 3 ③橙	—	細い棒状品をつかんだ状態の手の可能性が考えられる。器面にはナデ。	
266	人物腰	墳丘斜面東側	① (6.4) ② (6.0) ④1.7	①C②B 2 ③橙	8	下方に向かって緩やかに外反する。横方向の突帯と重なるように貼付された粘土帯は鎌と考えられる。	
267	人物上衣から基部	墳丘斜面北東側	① (13.0)	①C②B 3 ③橙	6	上衣の裾部は大半が欠損している。基部は円筒状で裾部の接合痕から下位3.5cmに小孔を穿つ。	
268	人物上衣	墳丘斜面東側	① (3.0)	①C②B 3 ③橙	10	上衣の裾部。本体から剥落したもの。外面にはハケメ。	
269	人物上衣	北側トレンチ	① (5.0)	①C②B 3 ③橙	12	円筒状の本体に断面三角形の粘土帯を貼付、肥厚させ、上衣の裾部を形成したものと考えられる。	
270	人物装身具玉類か	墳丘斜面南側	① (2.3)	①D②B 2 ③にぶい橙	—	水滴状の粘土粒。本体からの剥落痕が見られる。装身具か。	

遺物観察表

馬形埴輪 (第41～43図、P L 22)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
271	馬耳	墳丘斜面東側	① (3.5) ④1.0	①C②B 2 ③赤褐	不明	先端の破片である。木の葉状に尖っている。	
272	馬鼻先	墳丘斜面東側	④2.6	①C②B 2 ③明褐	—	円筒状の破片であるが端部が主軸方向に対し、斜めに切られていることと端部寄りに小孔が穿たれていることから馬の鼻先と考えた。顎の部分にも小孔が開けられている。	
273	馬目か	墳丘斜面東側	① (5.5) ④1.8	①C②B 2 ③褐	—	弱く彎曲する板状の破片。小孔の一部が残存。孔の周囲は僅かに肥厚する。	
274	馬轡鏡板	墳丘斜面東側、南東部攪乱部分	① (6.3) ② (9.3) ④0.9	①D②A 2 ③明赤褐	—	右頬に装着されたf字形鏡板の一部である。縁辺部に沿って細い粘土紐を貼り、この上に間隔を保って粘土粒を配し、縞を表現する。器面はナデ。	
275	馬轡鏡板	墳丘東側トレンチ	① (4.8) ② (4.2) ④1.0	①D②A 2 ③にぶい褐	—	鋭角な角を有する粘土板。274と同様の意匠が見られる。	
276	馬轡鏡板	墳丘斜面南側	① (3.5) ② (3.2) ④0.9	①D②B 2 ③明褐	—	ほぼ直角な角を有する粘土板。274と同様の意匠が見られる。	
277	馬鞍周辺	墳丘斜面西・北・東・南側	① (9.3) ② (27.7) ③ (20.2)	①C②B 2 ③明赤褐	12	背中大型破片である。前輪は右側部分を残す。後輪は本体から剥離して残存しない。居木・鞍褥の表現は見られない。側面には右鐙の鐙鞆の上端が残る。後輪の後方には幅0.7cmの繫が3本見られ雲珠に向かうと考えられる。	
278	馬鞍橋前輪左端か	墳丘斜面南側	① (7.8) ② (7.1) ④3.2	①C②B 2 ③橙	10	鞍橋の一部で、下端の破片と考えられる。両面ともハケメを施した後周縁部にヨコナデを重ねる。	
279	馬胴部	墳丘斜面南側	① (12.1) ④1.9	①C②B 2 ③明赤褐	—	幅2cm程の繫が貼付されている。周囲には広範囲に及ぶ剥離痕が見られる。	
280	馬鞍	墳丘斜面東・南東側	① (13.3) ② (11.9) ④2.5	①C②B 2 ③明赤褐	—	胴部本体の上に貼られた粘土は障泥の痕跡か。この上に輪鐙の上半部が残存している。	
281	馬左側面頸から鞍	墳丘斜面東側	① (13.0) ② (14.4) ④4.5	①C②B 2 ③明褐	—	幅2cm程の胸繫と鞍の前輪の一部が残存する。内面は丁寧なナデ。	外面は摩耗。
282	馬尻から尻尾	墳丘斜面東・南側	① (10.0) ② (11.5) ④1.4	①C②B 2 ③明褐	9	尻尾の付け根の周辺の破片である。尻尾はまだ中空部分の残存である。外面には幅2cm程の繫の剥離痕が廻る。尻の孔の一部が残存する。	
283	馬尻	墳丘斜面北側	① (5.4) ④1.5	①C②B 2 ③明赤褐	10	本体から筒状に立ち上がる。馬の尻尾か耳の可能性がある。外面にはハケメ。内面にはナデ。	外面は摩耗。
284	馬鈴	墳丘東側トレンチ	① (5.1) ② (4.5) ④3.3	①C②B 2 ③明褐	—	直径3cmの半球形を呈する。中央やや上方寄りに横方向の刻みが入る。本体から剥落した痕跡が見られる。装着部位は不明。	
285	馬鈴	墳丘斜面北東側	① (5.0) ② (4.6) ④3.6	①C②B 2 ③橙	—	半球形を呈する。中央やや上方寄りに横方向の刻みが入る。本体から剥落した痕跡が見られる。	
286	馬鈴	墳丘斜面東側	① (3.6) ② (3.7) ④2.7	①C②B 2 ③明褐	—	中実。半球形を呈する。	器面は摩耗する。
287	馬腹部	墳丘斜面東側	② (12.4) ④2.3	①C②B 2 ③橙	10	厚さ2cmを越える破片である。内面にハケメを残す。	外面は摩耗。
288	馬腹部	墳丘斜面東側	② (9.3) ④2.4	①C②B 2 ③にぶい橙	10	厚さ2cmを越える破片である。内面にハケメを残す。	外面は摩耗。
289	馬腹部	墳丘斜面東側	② (7.6) ④2.0	①C②B 2 ③明赤褐	10	股間に近い部位か。	
290	馬脚股間	墳丘斜面東側	① (7.6) ② (15.1)	①C②B 2 ③明褐	10	脚の前後は不明。内面には両脚を接合するための粘土塊の貼り付けが見られる。外面は丁寧なナデ。	
291	馬雄生殖器	墳丘斜面東側	② (5.2) ④3.1	①C②B 2 ③橙	—	先端の尖った中実の粘土塊で2個の粘土粒が貼付されている。胴体からの剥離痕が見られる。	
292	馬脚部上位破片	墳丘斜面南東側	① (10.2) ⑤ (12.0)	①C②B 2 ③橙	11	上端は緩やかに外反を始めている。外面はタテハケで一部にナデ。切開再接合の痕跡が見られる。	
293	馬脚部破片	墳丘斜面東・南側	① (8.9)	①C②C 1 ③橙	11	外面はタテハケ。内面はナデ。	詳細な部位不明。
294	馬脚部上位破片	墳丘斜面南東・南側	① (8.8) ⑤ (12.0)	①C②B 2 ③橙	12	上端は緩やかに外反を始めている。外面はタテハケで一部にナデ。切開再接合の痕跡が見られる。	
295	馬脚部破片	墳丘斜面北東・南東側、東トレンチ	① (7.4) ⑤ (12.0)	①B②B 2 ③橙	11	外面はタテハケ。内面はナデ。縦方向に切開再接合の痕跡が見られる。	外面は摩耗。
296	馬脚部破片	墳丘斜面東側	① (12.9) ⑤ (12.0)	①C②C 1 ③橙・明褐	11	蹄の切り込みの一部が残存する。外面はタテハケ。内面はナデ。縦方向に切開再接合の痕跡が見られる。	
297	馬脚部下位破片	墳丘斜面東側	① (7.1)	①C②C 1 ③にぶい褐	11	蹄の切り込みが見られる。外面はタテハケ。内面はナデ。	

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケ メ	成形・整形の特徴	備 考
298	馬脚部下位破片	墳丘斜面南東側	① 〈3.9〉	①C②C 1 ③にぶい褐・灰褐	11	蹄の切り込みが見られる。外面はタテハケ。内面はナデ。	一部還元状態となっている。
299	馬脚部下位破片	墳丘斜面東側	① 〈8.0〉	①C②C 1 ③明赤褐・褐灰	12	蹄の切り込みが見られる。下端は外側に肥厚している。外面はタテハケ。内面はナデ。	一部還元状態となっている。
300	馬脚部下位3/4	墳丘斜面南側	① 〈13.0〉 ⑤ 〈13.4〉	①C②B 2 ③橙	11	蹄の切り込みが見られる。成形時に縦方向に切開再接合した部分から剥離している。外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。	左脚か。
301	馬脚部下位2/3	墳丘斜面東・南側	① 〈11.2〉 ⑤ 〈9.8〉	①C②B 2 ③橙	11	蹄の切り込みが見られる。下端は一部分が内側に肥厚する。外面はタテハケ。内面はナデ。	外面は摩耗。
302	馬脚部下位1/4	墳丘斜面南側	① 〈11.0〉	①C②B 3 ③橙	12	器肉は薄い。蹄の切り込みはやや弧を描く山形を呈する。外面はハケメ。内面はナデ。	外面は摩耗。
303	馬脚部下位1/3	墳丘斜面東側	① 〈10.5〉 ⑤ 〈10.5〉	①C②B 2 ③橙	不明	切開再接合の痕跡が見られる。	外面は摩耗。
304	馬脚部下位破片	墳丘斜面東側	① 〈7.4〉	①C②B 2 ③橙	14	外面はタテハケ。内面はナデ。下端に粘土板成形時の板目が残る。基部粘土板の重ねが見られる。	底面に礫の圧痕。

器種不明の形象埴輪 (第44図、P L 22・23)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケ メ	成形・整形の特徴	備 考
305	不明	墳丘斜面南側、東側トレンチ	① 〈9.5〉 ② 〈10.7〉 ④1.2	①C②B 2 ③にぶい橙	14	厚さ1cmの板状破片。正面はハケメ調整の後周縁部を中心にナデを重ねている。	縁辺部に赤彩。後面は摩耗。
306	不明	石室崩落土内	① 〈10.1〉 ② 〈7.1〉 ④1.1	①C②B 2 ③橙	14	305と同様。	縁辺部に赤彩。
307	不明	墳丘斜面東側	① 〈9.6〉 ② 〈7.7〉 ④1.8	①C②B 2 ③にぶい橙	—	板状の破片。正面にはナデ。後面には粘土帯が貼付されている。	後面は摩耗。
308	不明	石室崩落土内	①10.5 ② 〈7.4〉 ④1.2	①C②B 2 ③橙	14	305と同様の板状破片である。	縁辺部に赤彩か。
309	不明	墳丘斜面西側	① 〈7.0〉 ② 〈8.3〉 ④1.4	①C②B 2 ③橙	16	板状の破片。正面にヘラ描き沈線による弧線が見られる。後面には粘土帯が貼付される。	
310	不明	墳丘南東側攪乱部分	① 〈6.6〉 ② 〈5.3〉 ④1.2	①C②B 2 ③橙	14	板状の破片。正面にヘラ描き沈線による細い弧線が見られる。	
311	不明	石室崩落土内	① 〈6.2〉 ② 〈5.0〉 ④1.3	①C②B 2 ③橙	14	板状の破片。正面にヘラ描き沈線による細い弧線が見られる。	後面は摩耗。
312	不明	墳丘斜面西側	① 〈4.1〉 ② 〈4.9〉 ④1.2	①C②B 2 ③明赤褐	不明	弱く彎曲する小破片。正面にヘラ描き沈線による文様が見られる。外面は粗いナデか。	
313	不明	墳丘斜面西側	① 〈3.5〉	①C②B 2 ③明赤褐	—	弱く彎曲する小破片。正面にヘラ描き沈線による文様が見られる。外面は粗いナデか。	
314	不明	墳丘斜面東側	① 〈10.0〉 ② 〈9.6〉 ④4.3	①B②A 2 ③明赤褐	12	縁辺部は弧状を呈す。断面は帽子の鏝状を呈す。外面にはヘラ描き沈線による鋸歯文が配されている。中央寄りに一度穿った小孔を粘土で塞いだ痕跡が見られる。	天地左右不明。後面は摩耗。
315	不明	墳丘斜面東側	① 〈6.7〉 ④2.5	①C②B 2 ③橙	—	板状の破片である。裏面に粘土紐を粗雑に貼付する。	器面は摩耗。
316	不明	墳丘斜面東側	① 〈7.3〉 ② 〈7.3〉 ④2.2	①B②B 2 ③明赤褐	—	外面に断面三角形の突帯を貼付する。縦方向にも帯を貼っている。一度穿孔した小孔を再度粘土塊で塞いでいる。成形は粗雑。	天地不明。
317	不明	墳丘斜面東側	① 〈6.2〉 ② 〈5.7〉 ④1.8	①A②B 2 ③明赤褐	—	外面には断面三角形の突帯が貼付される。一度穿った孔を粘土で塞いだ痕跡が見られる。	天地不明。
318	不明	墳丘斜面北側	① 〈6.6〉 ② 〈6.2〉 ④2.1	①C②B 2 ③明赤褐	8	小径の本体に幅3.5cm以上の薄い粘土帯・粘土粒が重ねられている。外面はタテハケ。	天地不明。
319	不明	墳丘斜面東側	① 〈4.8〉 ② 〈6.0〉 ④1.0	①B②B 2 ③明赤褐	—	L字状に延びる突帯と小孔が見られる。	天地不明。
320	不明	墳丘斜面東側	① 〈4.6〉	①C②B 2 ③赤褐	9	弱く内彎する。先端の外面にハケメを、内面にナデを施す。	
321	不明	墳丘東側トレンチ	① 〈5.8〉 ⑤ 〈14.0〉	①C②B 3 ③明赤褐	—	馬の蹄に類似する切り込みが見られる。外面に粘土帯の貼付がある。内外面ともナデ。	
322	不明	墳丘斜面北側	① 〈6.2〉 ② 〈6.2〉 ④1.3	①B②B 2 ③明赤褐	—	板状の破片で円形の粘土粒が貼付されている。	天地不明。

遺物観察表

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
323	不明 靱か	墳丘東側トレンチ	① (2.1) ④1.3	①C②B 2 ③橙	—	外面に刻み目を伴う粘土紐が貼付されている。	天地不明。
324	不明	墳丘斜面南側	① (3.2) ④0.9	①D②B 2 ③明褐	—	断面三角形の粘土紐。本体から剥落したもの。	天地不明。
325	不明	墳丘斜面東側	① (2.8) ④0.5	①D②B 2 ③明褐	18	幅1.2cmのやや偏平な粘土紐。本体に接していた面にハケメを残す。	天地不明。
326	不明	墳丘斜面東側	① (1.5) ④0.6	①D②B 2 ③明褐	—	幅0.7cmの偏平な粘土紐。	天地不明。
327	不明	墳丘斜面南東側 攪乱部分	① (7.2) ④2.6	①D②A 2 ③橙	—	円形の粘土粒が貼付される。	天地不明。
328	不明	墳丘斜面東側	① (6.3) ④1.2	①D②B 2 ③橙	—	器面は彎曲する。円形の粘土粒が貼付される。	天地不明。
329	不明	墳丘斜面南東側 攪乱部分	① (2.6) ② (4.2) ④2.0	①D②B 2 ③橙	12	本体に貼付された幅3.3cmの板状破片。中央に円形の粘土粒が貼付される。	天地不明。
330	不明	墳丘斜面東側	① (4.7) ④1.1	①D②B 2 ③橙	—	器面は弱く彎曲する。円形の粘土粒が貼付される。	天地不明。
331	不明	墳丘斜面東側	① (6.0) ④2.0	①D②B 2 ③橙	—	円形の粘土粒が貼付される。	天地不明。
332	不明	墳丘斜面東側	① (5.9)	①D②A 2 ③明赤褐	—	端部の直径3cmの棒状の粘土。本体に差し込まれていたのか、全体の3分の1ほどに剥離痕。	天地不明。

形象埴輪基台部 (第45・46図、P L 23)

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
333	形象基台部 中位大型破片	石室崩落土内	① (35.0)	①B②B 2 ③赤褐	7	中位に突帯が貼付される。突帯より上方の径が細くなるようであるが全体的には大きな変化はない。基部に小孔が穿たれる。	突帯直下の直径17.5cm。
334	形象基台部 中位破片	墳丘斜面北・北東側	① (13.5)	①B②B 3 ③明赤褐	7	小径。外面はタテハケ。内面はナデ。	
335	形象基台部 中位破片	墳丘斜面北側、 北西トレンチ	① (10.4)	①B②B 2 ③明赤褐	7	外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。	
336	形象基台部 中位破片	墳丘斜面北東側、 石室崩落土	① (9.8)	①B②B 3 ③明赤褐	8	小径。外面はタテハケ。内面はナデ。	
337	形象基台部 中位破片	墳丘斜面東側	① (9.5)	①B②B 2 ③橙	15	外面はタテハケ。内面はナデ。	
338	形象基台部 中位破片	墳丘斜面南東側	① (8.3)	①C②A 2 ③橙	14	残部の横断面は正円を描いていない。小孔が穿たれている。外面はタテハケ。内面はナデ。	
339	形象基台部 中位破片	墳丘斜面東側	① (12.5)	①B②B 2 ③橙	15	小孔が穿たれている。外面はタテハケ。内面はナデ。基部粘土板の高さは9.0cm。	復元径は20cm。
340	形象基台部 中位破片	墳丘斜面北・東側	① (11.3)	①B②B 3 ③明赤褐	7	小径。中位に突帯が貼付される。外面はタテハケ。内面はナデ。	突帯直下の直径16.1cm。
341	形象基台部 中位破片	墳丘斜面北・北東側、 石室崩落土	① (18.6)	①B②B 3 ③明赤褐	7	残存部分では直径に大きな変化はみられない。中位に突帯を貼付する。外面タテハケ。内面はナデ。	突帯直下の直径16.5cm。
342	形象基台部 中位破片	墳丘斜面西・北西側、 西トレンチ	① (17.8)	①B②B 2 ③赤褐	8	13.5cmの間隔を開けて断面台形の突帯2条が貼付される。外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。小孔が見られる。	復元径は18.5cm。 胎土中に赤色粘土粒の混入が顕著。
343	形象基台部 中位破片	墳丘斜面東側	① (7.0)	①C②B 2 ③にぶい橙	10	外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。	
344	形象基台部 中位破片	墳丘斜面南側・ 東側トレンチ	① (17.2)	①C②B 2 ③橙	10	突帯の周辺には粗雑なナデが加えられている。	復元径16.9cm。
345	形象基台部 中位破片	墳丘斜面北東側	① (12.7)	①C②A 2 ③橙	13	突帯は指ナデ後重ねて粗雑な押圧が加えられている。外面はタテハケ。内面はナデ。	
346	形象基台部 下位1/3	墳丘斜面東側	① (7.5)	①C②C 1 ③にぶい黄褐	6	ごく小径。外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。	突帯直下の復元径14.1cm。内面還元気味。
347	形象基台部か 破片	北西トレンチ	① (7.4)	①C②B 3 ③橙	8	突帯は極めて低い。その上稜にはハケメ工具を押しつけたような工具痕が見られる。	

番号	器種・部位	出土位置	法量	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
348	形象基台部	墳丘西側トレンチ、石室崩落土	① (20.1) ⑤ (15.5)	①C②A 2 ③赤褐	14	直立気味に立ち上がる。底面から18cmの位置に小孔が穿たれている。外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。基部粘土板の高さは約10cm。外面下端に粘土板成形時の工作台の木目痕が残る。	
349	形象基台部 下位1/3	墳丘斜面東側	① (17.5) ⑤ (18.0)	①C②B 2 ③橙	13	直上に立ち上がるが、下端近くは形状が乱れている。基部粘土板の重ねは右が上。	外面は摩耗。
350	形象基台部 下位破片	墳丘斜面北側	① (4.8) ⑤ (16.0)	①C②B 3 ③橙	12	下端は外側の形状が歪んでいる。外面はタテハケ。内面はナデ。	
351	形象基台部 下位破片	墳丘斜面東側	① (6.2) ⑤ (16.0)	①C②B 3 ③橙	11	下端は外側の形状が歪んでいる。外面はタテハケ。内面はナデ。	
352	形象基台部 下位破片	墳丘斜面西側	① (14.1) ⑤ (13.6)	①C②B 3 ③橙	10	他の基部よりも小径か。外面はタテハケ。内面はナメ方向のナデ。	
353	形象基台部	墳丘東側トレンチ、斜面南側	① (9.3) ⑤ (16.0)	①C②A 2 ③明赤褐	10	ほぼ垂直に立ち上がる。外面はタテハケ。内面はナメ方向のナデ。	
354	形象基台部 下位破片	墳頂部南側	① (10.8) ⑤ 16.5	①C②B 2 ③橙	10	外面はタテハケ。内面はナメ縦方向のナデ。	
355	形象基台部	墳丘斜面北・北東・東側、石室崩落土	① (7.2) ⑤ 16.2	①B②B 3 ③明赤褐	8	小径。外面はタテハケ。内面はナデ。	
356	形象基台部	墳丘斜面北・北東側	① (11.2) ⑤ (16.0)	①C②B 2 ③明赤褐	6	底面から8.2cm上方に突帯貼付。外面はタテハケ。内面は縦方向のナデ。	
357	形象基台部	墳丘斜面西側	① (7.5) ⑤ (13.0)	①C②C 2 ③灰黄褐	14	小径。外面はタテハケ。内面はナデを施すが下端に粘土板成形時の工作台の板目痕を残す。	底面に植物の茎状の棒状圧痕が見られる。

石室内出土遺物 (第47図、P L 24)

番号	器種	出土位置	残存率 法量 (cm)	素材	成形・整形の特徴	備考
358	切子玉	玄室奥壁寄り床面	略完形 長2.15 幅1.6 厚1.5	水晶	側面の12面の面取りはやや不均等である。各稜は摩耗し、水晶のもつ透明感が失われている。穿孔は片面穿孔と考えられる。両小口面の孔の直径は0.4cmと0.15cmと大きく異なる。	重量6.38 g。透明。
359	切子玉	玄室棚石寄り床面	完形 長2.2 幅1.6 厚1.45	水晶	加工状況・器面の摩耗状況は358と同様である。穿孔は下端の中心を外れている。孔径は0.4cmと0.15cmである。	重量5.87 g。透明。
360	切子玉	玄室床面下	完形 長2.2 幅1.55厚1.45	水晶	加工状況・器面の摩耗状況は358と同様である。上端の小口面は加工時に欠損を二次的に補正したためかやや傾斜している。孔径は0.5cmと0.1cmである。	重量6.04 g。透明。
361	管玉	玄室床面下	完形 長2.35 幅0.45	珪質頁岩	側面から小口面への移行する部分は稜が丸みをおびている。穿孔は両面穿孔で管内に食い違いによる弱い段差が見える。上端面の孔径は0.2cmである。	重量0.78 g。緑色。
362	管玉	玄室床面	完形 長1.95 幅0.6	碧玉	側面・小口面ともいねいに加工している。穿孔は片面穿孔で、下端の中心を外している。上端面の孔径は0.25cmである。	重量1.29 g。濃緑色。
363	ガラス小玉	玄室床面下	完形 直径0.35 厚0.25	ガラス	全体が丸く仕上げられ、小口に平坦な面が見られない。	重量0.3 g。淡青緑色。透明。
364	ガラス小玉	玄室床面下	完形 直径0.35 厚0.2	ガラス	形状は363と同様である。	重量0.02 g。淡青緑色。
365	ガラス小玉	玄室床面下	完形 直径0.3 厚0.2	ガラス	形状は363と同様である。	重量0.02 g。濃青色。
366	ガラス小玉	玄室床面下	完形 直径0.45 厚0.3	ガラス	363に比して大径である。引き延ばし技法によるものか縦断面を見ると小口面が傾斜している。	重量0.08 g。淡青色。透明。
367	ガラス小玉	玄室攪乱孔内	完形 直径0.4 厚0.15	ガラス	他に比して厚みが無く、ドーナツ状を呈している。	重量0.03 g。淡青色。透明。
368	刀子	石室崩落土層中	切先 残長3.0	鉄製	切先周辺の破片である。刃幅1.25cm、背の厚さ0.2cm。錆による器面の剥落のため、刃部の観察は困難。	
369	鉄鎌	玄室内	茎部中位破片 残長6.1	鉄製	幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。断面は横長の長方形を呈している。器面は剥落が著しい。	天地不明。
370	鉄鎌	玄室床面下	茎部先端破片 残長1.2	鉄製	欠損する端部に向かって徐々に細くなっている。上端の幅0.3cm、厚さ0.2cmを測る。器面に植物繊維が葛纏にされた痕跡が見られる。	
371	円環	玄室床面下	完形	非鉄製。 青銅か	耳環の可能性が考えられる。環の直径は横2.4cm、縦2.2cmである。両端の間に0.25cmの隙間が生じている。環の太さは0.35cmでは円形を呈する。器面は錆びている。	



遺物観察表

遺構外出土の遺物

遺構外出土の弥生土器 (第51・53・54図、P L 24・25)

①の胎土 Aはチャート・片岩などの粗砂・礫を多量に含む。Bは粗砂・細砂を含む。Cは粗砂の混入は目立たず、白色鉱物粒の混入が目立つ。

番号	器種	出土位置	残存率 法 量	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴	備 考
379	甕	E-7 G	残ほぼ完形 口25.0 高35.4	①A②酸化 ③橙	口縁に横位縄文帯 (LR異束) を地とし、植物質の茎状物を束ねたと思われる歯数6本の櫛歯状施文具 (櫛II種) で、波形の大きい波状文を描く。口縁文様帯下位に同様の櫛歯状施文具による1条の横線文で画す。体部は左上がりの条痕による整形。条痕施文具は板状具小口面使用と思われる。底面に網代痕。	
380	甕	E-9 G	残1/2 口 (20.0) 高 (28.2)	①B②酸化 ③にぶい橙	口縁～体部がほぼ直上に立ち上がる砲弾形の器形。口縁の外上方に粘土帯を付加して肥厚させる。口唇部は押圧により薄く仕上げている。口縁外面に横位縄文帯を施文 (LR異束か)。内外面は削りとなで、内面下半にまばらな縦位磨き。	
381	壺	C-9 G暗褐色土	残口縁部破片	①C②酸化 ③明赤褐	口縁下に押圧を加えた突帯を廻らす。口唇は丸縁で内面無文。	
382	壺	E-9 G暗褐色土	残頸部破片	①A②酸化 ③明赤褐	頸肩境に押圧突帯を廻らす。	
383	壺	墳丘下西側	残口縁部破片	①B②酸化 ③赤褐	口縁下に縦位刻みを加えた低い突帯を廻らす。下位に横沈線で区画する。	
384	壺	墳丘裾部北側	残口縁部破片	①A②酸化 ③褐	丸縁の口唇に刻みを加え、下位に縦線を充填した方形区画文を並べる。施文具は篋か棒状具による。	
385	壺	E-9 G暗褐色土	残口縁部破片	①A②酸化 ③明赤褐	小さく外反する口縁外面全体に縄文 (LR) を施文し、3条の太い横沈線を廻らす。	
386	壺	C-9 G暗褐色土	残口縁部破片	①A②酸化 ③明褐	口縁外面に横沈線で区画し、上位を縄文 (R)、下位を沈線による山形文を描く。	
387	壺	墳丘斜面西側・D-8	残口縁部破片	①B②酸化 ③橙	口唇は面取り後、細かい刻みを加える。口縁外面に天地を違えた三角文を交互に配す。地文に細かく浅い細密条痕を縦～斜位に施す。	
388	壺	C-8 G暗褐色土	残口縁部破片 口 (13.8) 高 (10.5)	①B②酸化 ③褐	全体に緩く外反する口頸部に、口縁は横位、頸部は縦位の条痕を施す。施文具は2本単位 (半截竹管か)	
389	壺	D-9 G暗褐色土	残口縁部破片	①A②酸化 ③橙	口縁外面に縄文 (LR)、段状の口縁下端以下に縦位の条痕を施す。施文具は2本単位 (半截竹管か)	内面に炭素吸着。
390	壺	墳丘南側攪乱	残口縁部破片	①C②酸化 ③褐	口唇は薄い丸縁。口縁下位に縄文帯 (LR) を地文とし、2条平行沈線を廻らせる。	
391	壺	E-7 G暗褐色土	残口縁部破片	①B②酸化 ③褐	口唇に縄文押捺。口縁外面下位に縄文施文 (L) のち、浅い横位条痕を施す。	外面に炭素吸着。
392	壺	墳丘下北西側	残頸部破片	①A②酸化 ③明褐	上位に植物質棒状具による沈線、下位に縦位縄文 (L)	
393	壺	C-9 G暗褐色土	残頸部破片	①C②酸化 ③橙	板状小口と思われる工具先端による列点文。	
394	壺	北西トレンチ	残胴部破片	①B②酸化 ③にぶい赤褐	縄文 (L) の地文上に沈線による山形文を描く。内面は篋状具によるナデ。	
395	壺	D-8 G暗褐色土	残胴部破片	①C②酸化 ③明赤褐	上位を横位沈線で画し、その下に重四角文を並べる。縄文 (LR) を地文とする。	
396	壺	E-7 G暗褐色土	残胴部破片	①B②酸化 ③橙	浅い縄文 (LRか) を地文に細い沈線で円文状の文様を描く。	
397	壺	北東トレンチ	残胴部破片	①B変岩雲 母粒②酸化 ③橙	上位に2条沈線による三角文状の文様を描き、下位に縄文 (Rか) を施す。縄文は地文の可能性あり。	
398	壺	C-8 GP3	残頸部破片	①B変岩粒 ②酸化 ③明褐	筒形土器と思われる。口縁下と想定される部位に横沈線を廻らし、1本沈線の描出による縦長モチーフの入り組み文を描く。地文に細かい縄文 (LR) を施す。	
399	(甕)	墳丘斜面東側	残口縁部破片	①B②酸化 ③明赤褐	縄文 (L) を地文に、4mm巾の沈線で鋸歯状の文様を描く。	
400	壺	北東トレンチ	残頸部破片	①A②酸化 ③赤褐	3条沈線による方形文を描き、内区に刺突を充填するらしい。上位には波状か山形沈線文を配する。	
401	壺	墳丘下東側トレンチ	残肩部破片	①A②酸化 ③橙	縄文 (LR) を地文に2mm幅の細い沈線で連弧文を描く。	
402	壺	E-7 G暗褐色土	残頸部破片	①B②酸化 ③赤褐	縄文 (Lか) を地文に、山形ないし矢羽根状の沈線文を描く。隣接して短沈線が描かれるが、文様モチーフは不明。	小型壺か
403	壺	墳丘東側トレンチ	残胴部破片	①A②酸化 ③橙	筒型土器と思われる。縄文 (LRか) を地文に、細沈線で縦位短冊状文と曲線文を描く。	398と同一個体の可能性あり。

## 遺構外出土の遺物

番号	器種	出土位置	残存率 法 量	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴	備 考
404	壺	墳丘下北東側	残胴部破片	①C②酸化 ③赤褐	4mm幅の太い沈線による横線と、文様交点部に3点の刺突。下位に縄文(LR)。	
405	壺か甕	D-8G暗褐色土	残胴下半部破片	①A②酸化 ③明赤褐	無文。外面は上方への削りのち粗い磨き、内面はナデ。	内面に炭素吸着。
406	(小型)壺	墳丘斜面東側	残頸部破片	①B②酸化 ③にぶい黄褐	縄文(LRか)を地文に、1条と2条単位の細沈線による曲線的な文様を描く。	墳丘斜面北側・東側と接合
407	(小型)壺	墳丘下南東側	残頸部破片	①B②酸化 ③橙	2条単位の沈線で三角形か菱形文様、隣接して波状文と思われる文様を描く。磨消し縄文(LR)。	
408	(筒形土器)	北西トレンチ	残胴部破片	①C②酸化 ③褐	細い多重沈線による三角文状の文様を描く。左端は縦位区画無文帯だろう。磨消し縄文(LR)。	
409	壺	墳丘裾部南側	残胴部破片	①B②酸化 ③にぶい黄褐	3mm幅の細沈線複数条による三角文か台形文を描く。内区に管状具先端による刺突を充填。	
410	壺	D-9G暗褐色土	残胴部破片	①B②酸化 ③褐	409と同じ。	409と同一個体か
411	壺	北西トレンチ	残胴部破片	①C②酸化 ③明赤褐	4mm幅の浅く太い沈線3条による横線文。無文部は磨き。	
412	壺	C-8G暗褐色土	残頸部破片	①B②酸化 ③明褐	縦位羽状の条痕文。原体は二枚貝肋条か。	
413	壺	C-8G暗褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③明赤褐	縦位羽状条痕文。原体は2条単位で、条痕は幅広く浅い。内面ナデ。	
414	壺	C-8G暗褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③にぶい褐	413と同じ。	413と同一個体か
415	(甕)	C-8G暗褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③橙	細く疎らな条痕を斜位に施す。	
416	壺か甕	E-7G黒褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③橙	太さの不揃いな条痕を斜位に施す。	
417	壺か甕	C-8G暗褐色土	残胴部破片	①B②酸化 ③にぶい黄橙	鋭く太さの不揃いな条痕を斜位に施す。内面ナデ。	
418	壺か甕	D-8G暗褐色土	残胴部破片	①C②酸化 ③赤褐	鋭く太さの不揃いな条痕を斜位に施す。原体は半截管状具を束ねたものか。内面ナデ。	
419	壺か甕	E-7G暗褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③橙	浅い細密条痕を斜位に施す。内面ナデ。	
420	甕	C-8G暗褐色土	残口縁部破片	①C②酸化 ③橙	繊維質棒状品を疎らに束ねた工具による斜位条痕。口唇部内面から弱い刻み列。	
421	甕	玄室背面	残口縁部破片	①A②酸化 ③橙	口縁外面に浅い横刷毛目ののち、繊維質棒状具による斜位条痕。口唇部上縁に条痕施文具による刻み列。	
422	甕	墳丘斜面南側	残口縁部破片	①A②酸化 ③橙	束茎状具による縦位条痕。口縁にわずかな突起を作りだす。外面にタール付着(ふきこぼれか)。	外面に炭素吸着。
423	甕	C-9G暗褐色土	残口縁部破片	①C②酸化 ③赤褐	繊維質棒状品を疎らに束ねた工具による縦位条痕。口唇部上縁に棒状具による刻み。	
424	甕	北西トレンチ	残口縁部破片	①C②酸化 ③橙	縄文(LR)を地文として、2mm幅の細沈線で波状文(1本描線2条組合せか)を描く。	外面に炭素吸着。
425	甕	E-7G暗褐色土	残口縁部破片	①B②酸化 ③明赤褐	縄文(LR)を地文に5本単位の櫛歯状具による波状文を描く。内面ナデ。	
426	甕	墳丘斜面東側	残口縁部破片	①A②酸化 ③明褐	無文。内外面とも、ナデ仕上げ。内面に整形時の縦削り痕を残す。	
427	甕	C・D-8G暗褐色土	残肩部破片	①B②酸化 ③明褐	2条単位の沈線による三角連繫文を描く。縄文(LR)地文。	
428	甕	C-9G暗褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③褐	3mm幅の1条沈線による横線と鋸歯状文様を描く。	
429	甕	C-8G暗褐色土	残頸部破片	①C②酸化 ③明褐	板状具小口面によると思われる細かい縦位羽状条痕を施す。	
430	甕	E-7G黒褐色土	残胴部破片	①B②酸化 ③明褐	縄文(LR)地文に2条沈線による横位直線的な文様を描く。	
431	甕	E-7G暗褐色土	残胴部破片	①A②酸化 ③明赤褐	束茎状具による斜位条痕。内面はヘラ状具によるナデ。内面にコゲ痕あり。	内面に炭素吸着。

遺物観察表

番号	器種	出土位置	残存率 法 量	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴	備 考
432	甕	墳丘東側トレンチ	残胴部破片	①B②酸化 ③明赤褐	1条沈線による横線と曲線文様の組合せ。横線文以上に磨消し縄文(L)を施す。	
433	浅鉢	墳丘北側トレンチ	残口縁部破片	①B②酸化 ③橙	植物茎状具を2~3本束ねたと思われる工具で曲線と直線を組み合わせた構図の文様を描く。内面は丁寧なナデ。	
434	鉢	石室下	残口縁部破片	①B②酸化 ③橙	縦位の細かい条痕ののち、横位ナデ。内面は丁寧なナデ。	
435	浅鉢	E-7G・墳丘下北側トレンチ	残胴部破片	①A②酸化 ③におい黄橙	細沈線による短冊状文を横列に配し、その間を縄文(LR)充填。内面は磨き。	
436	壺か甕	D-9GP3	残底部破片 底(8.0) 高(2.0)	①A②酸化 ③橙	胴部外面はナデ。底部外面に木葉痕。	
437	壺か甕	D-8GP1・2	残底部破片 底(6.4) 高(1.8)	①B②酸化 ③橙	胴部外面はナデ。底部外面に木葉痕。	内面に炭素吸着。
438	壺か甕	墳丘裾部東側	残底部破片 底(7.0) 高(1.4)	①B②酸化 ③明褐	胴部外面はナデ。底部外面に木葉痕。	内面に炭素吸着。
439	壺か甕	C-9G暗褐色土	残底部破片 底(8.0) 高(2.7)	①A②酸化 ③明赤褐	胴部外面はヘラケズリ。底部外面に網代痕。	
440	壺か甕	墳丘斜面東側	残底部破片 底(8.0) 高(2.3)	①A②酸化 ③橙	胴部外面はナデ。底部外面に網代痕。	
441	壺か甕	墳丘西側トレンチ	残底部破片 底(9.0) 高(2.1)	①B②酸化 ③橙	胴部外面はナデ。底部外面に平織り布目痕。	内面に炭素吸着。
442	壺か甕	墳丘斜面南側	残底部破片 底(5.4) 高(2.6)	①C②酸化 ③明赤褐	胴部外面は細く鋭い斜条痕。底部外面に平織り布目痕。	
443	壺か甕	墳丘裾部南側	残胴部下位~ 底部 底6.0 高(1.9)	①A②酸化 ③明褐	底部外面はヘラケズリ。	内面に炭素吸着。
444	壺か甕	墳丘斜面北側	残胴部下位~ 底部 底6.7 高(3.2)	①A②酸化 ③明褐	胴部外面はヘラケズリ。底部外面はなでる	

遺構外出土の石器 (第55・56図、P L 26)

番号	器種	出土位置・層位	法 量			石 材	特 徴
			長さ×幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
445	石鋏	D-9G	19.8×9.3	3.7	822.3	雲母石英片岩	盤状の剥片素材。バチ形。ほぼ完形。刃部摩耗し、再調整後に使用痕。刃部両面調整、左右非対称。
446	石鋏	C-9G	18.4×7.0	2.9	485.7	雲母石英片岩	長楕円状の円礫素材。細身のバチ形。ほぼ完形。表裏周縁に調整を加えているが、素材の形状を大きく変えていない。刃部はつぶれ・摩耗が著しい。
447	石鋏	C-8G	18.2×9.1	3.6	747.9	砂岩	大型の自然面の残る剥片素材。幅広いバチ形。完形。刃部両面調整。刃部再調整後につぶれ・摩耗の使用痕有り。
448	石鋏	C-8G	16.9×7.1	1.9	336.7	雲母石英片岩	剥片素材。バチ形。完形。刃部両面調整。刃部につぶれ・摩耗著しい。側縁部にもつぶれ痕あり、柄への装着の緊縛によるものか。
449	石鋏	C-8G	10.3×8.0	2.1	376.8	緑色片岩	自然面の残る剥片素材。やや刃部がすぼまり短冊形か。刃部欠損後、刃部片面調整により再作出か。
450	石鋏	D-9G	16.0×7.6	2.7	357.4	雲母石英片岩	剥片素材。バチ形。基部の側面片側にえぐり状の調整痕有り。ほぼ完形。刃部両面再調整後、つぶれ・摩耗有り。
451	石鋏	C-8G	14.5×6.1	3.0	344.2	雲母石英片岩	自然面の残る剥片素材。バチ形か。側縁部の一部に敲打痕あり。ほぼ完形。刃部は両面調整。刃部欠損後、再調整。使用によるつぶれ・摩耗の使用痕有り。つぶれは自然面の残る面の刃部に集中するか。
452	石鋏	C-8G	(15.6)× 6.0	1.2	169.9	雲母石英片岩	自然面の残る薄い剥片素材。細身の短冊形か。刃部折れによる欠損。表面の節理面、一部剥落。
453	石鋏	C-8G	17.7×7.5	2.1	405.3	黒色片岩	自然面の残る剥片素材。短冊形か。ほぼ完形。刃部欠損後再調整。
454	石鋏	表採	20.4×8.4	3.6	808.8	緑色片岩	自然面の残る剥片素材。短冊形。完形。刃部片面調整。刃部摩耗著し。
455	石鋏か	D-8G	(16.1)× 11.3	3.2	860.0	雲母石英片岩	自然面の残る剥片素材。大型のバチ形か。側面に敲打による調整痕有り。刃部・基部欠損。

番号	器種	出土位置・層位	法 量			石 材	特 徴
			長さ×幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
456	石鍬	C-9 G	(10.6) × 6.7	2.0	233.0	緑色片岩	剥片素材。基部欠損。短冊形か。刃部は両面調整。刃部はつぶれ・摩耗著し。
457	石鍬	C-9 G	(7.7) × 8.7	2.5	208.6	砂岩	自然面の残る剥片素材。バチ形か。基部のみで刃部欠損。
458	打製石斧	C-8 G	(12.8) × 5.7	1.7	159.1	雲母石英片岩	自然面の残る剥片素材。分銅形か。刃部一部欠損。
459	打製石斧	墳丘斜面東側	13.6 × 7.5	3.5	428.9	砂岩	完形。分銅形。刃部再調整。両端の刃部のつぶれ・摩耗著し。刃部の一部に被熱痕か。
460	石匙か	C-8 G	9.4 × 7.2	1.1	99.8	雲母石英片岩	剥片素材。基部の両側辺にえぐり状の調整。刃部片側は折れか。粗製大型の石匙か。
461	打製石斧か	墳丘下南東側	(8.1) × 5.5	1.4	88.0	珪質準片岩	自然面の残る剥片素材。片面に自然面がほぼ全面に残る。両端部欠損。
462	打製石斧か	表採	(9.5) × 5.1	1.7	145.6	黒色片岩	自然面の残る剥片素材。短冊形か。刃部欠損。
463	打製石斧か	墳丘西側トレンチ	(6.5) × 6.9	2.1	129.2	ホルンフェルス	剥片素材。基部のみで刃部欠損。風化著し。
464	石核	C-8 G	6.4 × 10.0	6.4	536.0	凝灰質砂岩	盤状円礫素材。上面に打面を作出し、小形の剥片を剥離。右側面は分割面か。
465	削器か	C-8 G 暗褐色土	9.0 × 6.2	2.1	165.8	ホルンフェルス	剥片素材。表裏のほぼ全面に調整。打製石斧の刃部欠損後の転用か。
466	二次加工のある剥片	C-8 G 黒褐色土	7.9 × 7.8	1.7	125.9	硬質砂岩	自然面の残る剥片素材。剥片の右側表裏に不規則な調整を加える。下辺の折れ面にも粗い調整。
467	二次加工のある剥片	E-9 G 暗褐色土	2.6 × 2.1	0.9	3.6	黒曜石	自然面の残る剥片素材。縁辺のほぼ全周に不規則な調整。

## 遺構外出土の古墳・平安時代、中・近世の土器 (第58図、P L 27)

番号	器種	出土位置	残存率 法 量	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴	備 考
468	土師器 S字甕	石室背面	残口縁部～胴部 上位破片 高 (3.1)	①細砂少量② 酸化③浅黄橙	口縁部上半は欠損する。口縁部内面はヨコナデ。内面には面取りは見られない。胴部外面にハケメ。	古墳時代前期。
469	土師器 杯	羨道部内	残口縁部破片 高 (2.4)	①細砂少量 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部は緩やかに彎曲して立ち上がる。内外面に棒状工具によるミガキが施されている。	
470	土師器 杯	墳丘斜面東側	残1/4 口(11.2) 底 (5.0) 高 (4.2)	①粗砂少量 ②酸化 ③にぶい赤褐	口縁部は狭小な底部から斜め上方に外反、先端で傾きを起こす。底部はヘラケズリにより平底となる。	片岩の混入は目立たない。平安時代9世紀。
471	土師器 杯	墳丘斜面～裾部北 東側・北側	残1/4 口 (11.0) 底 (4.0) 高 (6.6)	①粗砂少量 ②酸化 ③にぶい赤褐	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。口縁部の先端にヨコナデ。下位から底部にかけてヘラケズリ。	平安時代。9世紀。
472	土師質土器 皿	墳丘斜面東側	残3/4 口8.6 底4.8 高1.9	①粗砂 ②酸化か③橙	左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。内外面に炭素吸着。煤か。	時期・製作地不詳。
473	軟質陶器 播鉢	墳丘斜面北側	残口縁部破片 高 (1.8)	①白色鈳物粒 ②酸化か③橙	内面に卸し目。	中世。在地産。
474	軟質陶器 播鉢	墳丘斜面北側	残口縁部破片 高 (4.8)	①鈳物粒少量 ②酸化か③橙	外面はヨコ方向のナデ。内面には1単位5本以上の卸し目。	中世。在地産。
475	軟質陶器 播鉢	墳丘斜面北東側	残口縁部破片 高 (6.4)	①白色鈳物粒 ②酸化か③橙	外面はナデ。内面には1単位7本以上の卸し目。使用による摩耗痕が認められる。	中世。在地産。
476	磁器碗	墳丘斜面北側	残口縁部下位～ 高台部1/3 高 (2.2)	①精選②還元 ③灰白	外面に文様あり。	18世紀後半。肥前波佐見系。
477	陶器仏飯器	墳丘斜面北側	残口縁部下位 高 (1.6)	①精選②還元 ③灰	外面に文様が見られるが不詳。焼成不良。	江戸時代。肥前か。波佐見系か。
478	陶器碗	墳丘上	残口縁部下位～ 高台部 高台5.4 高 (2.6)	①精選②還元 ③灰白	京焼風陶器。高台部内に「清水」の銘あり。	17世紀中葉～末。肥前。
479	陶器 呉器手碗	墳丘斜面東側	残口縁部下位～ 高台部 高台5.0 高 (2.1)	①精選②還元 ③浅黄	内外面に灰釉。貫入が著しい。	17世紀後半～18世紀前半。肥前。
480	陶胎染付碗	墳丘西側トレンチ	残口縁部下位～ 高台部 高台5.0 高 (2.5)	①精選②還元 ③灰白	口縁部外面の文様は不明。高台部外面に2条の横線が廻る。	18世紀。肥前。
481	陶器染付皿	墳丘斜面西側	残口縁部破片 口 (13.0) 高 (3.1)	①精選②還元 ③灰白	内面に文様を描く。見込みは釉剥ぎ。	18世紀後半～19世紀前半。瀬戸・美濃。

遺物観察表

番号	器種	出土位置	残存率 法量	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴	備考
482	陶器天目碗	墳丘斜面北東側	残口縁部破片 口(11.0)高(5.5)	①精選②還元 ③灰白	口縁部の先端は外面に稜を有しつままれたように尖る。鉛釉に近い鉄釉がかかる。	江戸時代か。瀬戸・美濃。
483	陶器碗	墳丘斜面東側	残口縁部下半～ 底部 1/3 底5.8 高(3.2)	①鈳物粒多量 ②還元③浅黄	鉛釉を施す。口縁部の下位、高台部内面にヘラケズリ。	17世紀中葉～後葉。瀬戸・美濃。
484	陶器碗	墳丘斜面北側	残口縁部下位～ 高台部 高台4.7 高(1.8)	①精選②還元 ③灰	外面に釉薬を施した腰鏝碗。小さな高台部が付く。	18世紀。瀬戸・美濃。
485	陶器灯明皿 受台	墳丘北側トレンチ	残脚台部1/2 底 5.5 高(3.8)	①精選②還元 ③淡黄	脚台部は大きくハの字状に外反。底面直上に最大径を有する。	19世紀。製作地不詳。
486	陶器灯明皿	墳丘西側トレンチ	残略完形 口9.0 底3.4 高2.2	①精選②還元 ③灰白	外面には右回転のヘラケズリを施す。内面に灰釉。外面の釉は口縁部先端にとどまる。内面に目傷4箇所あり。	19世紀か。製作地不詳。
487	陶器灯明皿	墳丘斜面西側	残口縁部～底部 破片 口(10.1) 底(4.0)高2.4	①精選②還元 ③浅黄	右回転ロコロ成形か。外面は口縁部の中位以下、底部まで回転を伴うヘラケズリ調整。	19世紀。瀬戸・美濃。
488	陶器灯明皿 受皿	墳丘斜面東側、石 室崩落土	残1/3 口(11.0) 底(5.6)高2.0	①精選②還元 ③浅黄	先端を除いて右回転ヘラケズリ。	19世紀。瀬戸・美濃。
489	陶器灯明皿 受皿	石室崩落土	残口縁部～底部 破片 口(11.8) 底(6.0)高2.1	①精選②還元 ③浅黄	右回転ロコロ成形か。外面は口縁部中位以下に回転を伴うヘラケズリ。受けにはヘラによる切り込みが見られる。	19世紀。瀬戸・美濃。
490	陶器皿または鉢	墳丘斜面北側	残口縁部破片 高(5.2)	①精選。白色・ 黒色鈳物粒② 還元 ③赤褐	口縁部の先端は受け口状に大きく外反する。内面に三鳥手の文様を刻すが不鮮明である。	江戸時代。肥前。
491	陶器鉢	墳丘斜面北東側	残口縁部下位～ 高台部破片高台 (12.0)高(3.0)	①白色鈳物粒 ②還元③にぶ い橙	内面に釉薬。	江戸時代。
492	陶器搦鉢	北東トレンチ	残口縁部破片 高(5.0)	①粗砂少量② 還元③明赤褐	外面はヨコ方向のナデ。内面には卸し目が見られる。	江戸時代。
493	陶器搦鉢	墳丘斜面東側	残口縁部破片 高(5.0)	①精選②還元 ③淡黄	内外面に釉薬。内面の卸し目は使用により摩耗が著しい。	江戸時代。
494	陶器搦鉢	墳丘斜面東側	残口縁部破片 高(3.2)	①精選②還元 ③淡黄	内外面に釉薬。内面に卸し目。	江戸時代。

遺構外出土の中・近世金属製品 (第59図、P L 27)

番号	器種	出土位置	残存率 法量 (cm)	素 材	成形・整形の特徴	備考
495	不明 棒状品	羨道部埋没 土上層	破片 残長14.1	鉄製	一端は薄く偏平になり、ヘラ状を呈している。もう一端は切断されたような面をもって収束している。器面の状況が悪いため、断面形が円形なのか面を持つものか不明である。縦0.6cm、幅0.65cmを測る。	
496	不明 かんざし?	墳丘東側	長7.05	非鉄製	薄板を筒状に巻き、一端を花文様のある板で塞いでいる。横断面形は五角形で、縦0.9cm、横1.05cmを測る。もう一端は断面円形で開放されている。側面にも文様が付されている。	
497	煙管	墳丘斜面北 側	火皿部 高1.0	非鉄製	雁首から火皿のみが外れて残存したもの。上端の直径は1.8cm×1.6cmである。	

遺構外出土の中・近世石製品 (第59図、P L 27)

番号	器種	出土位置	残存率 法量 (cm)	石 材	成形・整形の特徴	備考
498	板碑	墳丘斜面北 東側	略完形 長55.7 幅18.1 厚2.7	緑泥片 岩	頂部の山形は著しく不均等である。向かって右側が欠損、あるいは二次調整後の形状を呈していると考えられる。基部も左右の均衡を欠いている。山形の直下の条線は見られない。種子はキリークが彫られ、蓮台を伴っている。紀年銘は認められない。裏面には下位を中心に横方向に鑿状の工具痕を多く残している。	重量4799 g
499	板碑	墳丘斜面北 東側	破片 長(19.9) 幅15.4 厚さ1.5	緑泥片 岩	頂部の山形はていねいに作られ、均整がとれている。種子の最上位が一部残存するところで欠損している。幅15.4cm、厚さ1.5cmを測る。裏面は剥離している。	重量642 g

## 遺構外出土の中・近世の古銭 (第60図、P L 28)

番号	銭種	出土位置	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
500	景德元寶	墳丘南西側	A 24.63 B 24.56	C 20.14 D 19.44	① 1.38 ③ 1.22 ② 1.21 ④ 1.42	3.2	1004年 北宋	左下外縁一部欠損。
501	元符通寶	墳丘南西側	A 24.47 B 24.50	C 20.42 D 20.30	① 1.17 ③ 1.16 ② 1.10 ④ 1.23	3.2	1098年 北宋	
502	聖宋元寶	墳丘南西側	A 24.48 B 24.42	C 19.84 D 19.83	① 1.42 ③ 1.26 ② 1.43 ④ 1.31	3.5	1101年 北宋	
503	天聖元寶	墳丘南西側	A 24.93 B 24.91	C 19.85 D 19.76	① 1.31 ③ 1.18 ② 1.25 ④ 1.22	3.6	1023年 北宋	
504	天聖元寶	墳丘南西側	A 25.54 B 25.74	C 21.38 D 20.84	① 1.15 ③ 1.16 ② 1.13 ④ 1.06	3.7	1023年 北宋	
505	淳化元寶	墳丘南西側	A 24.73 B 24.68	C 17.71 D 17.68	① 0.95 ③ 0.94 ② 0.96 ④ 0.96	2.8	990年 北宋	
506	政和通寶	墳丘南西側	A 24.32 B 24.29	C 20.12 D 19.97	① 1.24 ③ 1.60 ② 1.29 ④ 1.56	3.6	1111年 北宋	
507	紹聖元寶	墳丘南西側	A 24.54 B 24.62	C 18.90 D 19.14	① 1.22 ③ 1.25 ② 1.28 ④ 1.11	3.3	1094年 北宋	
508	治平通寶	墳丘南西側	A 24.44 B 24.37	C 18.63 D 18.53	① 1.37 ③ 1.30 ② 1.36 ④ 1.29	3.7	1064年 北宋	外縁不整形。
509	元祐通寶	墳丘南西側	A 24.69 B 24.62	C 17.11 D 17.13	① 1.05 ③ 1.30 ② 1.23 ④ 1.21	3.3	1086年 北宋	
510	嘉祐通寶	墳丘南西側	A 25.14 B 25.26	C 19.56 D 19.12	① 1.13 ③ 1.02 ② 1.04 ④ 1.11	3.6	1056年 北宋	
511	景祐元寶	墳丘南西側	A 25.15 B 25.24	C 19.46 D 19.69	① 1.10 ③ 1.13 ② 1.08 ④ 1.13	3.5	1034年 北宋	右上外縁一部欠損。孔は不整形。
512	開元通寶	墳丘南西側	A 22.66 B 22.76	C 19.16 D 19.89	① 1.21 ③ 1.00 ② 1.03 ④ 1.09	2.7	621年 唐	
513	熙寧元寶	墳丘南西側	A 23.98 B 24.08	C 18.70 D 18.38	① 1.54 ③ 1.40 ② 1.51 ④ 1.42	4.0	1068年 北宋	
514	政和通寶	墳丘南西側	A 24.56 B 24.42	C 20.41 D 20.20	① 1.18 ③ 1.23 ② 1.25 ④ 1.20	2.4	1111年 北宋	下半部、残存不良。
515	開元通寶	墳丘南西側	A 24.79 B 24.72	C 20.37 D 20.13	① 1.27 ③ 1.28 ② 1.27 ④ 1.26	3.4	621年 唐	背上月。
516	元祐通寶	墳丘南西側	A 24.45 B 24.45	C 19.61 D 19.32	① 1.28 ③ 1.21 ② 1.19 ④ 1.31	3.6	1086年 北宋	
517	天聖元寶	墳丘南西側	A 24.98 B 24.96	C 20.70 D 20.38	① 1.16 ③ 1.13 ② 1.14 ④ 1.08	3.3	1023年 北宋	
518	宣和通寶	墳丘南西側	A 25.18 B 25.44	C 19.33 D 19.20	① 1.41 ③ 1.33 ② 1.48 ④ 1.38	4.4	1119年 北宋	
519	祥符元寶	墳丘南西側	A 24.93 B 25.24	C 17.97 D 17.84	① 1.13 ③ 1.13 ② 1.13 ④ 1.06	3.5	1009年 北宋	
520	熙寧元寶	墳丘南西側	A 23.95 B 24.01	C 19.40 D 19.19	① 1.55 ③ 1.22 ② 1.18 ④ 1.40	3.8	1068年 北宋	
521	元豊通寶	墳丘南西側	A 24.09 B 23.93	C 18.90 D 18.53	① - ③ 1.19 ② 1.20 ④ 1.12	2.8	1078年 北宋	上部欠損。
522	景祐元寶	墳丘南西側	A 25.44 B 25.62	C 19.15 D 19.09	① 1.14 ③ 1.12 ② 1.25 ④ 1.05	3.8	1056年 北宋	
523	政和通寶	墳丘南西側	A 24.52 B 24.48	C 21.07 D 21.38	① 1.34 ③ 1.29 ② 1.39 ④ 1.30	3.6	1111年 北宋	
524	皇宋通寶	墳丘南西側	A 24.33 B 24.56	C 19.71 D 19.68	① 1.21 ③ 1.07 ② 1.07 ④ 1.21	3.0	1039年 北宋	
525	貞元重寶	墳丘南西側	A 23.70 B 23.33	C 18.98 D 18.87	① 0.93 ③ 0.93 ② 0.91 ④ 0.97	2.4	758年 唐	背下月。
526	天聖元寶	墳丘南西側	A 25.13 B 25.09	C 20.23 D 20.34	① 1.26 ③ 1.38 ② 1.28 ④ 1.28	3.8	1023年 北宋	
527	皇宋通寶	墳丘南西側	A 24.14 B 24.24	C 18.93 D 18.75	① 1.14 ③ 1.28 ② 1.18 ④ 1.21	3.3	1039年 北宋	
528	皇宋通寶	墳丘南西側	A 24.10 B 24.59	C 19.96 D 19.84	① 1.01 ③ 1.12 ② 1.17 ④ 1.06	3.1	1039年 北宋	

遺物観察表

番号	銭種	出土位置	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
529	皇宋通寶	墳丘南西側	A 24.62 B 24.97	C 19.74 D 19.97	① 0.94 ③ 1.06 ② 1.05 ④ 0.96	3.0	1039年 北宋	孔にバリ少々見られる。
530	元豊通寶	墳丘南西側	A 24.78 B 24.76	C 19.65 D 19.70	① 1.17 ③ 1.13 ② 1.15 ④ 1.23	3.7	1078年 北宋	
531	天聖元寶	墳丘南西側	A 24.73 B 24.89	C 20.51 D 20.13	① 1.19 ③ 1.12 ② 1.12 ④ 1.20	3.2	1023年 北宋	
532	開元通寶	墳丘南西側	A - B 22.78	C - D 20.28	① - ③ 1.04 ② 0.93 ④ 0.99	1.9	621年 唐	左上外縁欠損。
533	元祐通寶	墳丘南西側	A 23.62 B 23.58	C 19.14 D 18.90	① 1.46 ③ 1.21 ② 1.33 ④ 1.28	3.4	1086年 北宋	孔はバリ残り円形。
534	天聖元寶	墳丘南西側	A 25.10 B 25.01	C 20.68 D 20.54	① 1.21 ③ 1.14 ② 1.25 ④ 1.09	3.7	1023年 北宋	
535	至道元寶	墳丘南西側	A 24.82 B 24.78	C 17.18 D 18.03	① 0.97 ③ 0.98 ② 0.90 ④ 1.04	2.5	995年 北宋	
536	開元通寶	墳頂部西側	A 24.11 B 23.97	C 20.07 D 20.16	① 1.23 ③ 1.19 ② 1.17 ④ 1.25	3.6	621年 唐	
537	大觀通寶	墳丘斜面東側	A 24.92 B 24.92	C 21.46 D 21.08	① 1.43 ③ 1.29 ② 1.37 ④ 1.26	3.0	1107年 北宋	
538	寛永通寶	墳丘斜面西側	A 28.39 B 28.32	C 21.27 D 21.04	① 1.07 ③ 1.02 ② 1.04 ④ 1.05	4.0	1769年 日本	四文銭。11波。
539	寛永通寶	墳丘斜面南側	A 28.16 B 28.36	C 19.40 D 19.19	① 1.55 ③ 1.22 ② 1.18 ④ 1.40	5.0	1769年 日本	四文銭。11波。
540	寛永通寶	墳頂部北側	A (24.65) B -	C (19.89) D -	① 1.47 ③ 1.48 ② 1.40 ④ 1.50	2.9	1769年 日本	鉄銭。残存状態が脆弱であったため拓本未掲載。
541	寛永通寶	墳頂部北側	A 24.26 B 24.34	C 19.70 D 19.68	① 1.35 ③ 1.34 ② 1.34 ④ 1.23	2.4	1769年 日本	鉄銭。
542	寛永通寶	墳丘斜面西側	A 22.92 B -	C 18.43 D 18.45	① 1.43 ③ 1.45 ② 1.37 ④ 1.71	2.4	1769年 日本	鉄銭。右上外縁一部欠損。背上千か。

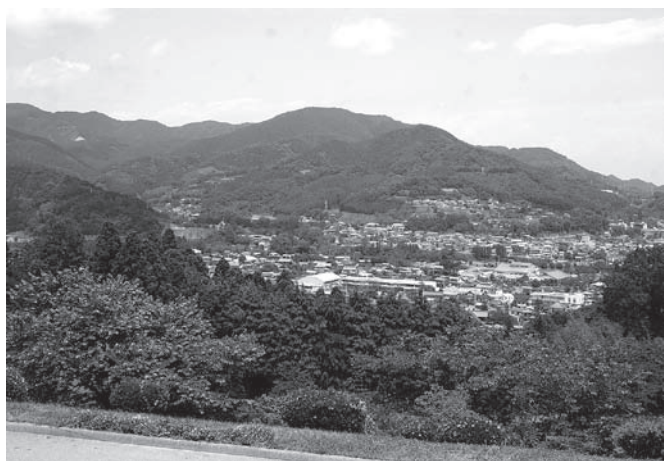
# 写真図版







1 原古墳の位置 (●) と周辺の地形 (上空から)



2 原古墳の位置と周辺の地形 (埼玉県側から)



3 調査前の原古墳 (南から)



4 調査前の原古墳 (南西、鬼石橋から)



5 雑木伐採後の原古墳 (南から)



1 墳丘全景（南から）



2 墳丘全景（北から）



1 墳丘全景 (南から)



2 墳丘全景 (北から)



3 墳丘全景 (西から)



4 墳丘全景 (東から)



5 墳丘東部分検出状況 (東から)



6 墳丘東部分葺石残存状況 (東から)



7 墳丘北東部分検出状況 (北西から)



8 墳丘北東部分葺石残存状況 (北東から)

# PL.4



1 墳丘北東部分残存状況（北から）



2 墳丘北西部分残存状況（西から）



3 墳丘西部分残存状況（西から）



4 墳丘南西部分残存状況（南から）



5 墳丘北東部分埴輪出土状況（東から）



6 墳丘北東部分埴輪出土状況（北東から）



7 墳丘裾部北東部分埴輪出土状況（南東から）



8 墳丘裾部北東部分埴輪出土状況（北東から）



1 石室全景 (南から)



2 石室床面 (北から)



3 石室羨道部閉塞状況 (南から)



4 石室羨道部 (南から)



5 石室梱石 (南から)



6 石室奥壁 (南から)

# PL.6



1 石室羨道部左側壁（東から）



2 石室玄室部左側壁（東から）



3 石室玄室部左側壁（北東から）



4 石室玄室部左側壁（東から）



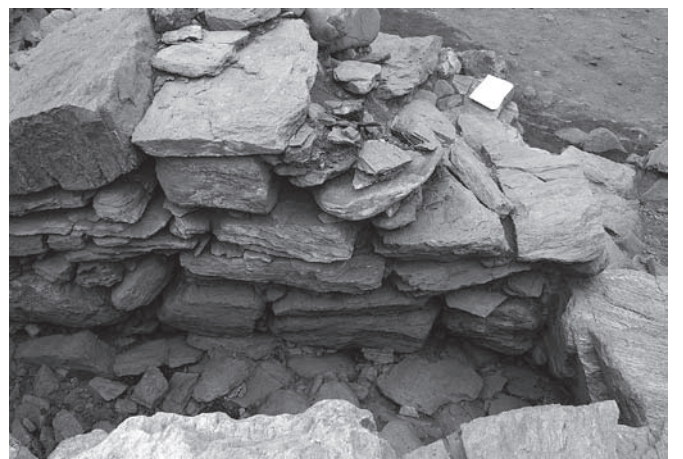
5 石室玄室部右側壁（西から）



6 石室羨道部右側壁（西から）



7 石室玄室右側壁（西から）



8 石室羨道部右側壁（西から）



1 石室床石除去後の舗石（北から）



2 石室羨道部舗石（南から）



3 石室奥壁設置状況（南から）



4 石室羨道部舗石除去後（南から）



5 石室玄室部舗石除去後（北から）



6 石室玄室内切子玉出土状況（南から）



7 石室玄室内切子玉出土状況（南から）





1 墳丘南東部分断ち割り状況（南から）



2 墳丘北東部分断ち割り状況（東から）



3 墳丘北西部断ち割り状況（北から）



4 墳丘南西部断ち割り状況（南から）



5 墳丘南西部断ち割り状況（東から）



1 墳丘北部分礫除去中の状況（北から）



2 墳丘西部分礫除去中の状況（南西から）



3 墳丘東部分礫除去中の状況（東から）



4 墳丘東部分礫除去中の状況（東から）



5 墳丘内礫除去中の石室（南から）



6 墳丘内礫除去中の石室左側壁背面（西から）



7 墳丘内礫除去中の石室右側壁背面（南東から）



1 墳丘内礫除去中の石室羨道部左側壁背面（南西から）



2 墳丘内礫除去中の石室奥壁背面（北東から）



3 石室羨道部左側壁石材 101～108(東から)



4 石室羨道部左側壁石材 101～108 除去後（東から）



5 石室羨道部右側壁石材 15～18(西から)



6 石室羨道部右側壁石材 15～18 除去後（西から）



7 石室玄室部右側壁石材 186 他（南から）



8 石室玄室部右側壁石材 186 他除去後（南から）



1 石室玄室部移築対象石材上端の検出状況(南から)



4 石室玄室部左側壁石材 274・275(東から)



2 石室玄室部右側壁石材 374(西から)



5 石室玄室部左側壁石材 274・275 除去後(東から)



3 石室玄室部右側壁石材 374 除去後(西から)



6 石室玄室部左側壁石材 274・275 除去後(東から)



7 墳丘内礫除去中の石室奥壁背面(北から)



8 墳丘内礫除去中の石室奥壁背面(北から)



1 墳丘基底面の礫と石室基底石検出状況（上空から）



2 墳丘基底面の礫と石室基底石検出状況（北から）



3 墳丘西部分基底面の礫検出状況（北から）



4 墳丘基底面の礫除去中の状況（南から）



5 石室玄室部基底石設置状況（南から）



6 石室玄室部基底石設置状況（北から）



7 石室基底石下の礫検出状況（南から）



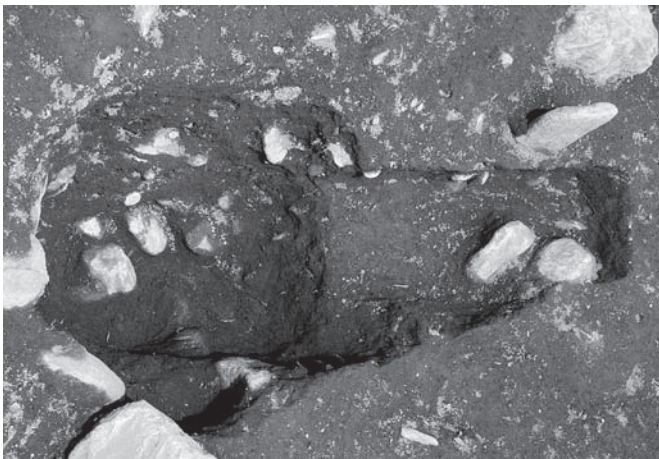
8 石室柵石下の礫検出状況（南から）



1 石室基底石下の礫と墳丘構築面（南から）



2 石室石材の据え方面（南から）



3 1号土坑全景（東から）



4 2号土坑全景（南から）



5 墳丘南西部分古銭出土地点（南西から）



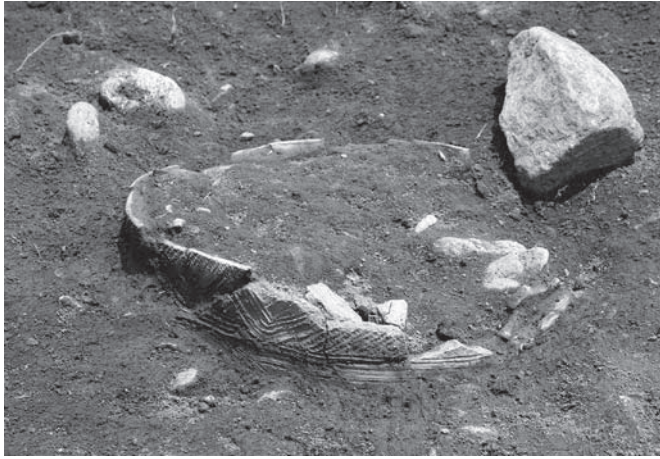
6 墳丘北東部分板碑出土状況（北東から）



7 F-7・8グリッド周辺遺物出土状況（東から）



8 E・F-8・9グリッド周辺遺物出土状況（南から）



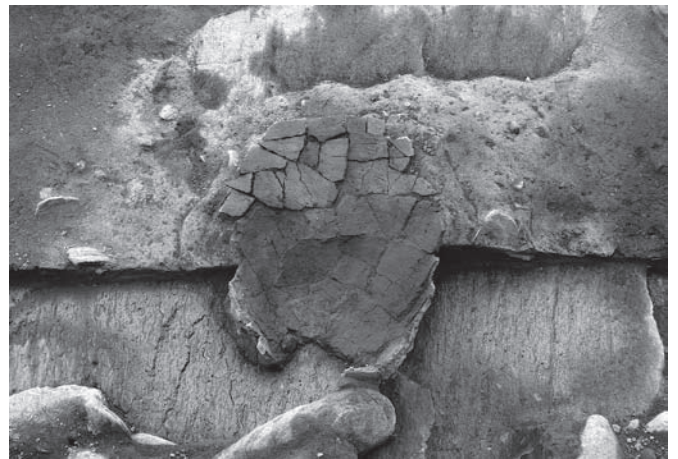
1 E-7グリッドP-1土器出土状況(北西から)



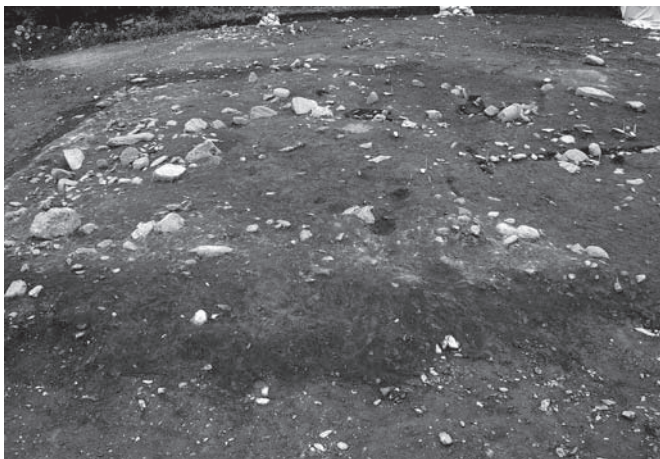
2 E-7グリッドP-1土器出土状況(南から)



3 E-9グリッドP-1土器出土状況(南から)



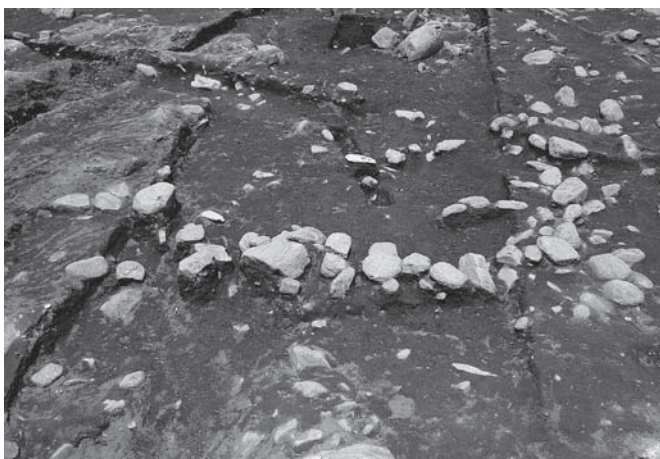
4 E-9グリッドP-1土器出土状況(北から)



5 墳丘下遺物出土状況(南から)



6 C-9グリッド遺物出土状況(南から)



7 C-8グリッド遺物出土状況(南から)



8 墳丘下遺物検出作業状況(南から)



1



23



39



15



6



2



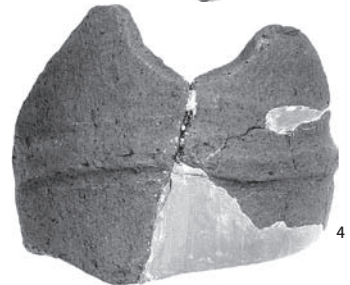
7



3



21



4



46



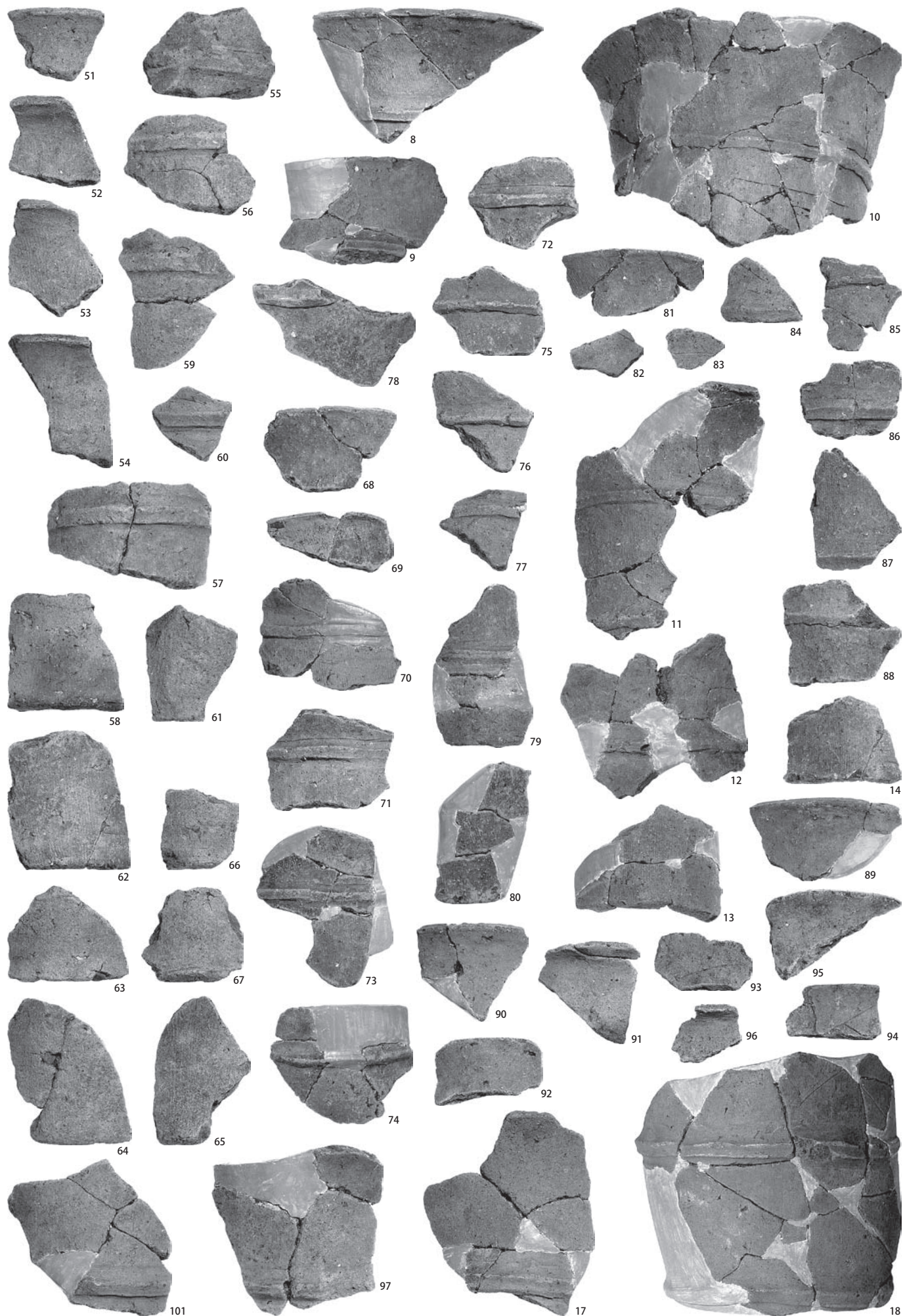
22

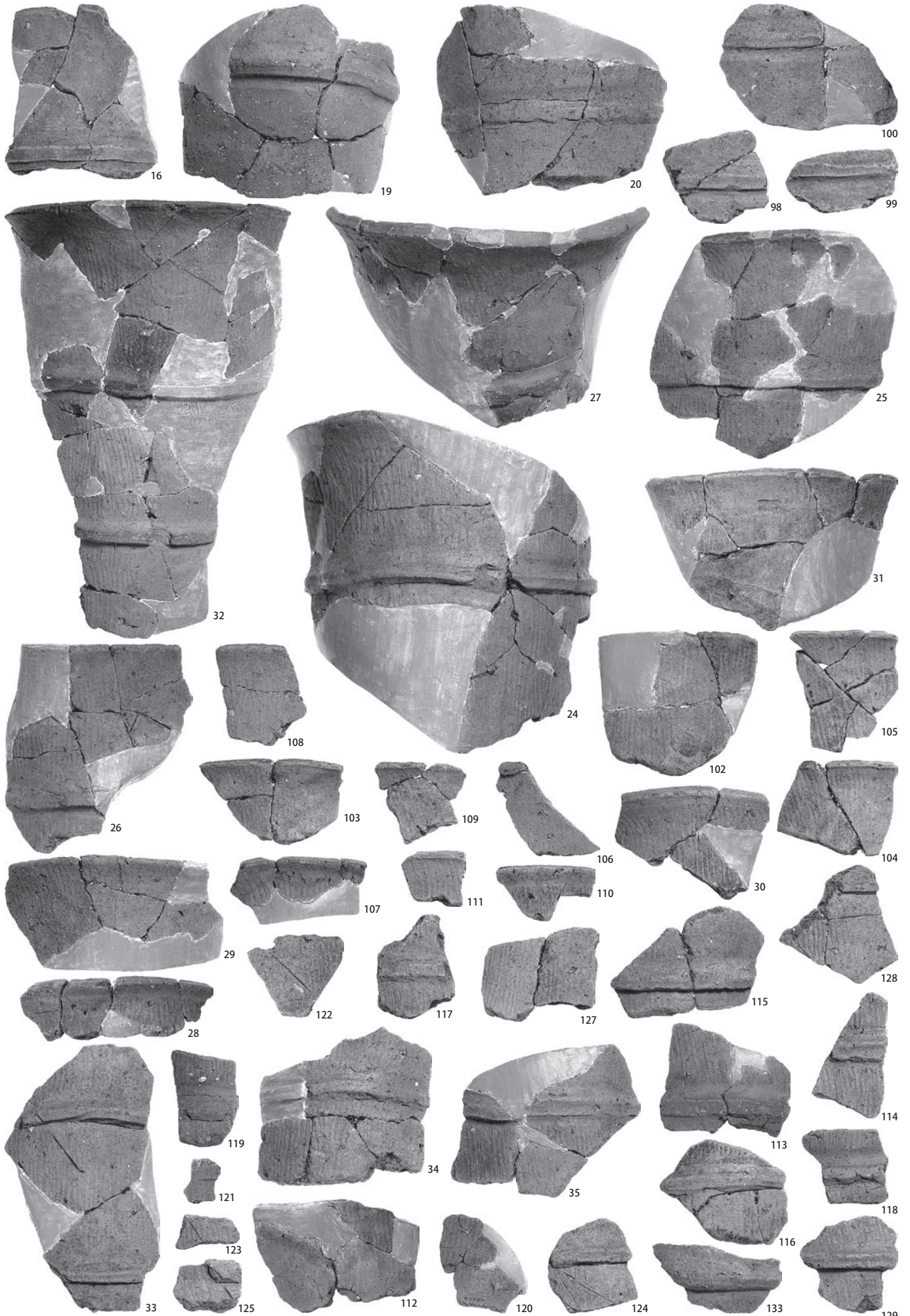


5

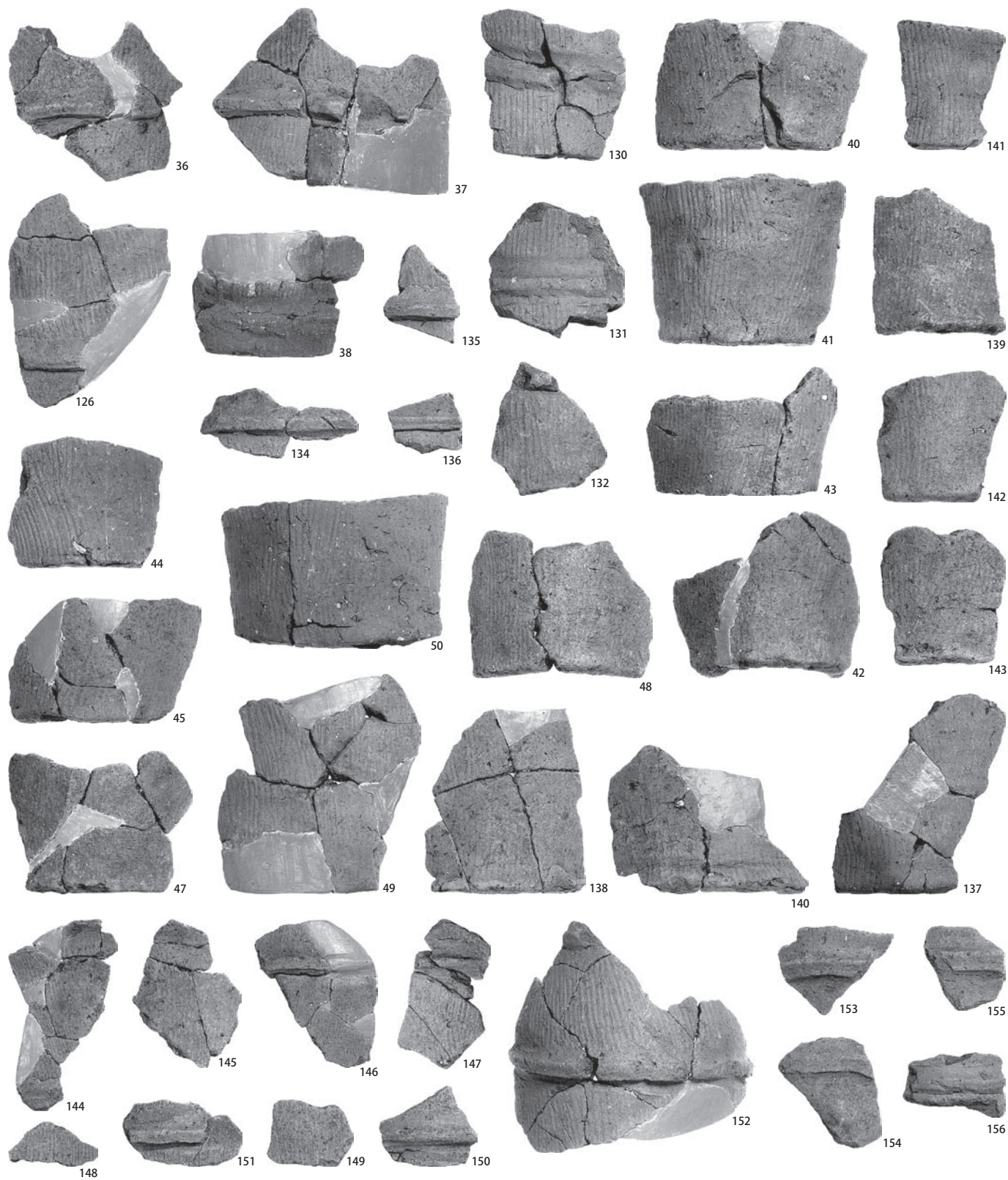
円筒埴輪 (1)



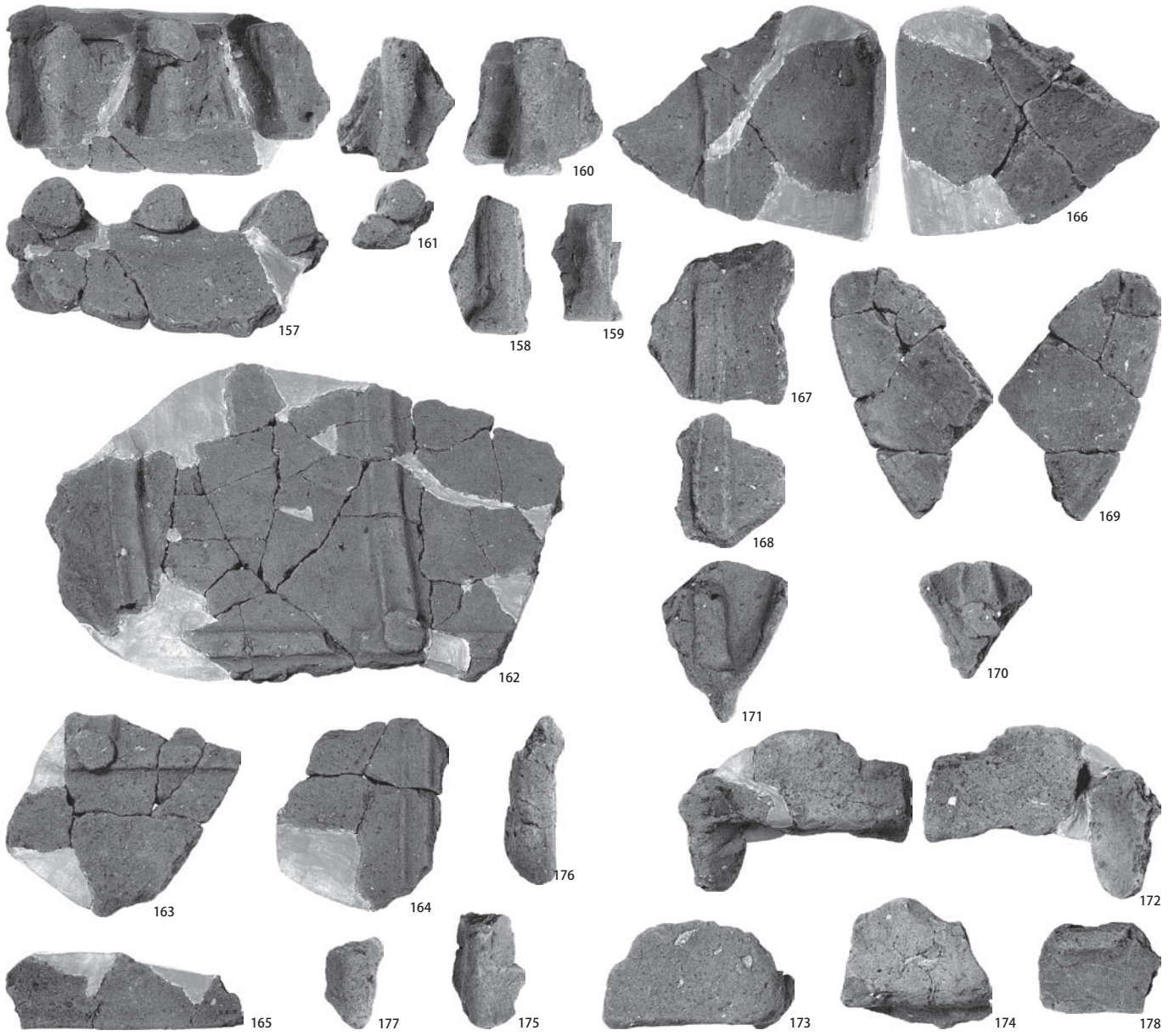




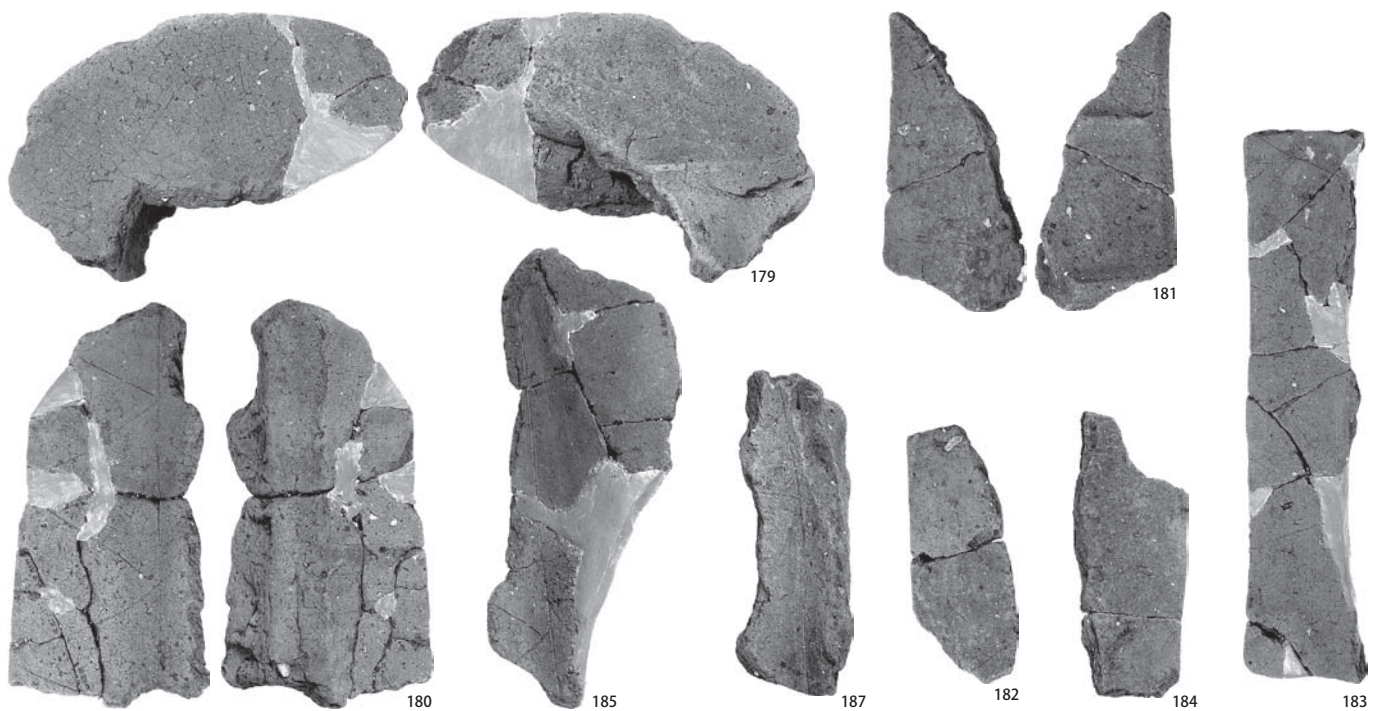
円筒埴輪 (3)



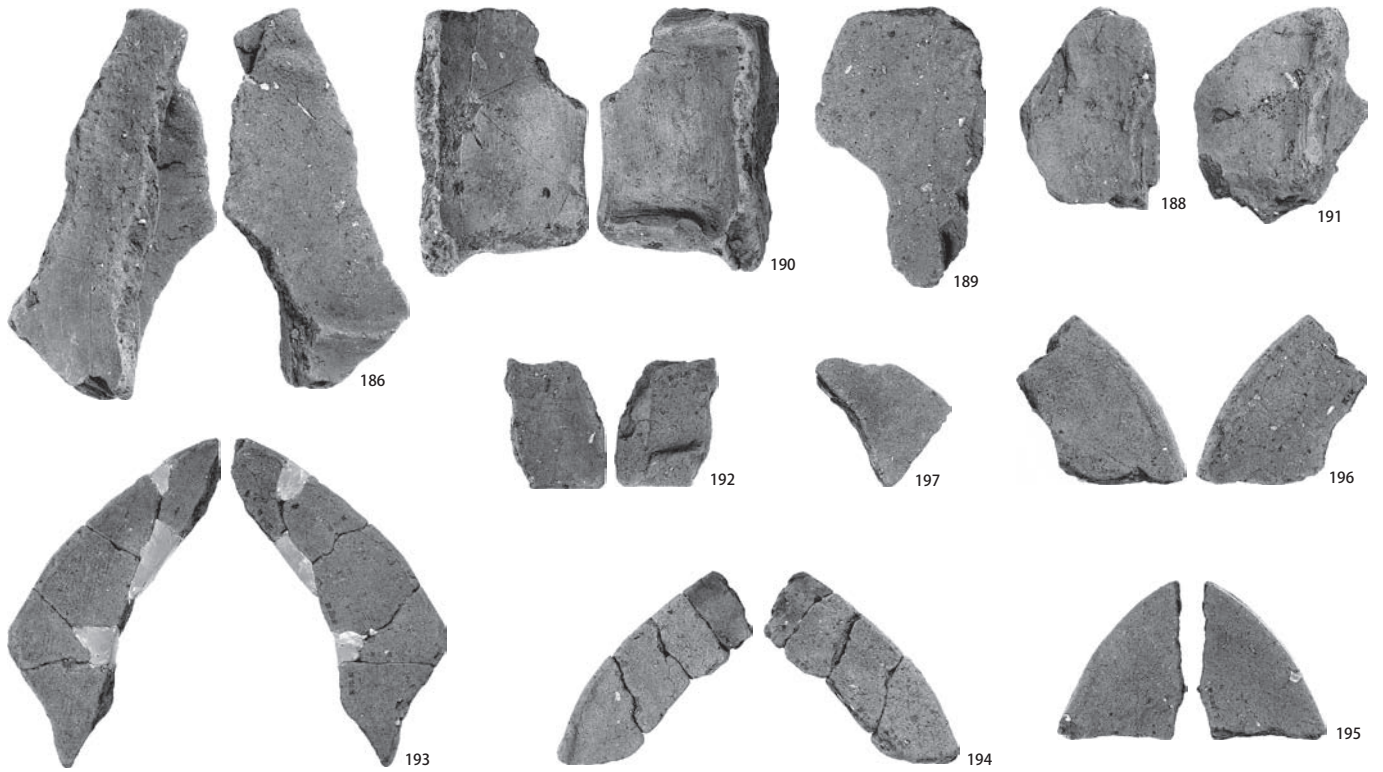
円筒埴輪 (4)



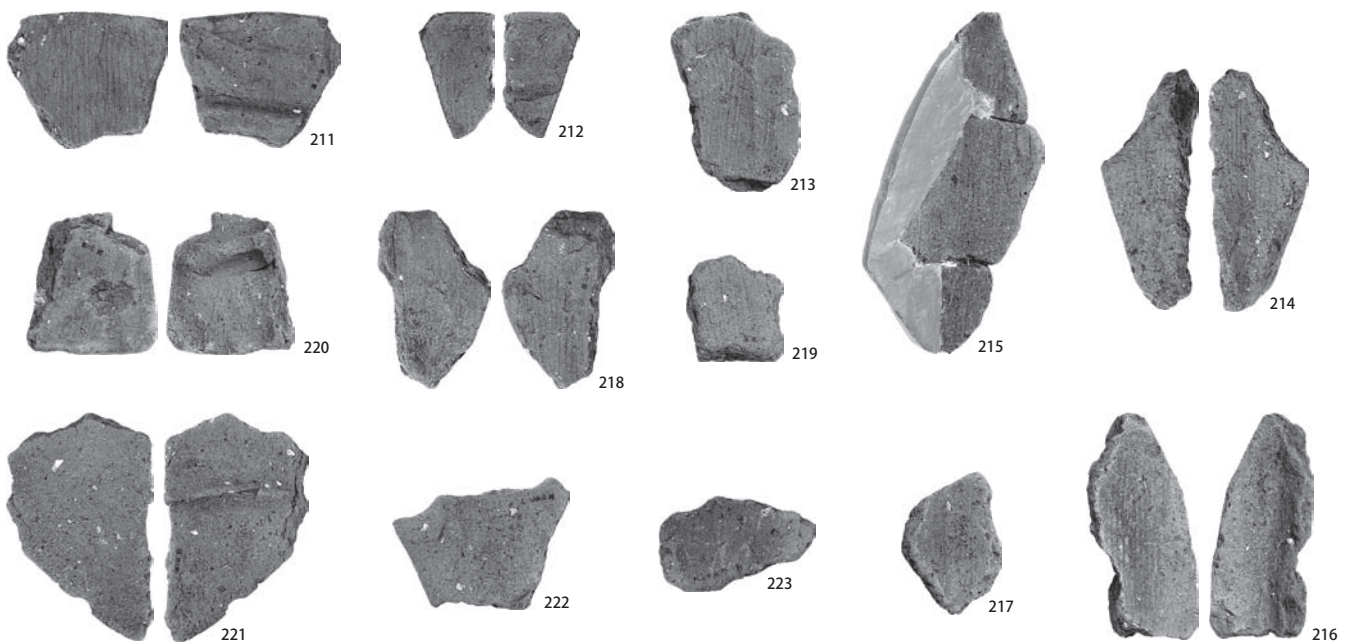
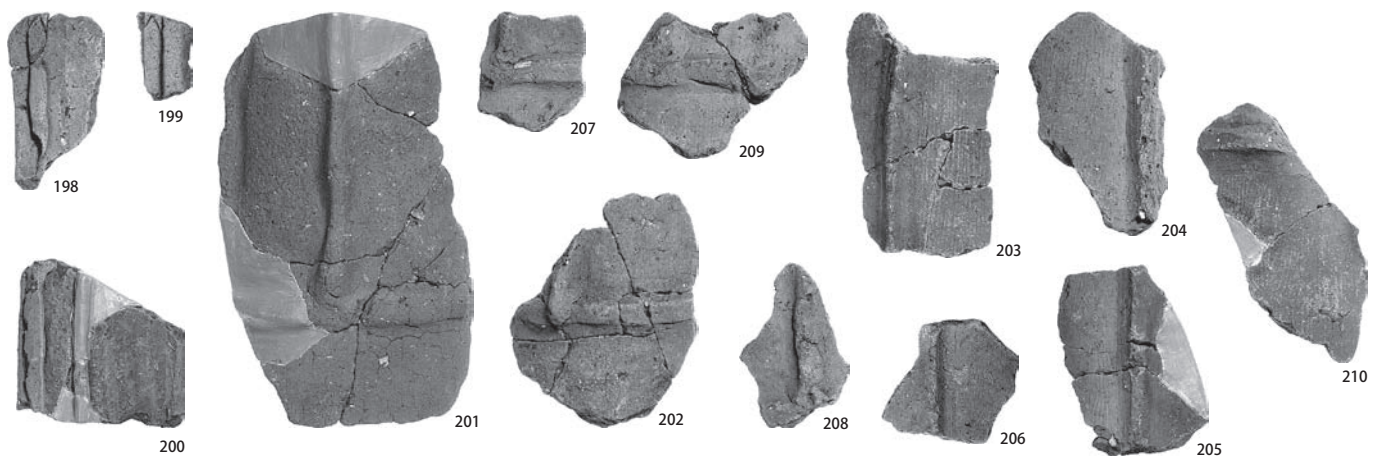
家形埴輪



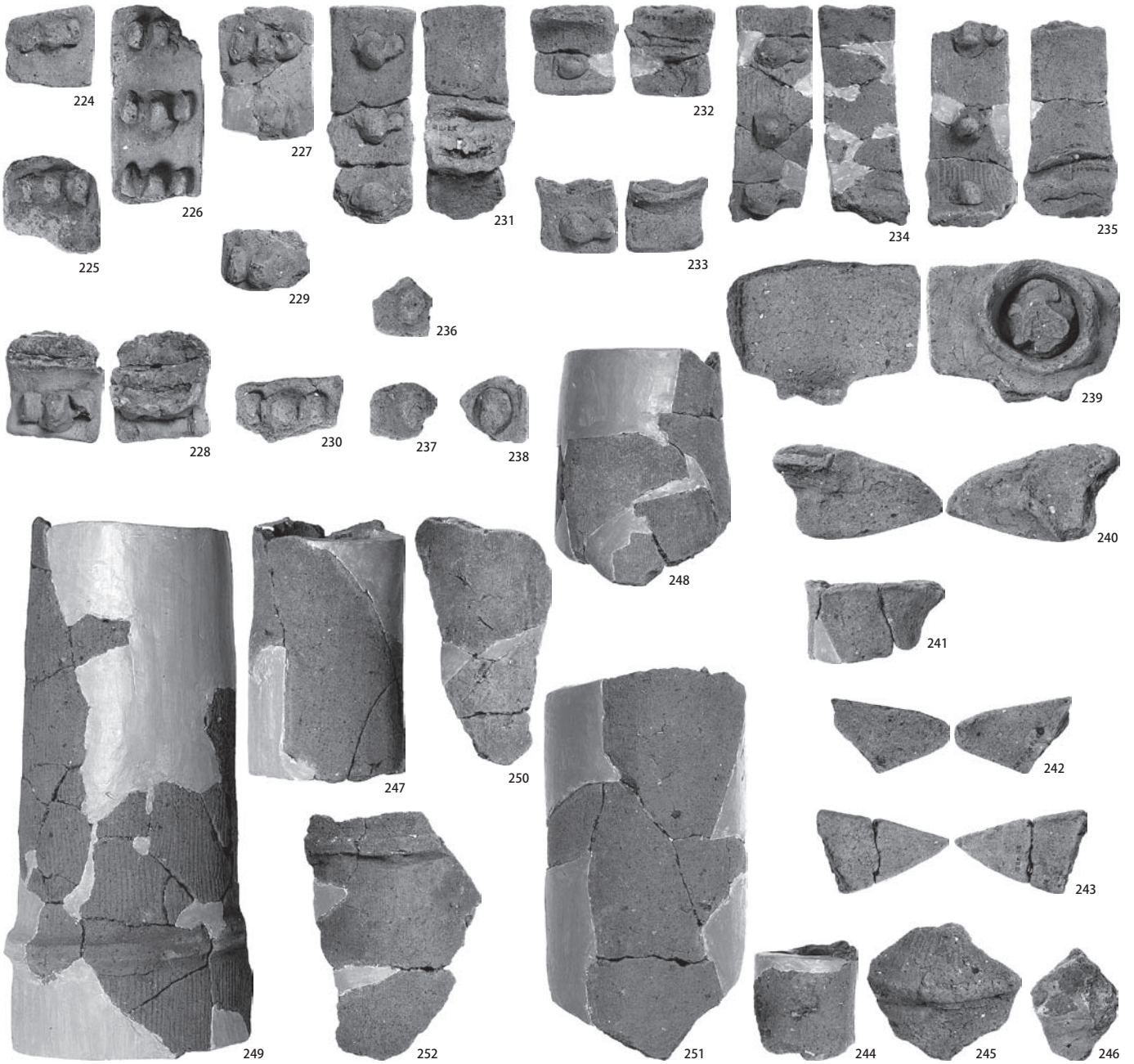
盾形埴輪 (1)



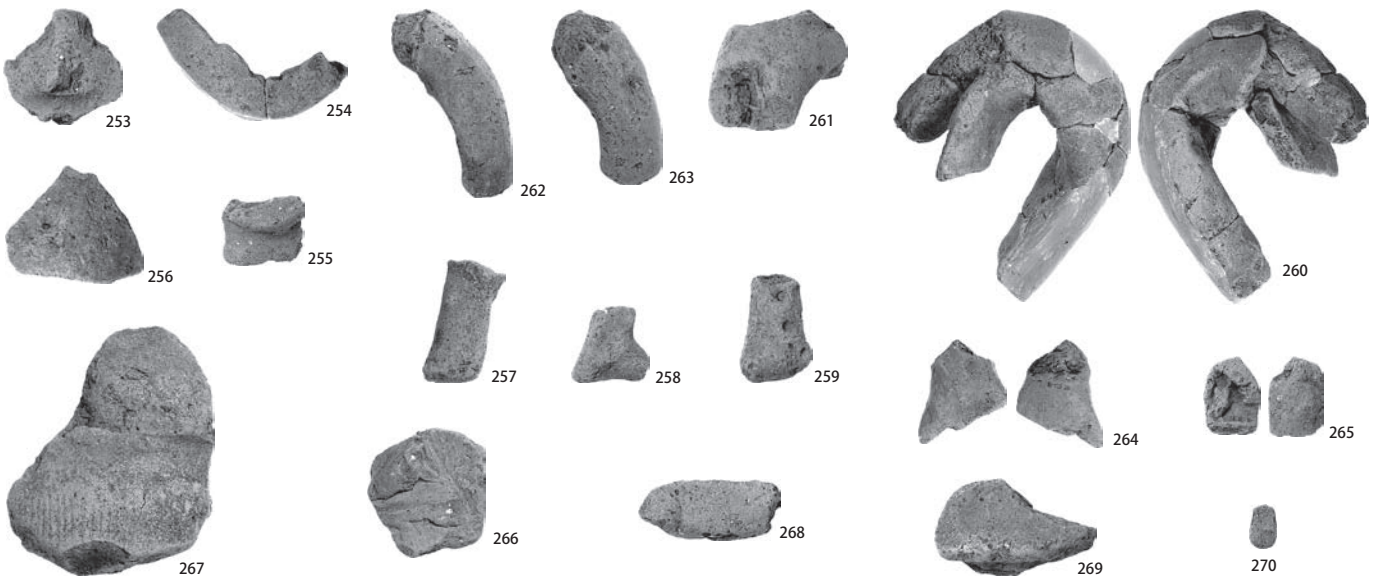
盾形埴輪 (2)



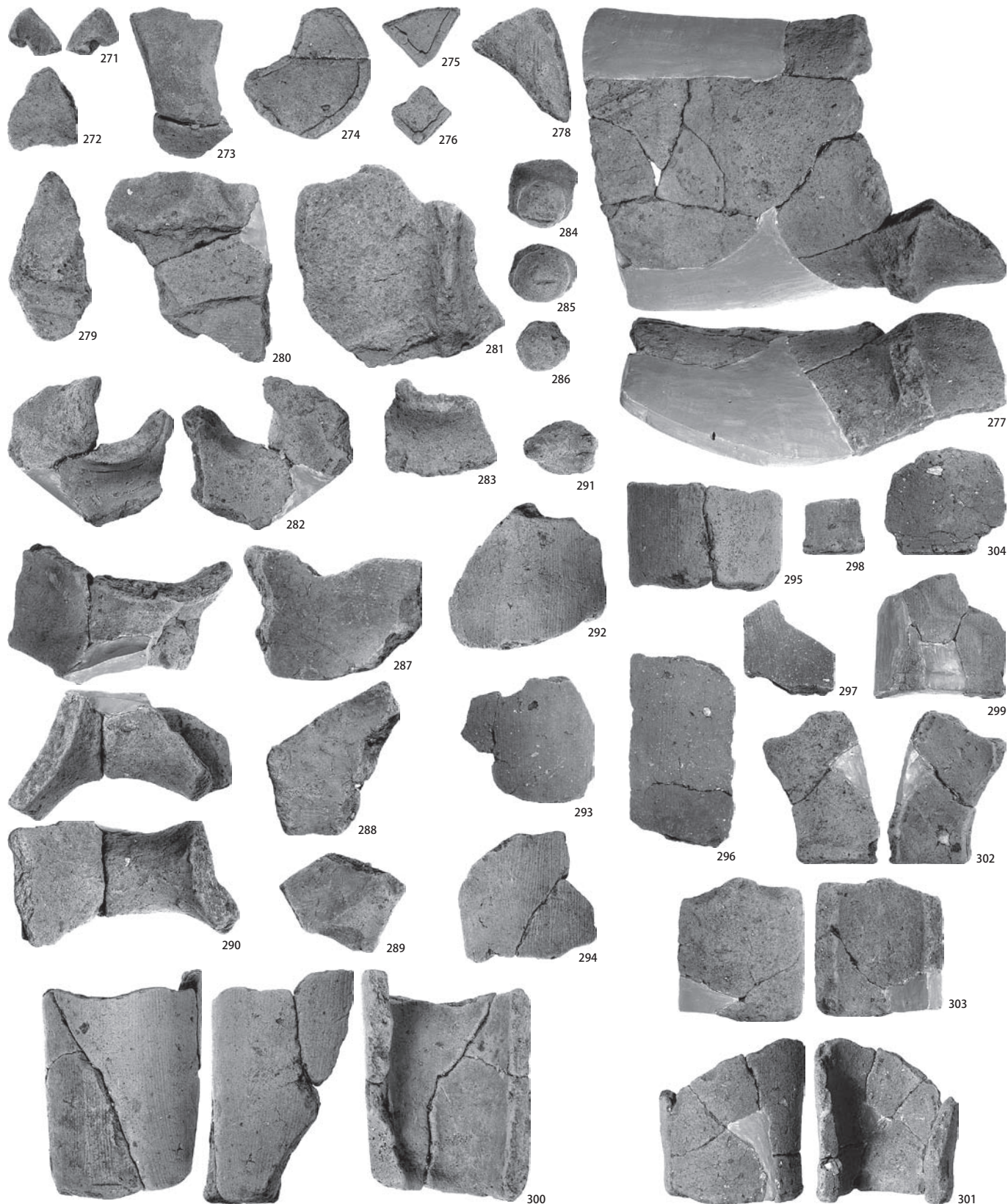
靴形埴輪



大刀形埴輪



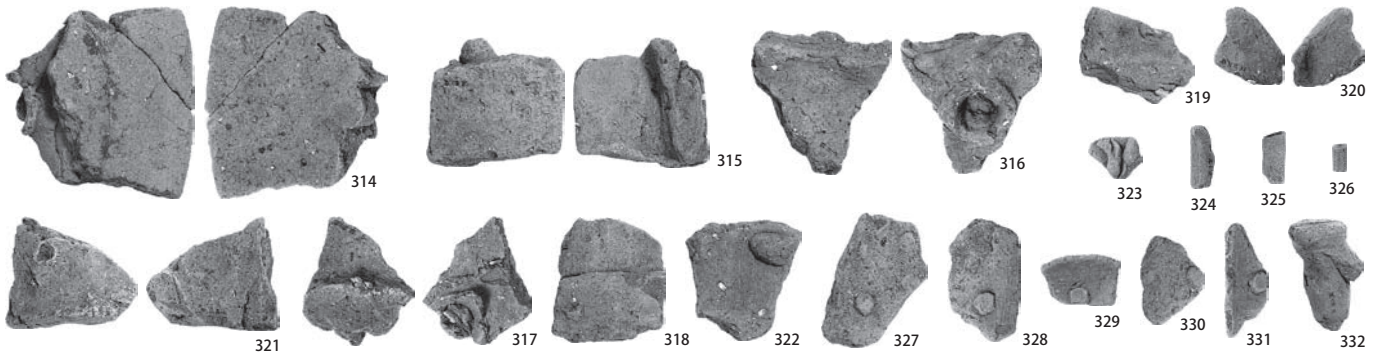
人物埴輪



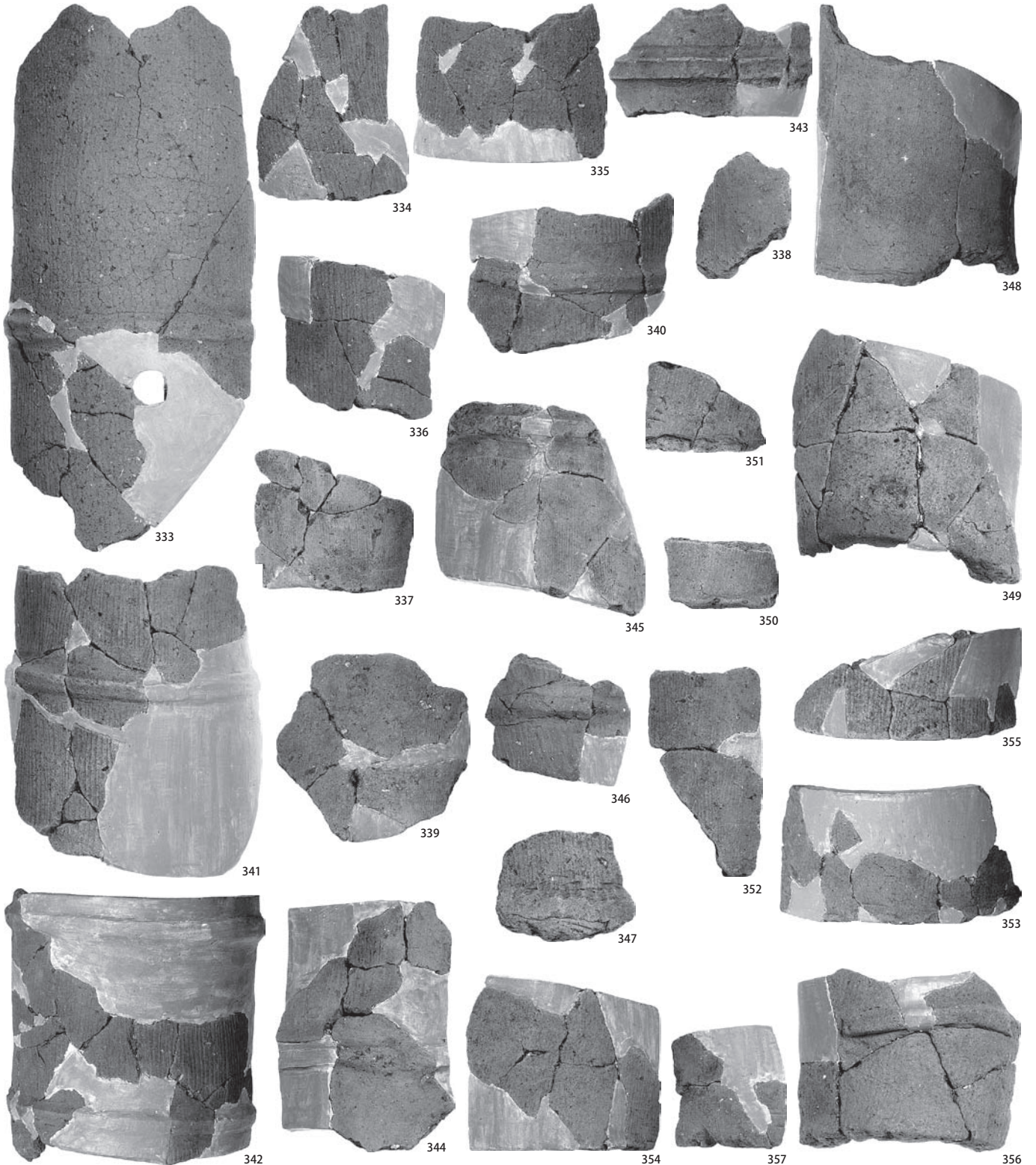
馬形埴輪



器種不明の形象埴輪 (1)



器種不明の形象埴輪 (2)



形象埴輪基台部

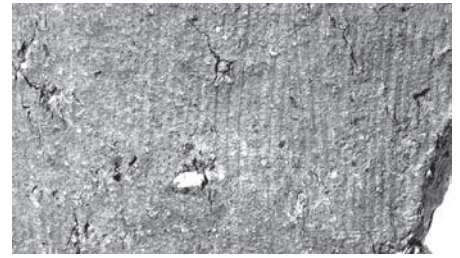




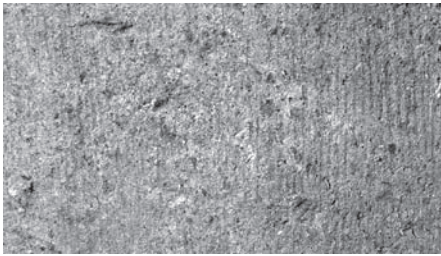
I (005)



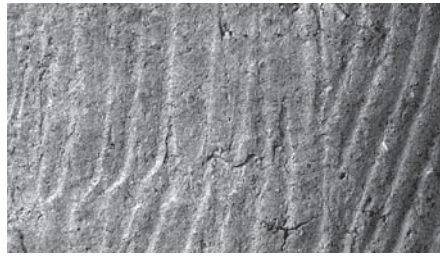
II (078)



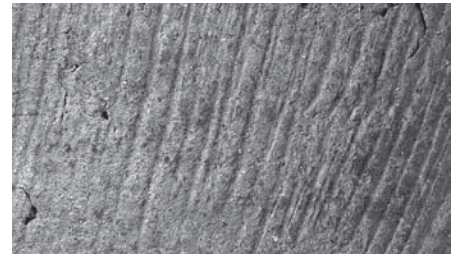
III (011)



IV (100)



V (141)



VI (046)

円筒埴輪ハケメの分類



358



359



360



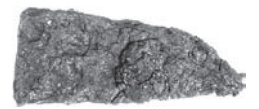
361



362



370



368



369



363



364



365



366



367



371

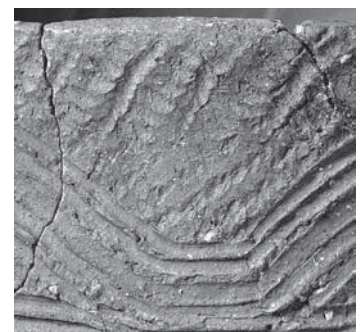
石室内出土遺物



379



380

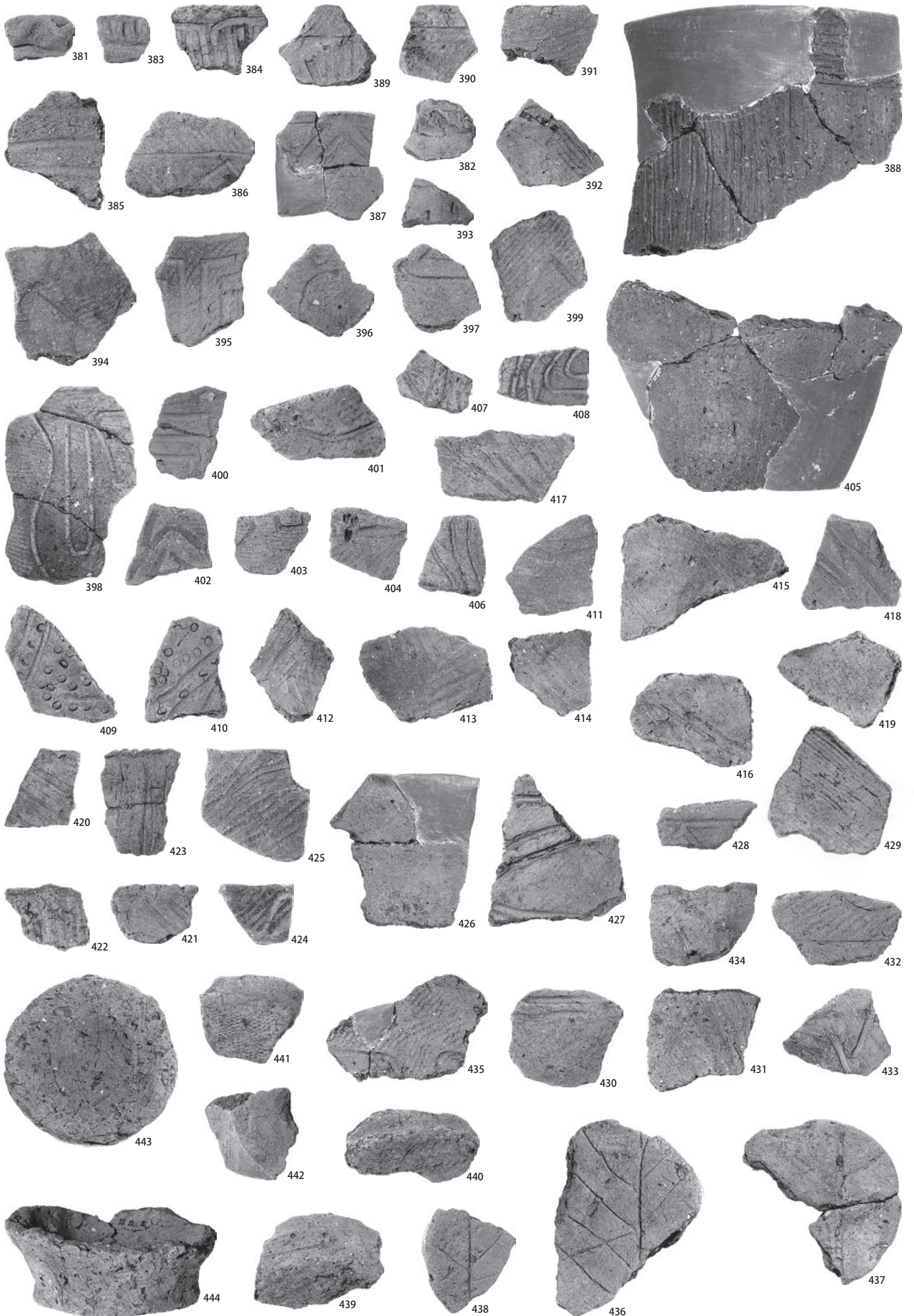


379 縄文原体



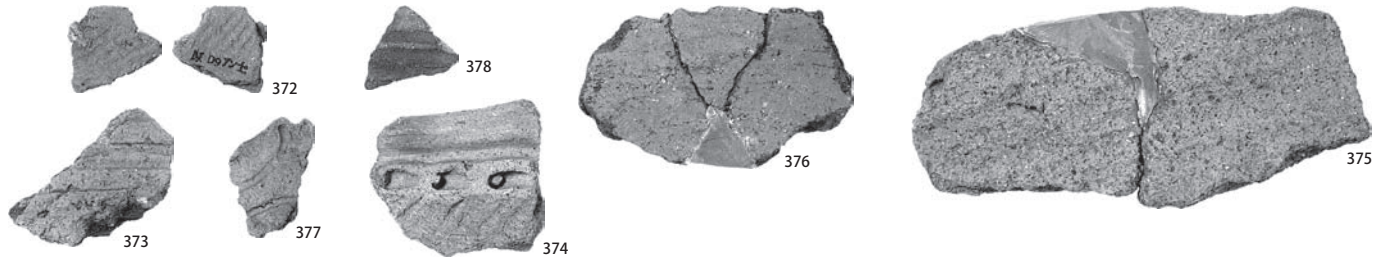
380 縄文原体

遺構外出土の弥生土器（1）



遺構外出土の弥生土器（2）

PL.26



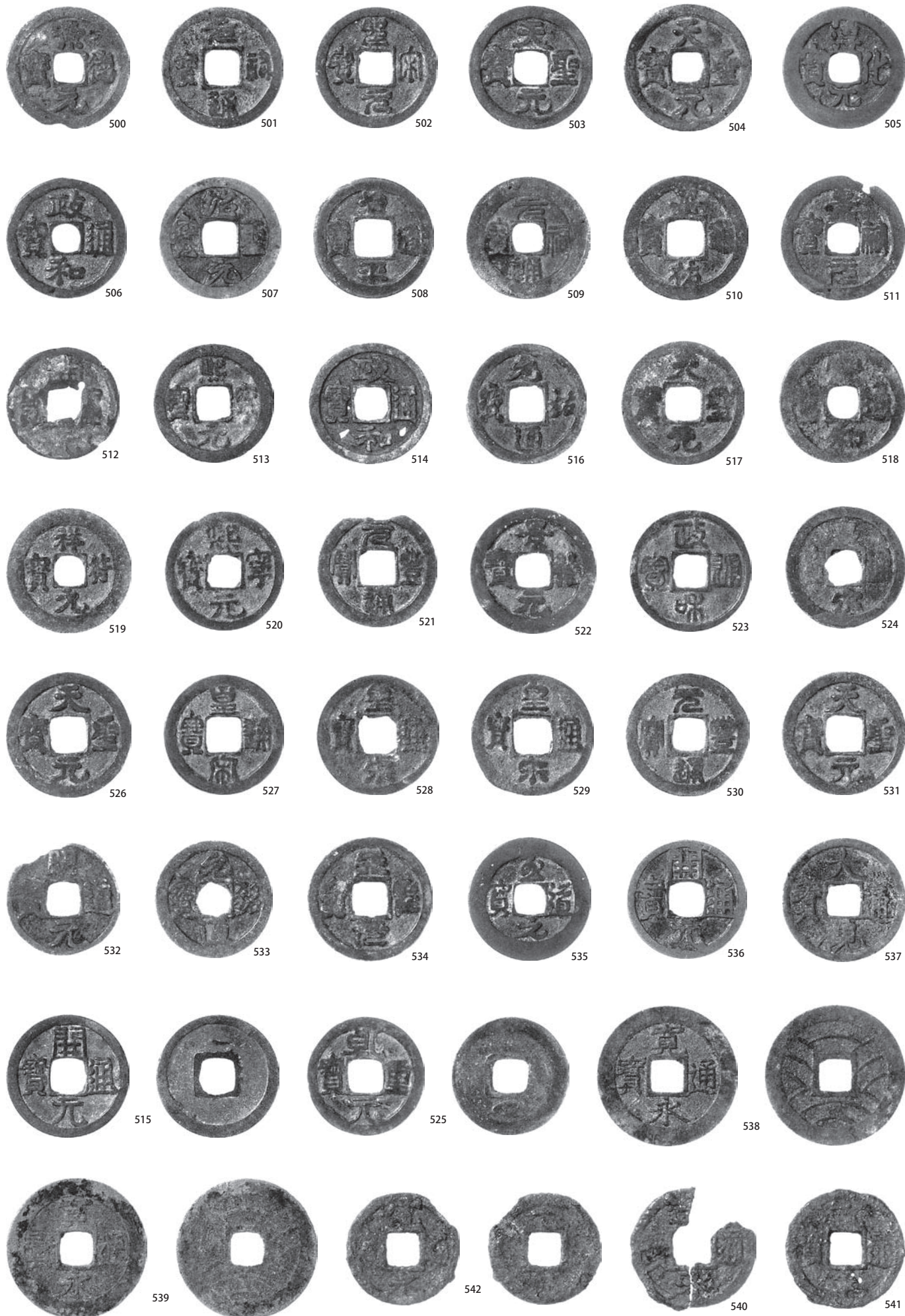
遺構外出土の縄文土器



遺構外出土の弥生時代石器



遺構外出土の古墳・平安時代、中・近世の遺物



遺構外出土の中・近世の古銭

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第476集

## 原 古 墳

国道462号〈鬼石橋〉地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成21(2009)年9月11日 印刷

平成21(2009)年9月18日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社 開文社印刷所

---

